

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第二十一冊

川津下樋遺跡

1996.3

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第二十一冊

川津下樋遺跡

1996.3

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

序 文

四国横断自動車道は、高松～善通寺間が平成4年5月に開通しました。これにより、瀬戸大橋と香川県の高速道路が結ばれることになり、香川県は本格的な高速交通時代を迎えることになりました。

香川県教育委員会では、四国横断自動車道（高松～善通寺間）の建設に伴い、昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して、用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。3年6ヶ月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し、平成3年9月に発掘調査を終了いたしました。また、平成3年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土品の整理を順次行っているところであり、平成4年度からは発掘調査報告書の刊行を開始いたしております。

このたび『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十一冊』として刊行いたしますのは、坂出市川津町に所在します川津下樋遺跡についてであります。川津下樋遺跡の調査では、縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が検出されています。特に、弥生時代前期の自然河川跡から検出されました井堰跡は、香川県最古の合掌型の井堰で当時の灌漑技術の水準の高さがうかがえ、また水田跡も検出されていることから、当時の集落における生産域の解明に重要な資料となるものと考えられます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と关心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成8年3月

香川県教育委員会

教育長 田中 塗一郎



(1)調査区全景（南より）



(2)第2井堀検出状況（南より）

巻頭図版



（3）水田址掘削前（東より）



（4）水田址掘削後（南より）



(5) S R 01 出土弥生土器



(6) S D 01 出土石器

卷頭図版



(7) S D 24 出土土器



(8) 出土弥生土器

例　　言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第二十一冊で、香川県坂出市川津町弘光で実施した川津下橋遺跡（かわつしもといいせき）の発掘調査の報告を収録した。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査は、（予備調査を平成2年2月から3月まで実施し、本調査を）平成2年5月10日から平成3年1月31日まで実施した。宅地部分の調査は平成3年7月1日から平成3年7月16日まで実施した。

発掘調査の担当は以下のとおりである。

（予備調査 渡邊茂智、西岡達哉、大林修三、古野徳久、山下平重）

本　調　査 片桐孝浩、大西義則、石川ゆかり、白川悦世、中野（松尾）優美

宅地部分調査 西岡達哉、真下拓也、白川悦世

4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同）

香川県土木部横断道対策室、同坂出土木事務所横断道対策課、坂出市瀬戸大橋・横断道対策室、坂出市教育委員会、坂出市川津公民館、四国横断自動車道建設坂出市川津連合対策協議会、弘光地区自治会、弘光地区水利組合

5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の編集は、片桐が担当した。

6. プラント・オパール分析は古環境研究所に、樹種同定・種子同定についてはパリノサーヴェイ株式会社に委託し、実施している。

7. 報告書の作成にあたっては、下記の方々の御教示を得た。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

茨木市教育委員会 宮脇 薫，高槻市教育委員会 森田克行，
御所市教育委員会 藤田和尊

8. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり、標高はT.P.を基準としている。

また、遺構は下記の略号により、表示している。

S K …土坑 S D …溝状遺構 S Z …水田遺構 S R …自然河川
S X …不明遺構

9. 掲図の一部に国土地理院地形図 丸亀（1/25,000）を使用した。

目 次

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査の経過.....	5

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境.....	8
第2節 歴史的環境.....	9

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法.....	12
第2節 土層序.....	12
第3節 遺構・遺物について	
1. 弥生時代前期.....	16
2. 弥生時代後期.....	100
3. 古墳時代前期（布留式期）.....	118
4. 時期不明遺構.....	129
5. 古代（7世紀）.....	131
6. 中世.....	133
7. 近世.....	136
8. 包含層出土遺物.....	139

第4章 自然科学調査の成果

第1節 川津下廻遺跡におけるプラント・オバール分析.....	163
第2節 川津下廻遺跡における植物性遺物の同定.....	173

第5章 総括..... 186

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（高松～善通寺）	2
第3図	整理作業風景	7
第4図	発掘作業に従事した方々	7
第5図	遺跡位置図（1/5000）	8
第6図	遺跡分布図	10
第7図	調査区割図・土層観察位置図	13
第8図	土層実測図(1)	14
第9図	土層実測図(2)	15
第10図	S R O 1 土層断面図①	17・18
第11図	S R O 1 土層断面図②	17・18
第12図	S R O 1 土層断面図③	19・20
第13図	S R O 1 土層断面図④	19・20
第14図	S R O 1 土層断面図⑤	21
第15図	S R O 1 土層観察位置図	21
第16図	S R O 1 最下層（暗黒灰色粘質土）出土遺物実測図(1)	23
第17図	S R O 1 最下層（暗黒灰色粘質土）出土遺物実測図(2)	24
第18図	S R O 1 最下層（暗黒灰色粘質土）出土遺物実測図(3)	25
第19図	S R O 1 最下層（暗こげ茶灰色粘質土）出土遺物実測図(1)	26
第20図	S R O 1 最下層（暗こげ茶灰色粘質土）出土遺物実測図(2)	27
第21図	S R O 1 最下層（暗こげ茶灰色粘質土）出土遺物実測図(3)	28
第22図	第1・2井堰平面図	30
第23図	第1井堰平面図	31
第24図	第1井堰平面図・見通し断面図	32
第25図	第1井堰杭断面図	33
第26図	第1井堰出土遺物実測図(1)	33
第27図	第1井堰出土遺物実測図(2)	34
第28図	第1井堰出土遺物実測図(3)	35
第29図	第1井堰出土遺物実測図(4)	36
第30図	第1井堰出土遺物実測図(5)	37
第31図	第2井堰平面図	39
第32図	第2井堰断面図	40
第33図	第2井堰断面模式図	40
第34図	第2井堰出土遺物実測図(1)	41
第35図	第2井堰出土遺物実測図(2)	42
第36図	第2井堰出土遺物実測図(3)	43
第37図	第2井堰出土遺物実測図(4)	44
第38図	第2井堰出土遺物実測図(5)	45
第39図	第2井堰出土遺物実測図(6)	46
第40図	S R O 1 南部検出杭断面図	47
第41図	S R O 1 南部検出杭位置図	48
第42図	S R O 1 中層出土遺物実測図(1)	49
第43図	S R O 1 中層出土遺物実測図(2)	50
第44図	S R O 1 中層出土遺物実測図(3)	51
第45図	S R O 1 中層出土遺物実測図(4)	52
第46図	S R O 1 中層出土遺物実測図(5)	53
第47図	S R O 1 中層出土遺物実測図(6)	54

第48图	S R 0 1 中层出土遗物实测图(7)	55
第49图	S R 0 1 中层出土遗物实测图(8)	56
第50图	S R 0 1 中层出土遗物实测图(9)	57
第51图	S R 0 1 中层出土遗物实测图(10)	58
第52图	S R 0 1 上层出土遗物实测图(1)	59
第53图	S R 0 1 上层出土遗物实测图(2)	60
第54图	S R 0 1 上层出土遗物实测图(3)	61
第55图	S R 0 1 上层出土遗物实测图(4)	62
第56图	S R 0 1 上层出土遗物实测图(5)	65
第57图	S R 0 1 上层出土遗物实测图(6)	66
第58图	S R 0 1 上层出土遗物实测图(7)	67
第59图	S R 0 1 上层出土遗物实测图(8)	68
第60图	S R 0 1 上层出土遗物实测图(9)	69
第61图	S R 0 1 上层出土遗物实测图(10)	70
第62图	S R 0 1 上层出土遗物实测图(11)	71
第63图	S R 0 1 上层出土遗物实测图(12)	72
第64图	S R 0 2 土层断面图	74
第65图	水田址模式图	75
第66图	水田址平面图	76
第67图	IV区水田址西壁土层断面图	77 78
第68图	IV区水田址北壁土层断面图	77 78
第69图	水田址断面图	77 78
第70图	绘出水田面积分布	79
第71图	水田址出土遗物实测图	81
第72图	S D 1 8 土层断面图	82
第73图	S D 1 9 土层断面图	83 84
第74图	S D 1 9 · 2 0 土层断面图	85
第75图	S D 1 8 · 1 9 出土遗物实测图	86
第76图	S D 1 9 出土遗物实测图(1)	87
第77图	S D 1 9 出土遗物实测图(2)	88
第78图	S D 1 6 · 2 4 · 2 1 土层断面图	90
第79图	S D 2 1 出土遗物实测图	90
第80图	S D 1 8 · 2 3 土层断面图	91
第81图	S D 2 9 · 3 1 土层断面图	91
第82图	S D 2 7 出土遗物实测图(1)	92
第83图	S D 2 7 出土遗物实测图(2)	93
第84图	S D 3 0 · 3 2 土层断面图	94
第85图	S D 3 0 出土遗物实测图	95
第86图	S D 3 3 土层断面图	96
第87图	S D 3 3 出土遗物实测图	97
第88图	S D 4 6 土层断面图	98
第89图	S D 4 6 出土遗物实测图	99
第90图	S D 0 3 · 0 4 · 0 5 土层断面图	100
第91图	S D 0 3 · 0 4 · 0 5 出土遗物实测图	101
第92图	S D 0 6 土层断面图	102
第93图	S D 0 6 出土遗物实测图(1)	103
第94图	S D 0 6 出土遗物实测图(2)	104
第95图	S D 0 6 出土遗物实测图(3)	105
第96图	S D 0 6 出土遗物实测图(4)	106
第97图	S D 0 6 出土遗物实测图(5)	108
第98图	S D 0 7 · 1 3 土层断面图	108
第99图	S D 0 7 · 1 0 · 1 3 出土遗物实测图	110

第100図	S D 1 2 出土遺物実測図	111
第101図	S D 1 5 出土遺物実測図	112
第102図	S D 2 6 出土遺物実測図	114
第103図	S D 2 6・2 7 出土遺物実測図	115
第104図	S X 0 1・0 6 土層断面図	116
第105図	S X 0 1・0 6・0 8 出土遺物実測図	117
第106図	S D 1 4 出土遺物実測図	119
第107図	S D 2 1・2 4 土層断面図	120
第108図	S D 2 4 上層出土遺物実測図	121
第109図	S D 2 4 中層出土遺物実測図(1)	122
第110図	S D 2 4 中層出土遺物実測図(2)	123
第111図	S D 2 4 下層出土遺物実測図	124
第112図	S D 2 5 土層断面図	126
第113図	S D 4 4 土層断面図	126
第114図	S D 2 5・4 4 出土遺物実測図	127
第115図	S X 0 3 出土遺物実測図	128
第116図	S X 0 3 土層断面図	129
第117図	S D 3 4 土層断面図	130
第118図	S D 3 6・3 7・3 8・3 9・4 0・4 1・S R 0 2 土層断面図	130
第119図	S D 0 2 土層断面図	131
第120図	S D 0 8 土層断面図	131
第121図	S D 0 8 出土遺物実測図(1)	131
第122図	S D 0 8 出土遺物実測図(2)	132
第123図	S D 0 1 土層断面図	134
第124図	S D 0 1 出土遺物実測図	135
第125図	S K 0 5 出土遺物実測図	136
第126図	S D 3 5 出土遺物実測図	138
第127図	包含層出土遺物実測図(1)	140
第128図	包含層出土遺物実測図(2)	141
第129図	包含層出土遺物実測図(3)	142
第130図	包含層出土遺物実測図(4)	143
第131図	包含層出土遺物実測図(5)	144
第132図	包含層出土遺物実測図(6)	145
第133図	包含層出土遺物実測図(7)	146
第134図	包含層出土遺物実測図(8)	147
第135図	包含層出土遺物実測図(9)	148
第136図	包含層出土遺物実測図(10)	149
第137図	包含層出土遺物実測図(11)	150
第138図	包含層出土遺物実測図(12)	151
第139図	包含層出土遺物実測図(13)	152
第140図	包含層出土遺物実測図(14)	153
第141図	包含層出土遺物実測図(15)	154
第142図	包含層出土遺物実測図(16)	155
第143図	包含層出土遺物実測図(17)	156
第144図	包含層出土遺物実測図(18)	157
第145図	包含層出土遺物実測図(19)	158
第146図	包含層出土遺物実測図(20)	159
第147図	イネのプランツ・オパールの検出状況	167
第148図	おもな植物の推定生産量と変遷(1)	168
第149図	おもな植物の推定生産量と変遷(2)	169
第150図	おもな植物の推定生産量と変遷(3)	170
第151図	プランツ・オパールの顕微鏡写真	172

第152図	樹種顕微鏡写真(1).....	181
第153図	〃 (2).....	182
第154図	〃 (3).....	183
第155図	〃 (4).....	184
第156図	植物遺体	185
第157図	川津下掘遺跡遺構変遷図	187 · 188
第158図	川津下掘遺跡弥生時代前期～中期遺構配置図	189 · 190

表 目 次

第1表	四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1) ······	3
第2表	四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2) ······	4
第3表	遺跡一覧表 ······	11
第4表	S R O 1 最下層 (暗黒灰色粘質土) 出出土器觀察表 ······	25
第5表	S R O 1 最下層 (暗黒灰色粘質土) 出出土器觀察表 ······	25
第6表	S R O 1 最下層 (暗こげ茶灰色粘質土) 出出土器觀察表 ······	26
第7表	S R O 1 最下層 (暗こげ茶灰色粘質土) 出出土器觀察表 ······	29
第8表	第1井堰出土土器觀察表 ······	33
第9表	第1井堰出土石器觀察表 ······	34
第10表	第1井堰出土木器觀察表 ······	38
第11表	第2井堰出土土器觀察表 ······	41
第12表	第2井堰出土石器觀察表 ······	41
第13表	第2井堰出土木器觀察表 ······	47
第14表	S R O 1 中層出土土器觀察表(1) ······	48
第15表	S R O 1 中層出土土器觀察表(2) ······	50
第16表	S R O 1 中層出土石器觀察表(1) ······	56
第17表	S R O 1 中層出土土器觀察表(3) ······	59
第18表	S R O 1 中層出土石器觀察表(2) ······	59
第19表	S R O 1 上層出土土器觀察表(1) ······	63 · 64
第20表	S R O 1 上層出土土器觀察表(2) ······	73
第21表	S R O 1 上層出土石器觀察表 ······	73
第22表	水田址面積一覧表 ······	79
第23表	水田址出土土器觀察表 ······	80
第24表	水田址出土石器觀察表 ······	80
第25表	S D 1 8 出出土器觀察表 ······	89
第26表	S D 1 8 出出土石器觀察表 ······	89
第27表	S D 1 9 出出土器觀察表 ······	89
第28表	S D 1 9 出出土石器觀察表 ······	89
第29表	S D 2 1 出出土器觀察表 ······	89
第30表	S D 2 1 出出土石器觀察表 ······	89
第31表	S D 2 9 出出土器觀察表 ······	91
第32表	S D 2 9 出出土石器觀察表 ······	91
第33表	S D 3 0 出出土器觀察表 ······	94
第34表	S D 3 0 出出土石器觀察表 ······	94
第35表	S D 3 3 出出土器觀察表 ······	97
第36表	S D 3 3 出出土石器觀察表 ······	97
第37表	S D 4 6 出出土器觀察表 ······	98
第38表	S D 4 6 出出土石器觀察表 ······	98
第39表	S D 0 3 · 0 4 · 0 5 出出土器觀察表 ······	101
第40表	S D 0 6 出出土土器觀察表(1) ······	107
第41表	S D 0 6 出出土石器觀察表 ······	107
第42表	S D 0 6 出出土土器觀察表(2) ······	107
第43表	S D 0 7 出出土石器觀察表 ······	109
第44表	S D 1 0 出出土土器觀察表 ······	109
第45表	S D 1 0 出出土石器觀察表 ······	109
第46表	S D 1 3 出出土石器觀察表 ······	109
第47表	S D 1 2 出出土石器觀察表 ······	111

第48表	S D 1 5 出土土器観察表	112
第49表	S D 1 5 出土石器観察表	112
第50表	S D 2 6 出土土器観察表	113
第51表	S D 2 6 出土石器観察表	113
第52表	S D 2 7 出土土器観察表	113
第53表	S X 0 1 出土土器観察表	117
第54表	S X 0 6 出土土器観察表	117
第55表	S X 0 6 出土石器観察表	117
第56表	S X 0 8 出土土器観察表	117
第57表	S D 1 4 出土土器観察表	118
第58表	S D 1 4 出土石器観察表	118
第59表	S D 2 4 上層出土土器観察表	121
第60表	S D 2 4 上層出土石器観察表	121
第61表	S D 2 4 中層出土土器観察表	125
第62表	S D 2 4 中層出土石器観察表	125
第63表	S D 2 4 下層出土土器観察表	125
第64表	S D 2 4 下層出土石器観察表	125
第65表	S D 2 5 出土土器観察表	127
第66表	S D 2 5 出土石器観察表	127
第67表	S D 4 4 出土土器観察表	127
第68表	S X 0 3 出土土器観察表	128
第69表	S X 0 3 出土石器観察表	128
第70表	S D 0 8 出土土器観察表	133
第71表	S D 0 8 出土石器観察表	133
第72表	S D 0 1 出土土器観察表	134
第73表	S D 0 1 出土石器観察表	134
第74表	S K 0 5 出土土器観察表	136
第75表	S D 3 5 出土土器観察表	137
第76表	S D 3 5 出土石器観察表	137
第77表	包含層出土土器観察表(1)	159
第78表	包含層出土土器観察表(2)	160
第79表	包含層出土石器観察表(1)	160
第80表	包含層出土石器観察表(2)	161
第81表	包含層出土石器観察表(3)	162
第82表	包含層出土土器観察表(3)	162
第83表	プラント・オーバル分析結果	166
第84表	樹種同定結果(1)	176
第85表	樹種同定結果(2)	177
第86表	植物遺体の同定結果	179
第87表	遺構観察表(1)	192
第88表	遺構観察表(2)	193
第89表	遺構観察表(3)	194

付 図 目 次

卷頭図版目次

- 卷頭図版(1)調査区全景(南より)
(2)第2井堰検出状況(南より)
(3)水田址掘削前(東より)
(4)水田址掘削後(南より)
- (5)SR01出土弥生土器
(6)SR01出土石器
(7)SD24出土土器
(8)出土弥生土器

図版目次

- 図版1 (1)Ⅲ区・Ⅳ区南部遺構検出状況(北より)
(2)Ⅳ区南部遺構検出状況(北より)
- 図版2 (1)Ⅳ区北部遺構検出状況(南より)
(2)I区北部遺構検出状況(南より)
- 図版3 (1)Ⅲ区・Ⅳ区南部遺構検出状況(真上より)
(2)SR01土層断面①
- 図版4 (1)SR01土層断面②
(2)SR01土層断面④
- 図版5 (1)SR01土層断面④拡大
(2)SR01土層断面⑤
- 図版6 (1)第1・2井堰検出状況(西より)
(2)第1・2井堰検出状況(東より)
- 図版7 (1)第1井堰検出状況(西より)
(2)第1井堰検出状況(SR01内より)
- 図版8 (1)第1井堰検出状況
(2)第1井堰検出状況
- 図版9 (1)第1井堰検出状況(SR01内より)
(2)第1井堰杭検出状況(SR01内より)
- 図版10 (1)Ⅳ区南部検出状況(真上より)
(2)第1井堰杭No.2・3
- 図版11 (1)第1井堰杭No.6・7
(2)第1井堰杭No.12
(3)第1井堰杭No.8
(4)第1井堰杭No.9
(5)第1井堰杭No.14①・②
(6)第1井堰杭No.4①～③
- 図版12 (1)第2井堰検出前
(2)第2井堰検出状況(南より)
- 図版13 (1)第2井堰検出状況(南より)
(2)第2井堰検出状況(南西より)
- 図版14 (1)第2井堰検出状況(西より)
(2)第2井堰検出状況拡大(西より)
- 図版15 (1)第2井堰検出状況(北西より)
(2)第2井堰検出状況(北より)
- 図版16 (1)第2井堰検出状況拡大(南東より)
(2)第2井堰検出状況(南東より)
- 図版17 (1)第2井堰検出状況拡大(西より)
(2)第2井堰実測風景
- 図版18 (1)第2井堰検出状況(西より)
(2)第2井堰検出状況(東より)
- 図版19 (1)第2井堰検出状況(西より)
(2)第2井堰検出状況拡大(西より)
- 図版20 (1)第2井堰検出状況拡大(西より)
(2)第2井堰検出状況(南より)
- 図版21 (1)第2井堰検出状況(東より)
(2)第2井堰検出状況(東より)
- 図版22 (1)第2井堰検出状況(南東より)
(2)第2井堰検出状況拡大(南東より)
- 図版23 (1)第2井堰検出状況(北東より)
(2)第2井堰検出状況(北東より)
- 図版24 (1)第2井堰杭拡大(南より)
(2)第2井堰断面拡大(西より)
- 図版25 (1)第2井堰断面(西より)
(2)SR01南部検出杭No.24
(3)SR01南部検出杭No.21
- 図版26 (1)Ⅳ区北部検出状況(南より)
(2)Ⅳ区水田址検出状況(南より)
- 図版27 (1)Ⅲ区水田址検出前(東より)
(2)Ⅲ区水田址検出状況(南より)
- 図版28 (1)Ⅲ区水田址拡大
(2)Ⅳ区水田址拡大
- 図版29 (1)Ⅳ区水田址西壁土層(B地点)
(2)Ⅳ区水田址西壁土層(A地点)
- 図版30 (1)Ⅳ区水田址西壁土層(C地点)
(2)Ⅳ区水田址西壁土層
- 図版31 (1)Ⅳ区水田址北壁土層
(2)Ⅳ区水田址北壁土層(D地点)
- 図版32 (1)SD01土層断面(A-A')
(2)SD01土層断面(C-C')
- 図版33 (1)SD02土層断面(A'-A)
(2)SD06土層断面(A'-A)
- 図版34 (1)SD17土層断面
(2)SD16・24・21土層断面
(A-A')
- 図版35 (1)SD18土層断面
(2)SD19土層断面
- 図版36 (1)SD19土層断面(D-D')
(2)SD19土層断面(C-C')
- 図版37 (1)SD19土層断面
(2)SD19土層断面(A'-A)

図版38	(1) SD 1 9 土層断面 (B-B'の一部) (2) SD 1 9 土層断面 (B-B'の一部)	図版74	水田址出土遺物②
図版39	(1) SD 1 9 土層断面 (B-B'の一部) (2) SD 2 0 土層断面 (A-A')	図版75	SD 1 9 出土遺物①
図版40	(1) SD 2 1 土層断面 (2) SD 1 6・2 4・2 1 土層断面 (A-A')	図版76	(1) SD 1 9 出土遺物② (2) SD 2 1 出土遺物
図版41	(1) SD 2 4・1 8 土層断面 (A'-A) (2) SD 2 4 土層断面	図版77	SD 2 9 出土遺物①
図版42	(1) SD 1 8 土層断面 (2) SD 2 1 土層断面	図版78	(1) SD 2 9 出土遺物② (2) SD 3 0 出土遺物
図版43	(1) SD 2 5 土層断面 (A-A') (2) SD 2 9 土層断面	図版79	(1) SD 3 3 出土遺物 (2) SD 0 4 出土遺物 (3) SD 4 6 出土遺物
図版44	(1) SD 2 9・3 1 土層断面 (A-A') (2) SD 2 9・3 1 土層断面	図版80	SD 0 6 出土遺物①
図版45	(1) SD 3 0 土層断面 (2) SD 3 0・3 2 土層断面 (A-A')	図版81	SD 0 6 出土遺物②
図版46	(1) SD 3 4 土層断面 (2) SD 3 6 土層断面	図版82	(1) SD 0 7 出土遺物 (2) SD 1 0 出土遺物 (3) SD 1 2 出土遺物 (4) SD 1 5 出土遺物
図版47	(1) SD 4 1 土層断面 (A-A'の一部) (2) SD 4 2 土層断面	図版83	(1) SD 2 6 出土遺物 (2) SD 1 4 出土遺物①
図版48	(1) SD 4 6 土層断面 (A-A') (2) SX 0 3 土層断面	図版84	(1) SD 1 4 出土遺物② (2) SD 2 4 上層出土遺物
図版49	(1) SX 0 3 土層断面 (2) 発掘作業風景	図版85	SD 2 4 中層出土遺物
図版50	SR 0 1 最下層 (暗黒灰色粘質土) 出土遺物①	図版86	SD 2 4 下層出土遺物
図版51	SR 0 1 最下層 (暗黒灰色粘質土) 出土遺物②	図版87	SD 2 5 出土遺物
図版52	SR 0 1 最下層 (暗こげ茶灰色粘質土) 出土遺物①	図版88	(1) SX 0 3 出土遺物 (2) SD 0 8 出土遺物
図版53	(1) SR 0 1 最下層 (暗こげ茶灰色粘質土) 出土遺物② (2) 第1井壁出土遺物①	図版89	(1) SD 0 1 出土遺物 (2) SK 0 5 出土遺物
図版54	第1井壁出土遺物②	図版90	SD 3 5 出土遺物①
図版55	第1井壁出土遺物③	図版91	SD 3 5 出土遺物②
図版56	第2井壁出土遺物①	図版92	包含層出土遺物①
図版57	第2井壁出土遺物②	図版93	包含層出土遺物②
図版58	(1) 第2井壁出土遺物③ (2) SR 0 1 中層出土遺物①	図版94	包含層出土遺物③
図版59	SR 0 1 中層出土遺物②	図版95	包含層出土遺物④
図版60	SR 0 1 中層出土遺物③	図版96	包含層出土遺物⑤
図版61	SR 0 1 中層出土遺物④	図版97	包含層出土遺物⑥
図版62	SR 0 1 中層出土遺物⑤	図版98	包含層出土遺物⑦
図版63	SR 0 1 中層出土遺物⑥	図版99	包含層出土遺物⑧
図版64	SR 0 1 上層出土遺物①	図版100	包含層出土遺物⑨
図版65	SR 0 1 上層出土遺物②	図版101	包含層出土遺物⑩
図版66	SR 0 1 上層出土遺物③	図版102	包含層出土遺物⑪
図版67	SR 0 1 上層出土遺物④	図版103	包含層出土遺物⑫
図版68	SR 0 1 上層出土遺物⑤	図版104	包含層出土遺物⑬
図版69	SR 0 1 上層出土遺物⑥		
図版70	SR 0 1 上層出土遺物⑦		
図版71	SR 0 1 上層出土遺物⑧		
図版72	SR 0 1 上層出土遺物⑨		
図版73	水田址出土遺物①		

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は、同善通寺～豊浜間に引き続き、昭和57年1月8日に整備計画決定され、昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団總裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会は、これを受けて路線内の埋蔵文化財包蔵地の状況を確認する目的で国庫補助事業として分布調査を実施した。これらの成果をもとに、路線内に所在する埋蔵分化財包蔵地の取り扱いについて、日本道路公団と文化庁の協議が行われ、基本的には記録保存で対応することが決定した。路線内での対象面積はこの時点で39万m²余りと判断した。

また香川県教育委員会は、同事業に対応するため香川県土木部横断道対策室及び日本道路公団高松建設局管理課、同高松工事事務所と昭和162年度の早い時期から調査体制等について協議を開始した。

協議の結果、昭和63年度当初から2カ年の予定で本調査を実施すること、整理報告は発掘調査の終了後に実施すること等が決定した。このため香川県教育委員会では、調査体制の充実を図ることを目的に、昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置し、専門職員の増員等の措置を順次実施した。

平成元年には、坂出市川津町に所在する埋蔵文化財包蔵地の具体的な内容について確認するため、日本道路公団と協議の上、用地買収の進歩状況に合わせ平成2年2月26日～3月17日の期間で予備調査を実施した。実施にあつては、地元関係者、四国横断自動車道・南進自動車道対策協議会、同中塚地区対策協議会、同西又地区対策協議会、坂出市都市開発



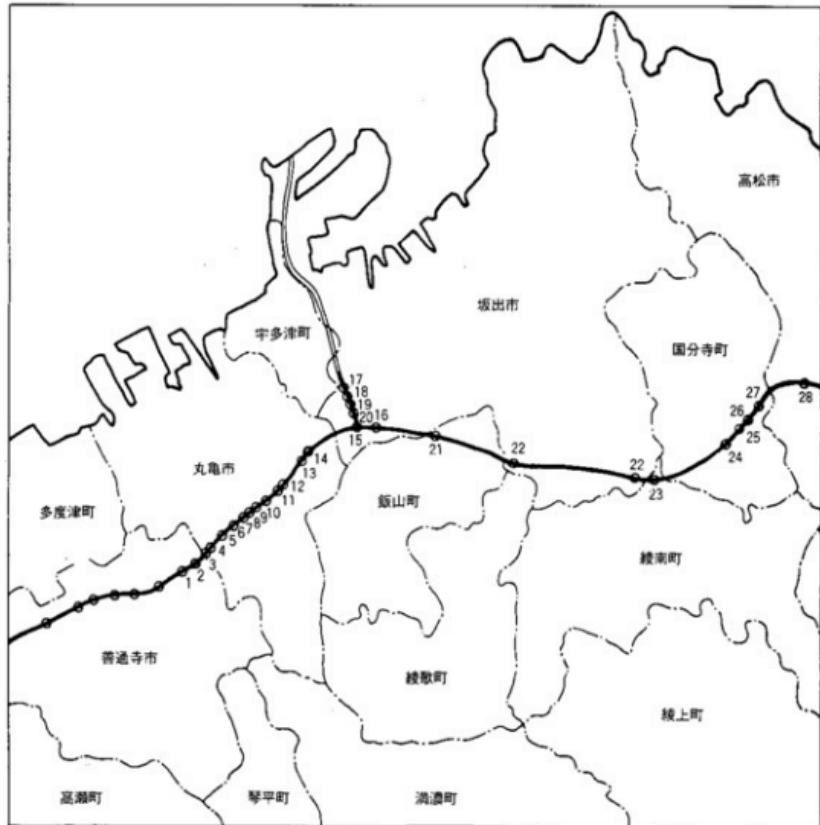
第1図 遺跡位置図

部瀬戸大橋・四国横断道対策室、香川県坂出土木事務所横断道対策課等の協力を得た。予備調査の結果、川津下掘遺跡を始めとする集落跡を中心とした6遺跡についての内容を把握し、同地区での本調査対象面積を111,750m²に確定した。

今回報告する川津下掘遺跡は、この6遺跡の北部に位置し、調査対象面積9,850m²を計る。

本調査は、調査区をI区～V区に分けて行い、平成2年5月10日にI区から着手し、平成3年1月31日に同遺跡全体の調査を終了した。ただし宅地部分は、平成3年7月1日から平成3年7月16日に調査を行った。

調査は、香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託を受け、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。



第2図 四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（高松～善通寺）

第1表 四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1)

No.	遺跡名	所在地	調査場所	調査期間	遺構	遺物	報告番号
1	能川五条遺跡	普通市市原出町	12,300 10,200	元. 6.26 ~ 2 . 3.31 2 . 4 . 9 ~ 2 . 12 . 5	弥生時代(縄繩、堅穴住居、溝)、古代 中世建築、近世井戸	弥生土器、土師器、須恵器、石器、木 製品	
2	龍川四条遺跡	普通市市原田町 木懸町	20,200 1,700 300	元. 7.1 ~ 2 . 3.31 2 . 5.28 ~ 2 . 12 . 5 3 . 4 . 4 ~ 3 . 6.18	古代掘立柱建物、中世建物、溝、土塁 自然河川	縄文土器、土師器、須恵器、瓦器、磁 器、中世鏡	横断造報告第十 五冊
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町中村	12,041 1,300	63 . 4.18 ~ 元 . 2.10 元 . 4.10 ~ 2 . 3.31	弥生時代堅穴住居、溝、自然河川	弥生土器ほか	横断造報告第十 一冊
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町黒島	7,677 17,099 2,600	63 . 6.15 ~ 63 . 11.26 63 . 4.18 ~ 元 . 3.31 元 . 4.10 ~ 2 . 3.31	ユニット、溝、建物 堅穴住居、掘立柱建物、溝	旧石器、弥生土器、陶器	
5	鶴家原遺跡	丸亀市三条町黒島 鶴家町八幡上	14,067 6,450	63 . 4.18 ~ 元 . 3.31 元 . 4.10 ~ 2 . 3.31	掘立柱建物、溝、自然河川 灰陶器、有舌尖頭器ほか	弥生土器、土師器、須恵器、縄文陶器、 斎輪ほか	横断造報告第十 二冊
6	鶴家一里塚遺跡	丸亀市鶴家町八幡上	11,175	63 . 6.15 ~ 元 . 3.22	掘立柱建物、溝、自然河川	須恵器、斎輪ほか	横断造報告第十 七冊
7	鶴家大林上遺跡	丸亀市鶴家町大林上	12,741	63 . 6.15 ~ 元 . 2.17	掘立柱建物、溝、火葬墓	弥生土器、須恵器、近世陶磁器、ナフ 形石器	
8	鶴家田代遺跡	丸亀市鶴家町田代	3,033	63 . 12.12 ~ 元 . 3.25	掘立柱建物、溝		
9	川西北・原遺跡	丸亀市川西北・原	4,034	63 . 12.13 ~ 元 . 3.27	自然河川		
10	川西北・七条Ⅰ遺跡	丸亀市川西北七条	4,760	元 . 2 . 2 ~ 元 . 3.31	掘立柱建物、溝	土師器、須恵器	
11	川西北・七条Ⅱ遺跡	丸亀市川西北七条	12,208	元 . 4 . 10 ~ 元 . 8 . 11	中世掘立柱建物、溝、自然河川	土師器	
12	川西北・鐵冶屋遺跡	丸亀市川西北	3,366	63 . 12.13 ~ 元 . 3.27	掘立柱建物、溝、自然河川	土師器、須恵器、近世陶磁器	
13	龜野・東二瓦堀遺跡	丸亀市駒野町東二瓦堀	300	2 . 3 . 1 ~ 2 . 3 . 31		土師器、須恵器	
14	龜野・東分山崎遺跡	丸亀市龜野町	28,100 500	2 . 8 . 2 ~ 3 . 3 . 20 3 . 9 . 2 ~ 3 . 9 . 4	古墳時代堅穴住居、外生時代堅穴住居、 弥生土器、土師器、須恵器		
15	川津東山遺跡	坂出市川津町 坂山東坂元					

第2表 四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2)

No.	遺跡名	所在地	範囲(地)	開 営 期 間	遺 墓	遺 物	報告書番号
16	川津川西遺跡	板出市川津町	5,400	2・5.10～3・1.17 溝	古墳時代中期住居、古代～中世建物、土器、耳環	绳文土器、土器、須恵器、瓦質土器、土馬、耳環	
17	川津中駒遺跡	板出市川津町	15,290	2・5.10～3・2.28 張生時代窓穴住居、古代～中世掘立柱建物、溝、土坑、土坑墓	弥生土器、土器、須恵器、耳環、小刀	鐵鏃頭報告第十四冊	
18	川津下駒遺跡	板出市川津町	9,650	2・5.10～3・1.31 張生時代(水田、井垣)、溝、自然河川	绳文晚期土器、弥生土器、石器(打製石毛丁ほか)、木製品	鐵鏃頭報告第十一冊刊行予定	
19	川津二代駒遺跡	板出市川津町	10,400	2・5.10～3・3.16 張生時代(溝、自然河川)、中世(建物、水田はほか)	弥生土器、土器、石器	鐵鏃頭報告第十六冊	
20	川津ノ又遺跡	板出市川津町	35,160	2・4.12～3・3.28 弥生時代自然河川、张生時代～古墳時代窓穴住居、櫛立住居物、土坑、古代～中世(溝、水田)	弥生土器、土器、須恵器、石器、木製品、滑金具		
21	飯山一本松遺跡	飯山町	2,200	元、4.17～元、5.16	弥生土器、土器、須恵器		
22	府中地区	板出市府中町	3,000	2・10.30～2・12.26 土坑	須恵器		
23	様南奥下池衝遺跡	禮角町	2,900	元、5.22～元、7.24	須恵器駕除	須恵器	
24	国分寺下日名代遺跡	国分寺町福家	11,350	元、8.19～2・2.28 弥生時代溝、水田、動物足跡	弥生土器、土器、須恵器	鐵鏃頭報告第十八冊	
25	国分寺楠井遺跡	国分寺町福家	4,400	2・4.11～2・10.2 古墳時代窓穴式石室、中世窓、建物	土器、須恵器、瓦質土器、耳環		
26	国分寺六ツ目古墳	国分寺町福家	900	元、9・1～元、12.28 前方後円墳(主体部3基)	古式土器、銚器		
27	国分寺六ツ目遺跡	国分寺町福家	5,600	元、10・1～2・2.28 中近世建物	弥生土器、近世陶磁器、石器		
28	中期西井坪遺跡	高松市中岡町	11,600	元、8.19～2・3.25 旧石器ブロック、弥生時代～近世建物、埴輪燒成土坑、古墳、溝、土坑	弥生土器、土器、須恵器、埴輪、陶棺、ナイフ形石器、船底形石器		
			8,680	2・5.10～3・3.25 1,270	3・4・5～3・7.18		

第2節 調査の経過

川津下樋遺跡の発掘調査は、平成2年2月～3月に試掘調査を行い、本調査は平成2年5月に着手した。

発掘調査は、調査区をI～IV区に分け、それぞれの調査区をI-①・②・③、II-①・②、III-①・②、IV-①・②・③・④に細分した（第7図）。このなかでI-③区とIV-④区は宅地部分にあたり、家屋の撤去が遅れていたIV-④区を除く9,650m²を平成2年5月10日から工事請負方式で調査を開始した。また、宅地部分であるIV-④区（200m²）は、平成3年7月から直営方式で調査を行った。

調査にあたってはまず、予備調査を行い、試掘結果より詳細なデーターの収集に努めた。その結果、試掘調査では確認されていない遺構や包含層の厚さに新たな状況が判明した。また、工事用道路の仮設のも含め、調査工程の変更と土量の変更を余儀なくされた。

調査は、I・II区から開始した。この調査区は溝を中心とする遺構が検出されているが、やや希薄な状況である。次に取り掛かったIII区では水田址や溝が多数検出された。水田址は小区画のもので、計34区画検出されている。また、この水田址と関連するであろう井堰がIV区S R 0 1で検出された。

IV-④区宅地部分では、川津二代取遺跡から延びるS R 0 2自然河川や溝が検出され、当遺跡と川津二代取遺跡の繋がりが確認された。

以上で平成2年度と3年度の川津下樋遺跡の発掘調査は終了し、その調査面積は合計9,850m²となる。

整理作業は、平成6年4月1日から同年9月30日に行った。

整理作業の内容は、まず注記・接合作業・遺物抽出の後、土器・石器・木器の総数729点の実測作業を実施した。整理期間のほとんどが遺物の実測作業に費やされている。実測作業後遺構・遺物のトレースを行い、レイアウト・編集のち終了した。

発掘調査及び整理作業の体制

平成 2 年度

文化行政課
総括

総務

埋蔵文化財

長佐幹
長補主
副係主
主係主
主任技師
技

太田 彰一
菅原 良弘
野網朝二郎
宮内 憲生
横田 秀幸
石川恵三子
大山 真充
岩橋 孝
北山健一郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
総括 所長
所次長
係長(事務)
主査(土木)
主参係
係長
主任技師
主任技師
調査技術員
調査技術員
調査技術員
現場整理作業員

十川 安藤
安藤 加藤
山地 見
山地 藤勢
山地 真鍋
山地 片桐
西川 大西
西川 白川
中野 片岡
(松尾) 中野
葛谷 周子
葛谷 薫

泉雄司 修好
道正 政
護郎 史昌
宏浩 喬
則義
かり悦
世川 優美

平成 3 年度

文化行政課
総括

長幹
長補佐
副主幹
係主
係主
主任技師
技

中村 仁
菅原 良弘
小原 克己
(6.1~)
野網朝二郎
(~5.31)
宮内 憲生
横田 秀幸
(~5.31)
櫻木 新士
(6.1~)
石川恵三子
大山 真充
岩橋 孝
北山健一郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
総括 所長
所次長
係長(事務)
係長(事務)
主査(土木)
係長(土木)
主事
係長
主任技師
主任技師
調査技術員

松本 安藤
安藤 加藤
(~5.31)
土井 茂樹
(6.1~)
山地 今田
(~5.31)
山地 今田
(6.1~)
菅原 達也
真鍋 好昌
西岡 昌也
片岡 拓也
白川 悅世

豊嶺 道正
正司 茂樹
修 (6.1~)
修 (6.1~)
修 (6.1~)
政好
昌也

平成 6 年度

文化行政課
総括

長幹
長補佐
係主
係主
主任技師
技

高木 尚
小原 克己
高木 一義
(6.1~)
源田 和幸
星加 宏明
(6.1~)
櫻木 新士
(~5.31)
高倉 秀子
(6.1~)
藤原 和子
(~5.31)
藤好 史郎
國木 健司
森下 英治

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
総括 所長
所次長
係長(事務)
係長(事務)
主査
係長
文化財専門員
整理補助員
整理作業員

松本 土井
真鍋 前田
(~5.31)
土井 和也
(6.1~)
西村 厚
廣瀬 常雄
片桐 浩子
岡崎 伊
江 美子
中野 球
山地 美理
市川 孝
小林 美子
大西 美里
水谷 和葉
葉子

豊嶺 隆
樹 茂
(6.1~)
前田 和也
(6.1~)
西村 厚
廣瀬 常雄
片桐 浩子
岡崎 伊
江 美子
中野 球
山地 美理
市川 孝
小林 美子
大西 美里
水谷 和葉



第3図 整理作業風景



第4図 発掘作業に從事した方々

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

香川県は四国北東部にあり、面積が四県で最小の県である。北は備讃瀬戸を挟んで岡山県と相対し、南は阿讃山脈で徳島県と隔絶している。河川は地勢上からその流路が短く、しかも急勾配である。そのため常には水の流れがあまりないが、ひとたび洪水が起ると流れが速くなり、荒れる。そのため現在でも現地表面に旧流路（洪水河川）が確認できる水田地割りが見られる。



第5図 遺跡位置図 (1/5000)

土地面積に占める平野の割合の高い香川県には、西から三豊平野・丸亀平野・高松平野・度志平野などがある。このなかの丸亀平野には現在西から弘田川・金倉川・土器川・大東川の4河川があり、善通寺付近と坂出付近は弘田川・金倉川・大東川の沖積作用によって形成された沖積平野であることが判っている。しかし丸亀付近は平野の東・西部と異なり、緩肩状地形を呈した洪積台地が大半を占めている。その洪積台地上およびそれぞれの沖積平野には上記各河川の旧河道の痕跡が現地表面においても容易に観察される。

川津下樋遺跡は大東川によって形成された沖積平野部分にあり、現在の大東川の西岸際に位置する。南に飯野山、東は常山・金山・城山、北に角山・聖通寺山などがあり、西は丸亀平野部へと開けている。

川津下樋遺跡に近い下川津遺跡では、発掘調査により、旧大東川の流路が微高地を挟むように数条確認されている。この地が不安定であったことをよく物語っている。このような状況は徐々に変化していったようで、古代には下川津遺跡が「津」として機能していたことも推定される。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

旧石器時代の遺構は石器の素材となるサヌカイトの産地である国分台・城山・金山が近くにあることもあり、備讃瀬戸の島嶼部や城山・国分台周辺に多く確認されている。

縄文時代

縄文時代の遺構としては樅石島ガンド遺跡・下川津遺跡で突帯文系の土器が出土している程度で、確実な遺構は検出されていない。

弥生時代

弥生時代前期には下川津遺跡で多数の遺物が出土している。前期の遺構は上面不定形の竪穴住居跡が検出されてはいるが、なお不明な部分が多い。しかし大東川流域には西又遺跡・川津下樋遺跡などの集落および生産域（水田跡）としての遺構が検出されているので弥生時代前期から集落が形成されていたことは確実である。弥生時代中期になると青ノ山・飯野山などの比高が高い場所に散布地が見られる。平野部ではあまり遺構が確認されていないことから居住域の変化が窺える。弥生時代後期になると爆発的に竪穴住居が増え、集落が形成されるようである。付近では下川津遺跡周辺と飯野山北山麓周辺に単位集落が



第6図 遺跡分布図

あるのではないかと推定されている。

このように付近においては弥生時代前期より大規模な集落が形成されており、当遺跡で井堰・水田跡が確認されているように、前期の頃から高度な技術による開発が行われていたことが裏づけられている。

古墳時代

古墳時代前期には爺ヶ松古墳・ハカリゴーロ古墳などの前期古墳が見られる。これらの前期古墳は弥生時代終末期（庄内併行期）から集落を形成した集団の首長の古墳である。古墳時代中期の古墳はあまり確認されていない。古墳時代後期になると青ノ山・飯野山・城山周辺に多数の群集墳が出現する。

古代から中世

古代において下川津遺跡は貢納生産物の一時的な集積地と考えており、「津」としての性格が強い遺跡と推定している。また、中世には港としての「宇多津」もあることから大東川流域は交通の要所で、古代から中世においては讃岐国の窓口の一つであった可能性が考えられる。また、この平野には現在でも確認できる方画地割が残っており、条里制が施行されていたことが窺える。

第3表 遺跡一覧表

番号	名 称	種 類	所在 地	18	川津中塚遺跡	集 落 路	川津町中塚、中原
1	青ノ山山頂古墳	古 墓	丸龟市土器町	19		塚	川津町中塚
2	青ノ山古墳群	古 墓	丸龟市土器町	20		塚	川津町中塚
3	青ノ山墓地公園古墳	古 墓		21	もりさん	塚	川津町中塚
4	青ノ山鹿耳並群	鹿	丸龟市土器町	22		骨壺出土地	川津町弘光
5	吉岡神社古墳	古 墓	丸龟市土器町吉岡	23	弘光庵廻如来座像	仏 像	川津町弘光
6	尾尾茶臼山古墳	古 墓	八幡町	24	圓重冢	塚	川津町中塚
7	南田尾古墳	古 墓		25	川津下體遺跡	水田跡・河川跡	川津町弘光、下機
8	南見塙古墳	古 墓		26	川津二代取遺跡	集落跡・河川跡	川津町二代取
9	奥宮古墳	古 墓	川津町下川津	27		塚	川津町弘光
10	下川津1号墳	古 墓	川津町下川津	28	川津医又遺跡	集 落 路	川津町西又、中又
11	小山古墳	古 墓	小山	29		散 布 地	川津町六反地
12	川津茶臼山古墳	古 墓	小山	30	川津一ノ又遺跡	集 落 路	川津町一ノ又、中又
13	尾尾茶臼山古墳	古 墓		31	川津東山田遺跡	集 落 路	川津町東山田
14	下川津追跡	集落跡・河川跡	川津町下川津、中塚	32	川津西遺跡	集落跡・河川跡	川津町川西
15		塚	川津町下川津	33	三ノ池古墳	古 墓	三ノ池
16	おたかのもり	塚	川津町中塚	34	飯野山山頂遺跡	祭祀 遺跡	川津、丸龟市、飯野町
17	川津元結木遺跡	集 落 路	川津町元結木	35	飯野・東二瓦壁遺跡		丸龟市飯野町東二瓦壁

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

川津下槽遺跡の発掘調査は平成2年5月10日から工事請負方式で開始し、平成3年1月31日に終了した。

発掘調査に先立って当調査区をI～V区に分けた（第7図）。また、調査区画として、遺跡周辺部分の土地区画を考慮に入れ、グリッドを設定した。その基準となるのは、現在の遺跡周辺の土地区画に方画地割の状況が残っており、その基軸が真北から23° 西方に偏るのを反映したものである。区画設定の基準点として使用したのは、下川津遺跡調査時のI 2ポイント（国土座標第IV座標系、X = 143,328,276, Y = 32,022,306）である。

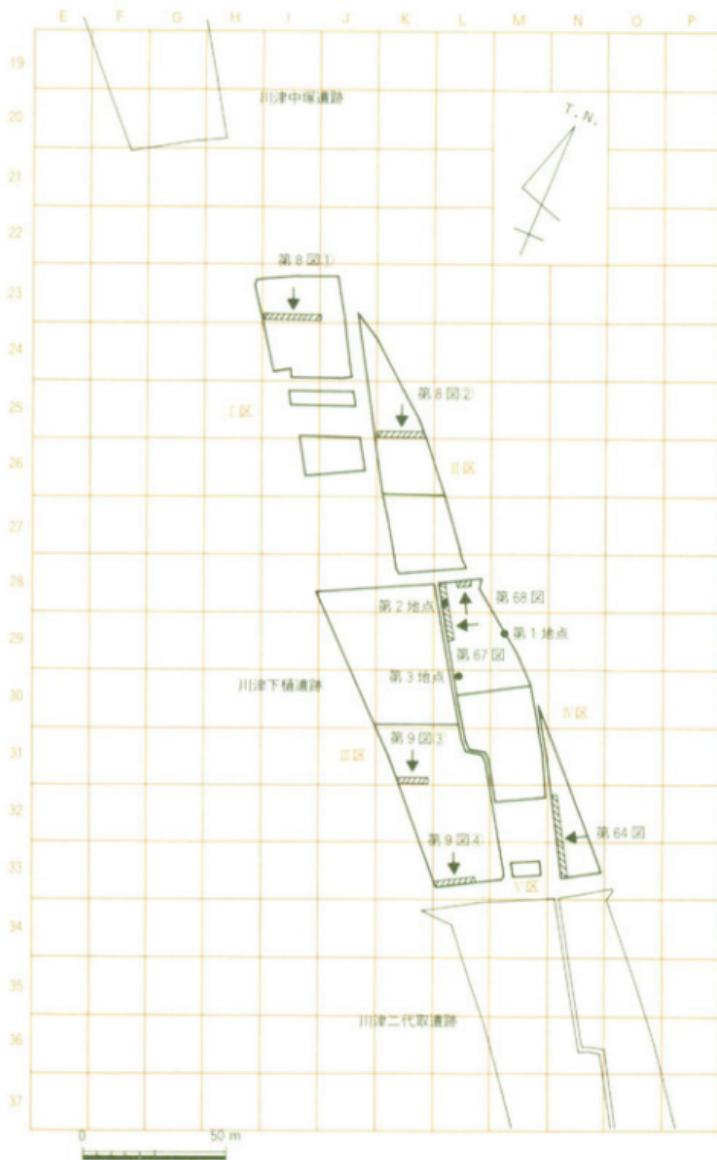
上記の基準点から、最小単位20m×20mの正方形の小区画を調査対象地域が包括できるように設定し、区画された基準線に対して東西方向にA～のアルファベットを南北方向に0～のアラビア数字を用いて呼称した。この区画設定の方法は、大東川右岸に所在する川津中塚遺跡I・II区、川津下槽遺跡、川津二代取遺跡に共通し、当遺跡はその中のH～Nと23～33の基準線が適用できる。

発掘調査は試掘調査の結果を再確認するために試掘調査の行っていない部分に予備調査を実施し、その結果を踏まえ第I調査区から順次発掘調査を実施した。

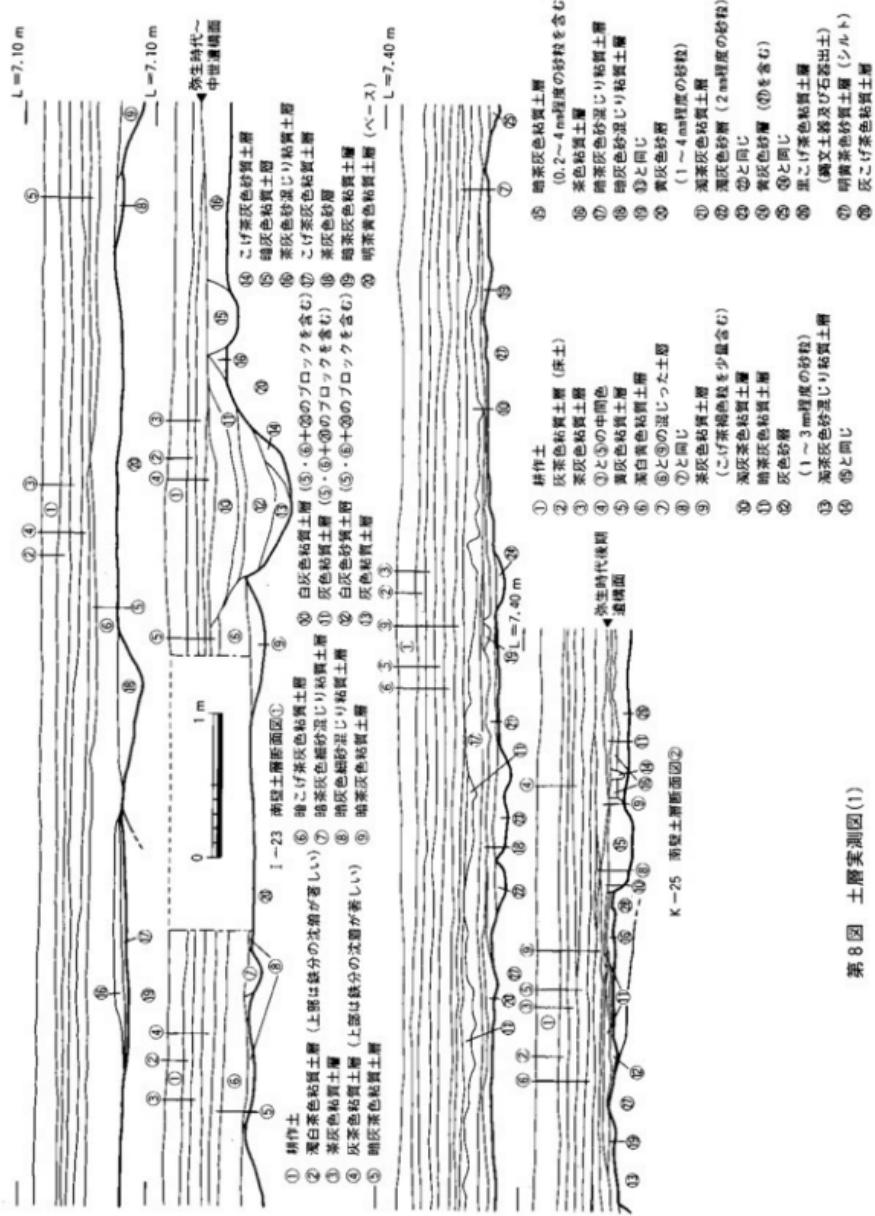
検出された遺構の平面図化は基本的には航空写真測量を行い、土層および細かい部分については適宜手書きを導入した。

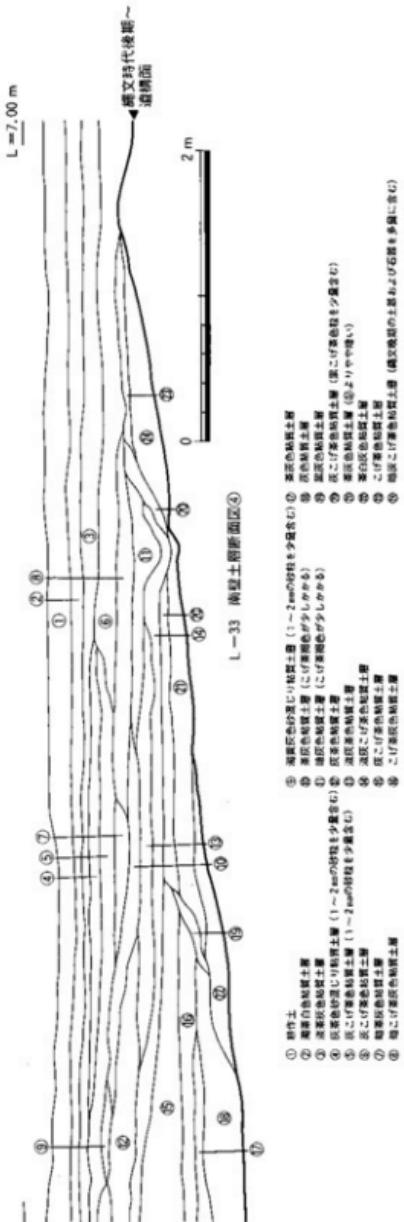
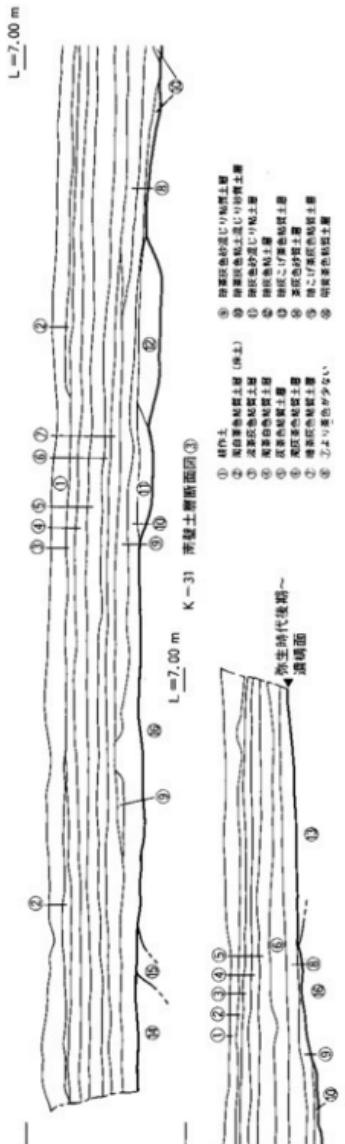
第2節 土層序

川津下槽遺跡で検出された遺構は、大別すると縄文時代晩期～弥生時代前期・中期・後期・古墳時代前期・古代・中世・近世の7時期ある。しかし、層位的には後世の削平により同一遺構面で違う時期の遺構が検出されることもある。たとえば縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構面と弥生時代中期の遺構面の間に第67図より10cmの間層が確認できる部分もあり、統一性はない。弥生時代中期と後期および中世の遺構面は同一面で検出した。近世



第7図 調査区割図・土層観察位置図





第9図 土層実測図(2)

は更に上位に遺構面があることが確認されている。

土層は上位から耕作土、灰茶色粘質土、茶灰色粘質土、黄灰色粘質土、濁白黄色粘質土とほとんど水平堆積を呈しており、旧の水田面と考えられる面が2面確認されている。この下層に若干の包含層があり、明茶黄色粘質土の地山がある。ほぼこの層位を基本としている。

第3節 遺構・遺物について

1. 弥生時代前期

川津下槽遺跡が所在する坂出平野(広義の丸龜平野)は、大東川を主要河川として北に下川津遺跡・川津中塚遺跡、南の飯野山裾に川津一ノ又遺跡などの大集落が形成されている。このような周辺遺跡の隣接するなかで川津下槽遺跡では、竪穴住居などの集落は検出されず、自然河川・溝・水田などの遺構が検出されている。また、自然河川では井堰も検出され、このような遺構からもわかるように、当遺跡は当時の生活空間のなかでの居住域ではなく、生産域として位置付けられるものである。

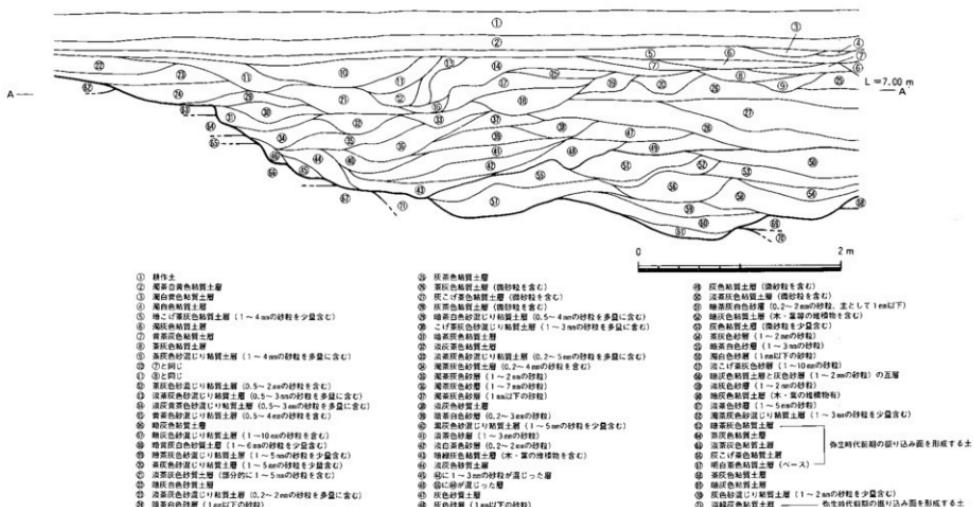
川津下槽遺跡と同じような状況の川津二代取遺跡でも、溝を主とする遺構が検出されている。そのため当遺跡周辺は下川津遺跡や川津一ノ又遺跡などの2大集落の基盤である生産域として位置付けられ、弥生時代の坂出平野の生活を復元するにあたり、重要な位置を占めるものと思われる。

当遺跡は坂出平野を北流する大東川の東部に位置し、検出されたSR01や溝はこの大東川の一支流と考えられる。しかし、当時(弥生時代)の大東川が現在の位置に流路を取っていたかは不明で、大東川の一支流説は推測の域をでない。

検出された遺構を弥生時代のなかでも古いものから紹介する。

SR01

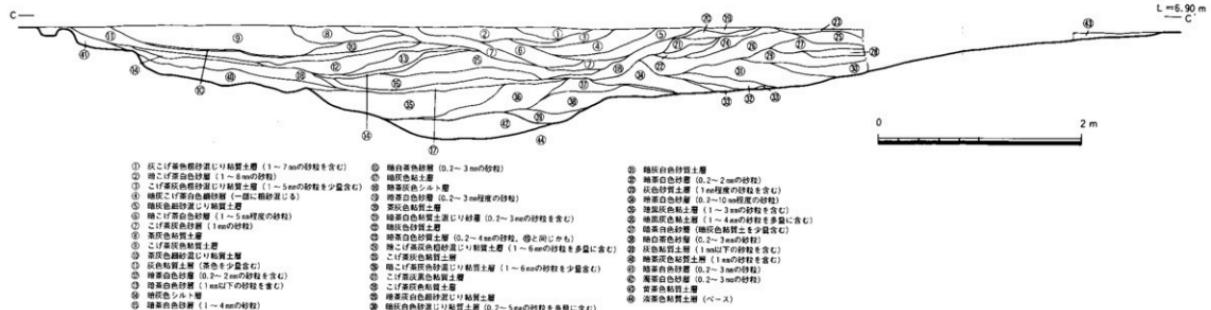
この自然河川は当調査区南部の川津二代取遺跡で検出されている自然河川と同じものと考えられるが、その接点がちょうど宅地部分と重複しており確証はない。そこでまず始めに当調査区(第Ⅲ～V調査区)の状況と川津二代取遺跡の状況とを説明する。まず、①川津二代取遺跡で検出された自然河川(SR02)は蛇行しながらも南西方向から北東方向に流路を取るもので明確には検出されていないが、調査区北部では北東隅に向かって延びている。規模は検出幅約6m、深さ約0.75mを計る。②当調査区で検出されている自然河川SR01は南東方向から北西方向に流路を取るがその南端部では若干東に屈曲する。規模はほぼ中央部で天幅約11.0m、深さ約1.08mを計る。③上記の接点部分である宅地部分(第V調査区)の



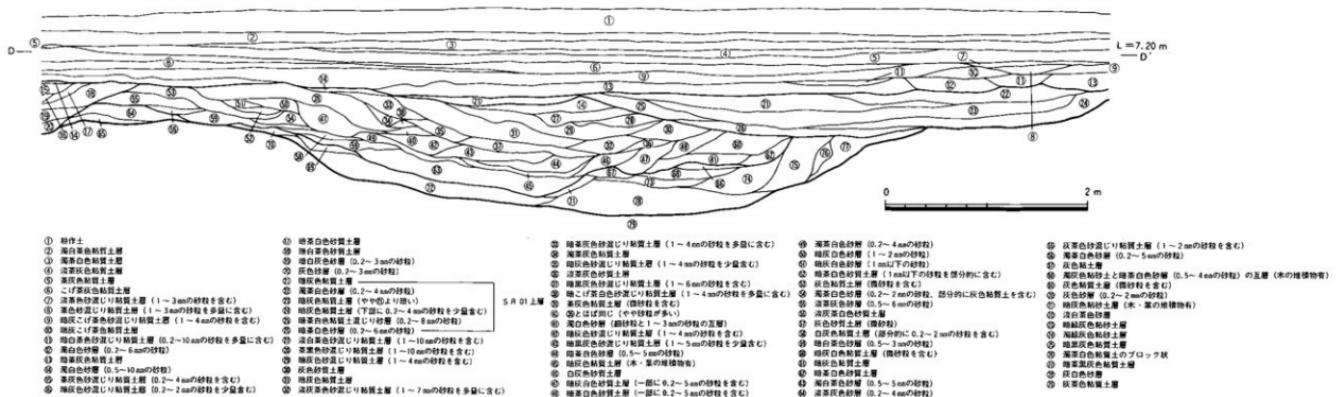
第10図 SR01 土層断面図①



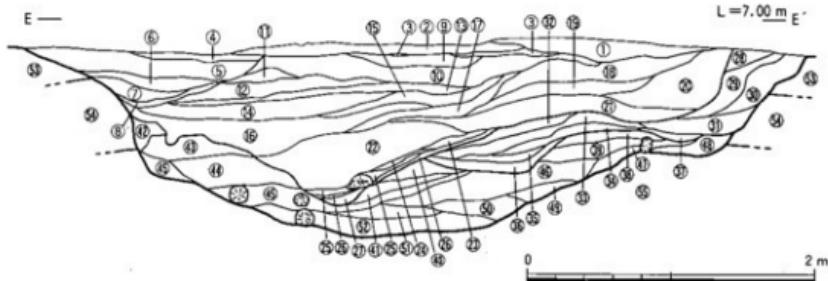
第11回 SR01 土層断面図②



第12回 S.B.01 土層断面図③

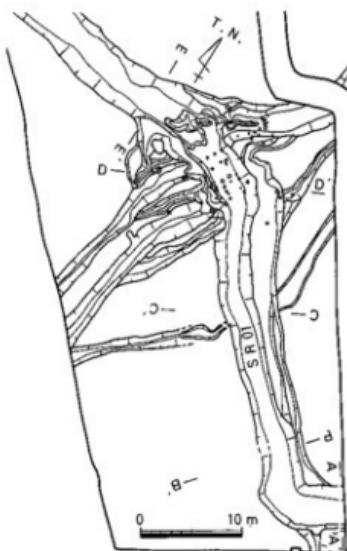


第13図 SR01 土層断面図④



地こそ苔色沙質じり粘土質土層 (0.2~3 mmの砂粒を含む)	包含層
地底の粘土質土層	
赤褐色じり粘土質土層 (0.2~2 mmの砂粒を含む)	
赤褐色砂疊じり粘土質土層 (1~2 mmの砂粒を含む)	
暗褐色粘土質土層 (微細粒を含む)	
褐色の粘土質土層	
灰色の土層 (0.5~10 mmの砂粒)	
灰色の粘土質土層	
地面白色粘土質土層	
灰色の粘土質土層 (微砂粒を多量に含む)	
① 薄褐色の沙質層 (1 mm以下)の砂粒)	
② 薄褐色の沙質層 (0.5~1 cm)の砂粒)	
③ 薄褐色の沙質層 (0.5 mm以下の砂粒)	
④ 薄褐色の沙質層 (0.5~10 mmの砂粒)	
薄褐色の沙質層 (1 mm以下)の砂粒)	
⑤ 薄褐色の沙質層 (0.5~10 mmの砂粒)	
⑥ とこぼり同じ	
灰褐色の粘土層 (微砂粒を含む)	
泥炭色沙質粘土層	
某灰色沙質土層	
白褐色沙質土層	
浅白色沙質層 (0.5~3 mmの砂粒)	
淡白色沙質層 (0.5~2 mmの砂粒)	
赤褐色沙質土層 (木・草等の堆積物有)	
淡白色沙質土層 (木・草等の堆積物有)	
淡褐色沙質土層 (0.5~10 mmの砂粒)	
赤褐色沙質土層	
湖沼底の粘土質土層 (⑩ をブロック状に含む)	
灰褐色の粘土質土層	
薄褐色の白色沙質層 (1 mm以下)の砂粒)	
薄褐色の沙質層 (1 mm以下)の砂粒)	
淡白色沙質層 (0.5~3 mmの砂粒)	
褐色沙質土層 (木・草等の堆積物有)	
淡褐色沙質層 (0.5~4 mmの砂粒)	
淡褐色シルト・粘土層 (木・草等の堆積物有)	

第14図 SB-01主層断面図⑤



第15図 SR 01 土層観察位置図

調査では面積が狭いものの検出されている自然河川は流路を北方向に取り、第Ⅳ調査区南部のSR02に繋がる。④出土遺物および堆積土より両遺跡で検出された自然河川の時期はほぼ同時期と考えられる。以上の4点から推察するとSR01と川津二代取遺跡で検出されているSR02は流路の方向が違うことや規模も若干違うことなどからおそらく川津二代取遺跡で検出された自然河川は流路を北方向に取り、当調査区のSR02に繋がり、南東隅をかすめながら調査区外に延びるようである。したがって当調査区で検出されたSR01は川津二代取遺跡で検出された自然河川（SR02）とは別のもので、その分流と考えられる。

SR01は調査区南部で検出されており、時期によって若干流路方向を異にするが、主流は南東方向から北西方向に流路を取る。中央部では西に屈曲し、北端は西方向に調査区外へと延びている。ちょうど中央屈曲部で井堰が2箇所で検出されている。

SR01の土層堆積状況は土層図①～⑤をみると下部に砂層を主にした土層を、上部に粘質土を主にした土層がみられ、ほぼ同じような堆積を示しており、それを大別すると上層・中層・下層・最下層となる。

上層はSR01の最終埋没時期と考えられる弥生時代後期のもので、流路は中層・下層・最下層のSR01の流路方向を取らず中央屈曲部上から真直ぐ北方向に延びるようである。規模は南端部では天幅約4.16m、深さ約0.4m、中央部では天幅約7.12m、深さ約0.36m、北端部では天幅約5.20m、深さ約0.42mを計る。

中層は粘質土を主とする上部部分と砂層の下部部分に分けられる。中層上部の埋没時期は出土遺物より弥生時代中期で、中層下部は弥生時代前期である。規模は中央部で天幅約5.4m・深さ約0.8mを計る。

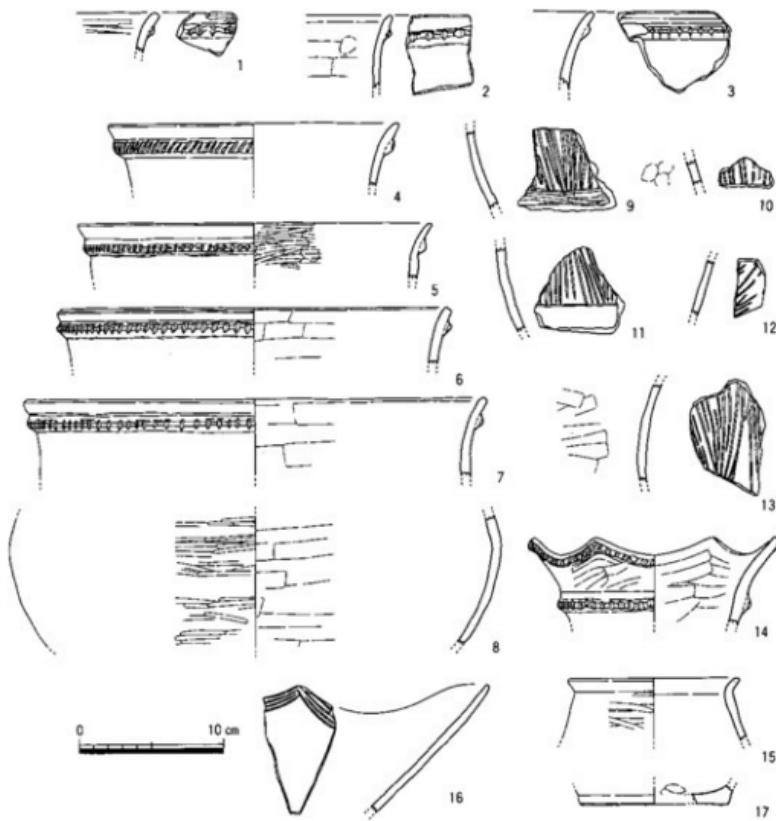
下層は砂層を主とし、埋没時期は出土遺物より弥生時代前期である。規模は南端部で天幅約4.6m・深さ約0.64m、中央部では天幅約6.48m・深さ約0.84m、北端部では天幅約5.4m、深さ約1.32mを計る。

最下層はSR01の南端西側に堆積していたもので、直接SR01の埋土かどうか判別できないが、土層図②より明らかに最下層を埋土とする落ち込みが確認できることからここではSR01に含めた。

①最下層

SR01最下層は第II図土層図②の第⑩層（暗こげ茶灰色粘質土）の上層と第⑫層（暗黒灰色粘質土）の下層からなる。

最下層はSR01の土層図②でしか確認されていない。その堆積状況はSR01の最下

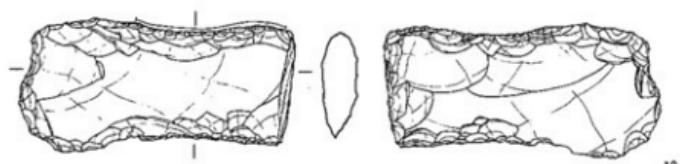


第16図 SR 01 最下層（暗黒灰色粘質土）出土遺物実測図(1)

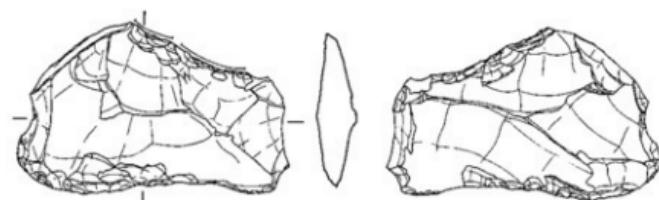
部で確認される土層⑯～㉔の上部に水平堆積しているものである。また、この最下層は下層以上の流路とは方向を異にしておりほぼ調査区南方向に真っ直ぐ延びるようである。土層㉖～㉔からは遺物は出土していない。

1～23は最下層（暗黒灰色粘質土）より出土した遺物である。

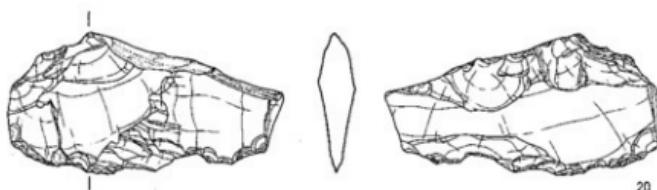
1～14は深鉢である。1～13は口縁端部外面に刻目突帯を持つもので、頸部外面に鋸歯状のヘラ描沈線が施されているものと施されないものがある。ヘラ描沈線が施されているものには、頸部と体部を区画するようなヘラ描沈線があり、全てその上方に施されている。14は口縁端部外面と頸部下端に二条の刻目突帯を持つもので、口縁部は波状口縁を呈する。15は壺である。頸部が内傾し、口縁部が外方に短く屈曲する。弥生時代前期の壺の祖形か。16は波状



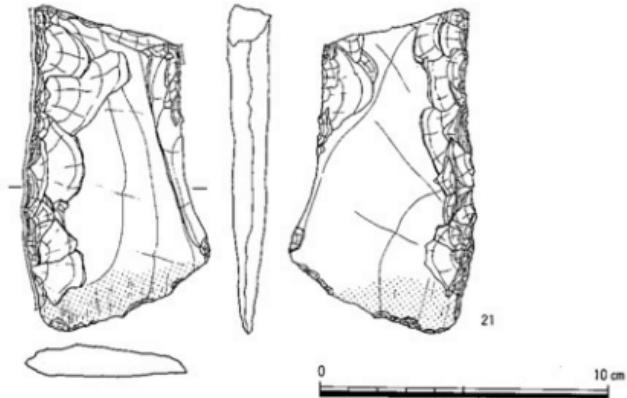
18



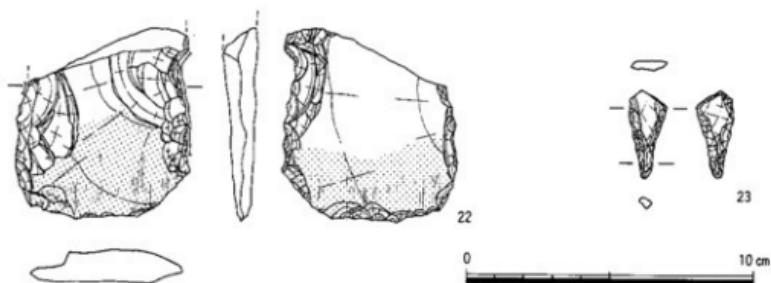
19



20



第17図 SR 01 最下層（暗黒灰色粘質土）出土遺物実測図(2)



第18図 SR 01 最下層（暗黒灰色粘質土）出土遺物実測図(3)

第4表 SR 01 最下層（暗黒灰色粘質土）出土土器観察表

番号	形態	器種	口径	器高	底径	外 面	内 面	その他	焼成	色 調	胎 土	遺存度
1	50	縄文 深鉢				斜目尖底文・ハラズキ			普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.2~1mmの砂粒を少含む 含む 石英・長石含む	破片
2	50	縄文 深鉢				斜目尖底文・ハラズキ			普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.2~1mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	破片
3	50	縄文 深鉢				斜目尖底文・ハラズキ			普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.1~1mmの砂粒を含む 含む 石英・長石含む	破片
4	50	縄文 深鉢	20.0cm			斜目尖底文・摩滅			普通	赤褐色 5R4/6~6	0.1~3mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	口徑 2/8
5	50	縄文 深鉢	24.3cm			斜目尖底文・ハラズキ			普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.1~1mmの砂粒を含む 含む 石英・長石含む	破片
6	50	縄文 深鉢	26.4cm			斜目尖底文・板付	(内)縄目	(外)縄目	普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.1~1mmの砂粒を含む 含む 石英・長石含む	破片
7	50	縄文 深鉢	31.4cm			斜目尖底文・ ハラズキ	板付		普通	灰褐色 2.5Y5/2	0.1~1mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	破片
8		縄文 深鉢				ハラズキ	板付		普通	暗灰褐色 2.5Y5/2~ 暗灰褐色 2.5Y5/2	0.2~1mmの砂粒を含む 含む 石英・長石含む	径 1/8
9	50	縄文 深鉢				ハラズキ	板付	(内)縄目	普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.1~1mmの砂粒を含む 含む 石英・長石含む	破片
10		縄文 深鉢				ハラズキ	ハラズキ	(外)縄目	普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.1~1mmの砂粒を含む 含む 石英・長石含む	破片
11	50	縄文 深鉢				ハラズキ	ハラズキ	(内)縄目	普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.1~1mmの砂粒を含む 含む 石英・長石含む	破片
12		縄文 深鉢				摩滅	ハラズキ	(内)縄目	普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.2~3mmの砂粒を含む 含む 石英含む	破片
13	50	縄文 深鉢				摩滅	ハラズキ	(内)縄目	普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.1~1mmの砂粒を含む 含む 石英含む	破片
14	50	縄文 深鉢	17.3cm			斜目尖底文・ 板付	(内)縄目	(外)縄目	普通	灰褐色 2.5Y5/2	0.1~1mmの砂粒を含む 含む 石英・長石含む	口徑 1/8
15	50	縄文 盆	11.8cm			ハラズキ	ハラズキ	摩滅	普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.1~1mmの砂粒を少含む 含む 石英含む	口徑 1/8
16		縄文 深鉢				摩滅		(内)口縁部	普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.1~1mmの砂粒を含む 含む 石英含む	破片
17		縄文 深鉢				摩滅		ハラズキ	普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.2~1mmの砂粒を含む 含む 石英・長石含む	底盤 1/8

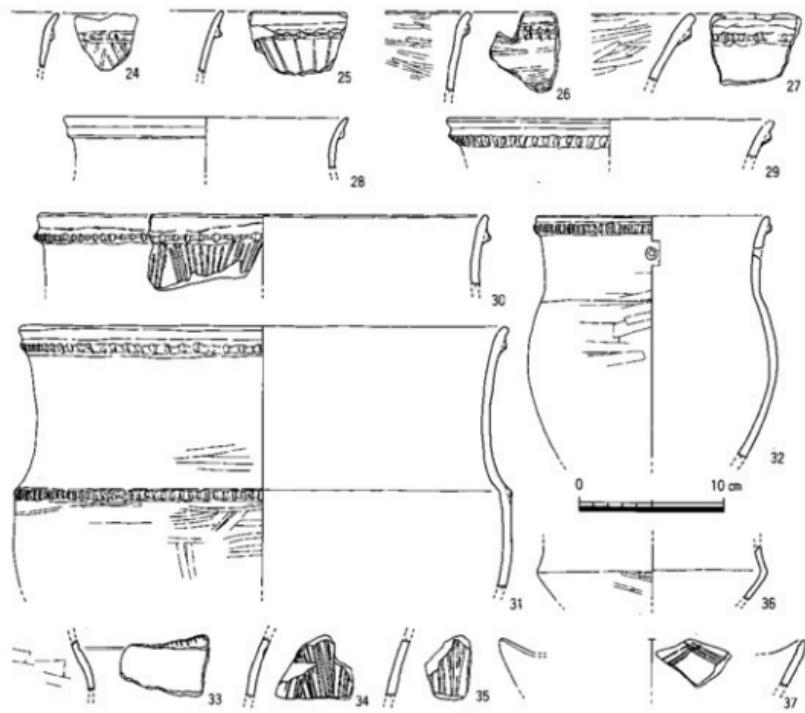
第5表 SR 01 最下層（暗黒灰色粘質土）出土石器観察表

番号	形態	器種	現存長	最大幅	最大厚	重 量	材 質	整 形・調 整 の 特 徴
18	51	石刀丁	9.4cm	4.4cm	1.2cm	65.72g	石質	風化、左側刃に抉りあり。該部位(背面)に鉛打痕あり
19	51	石刀丁	9.4cm	5.6cm	1.3cm	76.4kg	石質	風化、左側刃に抉りあり。該部位(背面)に鉛打痕あり
20		石刀丁	9.5cm	4.7cm	1.3cm	62.95g	石質	風化
21	51	石刀	11.1cm	6.3cm	1.4cm	105.81g	石質	風化、基部欠損、側面刃に鉛打痕あり、刃部両面に摩滅・擦痕あり
22	51	石刀	6.3cm	6.0cm	1.2cm	48.57g	石質	風化、基部欠損、側面刃に鉛打痕あり、刃部両面に摩滅・擦痕あり
23	51	石錐	3.0cm	1.3cm	0.4cm	1.35g	石質	風化

口縁の浅鉢である。口縁部内面に3条のヘラ描沈線が認められる。17は底部である。

18~23は石製品である。

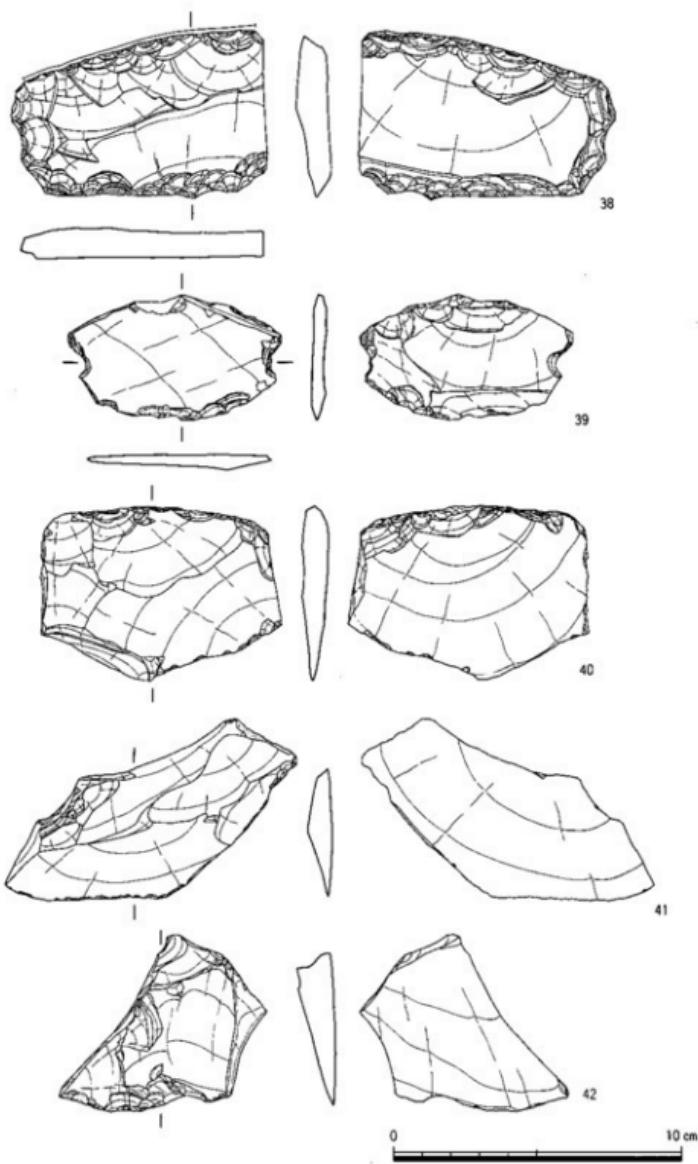
18~20は打製石庖丁である。形態は短冊型を呈し、端部片側に抉りが認められる。21~22は打製石鋤である。刃部が真っ直ぐなものと傾斜するものが認められる。刃部は両側が摩滅しており、擦痕が認められる。23は石錐である。



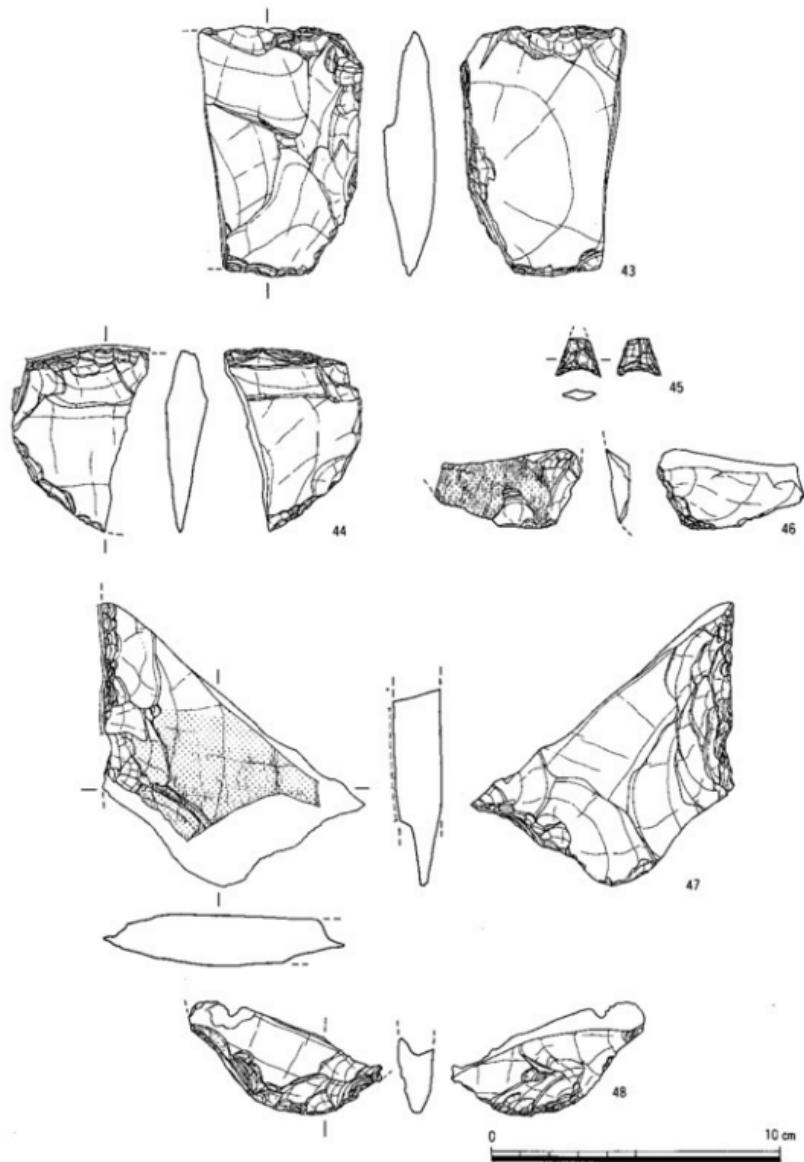
第19図 SR 01 最下層（暗こげ茶灰色粘質土）出土遺物実測図(1)

第6表 SR 01 最下層（暗こげ茶灰色粘質土）出土土器観察表

遺物	文様	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他の	焼成	色 調	胎 土	遺存度
24	網文 深鉢					縦目安突文 塗滅	[外]縦部に人字突文	普通	明赤褐色 SYR5/6	0.1~4mmの砂粒を多量に含む 石質含む	織片	
25	網文 深鉢					縦目安突文 ハラ	[外]縦部に人字突文	普通	にぼい黄褐色	0.1~2mmの砂粒を多量に含む 石質含む	織片	
26	網文 深鉢					縦目安突文 ハラ	縦目安突文	普通	にぼい黄褐色	0.1~2mmの砂粒を少量含む 石質含む	織片	
27	網文 深鉢					縦目安突文 ハラ	縦目安突文	普通	灰黄褐色 10YR5/2	0.1~2mmの砂粒を多量に含む 石質含む	織片	
28	網文 深鉢	19.5cm				垂葉・突帯 塗滅	普通	明赤褐色 SYR5/6	0.1~1mmの砂粒を多量に含む 石質含む	織片		
29	網文 深鉢	22.2cm				縦目安突文 ハラ	普通	灰黄褐色 10YR5/2	0.1~3mmの砂粒を含む 石質含む	織片		
30	網文 深鉢	30.8cm				縦目安突文・刺離	[外]縦部に人字突文	普通	にぼい黄褐色	0.1~2mmの砂粒を含む 石質含む	織片	
31	網文 深鉢	33.6cm				縦目安突文 ハラ	縦目安突文	香港	灰黄褐色 10YR5/2	0.1~3mmの砂粒を多量に含む 石質含む	白底 1/8	
32	網文 深鉢	16.0cm				縦目安突文 ハラ	縦部に穿孔	普通	黒褐色 2.5YR3/2	0.1~4mmの砂粒を多量に含む 石質含む	口底 2/8	
33	網文 深鉢					穿孔	横方向の[外]縦部に	普通	暗灰褐色 2.5Y5/2	0.1~2mmの砂粒を含む 石質含む	織片	
34	網文 深鉢					穿孔	横方向の[外]縦部に人字突文	普通	灰黄褐色 10YR5/2	0.1~1mmの砂粒を含む 石質含む	織片	
35	網文 深鉢						[外]縦部に人字突文	普通	黄褐色 2.5Y5/1	0.1~1mmの砂粒を含む 石質含む	織片	
36	網文 深鉢						ハラ	普通	黒褐色 2.5Y3/2	0.1~1mmの砂粒を多量に含む 石質含む	径 1/8	
37	網文 深鉢	21.0cm				穿孔	[外]縦部 穿孔	普通	灰黄色 2.5Y7/2	0.2~5mmの砂粒を少量含む	織片	



第20図 SR 01 最下層（暗こげ茶灰色粘質土）出土遺物実測図(2)



第21図 SR 01最下層（暗褐色茶灰色粘質土）出土遺物実測図(3)

第7表 S R 0 1 最下層（暗こげ茶灰色粘質土）出土石器観察表

番号	工具類	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調整の特徴
38	52	石庖丁	8.8 cm	5.6 cm	1.1 cm	84.75g	#38(1)	風化、長側刃（背）に敲打痕あり、短側刃の一方に抉りあり
39	52	石庖丁	7.4 cm	4.3 cm	0.5 cm	22.61g	#38(1)	両側刃に抉りあり、一部に摩滅あり
40	52	スクレイパー	8.4 cm	5.9 cm	0.9 cm	61.34g	#38(1)	風化
41	52	スクレイパー	10.1 cm	6.2 cm	0.9 cm	45.29g	#38(1)	白色風化
42	52	スクレイパー	6.0 cm	5.8 cm	1.2 cm	40.97g	#38(1)	風化、一部欠損
43	52	スクレイパー	5.6 cm	8.4 cm	1.8 cm	106.28g	#38(1)	風化、一部欠損
44	52	スクレイパー	4.3 cm	6.2 cm	1.4 cm	40.23g	#38(1)	風化、一部欠損、長側刃（背）に敲打痕あり、片面に摩滅あり
45		石鏃	1.3 cm	1.5 cm	0.3 cm	0.45g	#38(1)	風化、巴墨式、先端部欠損
46	53	石劍	2.7 cm	4.8 cm	0.7 cm	9.62g	#38(1)	基部欠損、刃部片面に摩滅・擦痕あり
47	53	石劍	7.1 cm	8.4 cm	1.6 cm	123.87g	#38(1)	風化、基部・刃部欠損、左側刃に敲打痕あり、刃部片面に摩滅・擦痕あり
48	53	石劍	3.1 cm	5.4 cm	1.2 cm	21.50g	#38(1)	風化、基部欠損、刃部片面に摩滅あり

24～48は最下層（暗こげ茶灰色粘質土）より出土した遺物である。

24～35は深鉢である。この上層出土の深鉢も下層出土の深鉢と形態及び調整においてほぼ同じものと考えられる。36・37は浅鉢である。37は波状口縁で、口縁部内面に3条のヘラ描沈線が施されている。

38～48は石製品である。38・39は打製石庖丁である。短冊状を呈するものは端部片側に抉りを持つ。40～44はスクレイパーである。41・42は切り出しナイフ状を呈する。45は石鏃、46～48は打製石劍である。

最下層出土遺物は土器が深鉢と浅鉢を主とし、僅かに壺が認められる。深鉢は口縁端部外面に1条の刻目突帯を施し、頸部外面に鋸歯状のヘラ描沈線を施すものを主とし、頸部外面にヘラ描沈線の鋸歯文が施されるものがある。この時期に石製品では打製の石庖丁が共伴しているようである。したがってこの時期より水稻耕作が行われていたことが推測される。石器は短辺部に抉りの入った石庖丁やスクレイパー・石劍が出土している。

最下層として上下2層に細分したが出土遺物にあまり時期差はなく、2層とも時期は縄文時代晚期と思われる。

②下層

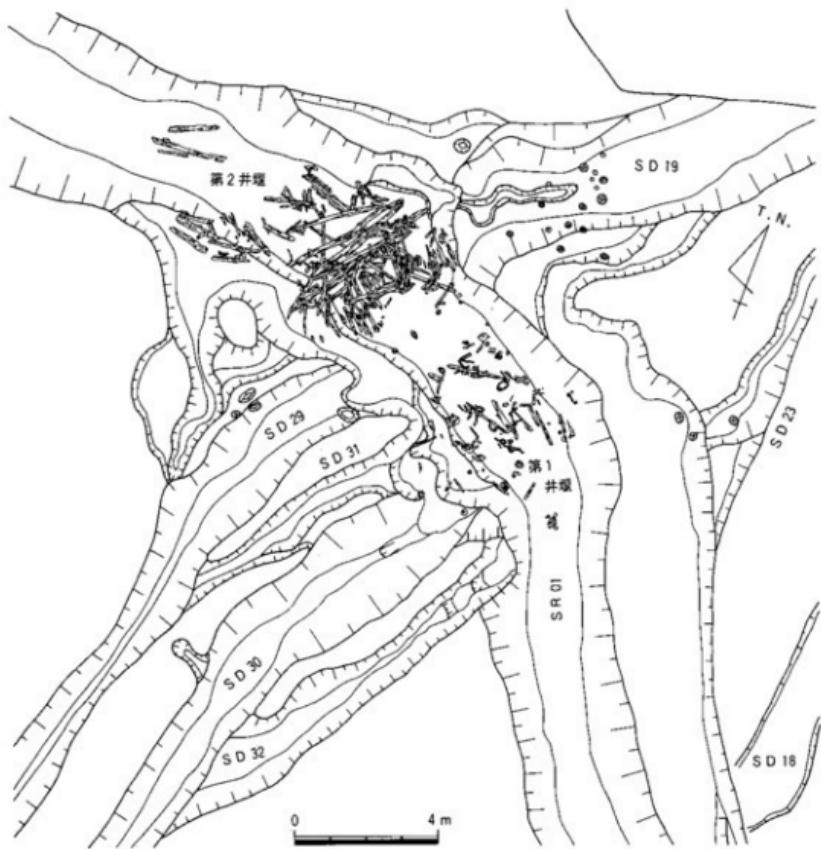
S R 0 1 下層は0.5～5 mmの砂粒の灰白色砂層（下層）と淡白茶色砂層（上層）に細分される。検出されたS R 0 1 全域で確認できる。それぞれの層より井堰が検出された。

下層で検出した井堰を第1井堰とし、上層で検出した井堰を第2井堰とする。

第1井堰

第1井堰はS R 0 1 のほぼ中央部、西に屈曲する部分で検出された。検出状態は灰白色砂層に混じり井堰部材が崩壊し、その隙間から杭が数本確認できる状態であった。

第1井堰はS R 0 1 の土砂によって倒壊されているため、その詳細は不明であるが、河



第22図 第1・2井堰平面図

床に残る杭やその他の部材の出土からここでは井堰とし、概要を説明する。

土層的には下層第⑯層（灰白色砂層）内より検出されており、この堆積によって破壊されたものである。この層内より多数の杭および井堰を構成する板状の部材と横木が出土し、炭化物も多量に混じっている。

この部材と灰白色砂層を取りのぞくとSR 01河床に15本の杭が確認された。この杭は河床全面に打たれており、流路に平行に並びが取れるものと直行に並びが取れるものがある。その杭列の規模をみるとSR 01に直行する長さは約2.5m、平行する長さは約2.4mを計る。ちょうどこの付近のSR 01が天幅4.64m、河床幅2.52mであることからほぼ幅

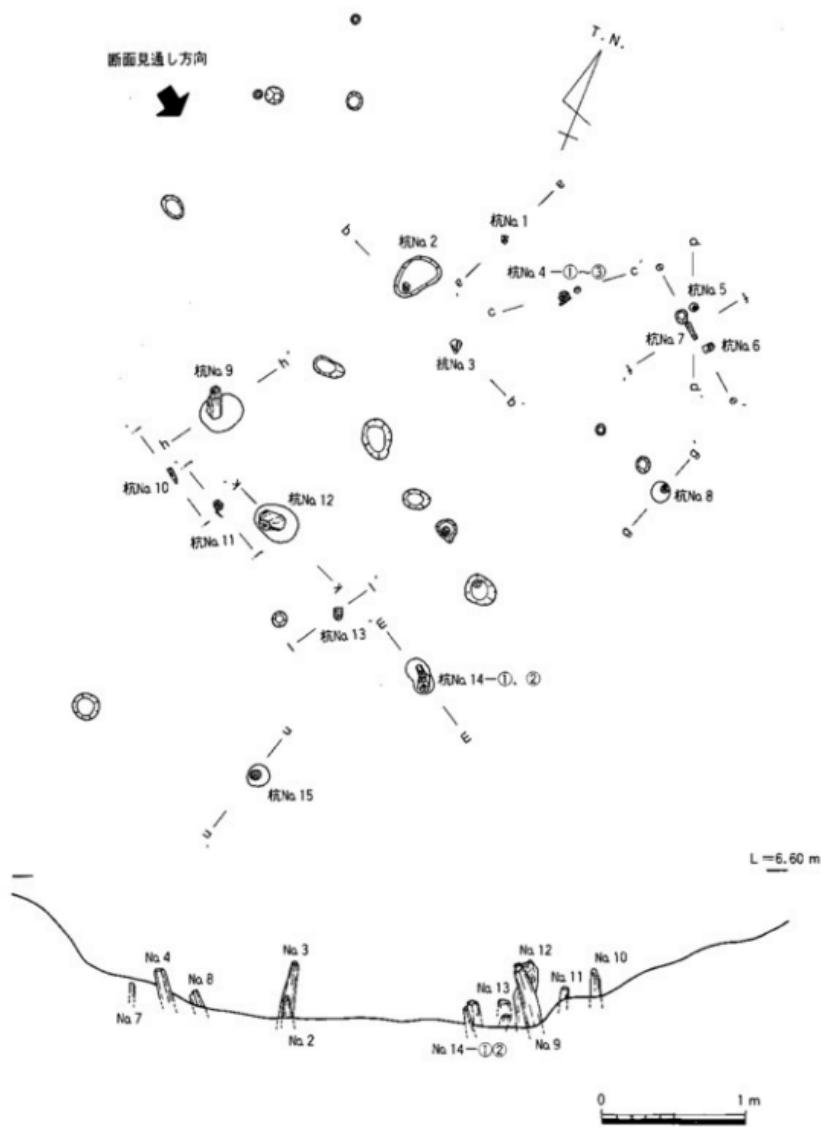


第23図 第1井堰平面図

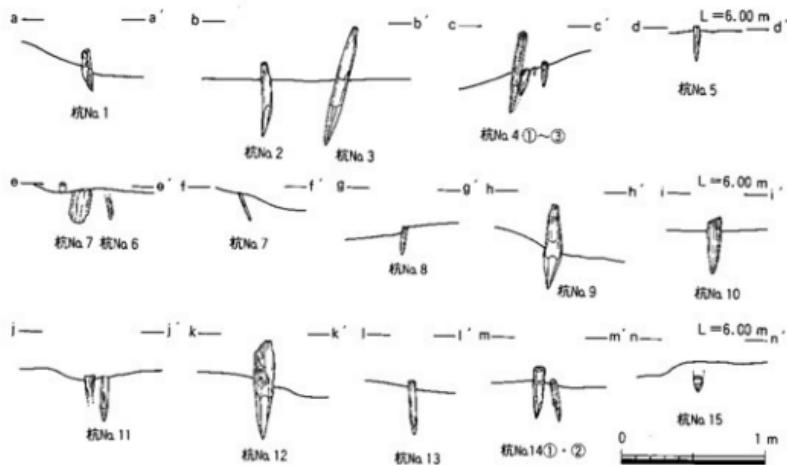
いっぱいに造られていたことがわかる。

河床で検出された杭はそのほとんどが、ほぼ垂直に打たれており、そのことから上部構造を推察すると直立型の井堰の可能性が考えられる。また、SR01の流路に対しては直行する。したがって井堰前面に受ける水圧が大きいと倒壊する恐れがあることから、あまり水量のない河川と考えられる。

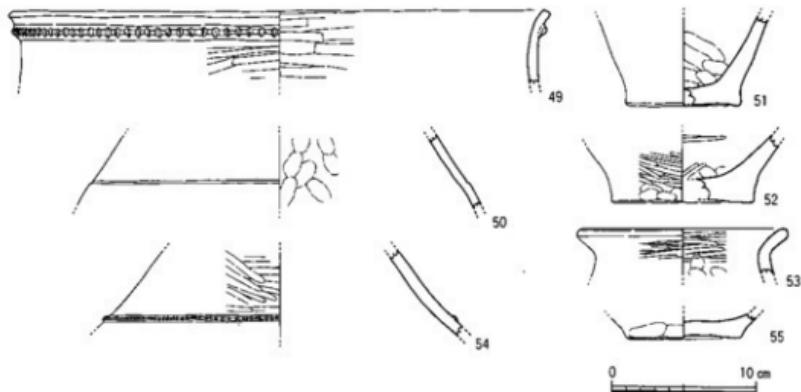
ここより約2m下流(北部)では第2井堰が検出され、南東からSR01に流れ込む溝SD29~32、北東に流れ出す溝SD19・23も検出されている。これらの溝のなかで第1井堰に関係のあるものはその位置関係および遺物よりSD23・30・32と思われる。



第24図 第1井堰平面図・見通し断面図



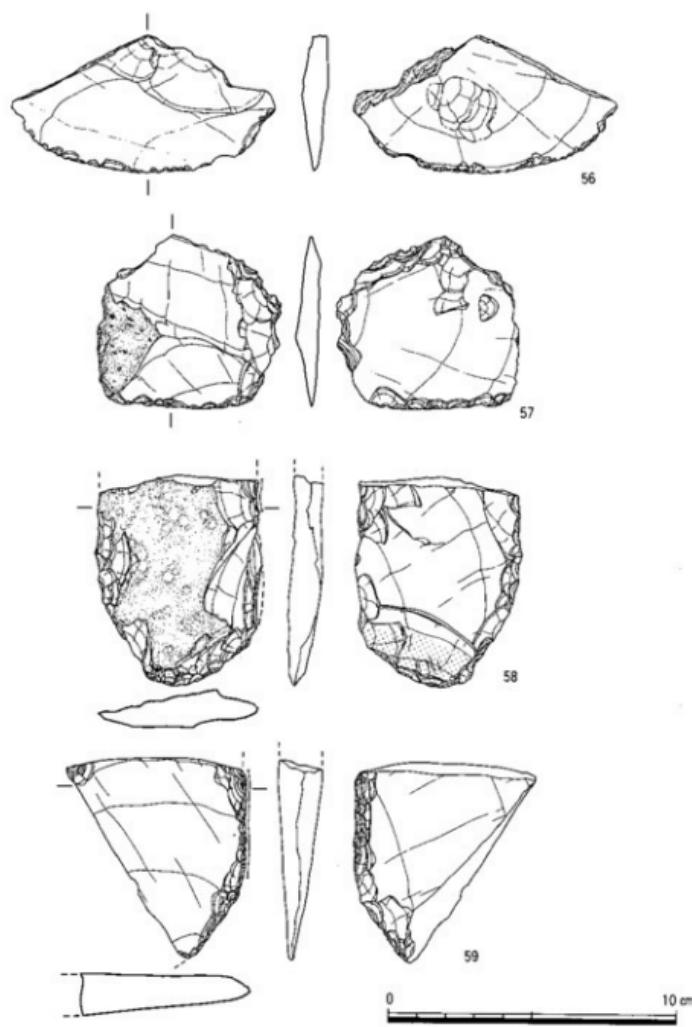
第25図 第1井堀杭断面図



第26図 第1井堀出土遺物実測図(1)

第8表 第1井堀出土土器観察表

番号	品目	器種	口径	器高	底種	外面	内面	その他	焼成	色調	胎土	遺存度
49	53	縄文 深鉢	37.4 cm		刮削痕有 底付	側方向の 擦痕有	-	-	普通	灰褐色 5/4/1	0.1~1 mmの砂粒を少許含む 板片	
50	53	縄文 盆				剥離	指付	(外)滑り出 上の擦	普通	灰褐色 10/2/3	0.2~3 mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	
51	54	縄文 底部		8.0 cm	++	指付	(内)貝花飾 付着	-	普通	灰褐色 10/2/3	0.3~3 mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	
52	54	縄文 底部		9.6 cm	へら形+指 突き	へら形+指 突き	-	-	普通	灰褐色 2.5/7/2 10/2/3	0.2~3 mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	底底 3/6
53	53	縄文 亞	14.4 cm		板付+付	指突き あり	-	-	普通	灰褐色 10/2/5/2	0.2~3 mmの砂粒を含む石英 ・長石含む	口底 1/8
54	53	縄文 盆			剥離側面 有	++	-	-	普通	灰褐色 10/2/3	0.1~3 mmの砂粒を含む石英 ・長石含む	底 1/8
55		底生 底部		8.0 cm	指付+付 あり	摩擦	-	-	普通	灰褐色 10/2/4	0.1~3 mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	底底 8/8

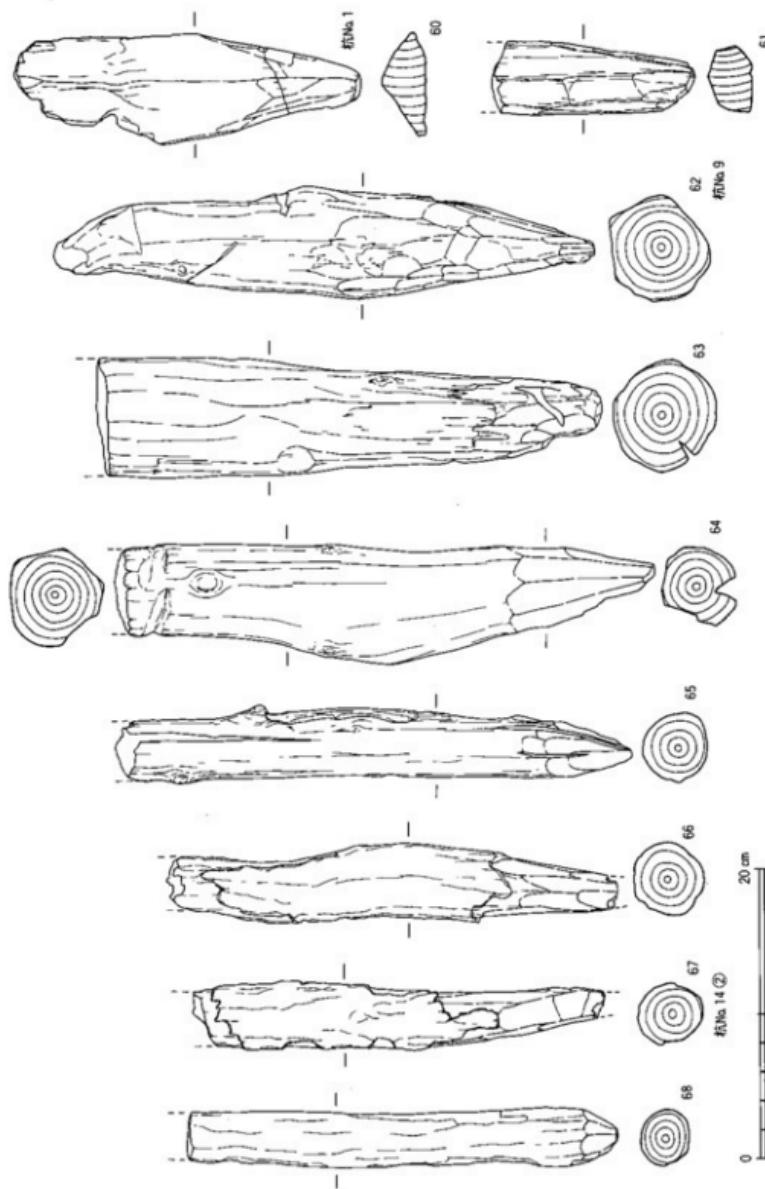


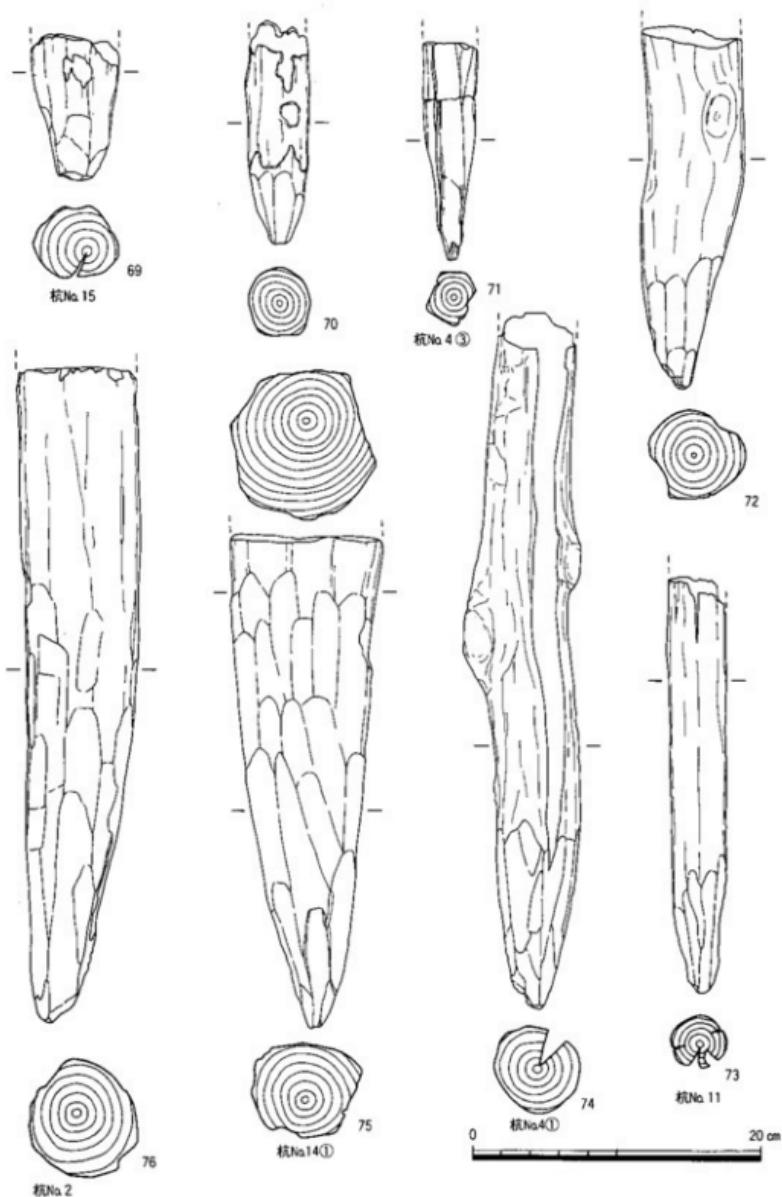
第27図 第1井堰出土遺物実測図(2)

第9表 第1井堰出土石器観察表

遺物 番号	形質 圖	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴	
								左側	右側
56	336-1n'-	石核	9.1 cm	4.6 cm	0.9 cm	32.68g	±281		
57	336-1n"-	石核	6.3 cm	5.7 cm	0.8 cm	36.66g	±281		
58	石核	石核	7.1 cm	5.8 cm	1.1 cm	59.16g	±281	基部欠損、右側邊に敲打痕あり、刃部前面に磨滅・擦痕あり	
59	石核	石核	6.8 cm	6.3 cm	1.5 cm	50.34g	±281	一部欠損、右側邊に敲打痕あり	

第28圖 第1井層出土遺物測量圖(3)





第29図 第1井掘出土遺物実測図(4)

SD 30・32は第1井堰前面で南西方からSR 01に流れこみ、SD 23第1井堰前面では北方向に流れ出す。したがってこの第1井堰の機能を推察するとSR 01の水量に加え、SD 30の水量で水位を上昇させ、SD 23より水を引き込んでいたものと考えられる。

遺物は下層内および井堰部材が集中する内部より出土している。井堰部材は杭を主として出土しているが、その他に横木や板状の杭が出土している。

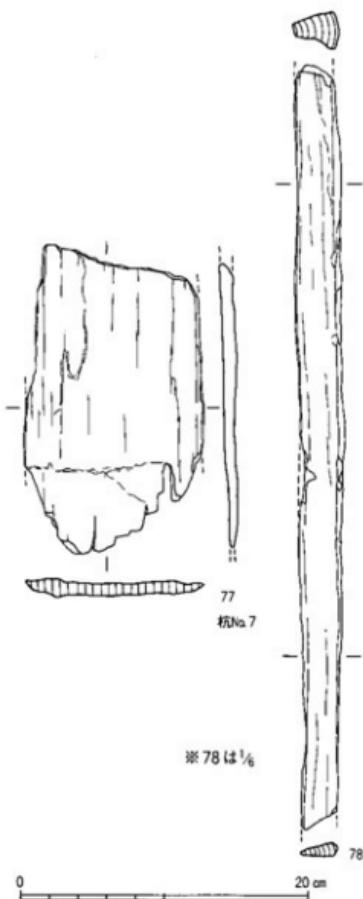
第1井堰と下層（灰白色砂層）より出土した遺物は49～59である。

49～52・56は第1井堰に伴う部材の集積内部に伴うものである。50は肩部に僅かに段を持つ壺である。

53・54・57～59は第1井堰直上の灰白色砂層より出土した遺物である。53は壺で、口縁部を短く外方に屈曲させる。54は肩部に削り出し突帯をもつものである。

60～78は第1井堰を構成する杭と板状部材である。60・61は柵目材を使用した杭である。62～73は芯持ちの杭である。77は板材を杭として使用している。78は井堰に使用した部材と思われる。杭に使用している材の種類はコナラ属コナラ亜属クヌギ節が多い。

時期は弥生時代前期中段階頃と考えられる。



第30図 第1井堰出土遺物実測図(5)

第10表 第1井堰出土木器観察表

遺物番号	写真図版	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	材質	その他の
60	55	杭	24.0 cm	7.4 cm		柱目	クヌギ	みかん削り材
61	杭	14.0 cm	5.0 cm			柱目	ムクロジ	みかん削り材
62	55	杭	55.7 cm	10.8 cm		芯持	クヌギ	
63	杭	35.0 cm	8.2 cm			芯持	クヌギ	
64	55	杭	37.4 cm	7.9 cm		芯持	クヌギ	杭上端に縦かけ溝あり
65	55	杭	35.7 cm	5.0 cm		芯持	クヌギ	
66	杭	31.3 cm	5.1 cm			芯持	クヌギ	
67	杭	28.5 cm	4.6 cm			芯持	クヌギ	
68	55	杭	29.9 cm	3.8 cm		芯持	アカガシ至高	
69	杭	9.6 cm	6.0 cm			芯持	クヌギ	
70	杭	15.1 cm	4.5 cm			芯持	タブノキ至高	
71	杭	14.7 cm	3.7 cm			芯持	クヌギ	
72	杭	24.3 cm	6.8 cm			芯持	クヌギ	
73	杭	28.4 cm	4.1 cm			芯持	アカガシ至高	
74	杭	37.2 cm	7.7 cm			芯持	クヌギ	
75	55	杭	33.6 cm	10.5 cm		芯持	クヌギ	
76	55	杭	34.8 cm	8.3 cm		芯持	クヌギ	
77	55	矢板杭	20.8 cm	11.9 cm	1.2 cm	板目	広葉樹	
78	井堰部材	78.4 cm	4.7 cm	3.8 cm		柱目	ヤマグワ	みかん削り材

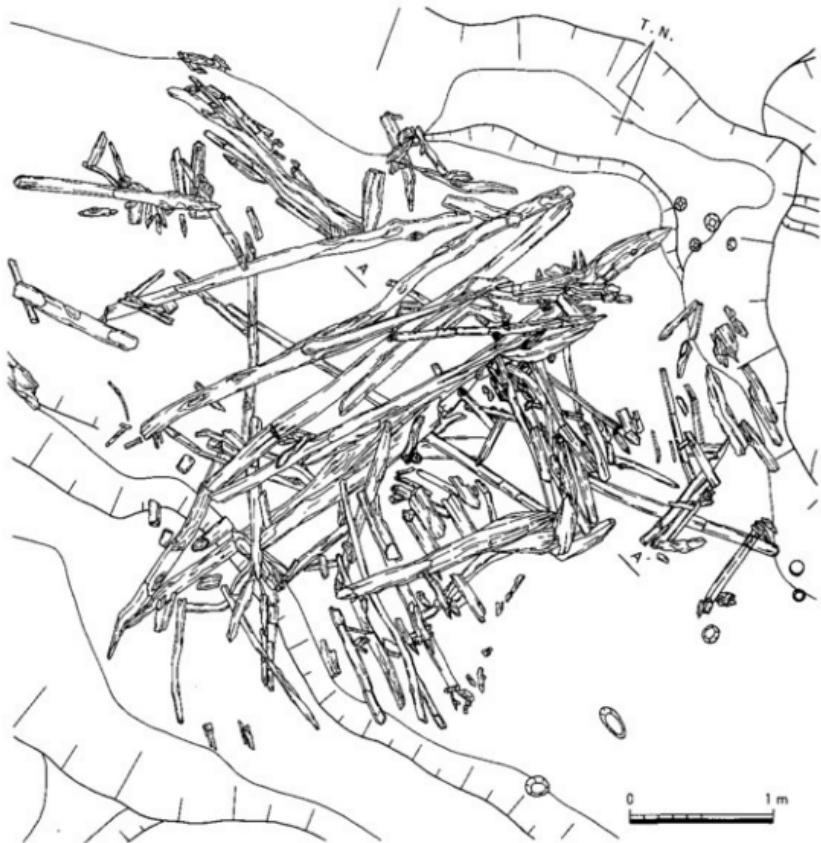
第2井堰

S R 0 1 下層淡白茶色砂層（上層）で検出された第2井堰は第1井堰の下流で検出された。検出状況は流路に対して横木が確認でき、それに直行するように板材が多数検出できた。また、下流には崩壊した井堰部材が検出されている。

S R 0 1 はこの位置で天幅4.3 m、底幅3.1 mの規模を持つ。検出された第2井堰は、やや上部に崩れはあるもののS R 0 1 の流路に直行し、規模は幅約3.6 m、基底部で上下流幅約2 mを計る。この井堰は第1井堰より残りがよく、最上部はないものの下部構造より合掌型に分類できる井堰であることがわかる。

第2井堰の構造は平面的にはS R 0 1 の流路に直行するように長さ約3~3.5 m、太さ11 cmの横木が検出段階で11本確認でき、その横杭に直行するように板状の部材が確認できる。また、断面からは上下流幅1.2 m、高さ0.25 mの土手状の高まりに、垂直に打った杭Aと上流方向への杭Bと下流方向への杭Cで横木を固定している。杭Aは太さ5~7 cmの芯持ち杭を使用しており、ほぼ垂直に断面観察部分では2列になるように確認できた。杭B・Cの斜めに打たれた杭は太さ8~9 cmで、杭Bが62.1°、杭Cが57.4°と若干上流側の杭の角度が大きいようである。杭Dは上流側の板材を固定したもので、直径4~5 cmとやや他の杭よりは細いようである。

また、横木と杭A~Cに絡めるように上流方向だけに傾斜をつけた板材を組む。この板材は長さ約1.2 m程度、幅0.05~0.1 m、厚さ0.03 mのもので、9.7°~13.5°の角度を

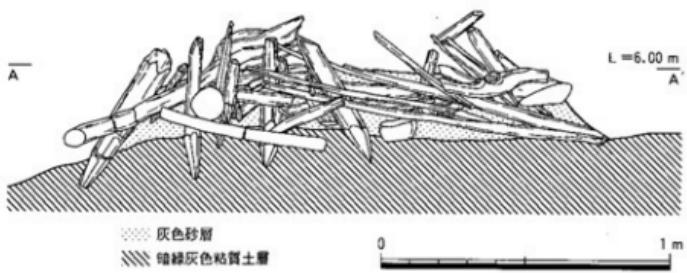


第31図 第2井堰平面図

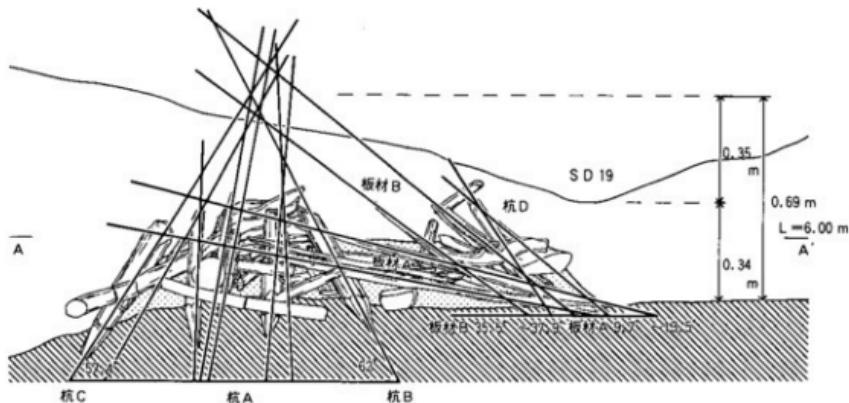
持つ板材Aと 35.5° ～ 37.9° の角度を持つ板材Bの2種類がある。板材の残りは悪いものの部分的には密に組まれており、この板材によって水流を留めるものと考えられる。しかし、その隙間に木の葉などを詰めていたかは不明である。また、杭および板材を固定するつるや紐状のものは確認されていない。受ける面の角度を変え、水圧をあまり受けない様にしているものと思われる。また、この板材を固定するように杭Dを打っている。

横木・杭・板材は交互になっており、井堰本体を水圧によって崩壊させないようにしているものと考える。これらの部材を繋ぎ止めるつる状のものは確認されていない。

第2井堰断面図より復元高を推定するとSR01底面より約0.8m前後が考えられる。



第32図 第2井堰断面図

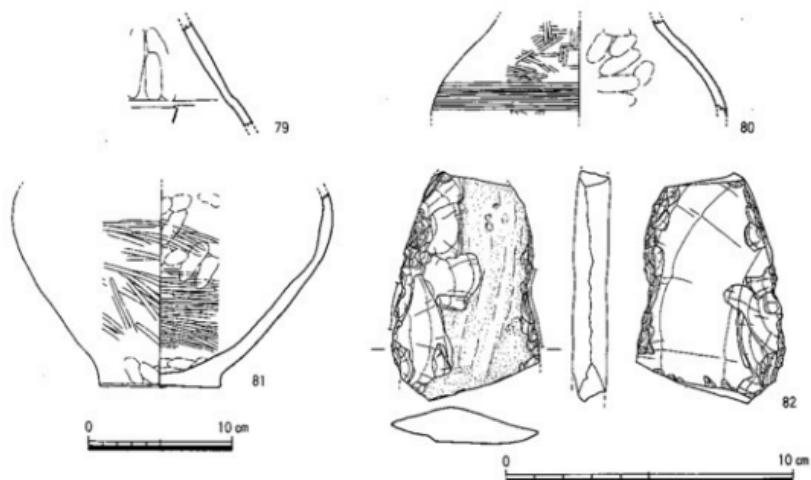


第33図 第2井堰断面模式図

また、SD 19を取水溝とすると、その溝の底高とSR 01の底高の差が約0.5mを計り、第2井堰復元高との差が0.3mであることから十分に水位を上げ、SD 19に水を引き込むことが可能であることがわかる。

SR 01の弥生時代前期段階の規模から推定するとあまり水量のない自然河川であったものと考えられる。これは前述したように川津二代取遺跡から延びる自然河川の支流であるということを裏付ける。

第2井堰に伴う遺物は弥生時代前期の遺物が内部より出土している。また、直上層である淡白茶色砂層より79～82の遺物が出土している。79～81は壺である。79は頭部と体部



第34図 第2井堀出土遺物実測図(1)

第11表 第2井堀出土器觀察表

器物 番号	瓦質 成形法	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色 調	胎 土	遺存度
79	56	弥生 罐				摩滅	指付 ¹ ・板 ²	(外)刷り出 しの段	やや 不良	灰青褐色 2.51S5/8	0.2~2mmの砂粒を多量に 含む石英・長石含む	板片
80	56	弥生 罐				へり口 ¹	指付 ² 大 きな凹凸 比較	(外)底面に 大きな凹凸 比較	普通	灰青色 2.51S5/3	0.1~1mmの砂粒を含む石 英・長石含む	板片
81	56	弥生 罐			8.4cm	へり口 ¹ ・指付 ²	指付 ³ 底 ⁴		普通	灰青色 2.51S5/2	0.1~1mmの砂粒を含む石 英・長石含む	底径8cm

第12表 第2井堀出土石器觀察表

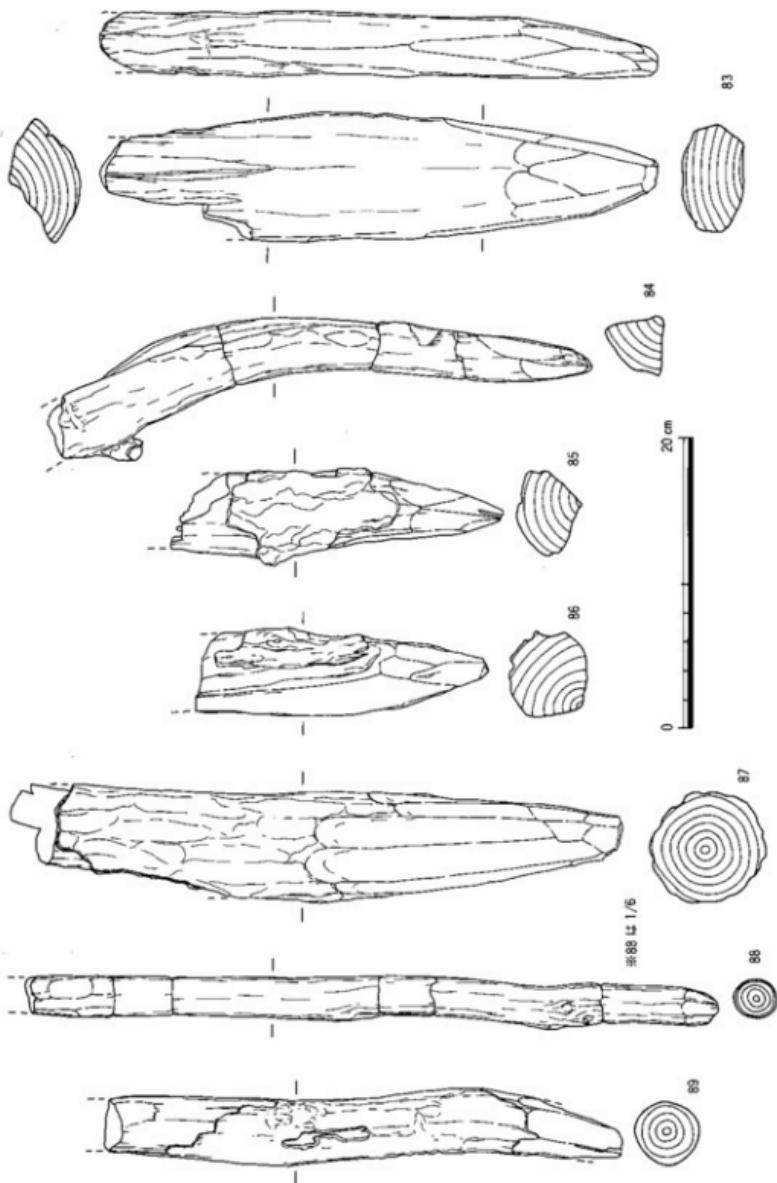
器物 番号	瓦質 成形法	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴
82	石歛	7.8cm	5.1cm	1.2cm	62.94g	±2.4%	基部・刃部欠損、両頭辺に崩壊あり	

の境に段を持つものである。80は頸部と体部の境に6条からなるヘラ描沈線を持つ。器表面はヘラ磨きが蜜に施されており、弥生時代前期新段階頃のものと思われる。82は打製石歛である。

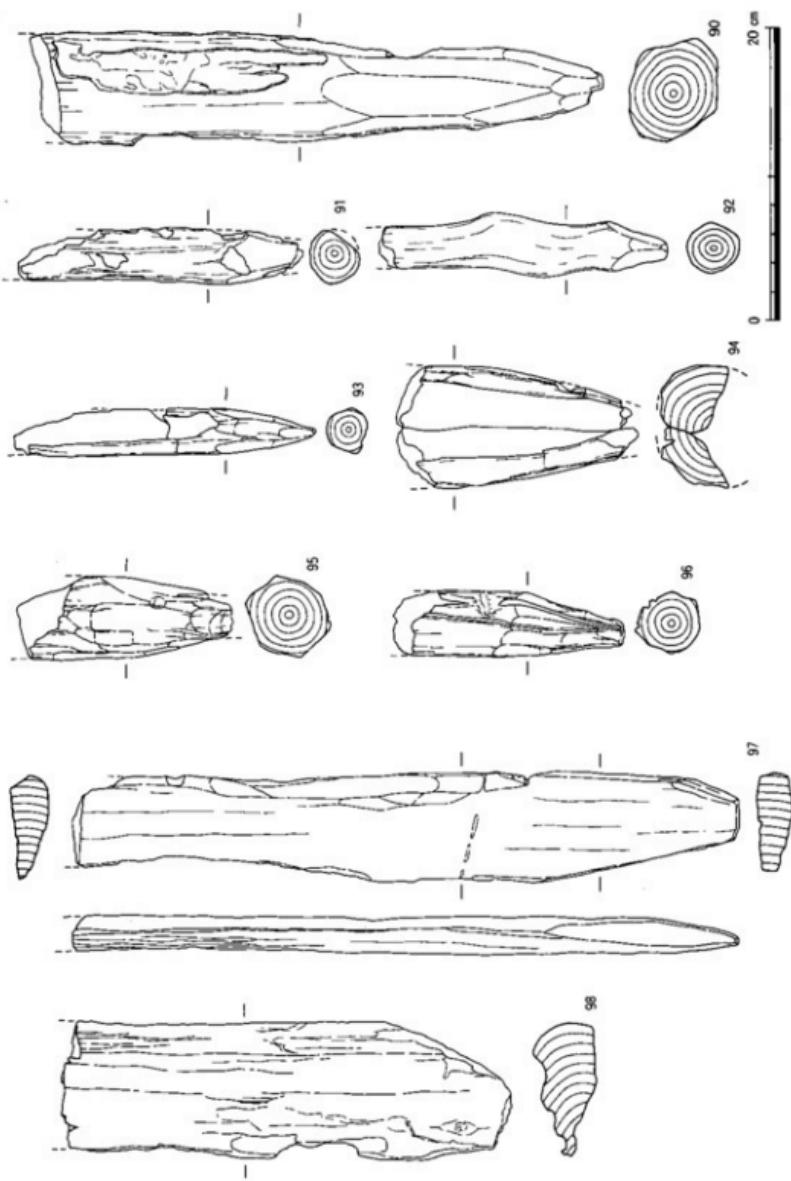
83~108は第2井堀に使用されていた木材である。83~98は杭で、99~105は板材で、106~108は横木と考えられる。

杭にはみかん割された材を杭とするもの、芯持ち材を杭にするもの、板材に割られたものを杭とするものの3種類が認められる。また、板材には薄くみかん割されたもの、板状のものなどが認められる。横木は太さ約0.14m、長さ約3.2mのものが使用されている。

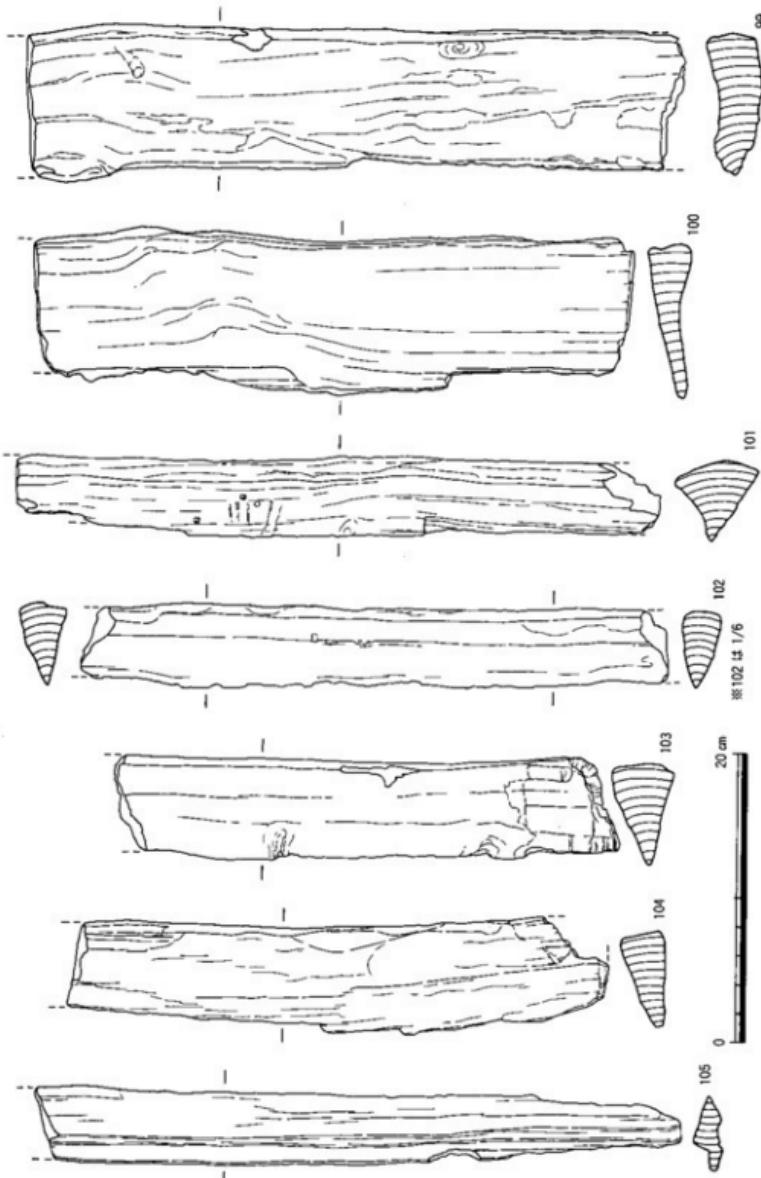
第35圖 第2井出土遺物測量圖(2)

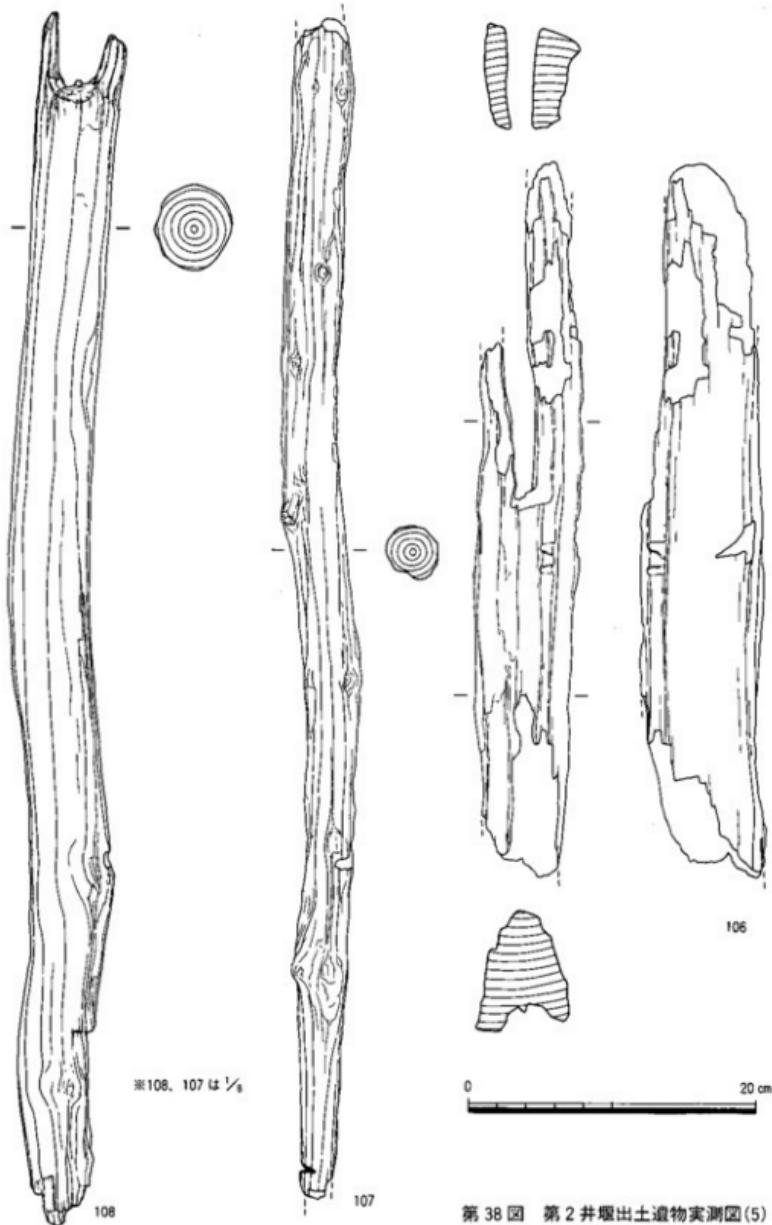


第36圖 第2井埋出土遺物實測圖(3)

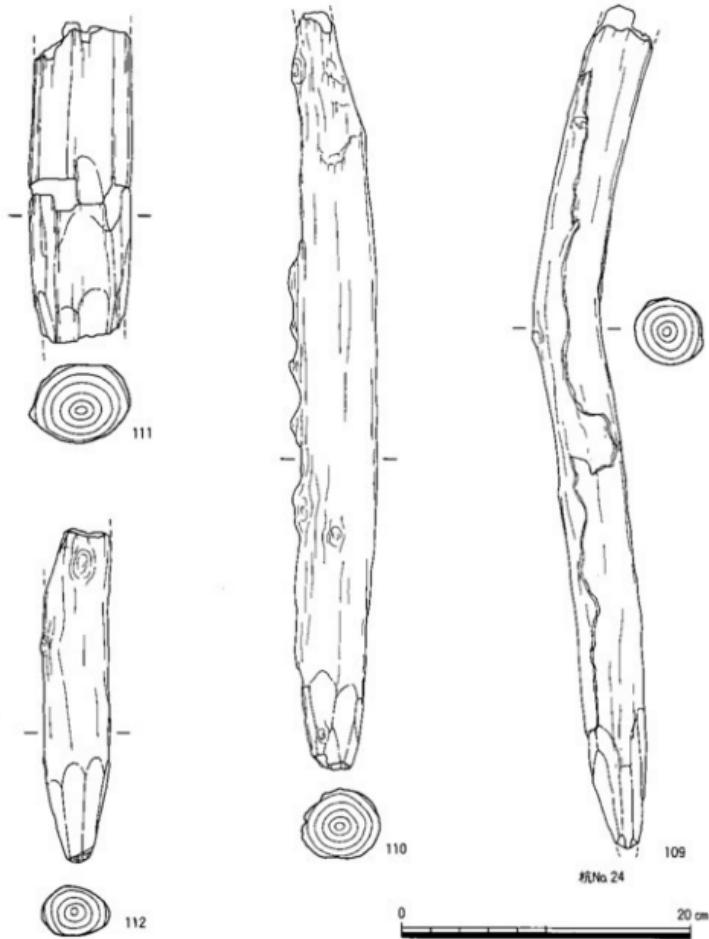


第37圖 第2井出土遺物實測圖(4)





第38図 第2井堀出土遺物実測図(5)



第39図 第2井環出土遺物実測図(6)

第13表 第2井堰出土木器観察表

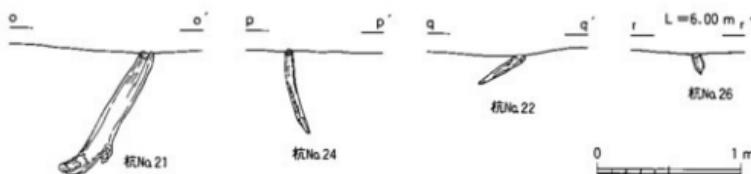
道具番号	写真図版	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	材質	その他の
83	56	杭	38.7 cm	8.6 cm		粗目	クヌギ	みかん削り材
84	56	杭	37.7 cm	4.9 cm		粗目	クヌギ	みかん削り材
85	56	杭	22.4 cm	5.3 cm		粗目	クヌギ	みかん削り材
86	56	杭	20.2 cm	6.1 cm		粗目	クヌギ	みかん削り材
87	57	杭	42.2 cm	7.7 cm		芯持	クヌギ	
88		杭	70.9 cm	4.5 cm		芯持	アカガシ亜属	
89	57	杭	36.0 cm	4.4 cm		芯持	広葉樹	
90	57	杭	39.0 cm	7.1 cm		芯持	アカガシ亜属	
91		杭	19.7 cm	3.7 cm		芯持	アカガシ亜属	
92		杭	20.0 cm	3.9 cm		芯持	エゴノキ属	
93		杭	20.9 cm	3.1 cm		芯持	イガシノキ属	
94		杭	16.7 cm	8.3 cm		芯持	アカガシ亜属	
95		杭	14.9 cm	5.7 cm		芯持	クヌギ	
96		杭	16.0 cm	4.5 cm		芯持	クヌギ	
97	57	杭	46.2 cm	7.3 cm	2.5 cm	粗目	ムクロジ	みかん削り材
98		井堰部材	31.3 cm	9.2 cm	4.3 cm	粗目	クヌギ	みかん削り材
99	57	井堰部材	45.4 cm	10.2 cm	3.5 cm	粗目	クヌギ	みかん削り材
100	57	井堰部材	41.8 cm	10.0 cm	2.9 cm	粗目	クヌギ	みかん削り材
101		井堰部材	34.4 cm	5.5 cm	5.5 cm	粗目	クヌギ	みかん削り材
102	57	井堰部材	60.8 cm	8.2 cm	3.9 cm	粗目	クヌギ	みかん削り材
103		井堰部材	33.6 cm	7.0 cm	4.2 cm	粗目	クヌギ	みかん削り材
104		井堰部材	37.1 cm	7.3 cm	3.0 cm	粗目	クヌギ	みかん削り材
105	57	井堰部材	44.5 cm	5.3 cm	1.7 cm	粗目	クヌギ	みかん削り材
106		井堰部材	49.1 cm	7.1 cm	7.0 cm	粗目	ヤマグワ	みかん削り材
107		井堰部材	161.4 cm	8.5 cm		芯持	クリ	
108	58	井堰部材	166.3 cm	11.6 cm		芯持	ヤマグワ	
109		杭	56.9 cm	4.7 cm		芯持	イガシノキ属	
110	58	杭	51.0 cm	6.0 cm		芯持	ヒノキ	
111	58	杭	21.2 cm	7.1 cm		芯持	クヌギ	
112	58	杭	23.0 cm	4.8 cm		芯持	クヌギ	

その他の杭

109～112は井堰検出位置よりやや上流部分（南部），ちょうどSR01がSR02から分流するあたりで検出した杭である。現状からは第1・2井堰のような構造を推定するような杭群ではないが，ちょうど川津二代取から延びる自然河川（SR02）からこのSR01が分流する部分（第V調査区検出杭）と分流し，北西方向に屈曲する部分で確認されたことから，水をSR01に引き込むための何らかの施設があった可能性が考えられる。

これらの杭は井堰に使用していた材と同じようにクヌギが多いことがわかる。

時期は下層としている砂層から検出されていることから弥生時代前期である。しかし，



第40図 SR01南部検出杭断面図

どちらの井堰と共に伴するかは不明である。

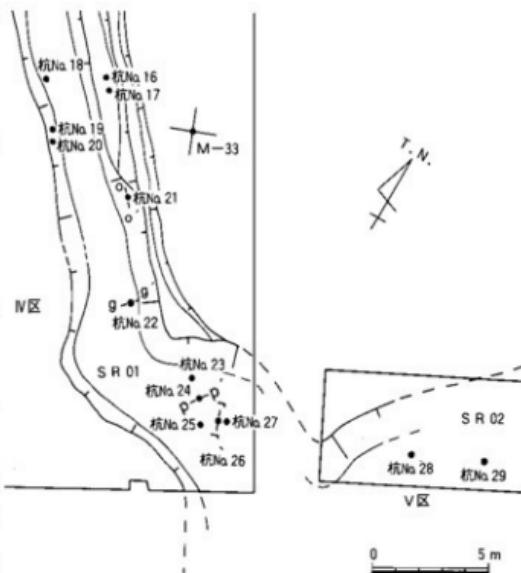
③中層

中層は粘質土の上層と砂層の下層に大きく分けられる。

下層は濁白茶色砂層を基本とするもので、第2井堰が検出された淡白茶色砂層の上部の層である。

下層より113～163が出土している。

113～118は縄文土器で深鉢・浅鉢が出土している。深鉢は口縁端部外面に刻目突帯を持つものと持たないものがみられる。

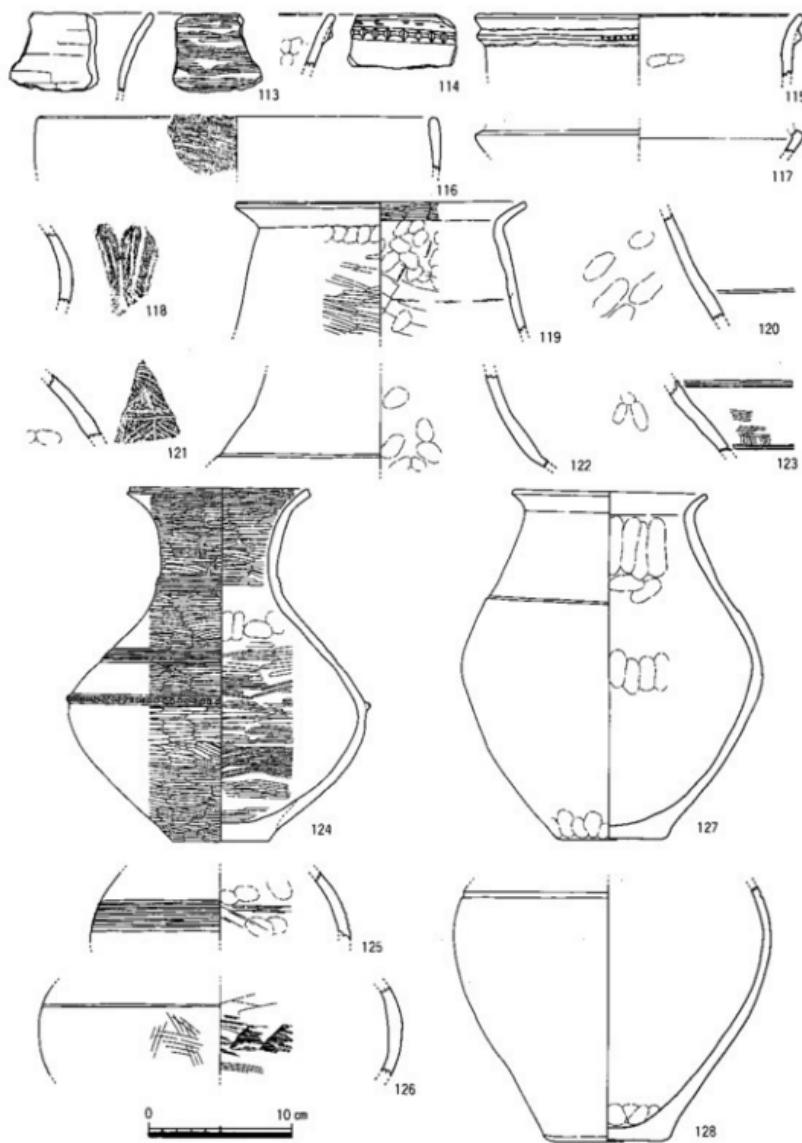


第41図 SR 01南部検出杭位置図

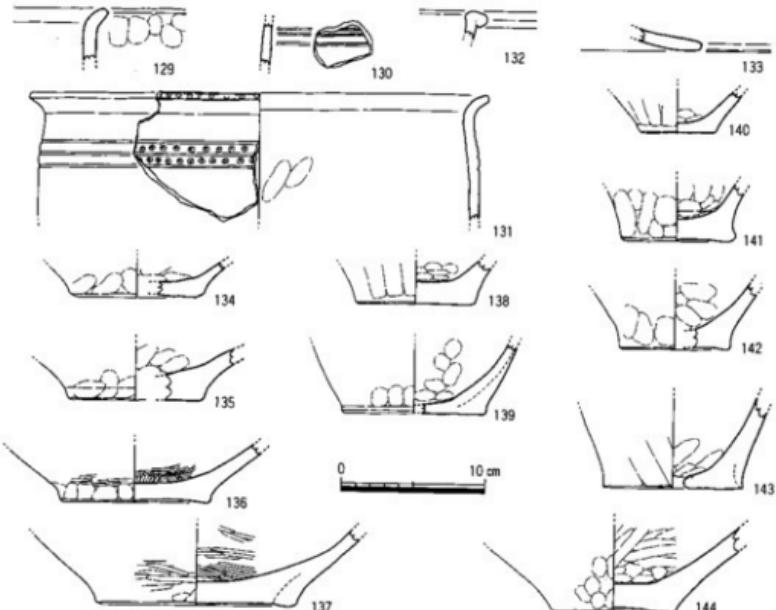
119～144は弥生土器である。壺には119のように頸部が内傾しながら立ち上がり、口縁部を外方に短く屈曲するものや、127のように頸部と体部の境に段を持ち、口縁部が外方に短く屈曲するものがある。124は頸部・体部上半に削り出し突帯・ヘラ描沈線、体部中

第14表 SR 01 中層出土土器観察表(1)

番号	品目	石器	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色 質	胎 土	遺存度
113	58	縄文 深鉢				つぼ	腹	指揮	普通	にぶい黄褐色	0.1～2mmの砂粒を含む石 英・長石含む	鏡片
114	58	縄文 深鉢				肩部突帯文	つぼ	指揮	普通	暗褐色 7. SYR3/2	0.1～3mmの砂粒を含む石	鏡片
115	58	縄文 深鉢	22.2 cm			肩部突帯文	つぼ	指揮	普通	灰白色 2. SYT/1	0.1～2mmの砂粒を含む石 英・長石含む	鏡片
116	58	縄文 鉢	26.9 cm			つぼ	つぼ	(外)真斜面	普通	暗褐色 10YR4/3	0.1～3mmの砂粒を含む石 英・長石含む	鏡片
117	58	縄文 浅鉢				摩滅	摩滅		普通	オリーブ色	0.2～1mmの砂粒を含む石 英・長石含む	鏡片
118	58	縄文 不明				(外)浅鉢	(外)浅鉢		普通	にぶい黄褐色	0.2～2mmの砂粒を含む石 英・長石含む	鏡片
119	59	弥生 壺	19.7 cm			つぼ	つぼ	指揮	普通	にぶい黄褐色	0.2～2mmの砂粒を含む石 英・長石含む	鏡片 1/8
120	59	弥生 壺				摩滅	(外) 突起	指揮	普通	10YR7/3	0.1～2mmの砂粒を含む石	鏡片
121	59	弥生 壺				つぼ	(外) 突起	指揮	普通	にぶい黄褐色	0.1～3mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	鏡片
122	59	弥生 壺				つぼ	つぼ	指揮	普通	灰白色 10YR8/2	0.1～4mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	鏡片
123	59	弥生 壺				つぼ	つぼ	指揮	普通	にぶい黄褐色	0.1～3mmの砂粒を含む石	鏡片
124	59	弥生 壺	12.3 cm	24.5 cm	6.7 cm	つぼ	つぼ	指揮	普通	黄褐色 2. SY5/4	0.1～2mmの砂粒を含む石 英・長石含む	鏡片
125	59	弥生 壺				つぼ	つぼ	指揮	普通	にぶい黄褐色	0.1～3mmの砂粒を含む石	鏡片 1/8
126	59	弥生 壺				つぼ	つぼ	指揮	普通	灰白色 2. SY6/2	0.1～2mmの砂粒を含む石 英・長石含む	鏡片
127	59	弥生 壺	13.3 cm	24.1 cm	7.8 cm	つぼ	つぼ	指揮	普通	灰黄色 2. SY7/2	0.1～2mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	鏡片
128	59	弥生 壺			8.8 cm	摩滅	摩滅	指揮	普通	にぶい黄褐色	0.1～2mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	鏡片 8/8



第42図 S R 01 中層出土遺物実測図(1)

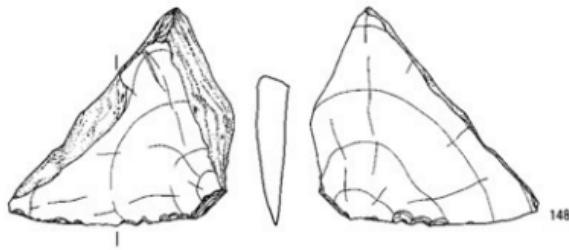
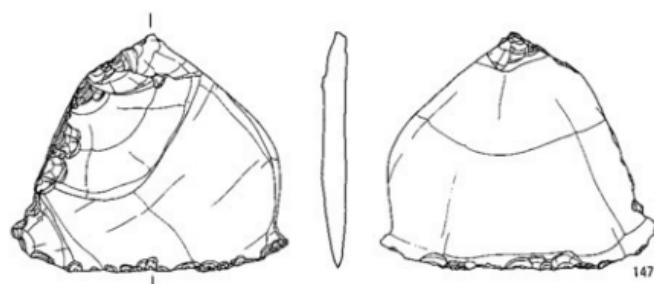
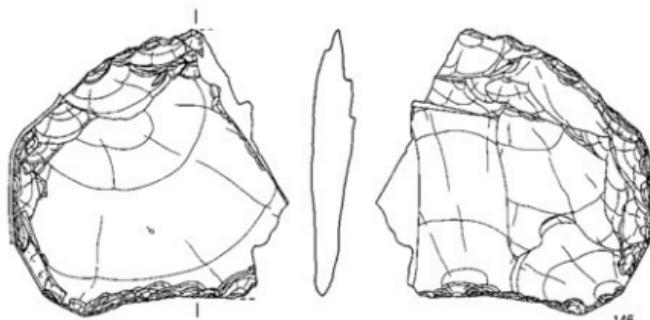
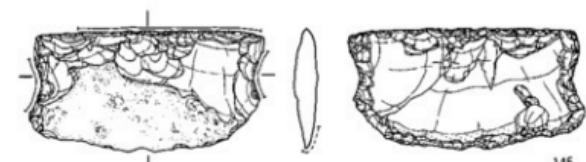


第43図 S R 01 中層出土遺物実測図(2)

第15表 S R 01 中層出土土器観察表(2)

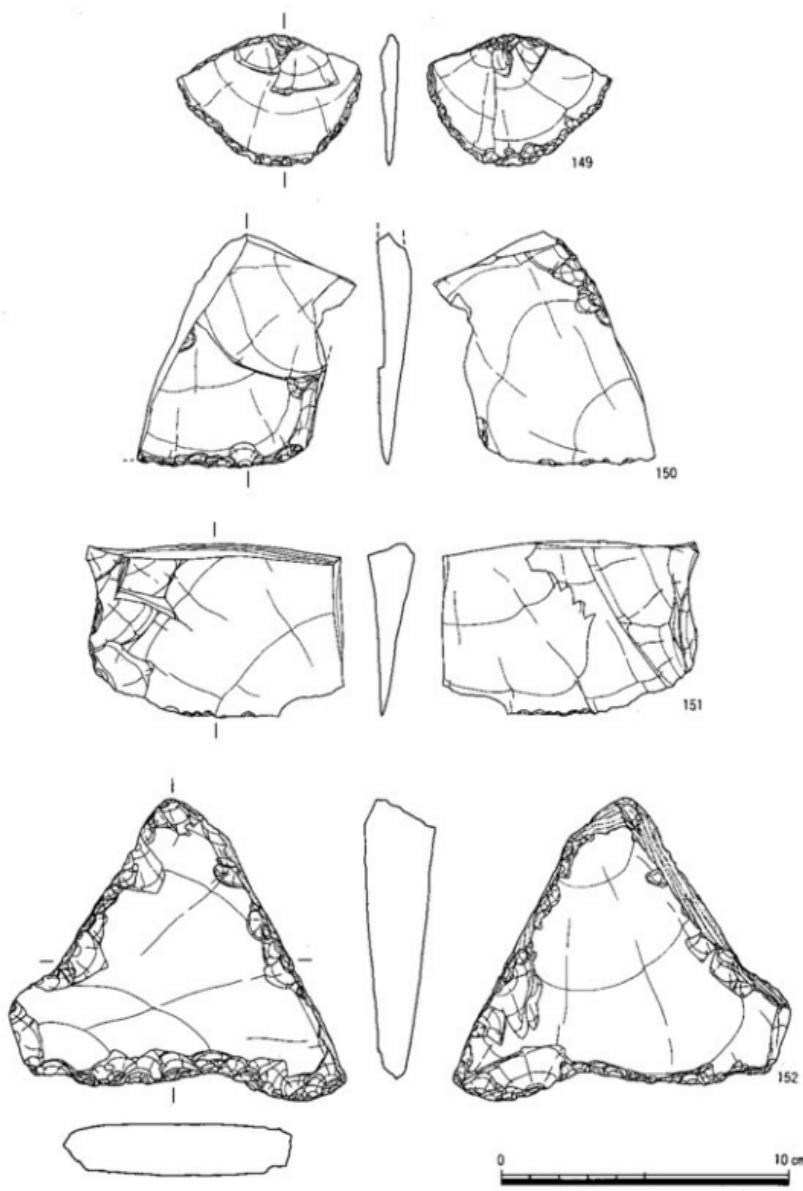
番号	分類	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他の	焼成	色調	胎土	造存度
129	60	弥生 壺				指揮さえ	ササ・草威 サム		普通	浅黄色 2.5V7/3	0.1~4mmの砂粒を多量に含む石	礫片
130	60	弥生 壺				ササ	ササ	(苏)沈緑	普通	にやい黄褐色	0.1~3mmの砂粒を含む石	礫片
131	60	弥生 壺		31.2cm		縦み目	ササ	[95] 3つの横筋	普通	2.5V7/3	0.1~4mmの砂粒を多量に含む石	口徑1/8 含む石・表面仕上げ
132	60	弥生 壺				横ササ	横ササ	無文	普通	淡褐色	0.1~3mmの砂粒を含む石	礫片
133	60	弥生 壺				横ササ	横ササ		普通	浅黄色 2.5V7/3	0.1~2mmの砂粒を含む石	礫片
134	60	弥生 底部	9.2cm			指揮さえ後 指揮さえ	ササ		普通	1.5~2mmの黄褐色	0.1~4mmの砂粒を含む石	底径2/8 含む石・表面仕上げ
135	60	弥生 底部	9.2cm			底張・指揮 指揮さえ	ササ		普通	2.5V7/3	0.1~4mmの砂粒を多量に含む石	底径3/8 含む石・表面仕上げ
136	61	弥生 底部	10.4cm			ハサミササ後 指揮さえ後	ハサミササ		普通	1.5~2mmの黄褐色	0.1~3mmの砂粒を多量に含む石	底径8/8 含む石・長石含む
137	61	弥生 底部	13.8cm			ハサミササ後 指揮さえ	ハサミササ		普通	1.5~2mmの黄褐色	0.1~3mmの砂粒を含む石	底径5/8 含む石・長石含む
138	60	弥生 底部	8.2cm			指揮さえ	ササ		普通	褐色 2.5V5/8	0.1~3mmの砂粒を含む石	底径2/8 含む石・表面仕上げ
139	60	弥生 底部	10.0cm			指揮さえ・サ 指揮さえ	ササ		普通	灰黃褐色 10V5/2	0.1~3mmの砂粒を多量に含む石	底径1/8 含む石・表面仕上げ
140	60	弥生 底部	5.2cm			指揮・ササ	ササ		普通	淺黃褐色 10V5/4	0.1~3mmの砂粒を含む石	底径4/8 含む石・長石含む
141	60	弥生 底部	7.2cm			指揮さえ	ササ		普通	にやい黄褐色	0.1~3mmの砂粒を多量に含む石	底径8/8 含む石・表面仕上げ
142	60	弥生 底部	7.5cm			指揮さえ	ササ		普通	にやい黄色	0.1~3mmの砂粒を多量に含む石	底径2/8 含む石・長石含む
143	61	弥生 瓢	9.6cm			板ササ後ササ	ササ		普通	灰黃褐色 2.5V7/2	0.1~3mmの砂粒を含む石	底径2/8 含む石・長石含む
144	61	弥生 瓢	8.5cm			指揮さえ・サ 指揮さえ	ササ		普通	灰黃褐色 2.5V7/2	0.1~3mmの砂粒を含む石	底径8/8 含む石・長石含む

央部に貼り付け刻目突帯が施された壺である。壺には129・131のような如意状口縁の壺がみられ、口縁部下には少条のヘラ描沈線が認られる。底部はすべてしっかりとした平底を残している。132は朝鮮系無文土器である。133は蓋と思われる。

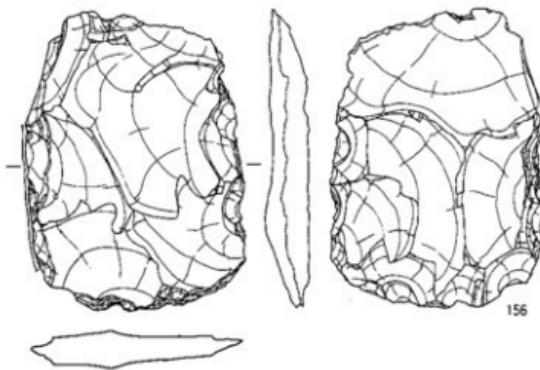
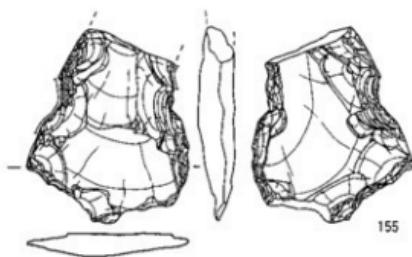
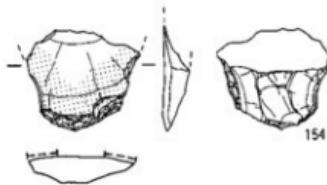
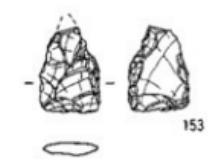


0 10 cm

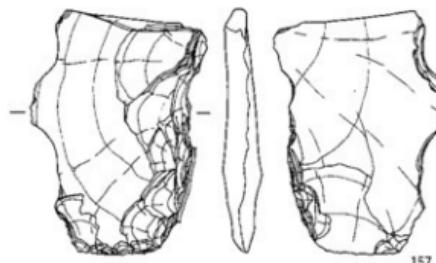
第44図 SR 01中層出土遺物実測図(3)



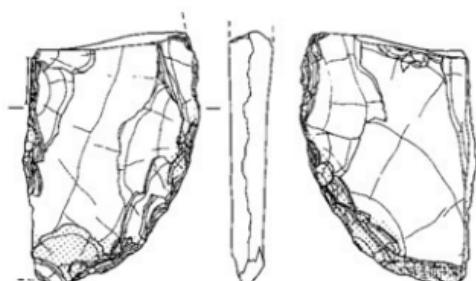
第45図 SR 01 中層出土遺物実測図(4)



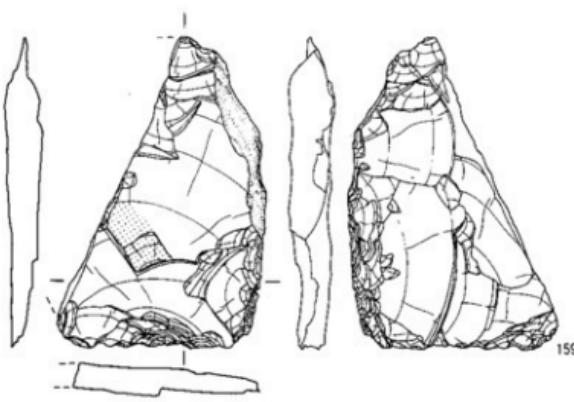
第46図 SR 01 中層出土遺物実測図(5)



157



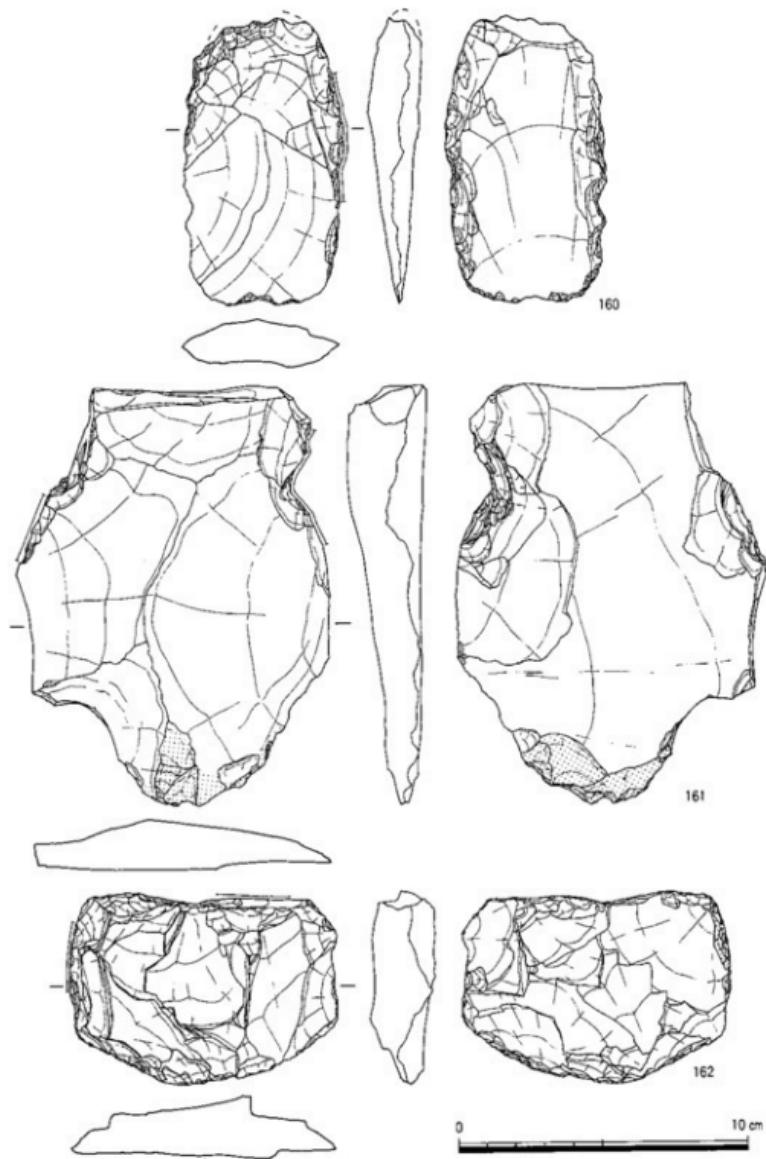
158



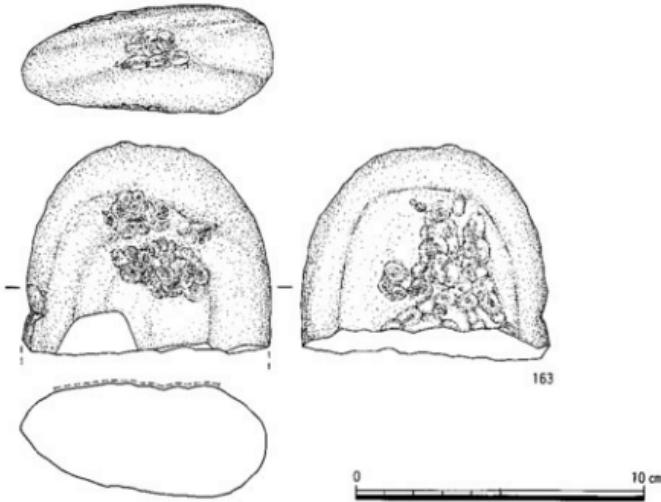
159



第47図 SR 01 中層出土遺物実測図(6)



第48図 SR 01 中層出土遺物実測図(7)



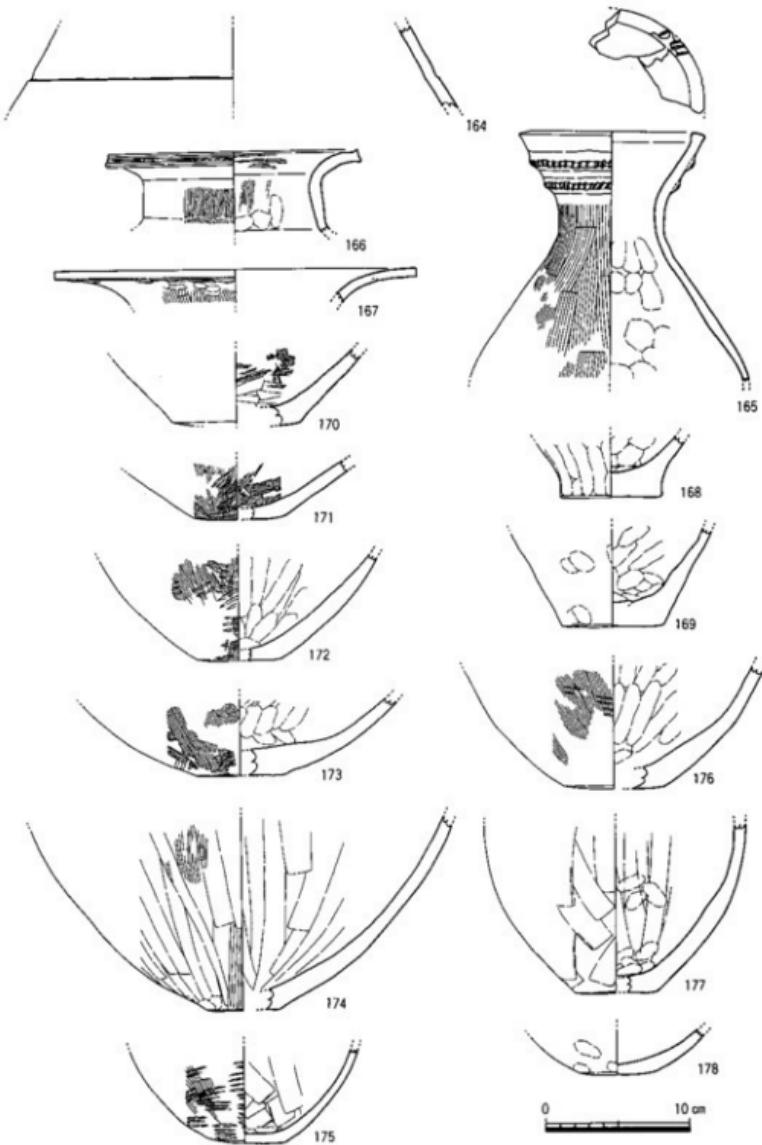
第49図 S R 01 中層出土遺物実測図(8)

第16表 S R 01 中層出土石器観察表(1)

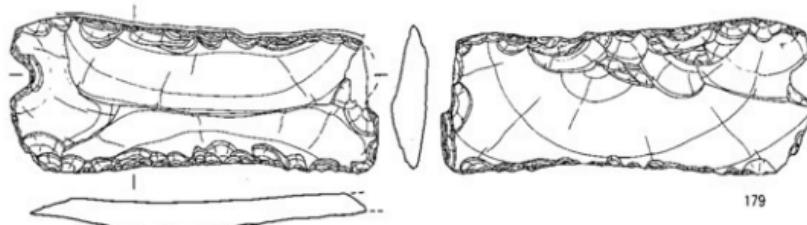
番号	記号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴	
								右側	左側
145	61	石庵丁	8.0 cm	4.1 cm	0.8 cm	37.00g	†‡§	両辺に抉りあり、長側辺(背)に敲打痕あり、刃部片面に摩滅あり	
146		石庵丁	9.6 cm	9.2 cm	1.5 cm	163.79g	†‡§	一部欠損、左側辺に敲打痕あり	
147	61	スクレイパー	9.3 cm	8.2 cm	1.0 cm	85.84g	†‡§		
148		スクレイパー	7.4 cm	7.3 cm	1.0 cm	65.02g	†‡§		
149	62	スクレイパー	6.4 cm	4.4 cm	0.6 cm	16.72g	†‡§		
150	61	スクレイパー	5.9 cm	7.9 cm	1.1 cm	61.89g	†‡§	一部欠損	
151	62	スクレイパー	8.9 cm	5.9 cm	1.6 cm	85.30g	†‡§		
152		不明	9.8 cm	10.9 cm	2.5 cm	238.94g	†‡§		
153		石斧	2.8 cm	2.1 cm	0.5 cm	3.28g	†‡§	平底式、先端部欠損	
154		石斧	3.4 cm	3.9 cm	0.9 cm	9.09g	†‡§	基底欠損、刃部片面に摩滅、擦痕あり	
155	62	石斧	5.6 cm	6.6 cm	1.3 cm	42.78g	†‡§	風化、基底欠損、両側辺に敲打痕あり	
156	62	石斧	10.3 cm	7.5 cm	1.5 cm	118.84g	†‡§	左側辺に敲打痕あり	
157		石斧	8.1 cm	5.5 cm	1.3 cm	61.22g	†‡§	右側辺に敲打痕あり	
158	62	石斧	6.0 cm	5.9 cm	1.5 cm	96.56g	†‡§	一部欠損、左側辺に敲打痕あり、刃部両面に摩滅、擦痕あり	
159		石斧	10.7 cm	6.8 cm	1.6 cm	107.95g	†‡§	基底欠損、片面に摩滅あり	
160	62	石斧	9.8 cm	5.5 cm	1.8 cm	95.70g	†‡§	基底欠損、右側辺に敲打痕あり	
161	63	石斧	14.3 cm	10.8 cm	2.7 cm	427.03g	†‡§	風化、両側辺に敲打痕あり、刃部両面に摩滅あり	
162		打製石斧	6.2 cm	9.1 cm	2.0 cm	147.88g	†‡§	長側辺(背)、左側辺に敲打痕あり	
163		白石	7.1 cm	8.6 cm	3.8 cm	330.98g	砂岩		

145～163は石製品である。全てサヌカイト製で両端に抉りの入った打製石庵丁やスクレイパーの他に、石斧が多量に出土している。146は大型の石庵丁と思われる。石斧は両側上部に刃つぶしされているものや抉り状になるもの（155）もある。

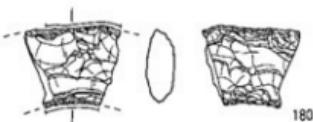
時期は出土遺物より弥生時代前期古段階から新段階と思われる。



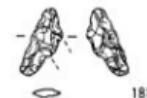
第50図 SR 01 中層出土遺物実測図(9)



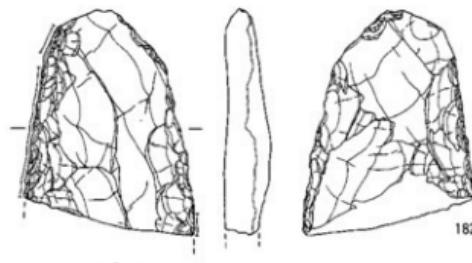
179



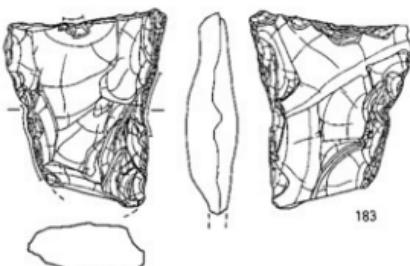
180



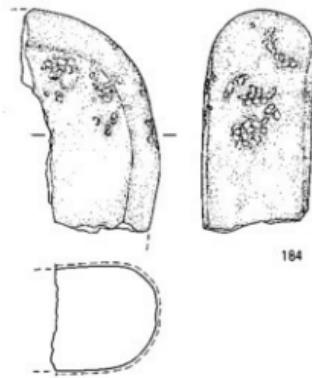
181



182



183



184

0 10 cm

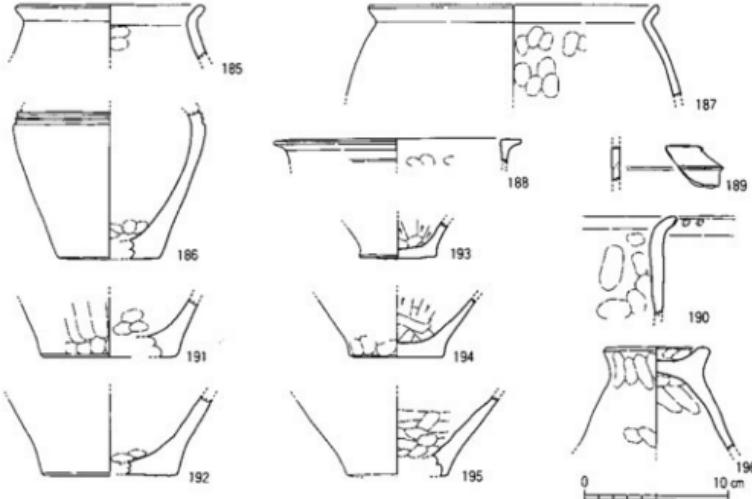
第51図 SR 01 中層出土遺物実測図(10)

第17表 SR 01中層出土土器觀察表(3)

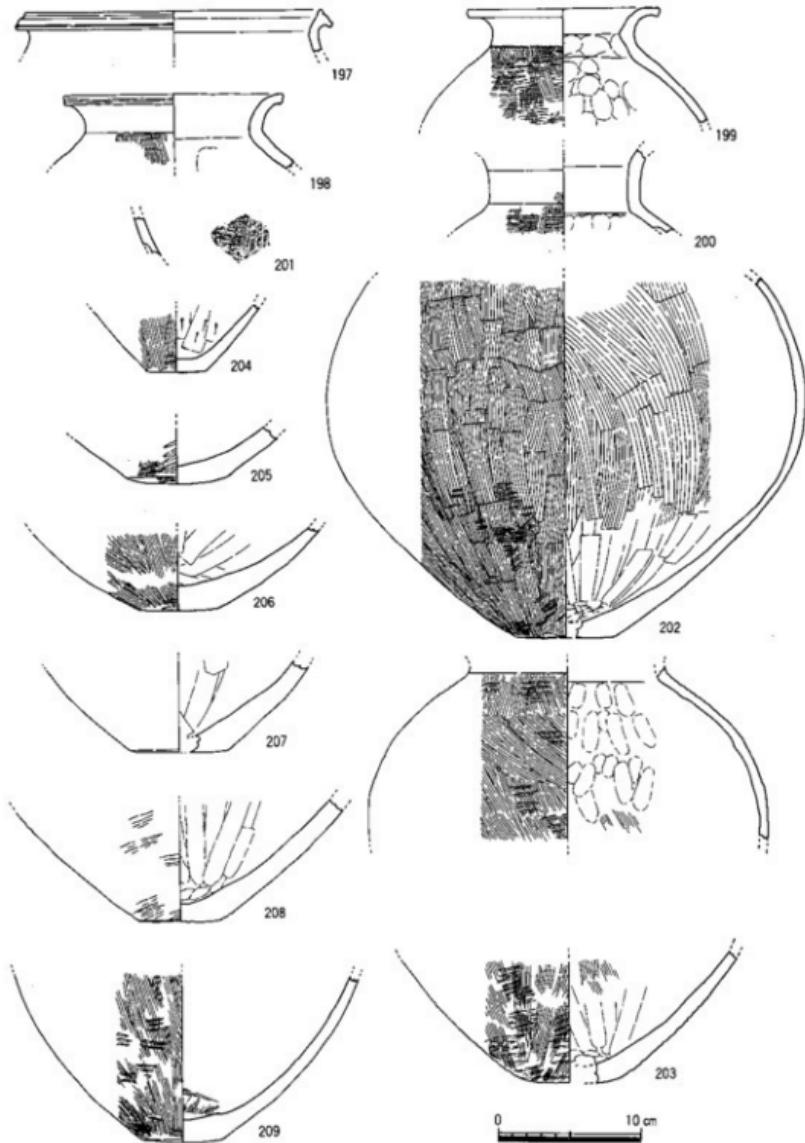
番号	形質	器種	口径	高さ	外側	内側	その他	焼成	色調	胎土	遺存度
164	弥生	豆			ツバ	ツバ	(手) 手取り出	普通	灰黄色 2.5H7/3	0.1~1mmの砂粒を多量に含む石	破片
165	63	弥生	豆	12.9cm	追加突起部 ツバ ハサウエ ハサウエ	ツバ 指揮 目	指揮 目	普通	灰黄色 2.5H6/3	0.1~5mmの砂粒を含む石	口径 2/8
166	63	弥生	豆	17.2cm	横ツバ ツバ	ツバ	ツバ	普通	灰黄色 2.5H8/3 灰黄色 2.5H7/2	0.1~2mmの砂粒を含む石	口径 7/8
167	弥生	豆		25.0cm	ハサウエ指揮 ツバ え	ツバ	ツバ	普通	灰黄色 1.0H7/3	0.1~1mmの砂粒を含む石	底径 1/8
168	弥生	底部			指揮 え ツバ	ツバ	ツバ	普通	灰黄色 2.5H7/2	0.1~1mmの砂粒を含む石	底径 8/8
169	63	弥生	底部	7.0cm	指揮 え ツバ	ツバ	ツバ	普通	灰黄色 2.5H7/2	0.1~1mmの砂粒を含む石	底径 8/8
170	弥生	底部		6.9cm	ツバ	ツバ	ツバ	普通	灰黄色 2.5H5/2	0.1~1mmの砂粒を多量に含む石	底径 2/8
171	弥生	底部		6.0cm	ツバ後ツバ ツバ 後	ツバ	ツバ	普通	灰黄色 1.0H7/3	0.1~1mmの砂粒を少量含む石	底径 2/8
172	弥生	底部		5.8cm	ツバ後ツバ ツバ	ツバ	ツバ	普通	灰黄色 2.5H7/3	0.1~1mmの砂粒を含む石	底径 1/8
173	弥生	底部		6.2cm	ツバ後ツバ ツバ	ツバ	ツバ	普通	灰黄色 2.5H8/2	0.1~1mmの砂粒を少量含む石	底径 1/8
174	弥生	底部		5.0cm	ハサウエツバ ツバ え	板形	板形	普通	灰黄色 2.5H5/2	0.1~1mmの砂粒を含む石	底径 2/8
175	63	弥生	底部	5.3cm	ツバ後ツバ ツバ	板形 板形	板形 板形	普通	灰黄色 2.5H7/2	0.1~3mmの砂粒を多量に含む石	底径 8/8
176	弥生	底部		6.9cm	ツバ後ツバ ツバ	板形	板形	普通	灰黄色 2.5H7/2	0.1~1mmの砂粒を少量含む石	底径 3/8
177	弥生	底部		5.6cm	板形 板形	板形 板形	板形 板形	普通	灰白色 5H7/2	0.1~1mmの砂粒を少量含む石	底径 6/8
178	弥生	底部		5.4cm	摩滅 摩滅 え	ツバ	ツバ	普通	灰白色 1.0H6/4	0.1~1mmの砂粒を多量に含む石	底径 4/8

第18表 SR 01中層出土石器觀察表(2)

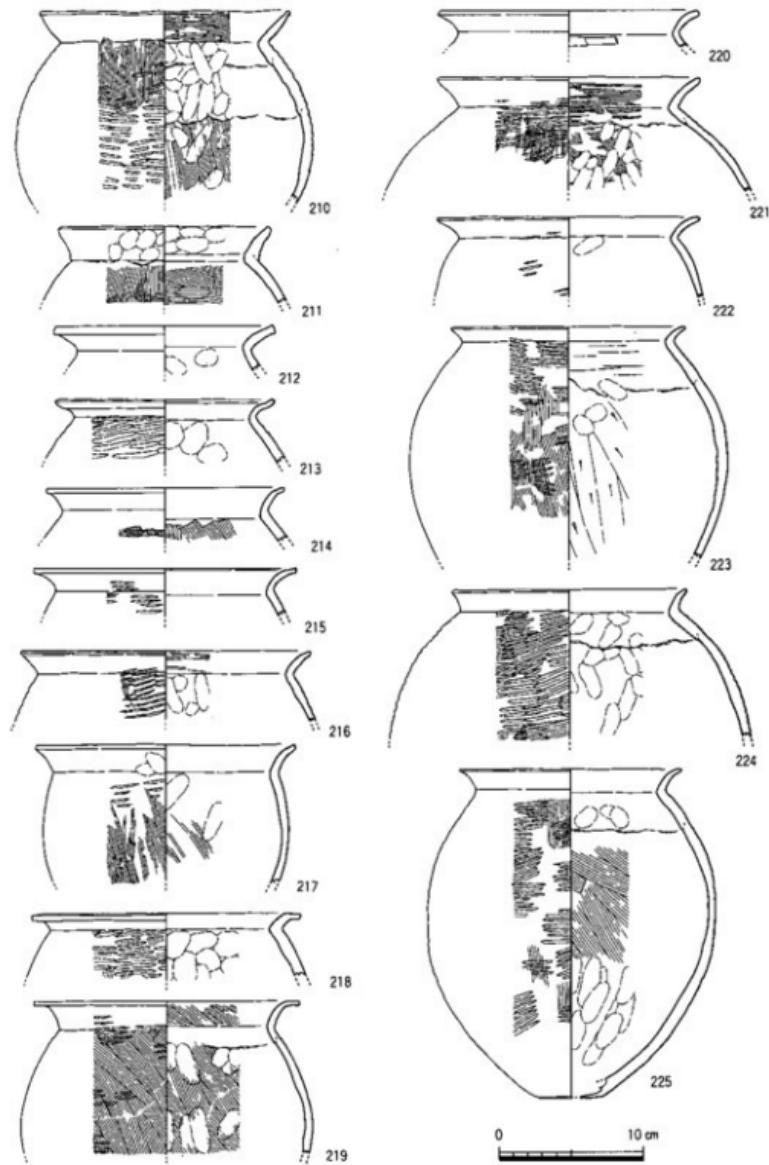
番号	形質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴		
179	63	石泡丁	12.6cm	5.2cm	1.2cm	93.10g	929件	一部欠損。長削刃(背)に敲打痕あり。両端刃に抉りあり		
180	石縫		3.3cm	2.6cm	1.0cm	10.40g	929件	風化。基部・先端部欠損。両端刃に敲打痕あり		
181	石縫		2.2cm	1.0cm	0.3cm	0.71g	929件	風化。円弧式。基部の一部欠損		
182	63	石縫	7.2cm	5.8cm	1.6cm	66.95g	929件	風化。刃部欠損。両端刃に敲打痕あり		
183	63	石縫	6.7cm	5.4cm	1.8cm	60.82g	929件	刃部欠損。両端刃に敲打痕あり		
184	合石		7.3cm	4.2cm	3.5cm	200.22g	花崗岩	一部欠損		



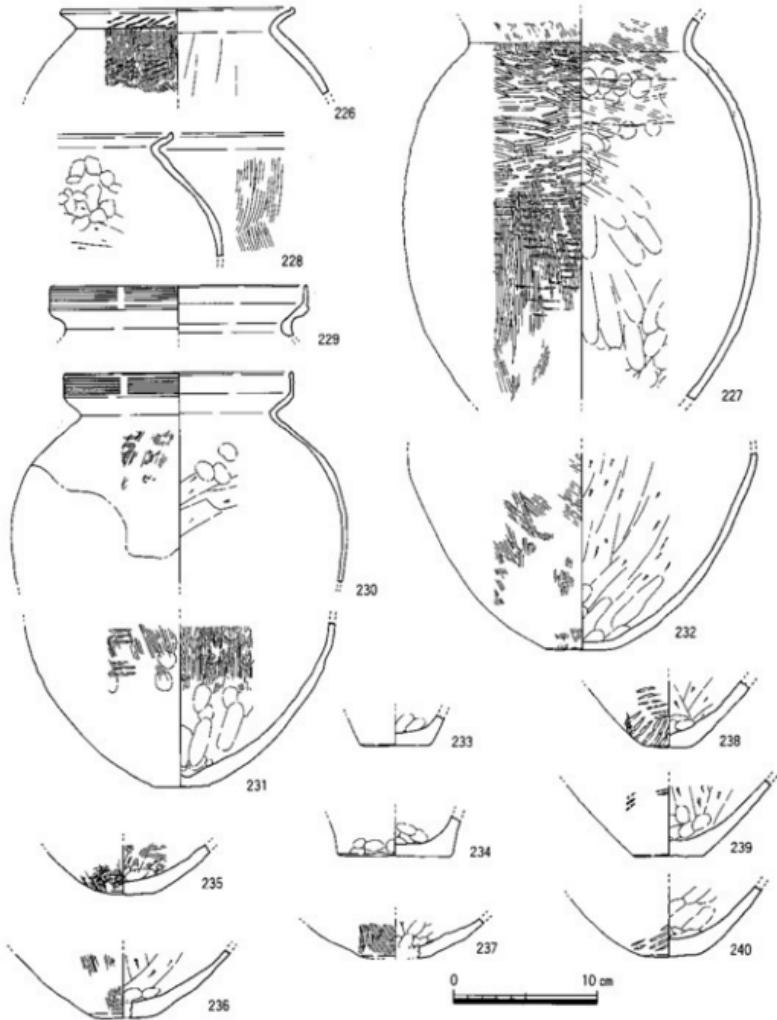
第52図 SR 01上層出土遺物実測図(1)



第53図 SR 01 上層出土遺物実測図(2)



第 54 図 S R 01 上層出土遺物実測図(3)



第55図 SR 01 上層出土遺物実測図(4)

中層（上層）は暗灰色や淡灰茶色の粘質土を主とする層である。

上層より164～184が出土している。

164～178は弥生土器である。165は直口壺で、体部から口縁部が外方に屈曲し、口縁端部をそのまま終わらせている。口縁部外面には二条の刻目突帯を持つ壺である。167は口

第19表 SR 01上層出土土器観察表(1)

番号	名類	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	胎土	追加度
185	44	抹生 瓶	13.0cm			艹?草彌 サツシ	艸?・指揮さ	(外)沈縫	普通	灰白色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	口徑 1/8
186	44	抹生 瓶		6.9cm		草彌 指揮さ	(外)沈縫	春透	灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	底径 3/8	
187	44	抹生 瓶	19.8cm			艸?草彌 サツシ	艸?・指揮さ・後?	春透	灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	口徑 1/8	
188	44	抹生 瓶	17.0cm			草彌	指揮さ・草	透 L1口跡	普通	褐色 5156/5	0.1~1mmの移粒を含む石	口徑 1/8
189	44	抹生 瓶				艸?	(外)沈縫	普通	暗灰黄色 2.515/2	0.1~0.7mmの移粒を少量含む	破片	
190	44	抹生 瓶				茶目・草彌	草彌・指揮さ	不真	灰白色	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	液片	
191	44	抹生 瓶	9.4cm			艸?草彌 サツシ	艸?・指揮さ	普通	灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	底径 2/8	
192	44	抹生 瓶	9.2cm			草彌	指揮さ・草	普通	灰黄色 10156/2	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	底径 2/8	
193	44	抹生 瓶	5.4cm			艸?	ヘ倒り	春透	灰オリーブ色	0.1~2mmの移粒を多量に含む 石墨	底径 8/8	
194	44	抹生 瓶	6.4cm			艸?・指揮さ	艸?・ヘ倒	普通	灰黄色 10156/2	0.1~1mmの移粒を含む石	底径 8/8	
195	44	抹生 瓶	7.0cm			刺繩	指?	普通	灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を含む石	底径 3/8	
196	44	抹生 瓶				刺繩	刺繩	普通	浅黃褐色 10156/3	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	つまみ	
197	44	抹生 瓶	20.0cm			草彌	艸?・艸?	普通	灰白色 2.515/1	0.1~1mmの移粒を含む石	瓶片	
198	44	抹生 瓶	15.0cm			横行?・時目	草彌・指揮さ	(外)葉縁に 1mmの凹部	普通	灰褐色 0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	口徑 2/8	
199	44	抹生 瓶	13.0cm			艸?・指揮	草彌・指揮さ	普通	浅黃褐色 10156/3	0.1~1mmの移粒を含む石	口徑 2/8	
200	44	抹生 瓶				艸?・刺繩	艸?	普通	浅黃褐色 10156/4	0.1~1mmの移粒を少量含む 石墨・長石含む	底径 3/8	
201	44	抹生 瓶				艸?	(外)葉縁に 1mmの凹部	普通	灰褐色	0.1~1mmの移粒を含む石	液片	
202	44	抹生 瓶	7.0cm			艸?刺繩・時目	時目・艸?	普通	灰白色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を少量含む 石墨・長石含む	底径 3/8	
203	44	抹生 瓶	7.2cm			艸?刺繩・時目	艸?	普通	灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を含む石	底径 2/8	
204	44	抹生 瓶	4.2cm			艸?刺繩・時目	ヘ倒り	普通	灰褐色	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	底径 5/8	
205	44	抹生 瓶	7.1cm			艸?刺繩・時目	刺繩	普通	灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を含む石	底径 3/8	
206	44	抹生 瓶	5.4cm			艸?刺繩・時目	艸?	普通	灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を少量含む 石墨・長石含む	底径 1/8	
207	44	抹生 瓶	6.8cm			艸?	艸?	普通	暗灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を含む石	底径 2/8	
208	44	抹生 瓶	5.6cm			艸?	艸?・指揮	普通	灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を少量含む 石墨・長石含む	底径 2/8	
209	44	抹生 瓶	5.6cm			艸?刺繩・時目	艸?・刺繩	普通	暗灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	底径 8/8	
210	44	抹生 瓶	16.9cm			艸?・刺繩・時目	艸?	普通	灰褐色	0.1~1mmの移粒を少量含む 石墨・長石含む	底 1/8	
211	44	抹生 瓶	14.1cm			艸?刺繩・時目	艸?・刺繩	普通	灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を少量含む 石墨・長石含む	底径 1/8	
212	44	抹生 瓶	14.8cm			横行?	横行?・指揮	普通	灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を含む石	口徑 1/8	
213	44	抹生 瓶	15.0cm			横行?	横行?・時目	普通	灰褐色 2.515/2	0.1~0.5mmの移粒を少は	口徑 1/8	
214	44	抹生 瓶	16.3cm			横行?・横行?	横行?・横行?	普通	灰褐色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を含む石	底径 1/8	
215	44	抹生 瓶	18.0cm			横行?	?	普通	灰褐色	0.1~1mmの移粒を少量含む 石墨・長石含む	口徑 1/8	
216	44	抹生 瓶	19.8cm			艸?刺繩・時目	時目・艸?	普通	灰褐色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を少量含む 石墨・長石含む	瓶片	
217	44	抹生 瓶	17.5cm			艸?・刺繩	艸?・刺繩	普通	灰褐色	0.1~1mmの移粒を含む石	底径 5/8	
218	44	抹生 瓶	18.5cm			艸?・刺繩	艸?・刺繩	普通	灰褐色	0.1~1mmの移粒を含む石	底 1/8	
219	44	抹生 瓶	18.2cm			艸?刺繩・時目	艸?・刺繩	普通	灰黄色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を少量含む 石墨・長石含む	底径 2/8	
220	44	抹生 瓶	18.0cm			草彌	艸?	普通	黑色 2.512/1	0.1~1mmの移粒を含む石	液片	
221	44	抹生 瓶	17.9cm			艸?刺繩	艸?・刺繩	普通	灰褐色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を少量含む 石墨・長石含む	口徑 1/8	
222	44	抹生 瓶	18.0cm			艸?・刺繩	艸?・刺繩	普通	灰褐色 10156/4	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	底径 1/8	
223	44	抹生 瓶	16.0cm			艸?刺繩	艸?・刺繩	普通	灰褐色	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	底径 2/8	
224	44	抹生 瓶	15.9cm			艸?	刺繩・指?	普通	褐色 5156/6	0.1~1mmの移粒を含む石	底径 1/8	
225	44	抹生 瓶	15.3cm	22.3cm	4.6cm	艸?刺繩	艸?・指揮	普通	灰褐色 10156/2	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石墨・長石含む	7/8	
226	44	抹生 瓶	15.8cm			艸?・刺繩	艸?・刺繩	普通	灰褐色	0.1~1mmの移粒を含む石	口徑 1/8	
227	44	抹生 瓶				艸?刺繩	艸?・刺繩	普通	灰褐色 2.515/2	0.2~1mmの移粒を少量含む 石英・長石含む	底 3/8	
228	44	抹生 瓶				横行?	横行?	普通	灰褐色	0.1~0.5mmの移粒を含む 石英・長石含む	液片	
229	44	抹生 瓶	17.6cm			横行?・横行?	?	酒津系裏	普通	灰褐色	0.1~1mmの移粒を含む 石英・長石含む	口徑 1/8
230	44	抹生 瓶	15.6cm			横行?・横行?	?	酒津系裏	普通	灰褐色 10156/2	0.1~1mmの移粒を含む石	底径 5/8
231	44	抹生 瓶		4.0cm		艸?・刺繩	艸?・刺繩	普通	灰褐色 10156/2	0.1~1mmの移粒を含む石	底径 4/8	
232	44	抹生 瓶		5.0cm		艸?	刺繩	普通	灰褐色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石英・長石含む	底径 2/8	
233	44	抹生 瓶		4.9cm		刺繩	?	普通	灰褐色 2.515/2	0.1~1mmの移粒を多量に含む 石英・長石含む	底径 6/8	

番号	分類	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その性	使用	色調	胎土	遺存度
234	弥生	壺		7.8cm	1.8cm	指揮させ 被毛	素減・指揮させ 被毛		普通	1.5cmの砂粒を含む石 灰・灰白色	0.1~1mmの砂粒を含む石 灰・灰白色	底径6/8
235	56	弥生	壺	4.6cm	1.5cm	付属小口目・ 付属	付属小口目・ 付属		普通	にぼい黄色 1.5cm	0.1~3mmの砂粒を多量に 含む石灰・灰白色	底径8/8
236	57	弥生	壺	4.9cm	1.5cm	付属	付属		普通	1.5cmの砂粒を多量に 含む石灰・灰白色	0.1~3mmの砂粒を多量に 含む石灰・灰白色	底径1/8
237	58	弥生	壺	5.1cm	1.5cm	指揮			普通	焦色2.5/2/1 1.5cm	0.1~1mmの砂粒を含む石 灰白色	底径2/8
238	59	弥生	壺	5.3cm	1.5cm	付属小口目	付属・指揮		普通	にぼい黄色 1.5cm	0.1~5mmの砂粒を含む石 灰白色	底径8/8
239	60	弥生	壺	4.8cm	1.5cm	付属	付属		普通	1.5cmの砂粒を多量に 含む石灰・灰白色	0.1~5mmの砂粒を多量に 含む石灰・灰白色	底径4/8
240	61	弥生	壺	3.9cm	摩滅	指揮			普通	1.5cmの砂粒を含む石 灰・灰白色 1.5cm	0.1~5mmの砂粒を含む石 灰・灰白色	底径5/8

縁部が朝顔型に開く壺である。底部はしっかりした平底を持つものと丸みを持ちながら小さい平底のものがある。

179~184は石製品である。179は両端に抉りを持つ打製石庖丁である。180は石鎌と思われる。

時期は出土遺物より弥生時代中期から後期が考えられる。

④上層

上層はS R 0 1の最終堆積層である。この時期にはこの層以下の流路方向が西方向に屈曲するのに対し、上層はほぼ真っ直ぐの流路方向を取る。

この層は暗灰色や暗茶白色の粘質土を主とする層である。

上層より185~289の遺物が出土している。

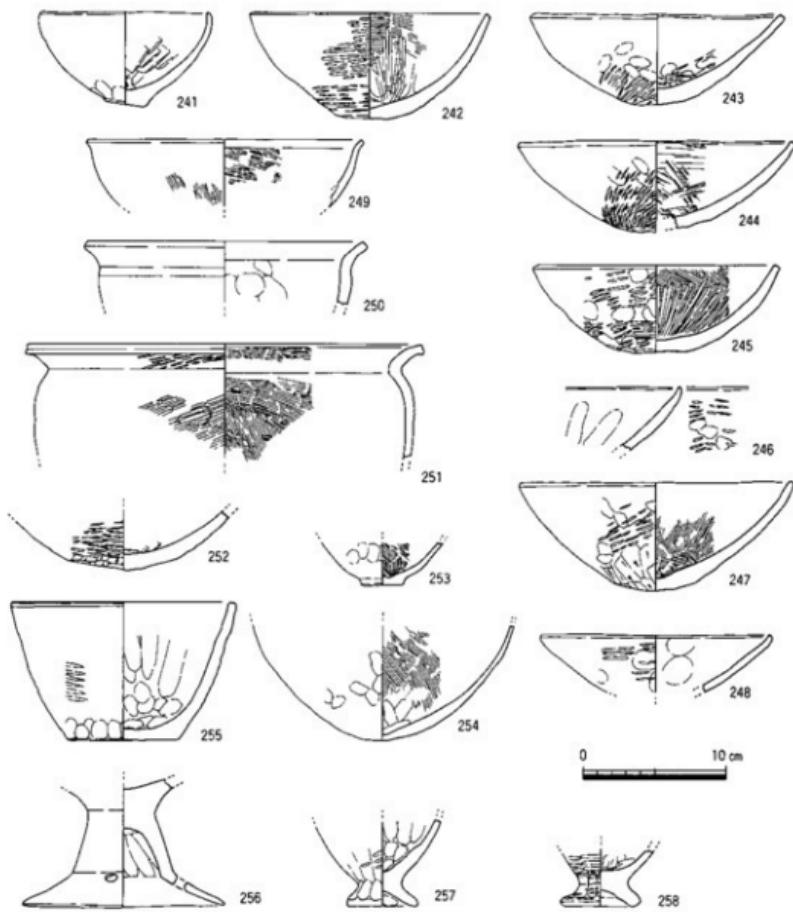
185~196は弥生時代前期から中期の土器である。

壺は口縁部を短く外方に屈曲させるもので、壺は如意状口縁のものと逆L口縁のものがみられる。196は蓋である。

197~258は弥生時代後期の土器である。

197~209は壺である。口縁端部を上下に拡張するものとそのまま終わらせるものがみられる。体部外面は叩きののち刷毛目が、内面は板なでや刷毛目が施されている。底部は小さい平底を残す。201は外面に線刻がみられる。

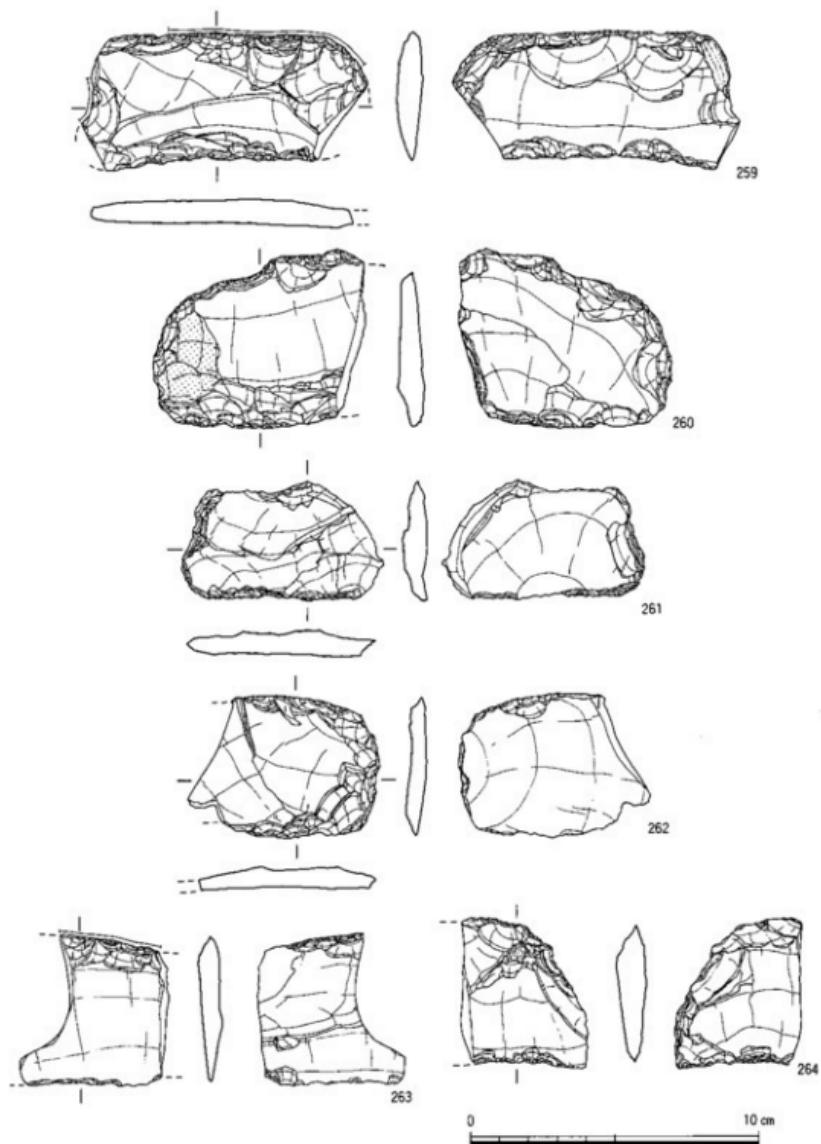
210~240は壺である。頸部を「く」の字に屈曲させるもので、口縁は真っ直ぐ延びるものとやや外反させるもの、やや外反させ口縁端部を小さく摘み上げるものがある。底部はしっかりした平底を持つものから丸底気味の平底のものまで認められる。225は頸部を「く」の字に屈曲させ、口縁をやや外反させる。体部最大径はほぼ中央にある。体部外面には叩きののち刷毛目が、内面は下半を指頭痕、上半には刷毛目が施されている。228は頸部を「く」の字に屈曲させ、口縁端部を小さく上方に摘み上げるものである。頸部内面の屈曲はシャープである。体部外面には継方向の刷毛目が、内面には体部最大径より下半をヘラ削り、上半には指頭痕が施されている。229・230は酒津型壺である。やや長胴の体部から頸部を「く」の字に屈曲させ、口縁部



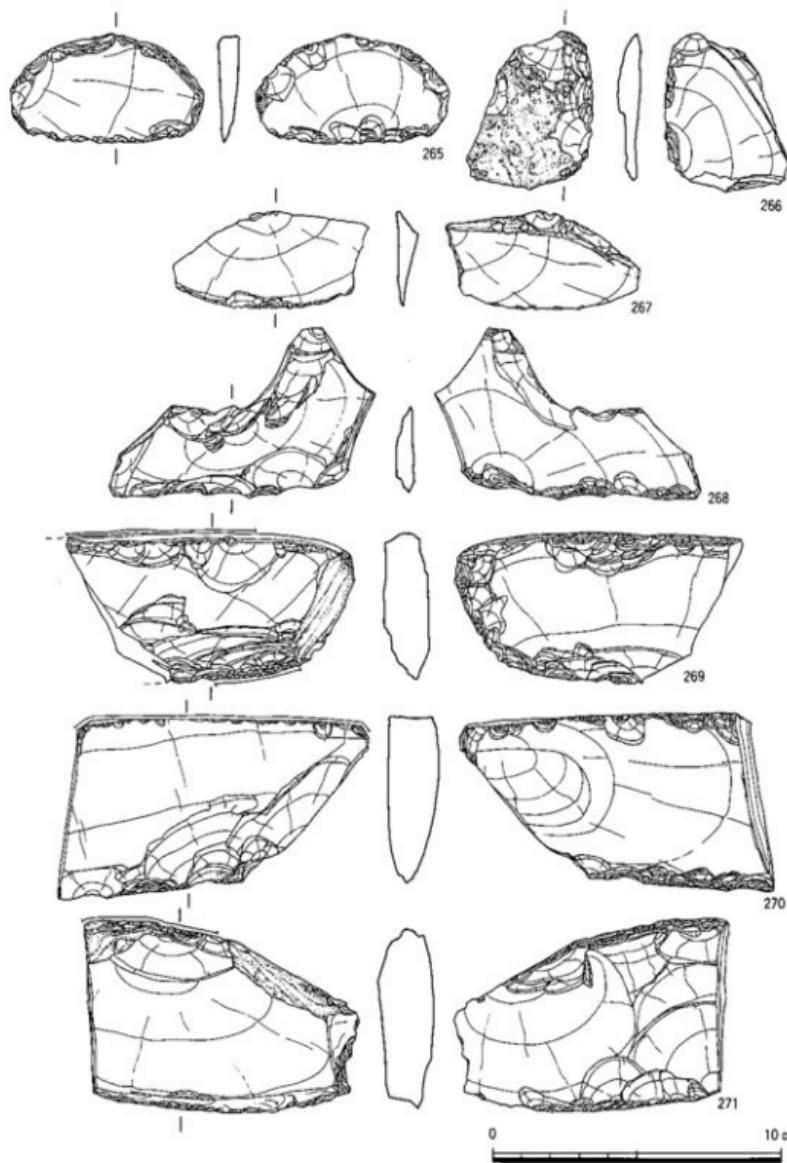
第56図 SR 01上層出土遺物実測図(5)

は上方に立ち上がる。口縁部外面には横描沈線が多条施されている。体部外面には細かい刷毛目が、内面には下半にヘラ削り、上半に指頭痕が施されている。体部最大径は上半にある。241～255は鉢である。

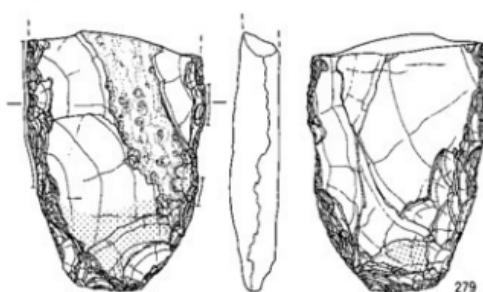
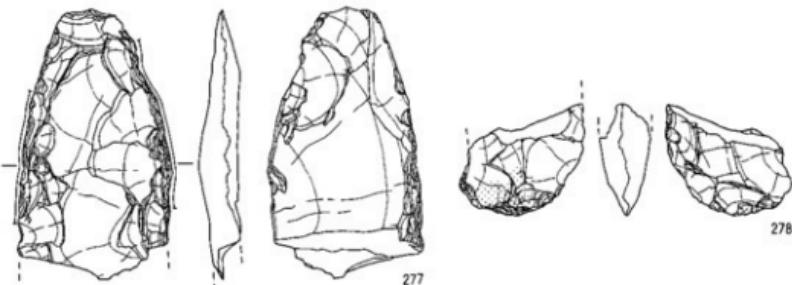
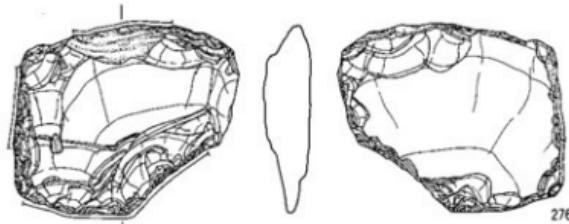
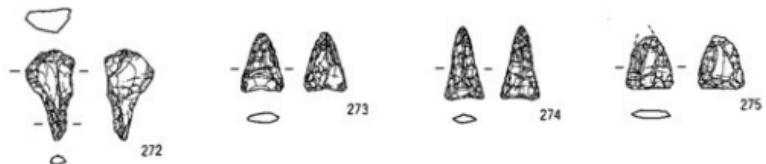
鉢には底部が平底のものと底部のみ不定方向のヘラ削りによって丸底化されたものがある。体部は内彎するものが主で直線的に延びるものが少量みられる。口縁部には外方に屈曲させるものがある。口縁端部は丸くおさめるものと面を持たせるものがある。体部外面



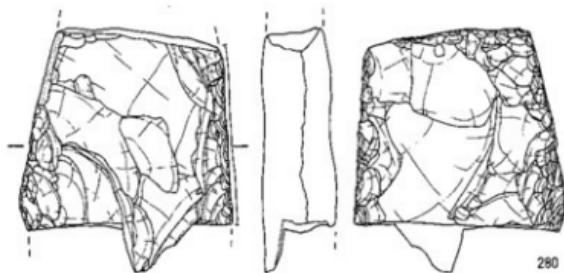
第 57 図 S R 01 上層出土遺物実測図(6)



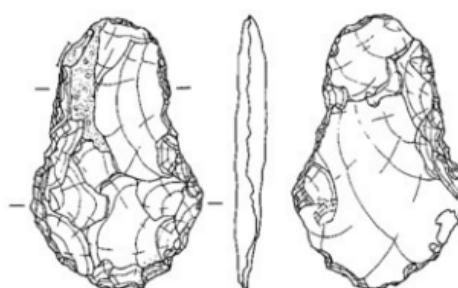
第 58 図 S R 01 上層出土遺物実測図(7)



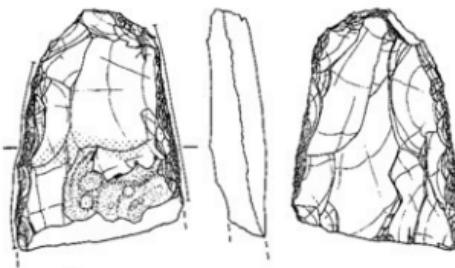
第59図 SR 01 上層出土遺物実測図(8)



280



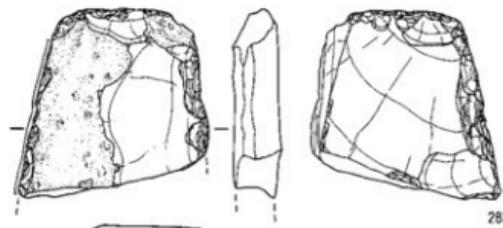
281



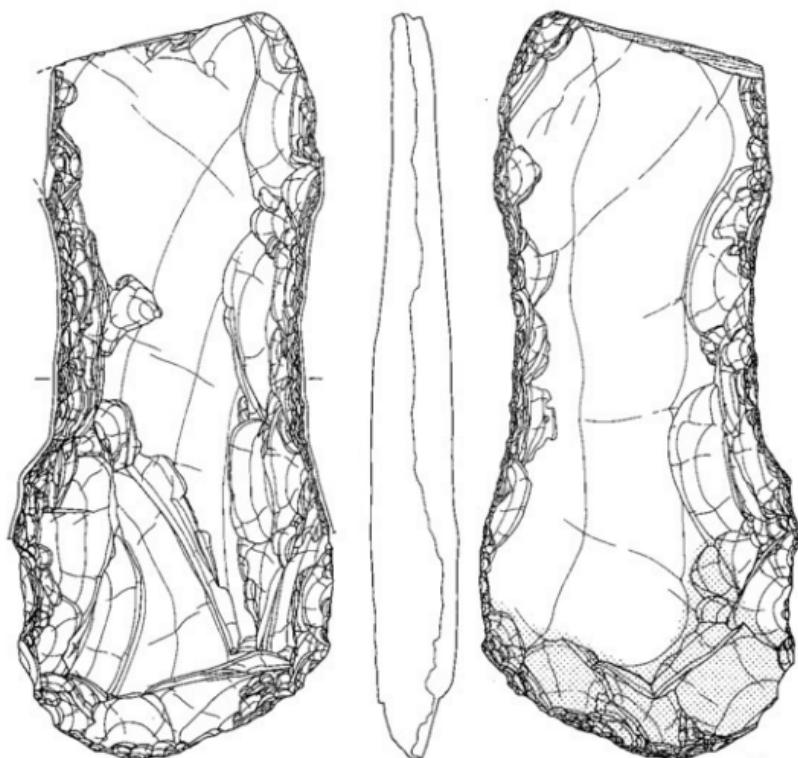
282



第 60 図 S R 01 上層出土遺物実測図(9)



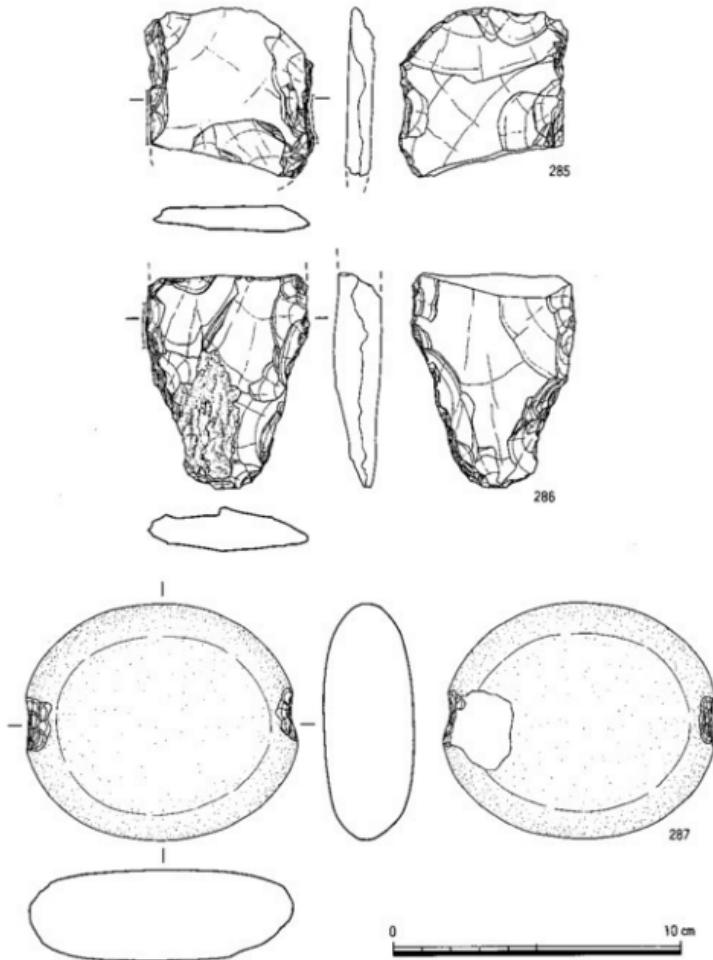
283



284



第 61 図 SR 01 上層出土遺物実測図(10)

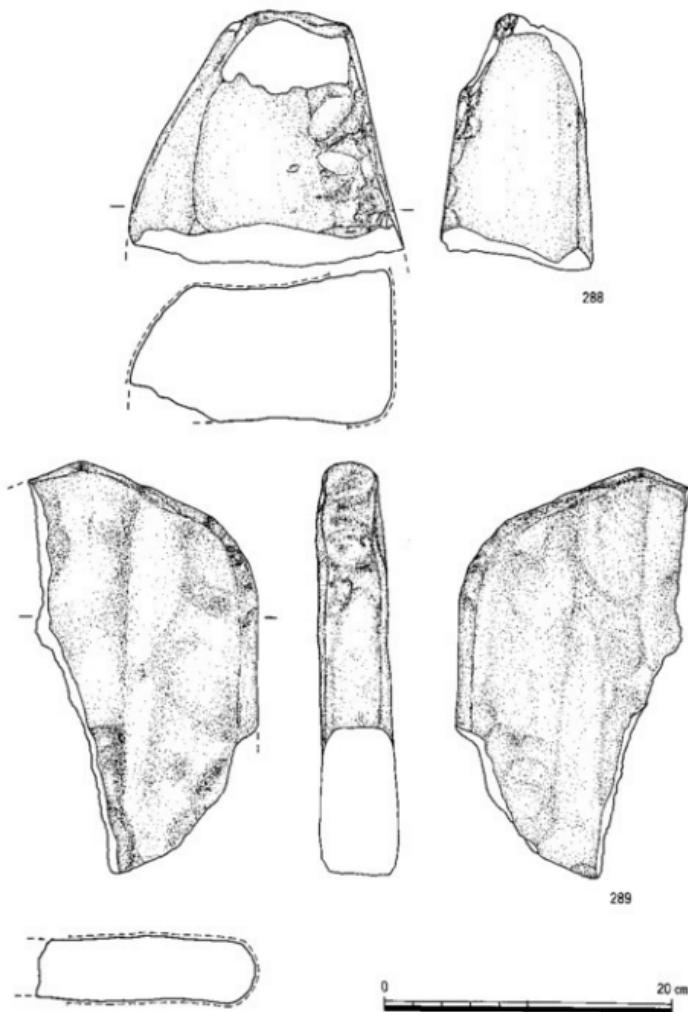


第62図 SR 01 上層出土遺物実測図(11)

の調整は叩きを基本とし、内面は刷毛目を基本とするものである。242・245は体部内面の刷毛目調整のあと縦方向のヘラ磨きが施されている。

256は高坏である。脚部は中央で外方に屈曲させる。屈曲点下に3箇所、穿孔が認められる。

257・258は製塩土器である。体部を内弯せるもので、外面には叩きが施されている。脚部外面には指頭痕状の指なでが施されている。



第63図 SR 01上層出土遺物実測図(12)

259～289は石製品である。

259～266は打製石庵丁である。打製石庵丁にしたものには両端に抉りを持つものと持たないものがある。ほとんど横長の長方形を呈する。267～271はスクレイパーである。269～271のように内太の身から刃部を作るものがある。272は石錐、273～275は石鎌である。

第20表 SR 01上層出土土器観察表(2)

番号	文具 部品	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	胎土	遺存度
241	66	弥生 鉢	11.7cm	6.1cm	2.6cm	サハ・指揮きえ 板付・板付	板付・板付		普通	明褐色 7.5TBS/6	0.1~3mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	8/8
242	66	弥生 鉢	16.0cm	7.2cm	4.4cm	ハ前引・サハ サハ・前引	サハ・サハ サハ		普通	浅黄色 2.5T7/3	0.1~2mmの砂粒を含む石英・長石含む	4/8
243	67	弥生 鉢	16.9cm	6.1cm	5.3cm	リリ後引・サハ さよ後引・サハ	板付・後 板付		普通	にぶい黄色 2.5TBS/3	0.1~5mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	6/8
244	67	弥生 鉢	18.8cm	6.2cm	5.0cm	横サハ・リリ リリ前引	直面が残る 板付		普通	にぶい黄色 2.5TBS/3	0.1~5mmの砂粒を含む石英・長石含む	7/8
245	67	弥生 鉢	17.1cm	6.1cm	5.2cm	サハ・指揮きえ 板付・指揮きえ	ハ前引		普通	灰黄色 2.5TBS/2	0.1~5mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	7/8
246	弥生 鉢					リリ後引	サハ		普通	灰黄色 2.5T7/2	0.1~1mmの砂粒を含む石英・長石含む	破片
247	67	弥生 鉢	18.5cm	7.5cm	5.6cm	リリ後引・サハ サハ・前引	ハ前引・サハ		普通	灰黄色 2.5T7/2	0.1~1mmの砂粒を含む石英・長石含む	6/8
248	弥生 鉢					リリ後引・指揮 指揮きえ	サハ		普通	灰黄色 2.5T7/3	0.1~1mmの砂粒を少量含む 石英・長石含む	口徑 1/8
249	弥生 鉢					サハ・ハ前引	ハ前引		普通	灰黄色褐色 10TBS/2	0.1~1mmの砂粒を少量含む 石英・長石含む	口徑 2/8
250	弥生 鉢					サハ	サハ		普通	灰黄色 2.5T7/2	0.1~1mmの砂粒を少量含む 石英・長石含む	口徑 1/8
251	68	弥生 鉢	27.0cm			横サハ・リリ リリ後引・サハ	ハ前引・横付		普通	にぶい黄色 2.5TBS/3	0.1~2mmの砂粒を含む石英・長石含む	口徑 1/8
252	弥生 鉢				7.5cm	リリ前引	サハ・後付		普通	灰黄色 2.5T7/3	0.1~1mmの砂粒を含む石英・長石含む	底径 8/8
253	68	弥生 鉢			3.0cm	サハ	ハ前引		普通	灰黄色 2.5T7/2	0.1~1mmの砂粒を含む石英・長石含む	底径 8/8
254	68	弥生 鉢			3.9cm	サハ	ハ前引・サハ		普通	にぶい黄色 2.5TBS/4	0.1~1mmの砂粒を含む石英・長石含む	底径 8/8
255	68	弥生 鉢	15.6cm	9.5cm	7.8cm	底付・サハ サハ・指揮きえ	サハ・指 指揮きえ		普通	灰黄色褐色 2.5TBS/3	0.1~2mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	4/8
256	68	弥生 高环			13.9cm	刺繡	刺繡	摩孔 3ヶ所	普通	明褐色 5TBS/6	0.1~2mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	脚部 5/8
257	68	弥生 製塙 土器			4.8cm	リリ前引・サハ サハ・指 指揮きえ	サハ・指 指揮きえ		普通	灰黄色褐色 10TBS/3	0.1~2mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	脚部 8/8
258	68	弥生 製塙 土器			5.5cm	リリ前引・サハ サハ・指 指揮きえ	サハ・指 指揮きえ		普通	灰白色 2.5TBS/2	0.1~1mmの砂粒を少量含む 石英・長石含む	脚部 8/8

第21表 SR 01上層出土石器観察表

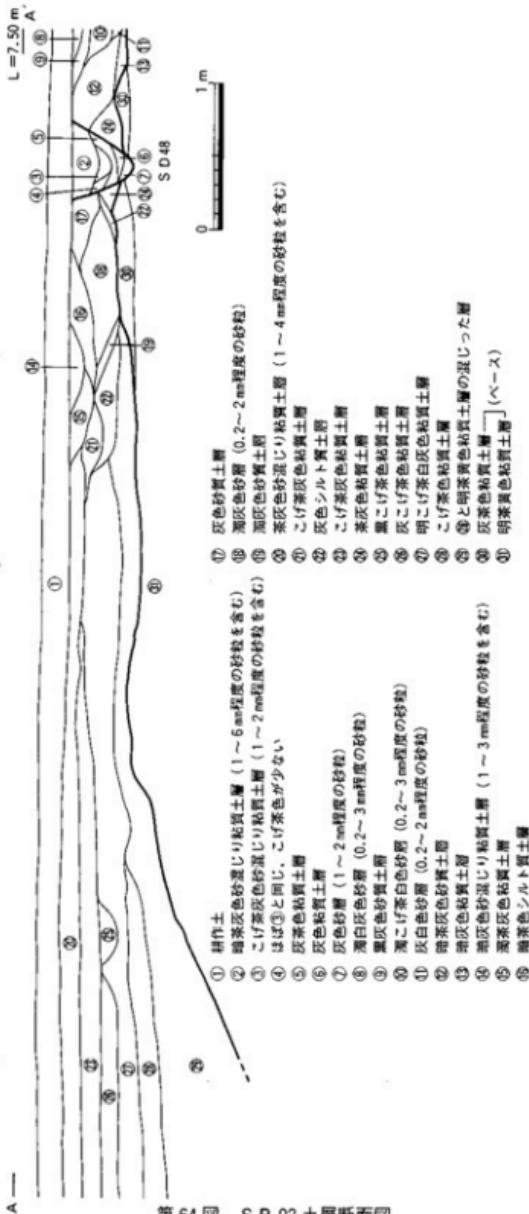
番号	文具 部品	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整形・調整の跡			
259	68	石船丁	9.6cm	4.4cm	0.9cm	54.0kg	#28付	一部欠損、鋸削邊の一方に抉りあり、長側辺(背)に敲打痕あり			
260	68	石船丁	6.9cm	5.6cm	0.9cm	46.2kg	#28付	風化、一部欠損、鋸削邊の一方に抉りあり、片面に磨滅あり			
261	68	石碗丁	7.0cm	4.1cm	0.9cm	26.5kg	#28付	風化			
262	68	石船丁	6.4cm	4.9cm	0.6cm	28.5kg	#28付	一部欠損			
263	68	石船丁	4.9cm	5.1cm	0.8cm	19.6kg	#28付	風化、一部欠損、長側辺(背)に敲打痕あり			
264	68	石船丁	4.4cm	5.0cm	1.0cm	25.1kg	#28付	風化、一部欠損			
265	69	石船丁	3.7cm	6.7cm	0.7cm	20.70kg	#28付	風化			
266		石碗丁	4.2cm	5.0cm	0.8cm	20.7kg	#28付	風化			
267	69	石船丁	6.3cm	3.3cm	0.7cm	14.6kg	#28付	風化			
268	69	石船丁	8.1cm	5.4cm	0.7cm	33.20kg	#28付	風化			
269	69	石船丁	9.6cm	5.1cm	1.6cm	125.67kg	#28付	風化、一部欠損、長側辺(背)に敲打痕あり			
270	69	石船丁	10.1cm	6.1cm	1.8cm	176.45kg	#28付	風化、長側辺(背)に敲打痕あり			
271	69	石船丁	9.4cm	5.3cm	1.9cm	158.18kg	#28付	風化、長側辺(背)に敲打痕あり			
272	69	石鉗	3.0cm	1.6cm	0.8cm	2.62kg	#28付	風化、平基式			
273	69	石鉗	2.0cm	1.4cm	0.3cm	0.80kg	#28付	風化、平基式			
274	69	石鉗	2.5cm	1.3cm	0.3cm	0.73kg	#28付	平基式			
275	69	石鉗	1.7cm	1.6cm	0.3cm	0.76kg	#28付	平基式、先端部欠損			
276		不明	7.6cm	6.2cm	1.6cm	109.82kg	#28付	風化、右側辺に敲打痕あり			
277	70	石歯	9.1cm	5.2cm	1.3cm	67.37kg	#28付	風化、左側辺欠損、右側辺に敲打痕あり			
278	70	石歯	2.9cm	3.9cm	1.8cm	16.60kg	#28付	基部欠損、左側辺間に磨滅・削痕あり			
279	70	石歯	8.9cm	6.2cm	1.7cm	115.89kg	#28付	白色風化、基部欠損、右側辺に敲打痕あり、刃部片面に磨滅・削痕あり			
280	70	石歯	8.0cm	7.3cm	2.6cm	180.12kg	#28付	風化、基部・刃部欠損、右側辺に敲打痕あり			
281	70	石歯	9.4cm	5.9cm	1.1cm	52.50kg	#28付	左側辺に敲打痕あり、刃部片面に磨滅あり			
282	71	石歯	8.0cm	5.6cm	1.9cm	127.64kg	#28付	風化、刃部欠損、左側辺に敲打痕あり、片面に磨滅あり			
283	71	石歯	6.0cm	6.2cm	1.7cm	83.51kg	#28付	風化、刃部欠損、左側辺に敲打痕あり			
284	71	石歯	24.6cm	11.0cm	3.0cm	990.52kg	#28付	風化、右側辺に敲打痕あり、刃部片面に磨滅あり			
285	71	石歯	5.2cm	5.7cm	1.0cm	40.89kg	#28付	風化、刃部欠損、右側辺に敲打痕あり			
286	71	石歯	7.3cm	5.7cm	1.6cm	70.57kg	#28付	風化、基部欠損、左側辺に敲打痕あり			
287	72	石錐	8.2cm	9.4cm	3.1cm	389.65kg	安山岩	風化、両側辺に抉りあり			
288	72	石錐	17.1cm	19.0cm	10.2cm	3890.0kg	砂岩	一面削減、両側辺に磨滅あり			
289	72	石錐	27.5cm	15.5cm	5.5cm	3570.0kg	輝緑岩	一面欠損、両側辺に磨滅あり			

277～286は打製石器である。281は瓢箪型を呈する小型の石器である。284は大型の石器である。柄を接合する部分と思われる中央部側辺はやや大きい抉りを持たせ、刃つぶしを行っている。刃部は傾斜を持つ、片側に摩滅痕を残す。以上は全てサヌカイト製である。287は安山岩製の石錐である。

S R 0 2

S R 0 2 は当遺跡南部の宅地部分東の第Ⅳ調査区と宅地部分の第Ⅴ調査区で検出した。ちょうど第Ⅴ調査区部分は川津二代取遺跡の北西部で検出された自然河川が北東方向に延び、検出されたものと考えられる。第Ⅲ調査区で検出されたS R 0 1 とはこの部分で合流するものと考えられる。しかし、調査面積が狭いためにS R 0 2 の北側の掘り方は確認できたが南側は調査区外にあるものと思われる。S R 0 2 の流路は北東方向に延び、調査区外へと延びる。

遺物は縄文時代晩期の土器片や弥生時代前期の土器片が少量出土している。



第64図 S R 02 土層断面図

S Z 0 1 (水田造構)

S Z 0 1 水田造構は調査区ほぼ中央部の地表下約0.7mで、東西約30m、南北約50m(約400m²)の範囲で検出された。大小の畦畔で方形に小さく区画された水田址は合計34区画検出された。この水田址を第65図のようにそれぞれの区画にNa1～Na34と振り、南北列を西からA～I列と便宜上呼称する。

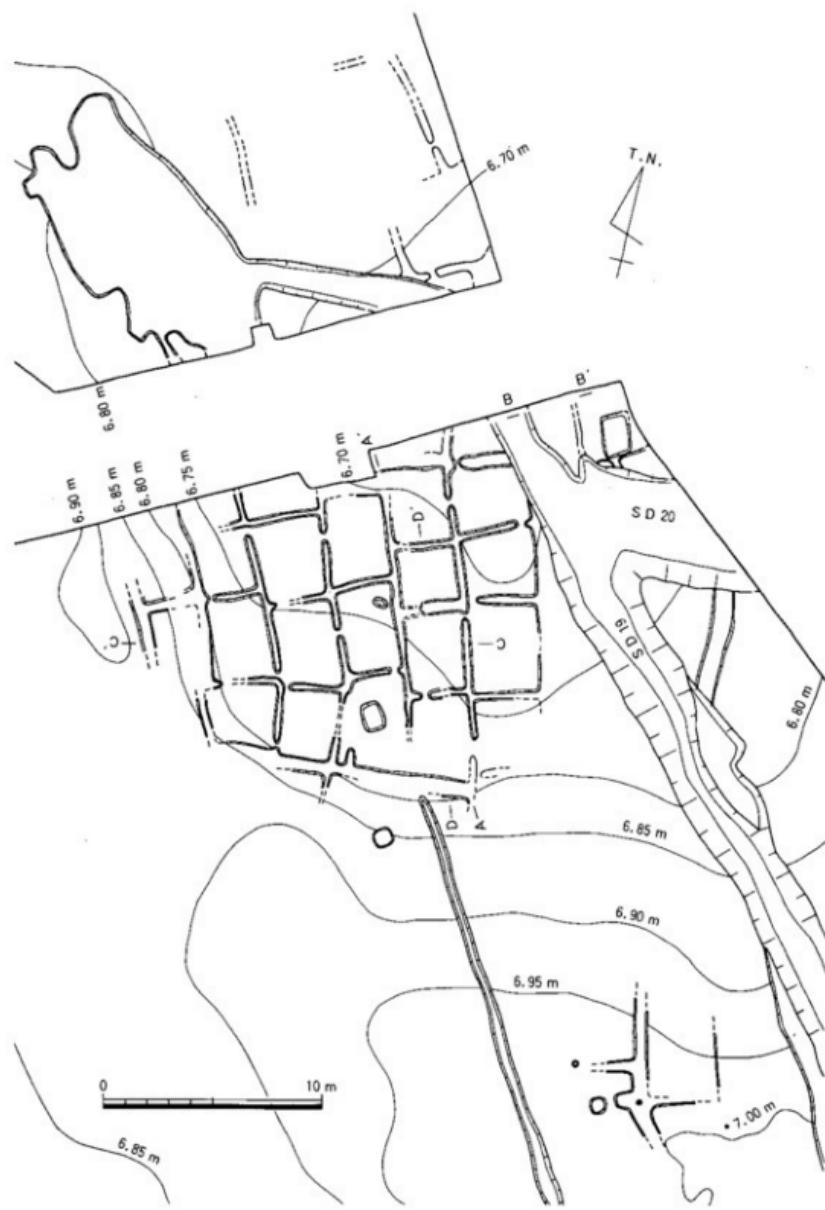
水田址は、南から北に緩やかに傾斜する部分に造られている。区画が集中して検出された南と北の比高差は14cmを計る。それぞれのA～I列でその比高差をみるとD列：4.5cm(Na7とNa8) - 3.0cm(Na8とNa9) - 2.5cm(Na9とNa10) - 1.0cm(Na10とNa11)，E列：1.0cm(Na14とNa15) - 1.5cm(Na15とNa16) - 3.0cm(Na16とNa17) - 2.0cm(Na17とNa18)，F列：0.5cm(Na21とNa22) - 2.0cm(Na22とNa23)，G列：0.5cm(Na25とNa26) - 3.0cm(Na26とNa27) - 0.5cm(Na27とNa28)，H列：1.5cm(Na29とNa30) - 3.0cm(Na30とNa31) - 2.0cm(Na31とNa32)となる。南北列の比高差には0.5～4.5cmと幅がみられる。

水田址は、幅45～78cm、高さ4cm程度を計る大畦畔を南辺と東辺および西辺に配し、そのなかを小区画に分けている。まず、等高線に直行して幅20～30cm、高さ4cmの中畦畔をほぼ等間隔で南北に9本配し、等高線に平行する東西の小畦畔を適宜設けている。南北に配された中畦畔の間隔は、その差が1m以内とほぼ一定しているが、東西に配された小畦畔の間隔は、1m以上とやや幅を持ち、一定していない。

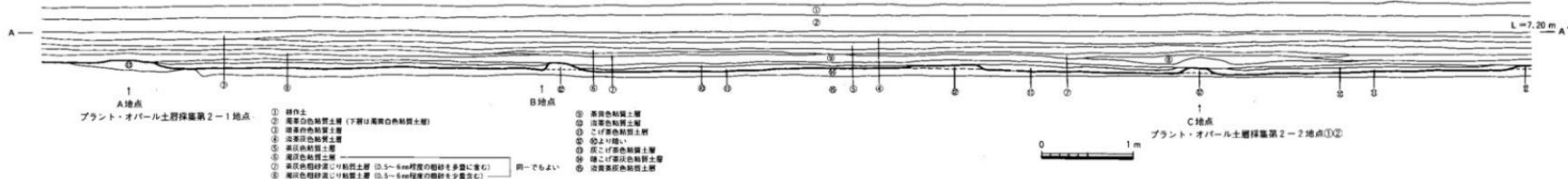
中畦畔と小畦畔によって区画されたそれぞれの水田址は、ほぼ正方形を呈するものもみられるが、ほとんどは南北のやや長い長方形を呈している。水田址一区画の一辺の幅は南北2.5～4.4m、東西2.55～3.45mを計る。区画が明確にわかるものは16区画で、最大のものは水田Na21で東西3.00m×南北4.40m(13.20m²)を計り、最小



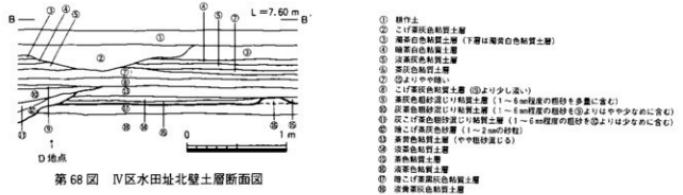
第65図 水田址模式図



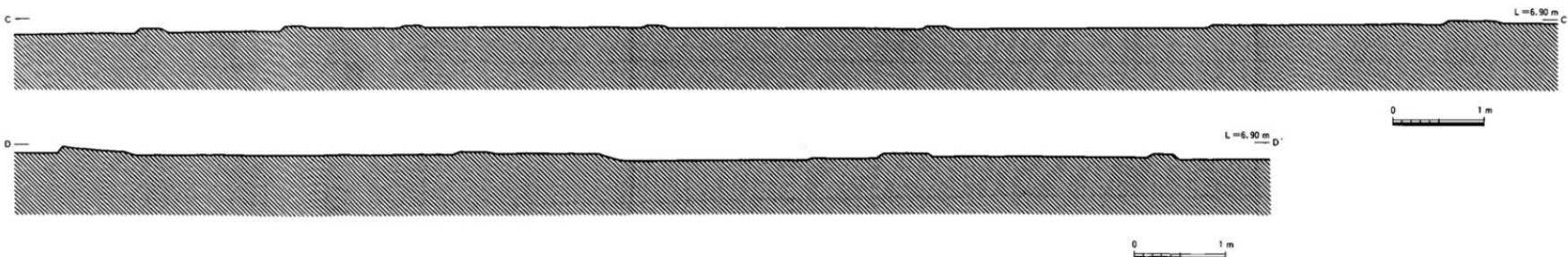
第66図 水田址平面図



第67図 IV区水田址西壁土層断面図



第68図 IV区水田址北壁土層断面図



第69図 水田址断面図

のものは水田No.16で東西2.75m×南北2.50m (6.88m²) を計る。平均は約10m²となり、香川県で検出されている同時期の水田址の一区画当たりの面積に比べるとやや広いようである。

それぞれの区画には水口が設けられており、(区画)

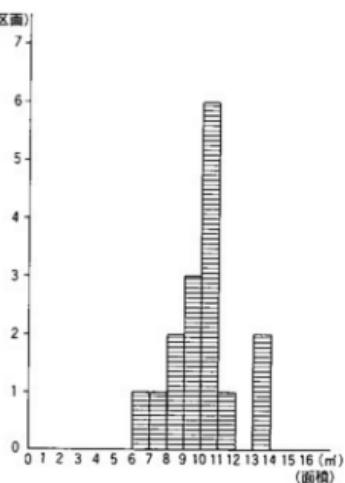
「畦越し」による配水は行っていないようである。

水田址付近の土層堆積状況は第67図のとおりである。水田址上層の第①層～⑨層は水平堆積を呈し、現水田面と中・近世墳の水田面と思われる。

第⑨層下面より検出された水田址は第⑯層（淡黄茶灰色粘質土層）を基盤層としており、その上層に堆積する第⑭層（暗こげ茶灰色粘質土層）を水田耕土としている。この水田耕土層は厚さ10cmを計る。畦畔は水田耕土とほぼ同質で、暗こげ茶色粘質土を呈する。

この水田址の時期を土層出土遺物からみると、

水田耕土とする第⑯層より縄文時代晚期の土器や



第70図 検出水田面積分布

第22表 水田址面積一覧表

水田No	南北長(m)	東西長(m)	面積(ef)	標高(m)	18	(0.38)	(1.12)	-	5.68
1	1.06	(1.20)	-	6.89	19	(1.27)	-	-	6.70 ~ 6.73
2	(2.90)	(1.32)	-	6.90 ~ 6.91	20	(0.73)	(0.56)	-	6.80
3	(1.46)	(1.37)	-	6.63	21	4.40	3.00	13.20	6.73 ~ 6.77
4	(0.38)	(0.65)	-	6.68	22	4.05	2.55	10.33	6.72 ~ 6.77
5	(1.40)	(2.54)	-	6.58	23	3.75	2.75	10.31	6.71 ~ 6.74
6	-	(1.30)	-	6.59 ~ 6.67	24	(0.70)	(1.54)	-	6.81
7	3.20	(1.94)	-	6.77	25	3.20	2.55	8.16	6.75 ~ 6.77
8	4.15	3.15	13.07	6.70 ~ 6.75	26	3.90	2.80	10.92	6.75 ~ 6.78
9	2.95	3.40	10.03	6.68 ~ 6.71	27	3.65	3.10	11.32	6.72 ~ 6.75
10	2.75	3.45	9.49	6.65 ~ 6.69	28	(1.20)	3.44	-	6.71 ~ 6.75
11	(1.12)	(2.56)	-	6.67 ~ 6.69	29	2.80	3.20	8.96	6.75 ~ 6.82
12	(0.40)	(1.80)	--	6.72	30	3.80	2.80	10.64	6.75 ~ 6.79
13	(1.50)	(3.33)	-	6.70 ~ 6.76	31	2.80	2.55	7.14	6.73 ~ 6.75
14	3.75	2.80	10.50	6.74 ~ 6.77	32	(1.04)	2.80	-	6.72
15	3.60	2.70	9.72	6.72 ~ 6.77	33	(1.70)	(0.62)	-	6.83 ~ 6.85
16	2.50	2.75	6.88	5.71 ~ 6.75	34	(1.05)	2.55	-	6.81 ~ 6.85
17	3.45	2.70	9.32	6.69 ~ 6.71					

石器が出土している（第71図294～297）。また、水田耕土上部に堆積した第⑪層からは弥生土器と思われる土器片が出土しているが、畦畔から遺物は出土していない。このことから時期は縄文時代晩期から弥生時代の水田であることがわかる。

次に第68図の土層図からみると第⑬層上面から弥生時代前期から中期にかけて機能していた溝S D 19が切り込まれていることから弥生時代中期以前であることがわかる。

以上のことから川津下樋遺跡で検出された水田址は縄文時代晩期から弥生時代中期の間に造られたものである。

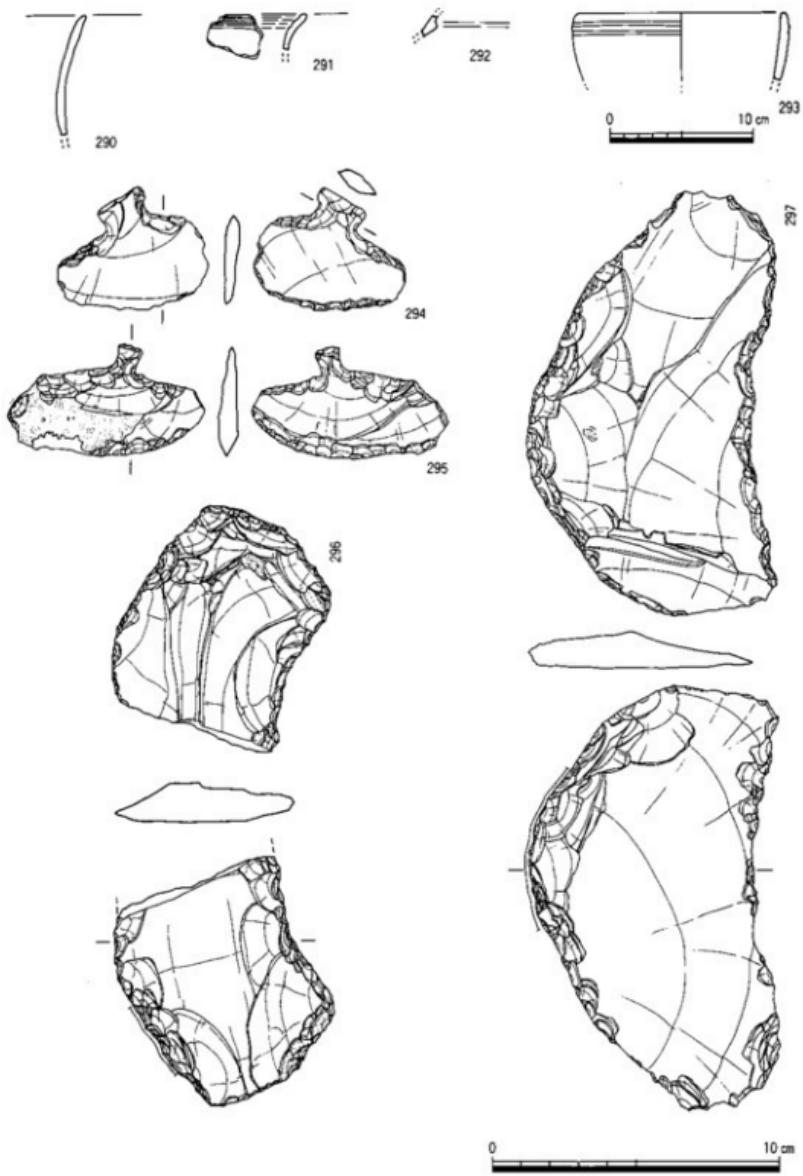
290～297は水田耕土（暗こげ茶黒灰色粘質土層）より出土した遺物である。290・291は深鉢である。290は頸部を外反させ、口縁端部を少し尖らせ気味に終わらせるものである。291は口縁端部内面に二条の沈線を持つ。292は浅鉢である。小破片であるが体部と頸部の境に屈曲部が認められる。293はボール状の鉢である。口縁部外面に二条の沈線を持つ。294・295は石匙である。296・297はスクレイバーである。形態は半月状で、刃部は内彎する。穂積み具として使われていたものと考える。

第23表 水田址出土土器観察表

番号	文様 有無	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	胎土	遺存度
290	73	縄文 深鉢				++	++		普通	灰黄色 2.5V7/4	0.2～1mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	破片
291	73	縄文 深鉢				++	++	(内)口縁部 に二条のへ リ盛沈線	普通	灰黄色 2.5V7/2	0.2～2mmの砂粒を少量含む 石英含む	破片
292	73	縄文 浅鉢				斜腹	斜腹		普通	暗灰青色 2.5T5/2	0.3～1mmの砂粒を含む	破片
293	73	縄文 鉢	14.2cm			摩滅:++	摩滅	(外)口縁部 に二条のへ リ盛沈線	普通	浅黄色 2.5V7/3	0.1～1mmの砂粒を少量含む 石英含む	口徑1/8

第24表 水田址出土石器観察表

番号	文様 有無	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴
294	73	石匙	5.2cm	4.2cm	0.5cm	10.95g	#33415	白色風化
295	73	石匙	6.8cm	3.8cm	0.7cm	17.04g	#33413	風化
296	74	アリバード	8.2cm	7.1cm	1.4cm	94.37g	#33416	風化、一部欠損、長側辺(背)に敲打痕あり、刃部両面に磨滅あり
297	74	アリバード	14.6cm	7.7cm	1.3cm	162.67g	#33411	風化、長側辺(背)に敲打痕あり



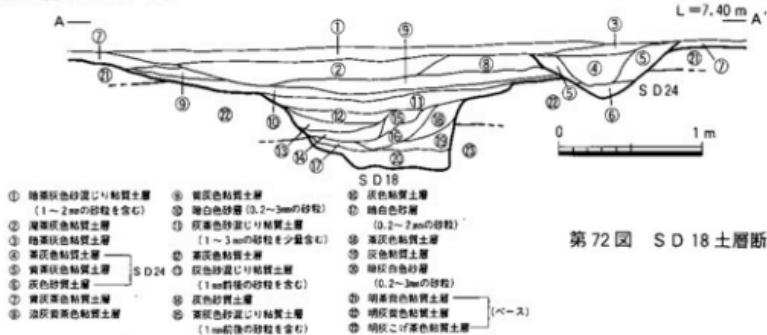
第 71 図 水田址出土遺物実測図

SD18

S D 1 8は第Ⅲ・Ⅳ調査区で検出した遺構である。この溝はS R 0 1が西に屈曲する部分より上流側の右岸から北方向に派生し、そのまま真っ直ぐ調査区外へと延びている。埋土は上部が粘質土層で、最下層は砂層である。規模はS R 0 1際では天幅約1.76m、深さ約0.08mとかなり削平を受けているようである。第Ⅳ調査区東部ではほぼ同じ部分をS D 2 4が流路を取っているが、天幅約1.4m、深さ約0.4mを計る。

298～302はSD18より出土した遺物である。

298は壺の口縁と思われる。口唇部に刻み目が施されている。その他の壺の頸部には沈線が施されている。



第72図 SD 18 土層断面図

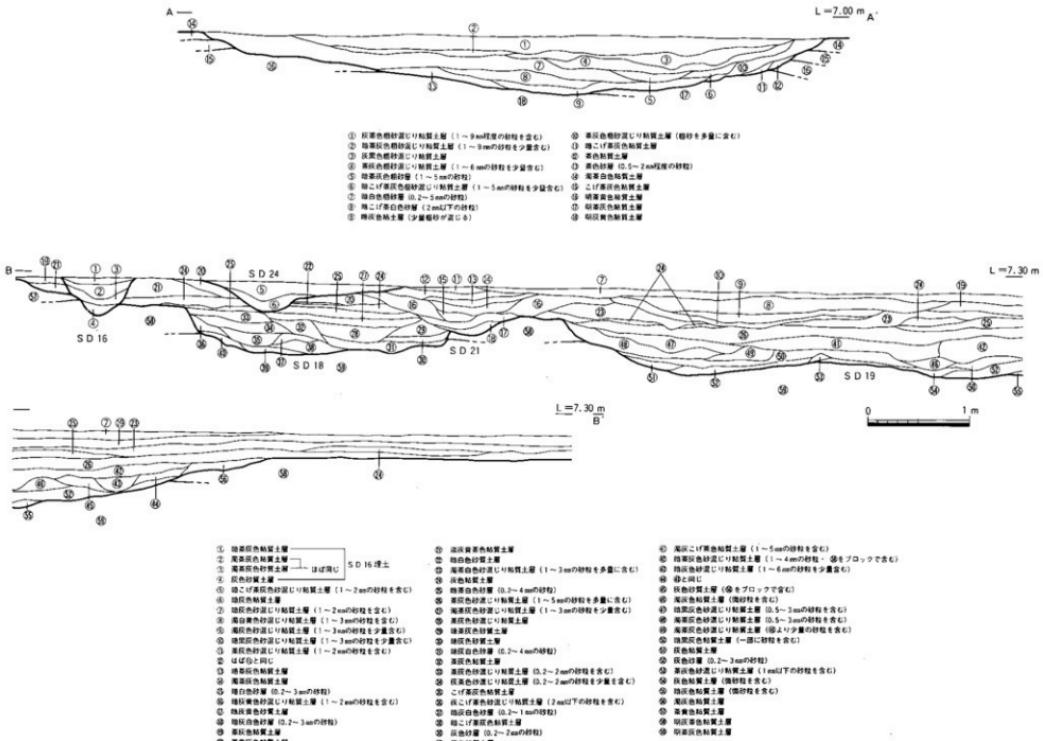
SD19

SD 19は第Ⅲ・Ⅳ調査区で検出した遺構である。この溝はSR 01が西に屈曲する部分、ちょうど第2井堰が検出された右岸から北東方向に派生し、その後北方に流路を取るものである。第Ⅳ調査区ではSD 19とSD 21の2条に分岐し、さらに第Ⅱ調査区では深さを減じ、消滅する。規模は派生部分で天幅約6.2m、深さ約0.6mを計り、分岐後の第Ⅳ調査区では天幅約4.72m、深さ約0.56mを計る。

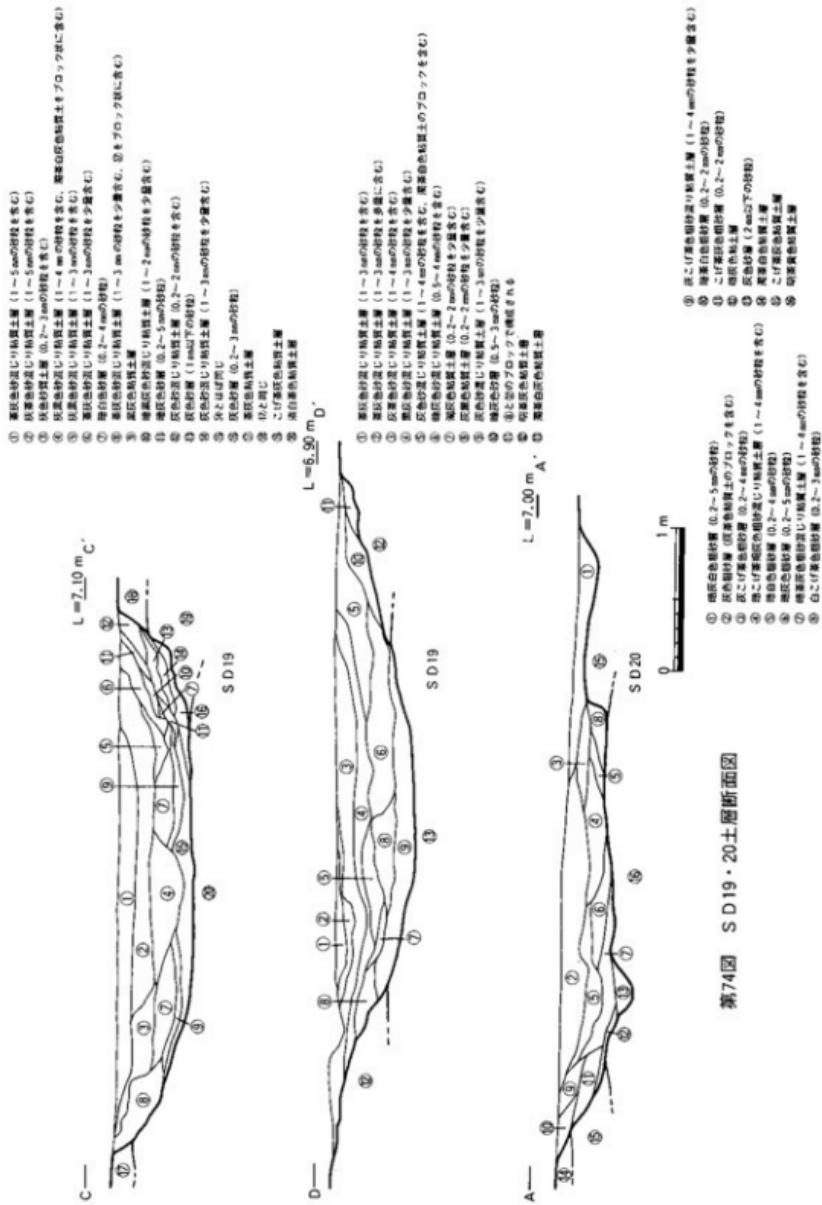
S D 1 9 の最終埋没は水田址 (S Z 0 1) の東の大畦畔と小区画水田を壊しており、この水田の埋没後、穿たれた溝であることがわかる。

303～321はSD19より出土した遺物である。

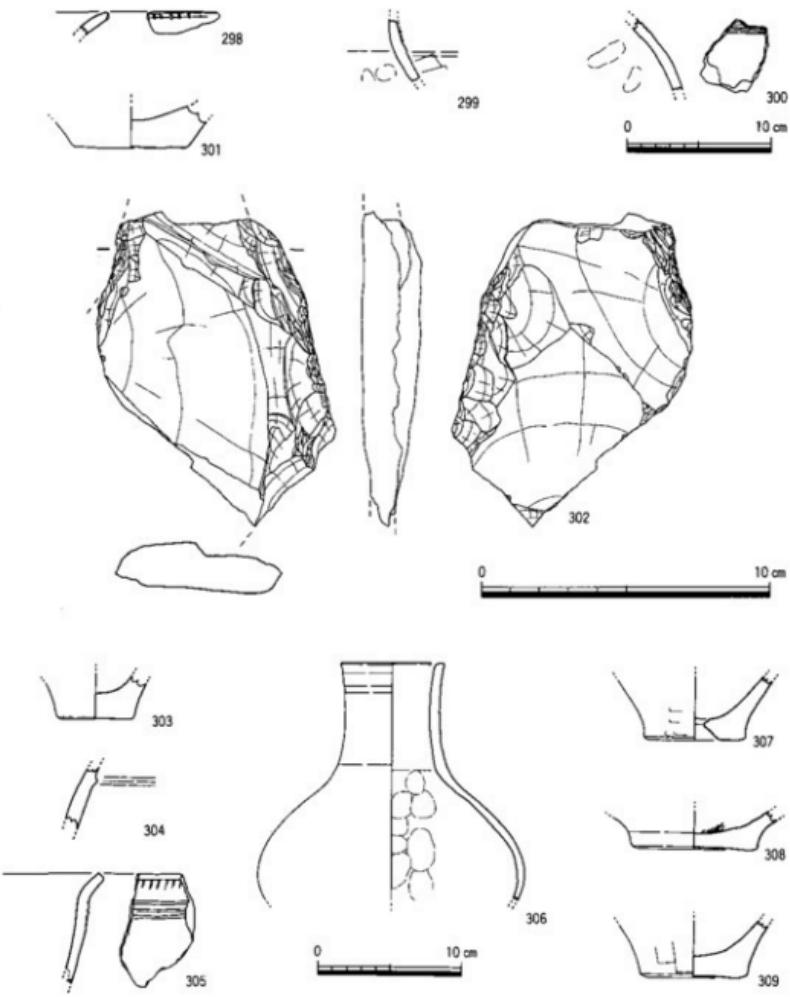
303は第Ⅲ調査区のSD19で出土した弥生土器底部である。305は頸部に3条のヘラ描沈線が施され、口縁端部外面下半には刻み目が認められる。306は長頸壺である。体部は卵形を呈し、口縁部外面に二条の凹線が僅かに認められる。307は甌である。310～321は石製品である。310・311は打製石庖丁で、端部に抉りが認められる。315はSD19最下



第73図 SD 19 土層断面図



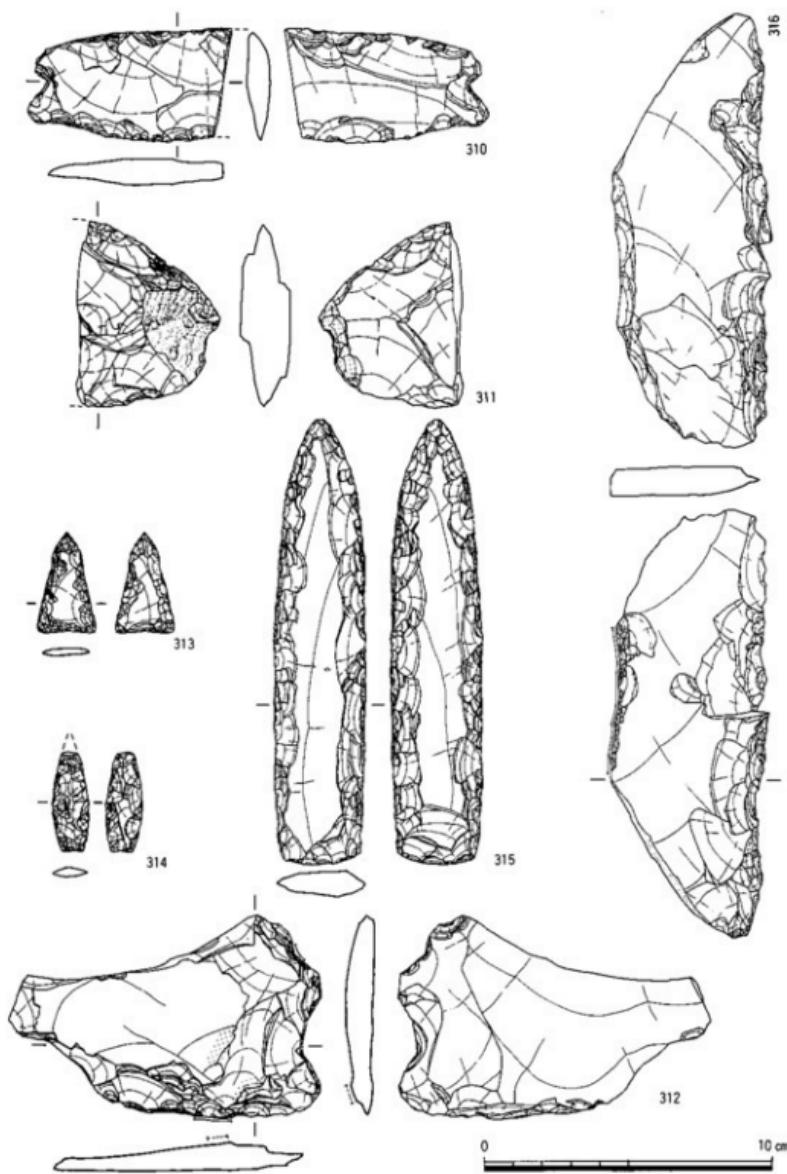
第74圖 SD19・20土層断面図



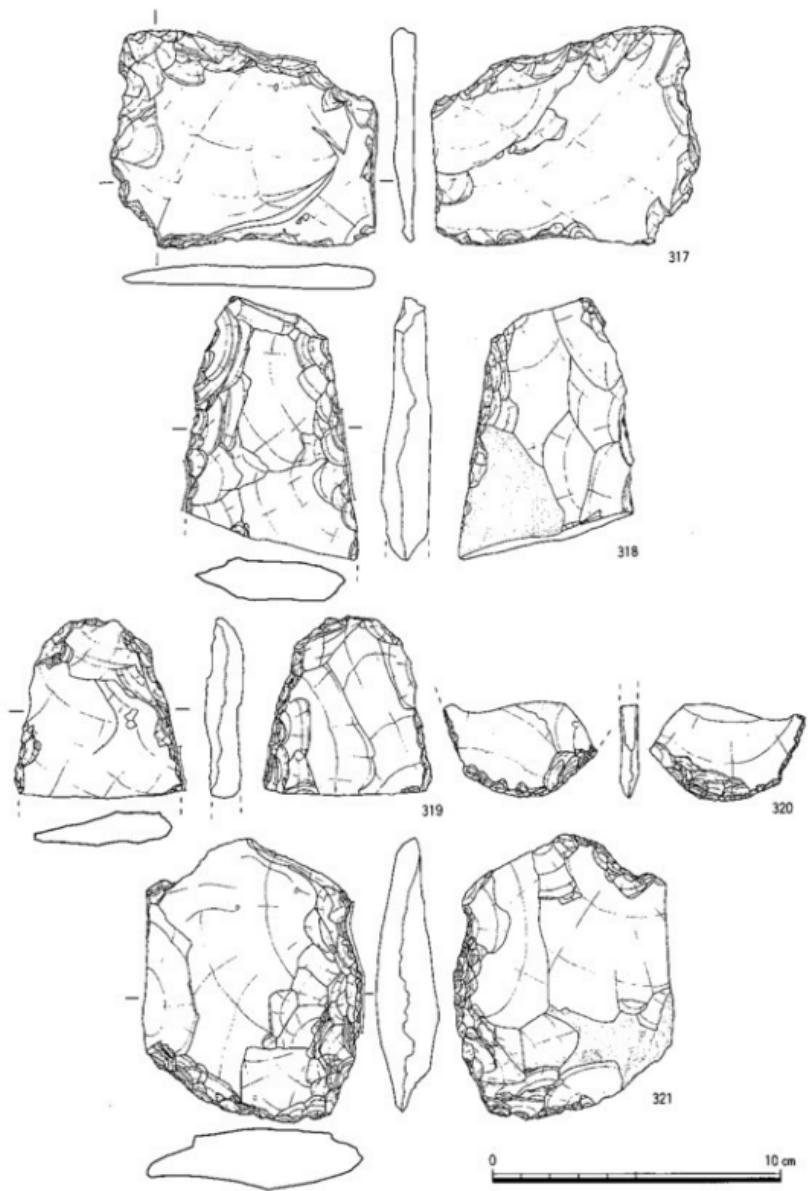
第75図 SD 18・19出土遺物実測図

層より出土した石槍である。318～320は石鉤である。刃部を欠損するものが多いが、やや刃部の広い短冊状を呈するものと思われる。321は打製石斧である。これら石製品はすべてサヌカイト製である。

時期は出土遺物より弥生時代前期～中期にかけて機能していたものと考えられる。



第 76 図 SD 19 出土遺物実測図(1)



第77図 SD 19出土遺物実測図(2)

第25表 SD 18出土土器観察表

番号	文書番号	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色 調	胎 土	遺存度
298		海生 錐				摩減・刻み目	摩減		普通	にぶい黄褐色 10YR6/4	0.2~2mmの砂粒を含む石 英・長石含む	鏡片
299		海生 錐				++・板++	++	(外)1系の 比較	普通	灰白色 2.5Y8/2	0.3~2mmの砂粒を含む石 英含む	鏡片
300		海生 錐				++	++	(外)比較	普通	にぶい黄褐色 2.5Y6/3	0.2~2mmの砂粒を含む石 英・長石含む	鏡片
301		海生 錐 底部			7.5cm	++	++		普通	にぶい黃色 2.5Y6/3	0.2~4mmの砂粒を多量に 含む石英・長石含む	底底2/8

第26表 SD 18出土石器観察表

番号	文書番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴			
302		石鉗	10.1cm	7.4cm	2.0cm	170.22g	#28付	馬蹄・刀部欠損			

第27表 SD 19出土土器観察表

番号	文書番号	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色 調	胎 土	遺存度
303		海生 錐			5.2cm	摩減	摩減		普通	灰白色 10YR8/2	0.2~2mmの砂粒を多量に 含む石英・長石含む	底底3/8
304		縄文 深鉢			++	++			普通	灰黄褐色 10YR8/2	0.2~2mmの砂粒を少額含む 石英含む	鏡片
305		海生 錐			++・矧み目	++	(外)1系の 比較		普通	にぶい黄褐色 10YR8/2	0.1~2mmの砂粒を多量に 含む石英・長石含む	鏡片
306		海生 錐 底部	7.1cm			摩減	摩減・指 跡きえん	(外)2系の 比較	普通	灰色 5Y6/1~5Y7/1	0.3~2mmの砂粒を含む長 石含む	底2/8
307	75	海生 錐			7.0cm	板++・++	摩減		普通	灰白色 5Y7/2	0.2~2mmの砂粒を多量に 含む石英・長石含む	底底4/8
308		海生 錐			8.6cm	++	++目		普通	灰白色 5Y8/2	0.2~2mmの砂粒を多量に 含む石英・長石含む	底底8/8
309		海生 錐 底部			7.4cm	板++・++	摩減		普通	灰褐色 2.5Y7/2	0.1~3mmの砂粒を多量に 含む石英・長石含む	底底3/8

第28表 SD 19出土石器観察表

番号	文書番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴		
310	75	石磨丁	6.7cm	3.7cm	0.8cm	26.91g	#28付	風化・一部欠損・右側刃の方に跡りあり		
311	75	石磨丁	4.9cm	6.3cm	1.8cm	52.02g	#28付	白色風化・左側刃の方に跡りあり・片面に摩減あり		
312	75	石磨丁	10.6cm	6.9cm	1.0cm	70.60g	#28付	風化・右側刃の方に跡りあり・左側刃片面に摩減あり		
313	76	石鉗	3.5cm	2.1cm	0.2cm	2.01g	#28付	平底式		
314	76	石鉗	3.5cm	1.3cm	0.3cm	1.60g	#28付	風化・錐集式・先端部欠損		
315	76	石鉗	15.3cm	2.2cm	0.9cm	57.36g	#28付	風化		
316	75	234/in-	14.8cm	5.3cm	1.0cm	113.86g	#28付	風化・長側刃(背面)に砸打痕あり		
317	75	234/in-	9.2cm	7.4cm	0.8cm	93.83g	#28付	風化・長側刃(背面)に砸打痕あり		
318	76	石鉗	7.9cm	5.9cm	1.7cm	91.80g	#28付	風化・左側欠損・右側刃に砸打痕あり		
319	76	石鉗	6.1cm	5.8cm	1.3cm	46.67g	#28付	風化・左側欠損・右側刃に砸打痕あり		
320		石鉗	3.2cm	4.9cm	0.7cm	14.17g	#28付	風化・基部欠損		
321	76	打製石斧	9.5cm	7.6cm	2.2cm	170.28g	#28付	風化・右側刃に砸打痕あり		

第29表 SD 21出土土器観察表

番号	文書番号	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色 調	胎 土	遺存度
322		海生 錐 底部			10.4cm		++		普通	透青色 2.5Y7/1~ 透青色 2.5Y5/2	0.1~4mmの砂粒を多量に 含む石英・長石含む	底底2/8

第30表 SD 21出土石器観察表

番号	文書番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴		
323	76	234/in-	8.1cm	8.1cm	1.5cm	132.39g	#28付	白色風化・一部欠損		
324	76	234/in-	7.9cm	5.2cm	0.9cm	40.70g	#28付	風化		

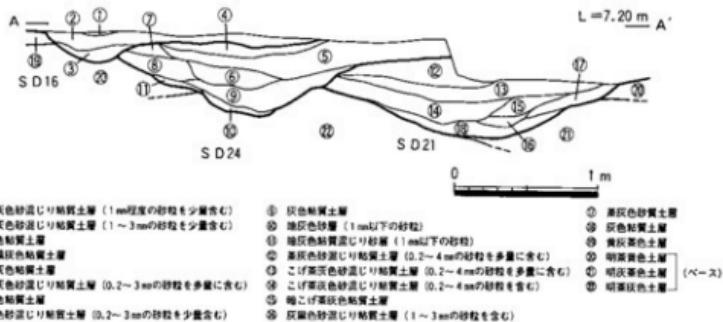
SD 20

SD 20は第IV調査区北端で調査区東側から調査区内へ延び、SD 19に合流する溝である。SD 19とは土層(第74図土層図)より前後関係は認められず、同時期であることがわかる。SD 19と同様にIV区北部では天幅の割に浅い溝である。

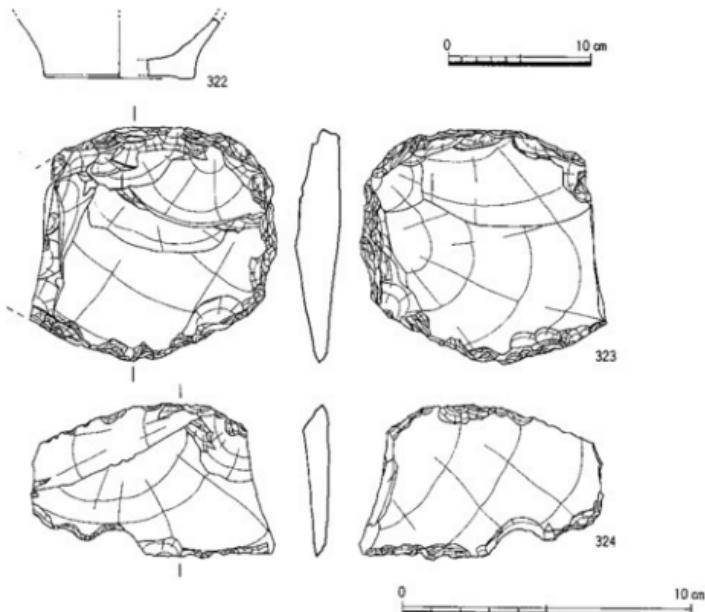
SD 21

SD 21は第Ⅳ調査区でSD 19から北東に派生する溝である。土層図からはSD 19との前後関係は認められない。

322～324はSD 21より出土した遺物である。322は壺の底部である。323・324はスケレイバーである。323は一部欠損しているもののその他は細かい調整が施されている。



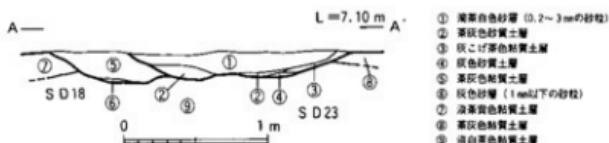
第78図 SD 16・24・21 土層断面図



第79図 SD 21 出土遺物実測図

SD 23

SD 23はSR 01の屈曲部から北方向に派生する溝である。ほぼ流路はSD 19・21と並走しており、そのまま調査区外に延びる。



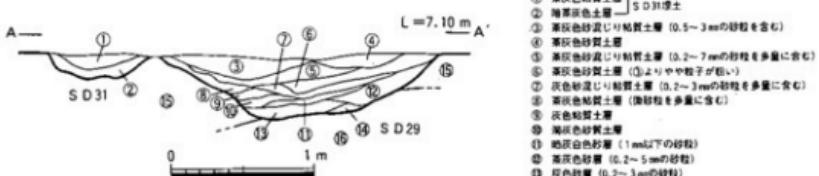
第80図 SD 18・23 土層断面図

SD 29

SD 29はSR 01に東側からちょうど屈曲部に流れ込む溝で、ほぼ北方向に流路を取る。上層は粘質土を主とした土層で、下層は砂を主とした土層からなる。ちょうど第2井堰前面に流れ込んでおり、この溝の水も第2井堰に溜まるように造られていたものと考えられる。

325～333はSD 29出土の遺物である。

326はほぼ直線的に延びる壙部が、口縁部で短く外反する高坏である。327は蓋である。



第81図 SD 29・31 土層断面図

第31表 SD 29出土土器観察表

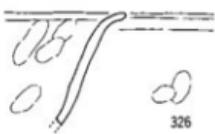
番号	形質	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他の特徴	焼成	色 調	胎 土	遺存度
325	弦文	蓋				手	手	(外)削り出 し突起	普通	灰黄色 2.5V7/2	0.1～2mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	径1/8
326	弦文	高坏				削離	削離		普通	褐色 7.5YR7/6	0.1～2mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	破片
327	弦文	蓋				手	手		普通	灰黄色 2.5V7/2	0.1～2mmの砂粒を多量に含む 石英・長石含む	つまみ

第32表 SD 29出土石器観察表

番号	形質	器種	現存径	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴
328	77	石歯	11.1 cm	6.1 cm	1.0 cm	115.40g	石英	風化、刃部向側邊に敲打痕あり、刃部背面に磨滅あり
329	77	石歯	10.9 cm	6.4 cm	1.2 cm	103.65g	石英	白色風化、一部剥損
330	77	打製石斧	9.9 cm	9.8 cm	2.4 cm	236.54g	石英	刃強辺に敲打痕あり、両面に磨滅あり、装荷板あり
331	326(n)	石歯	9.4 cm	10.0 cm	2.6 cm	237.45g	石英	風化
332	78	石歯	5.3 cm	4.8 cm	1.3 cm	55.56g	石英	基部・刃部欠損、両側辺に敲打痕あり
333	78	石歯	9.6 cm	5.4 cm	1.9 cm	126.45g	石英	両側辺に敲打痕あり



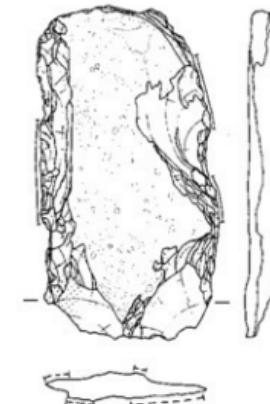
325



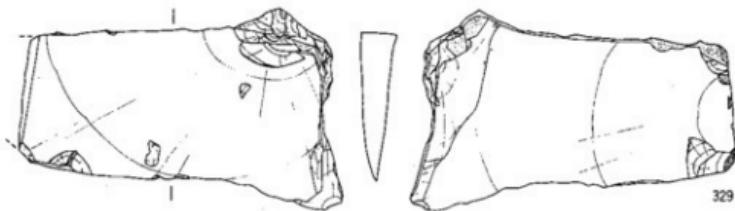
326



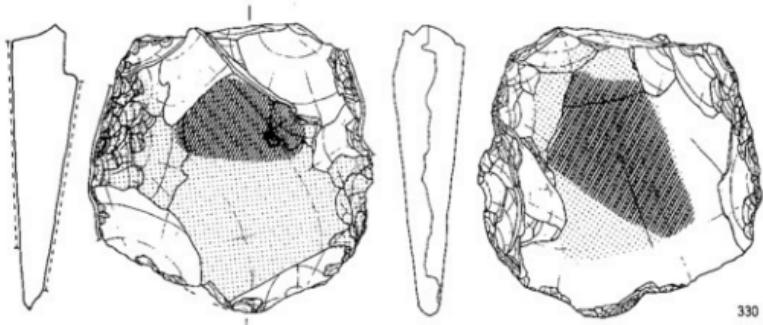
327



328



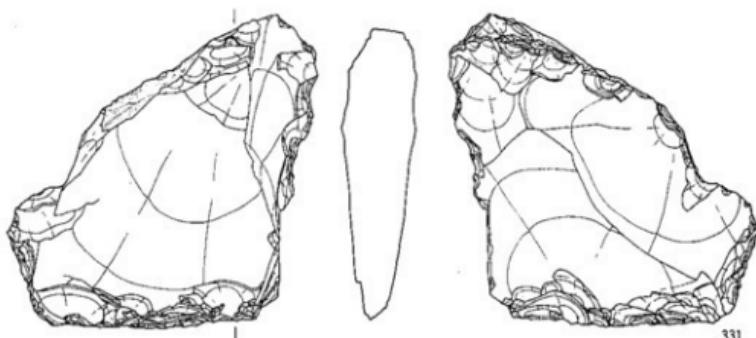
329



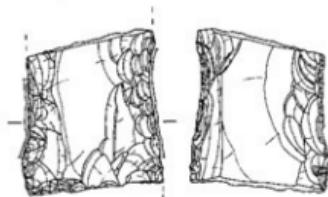
330



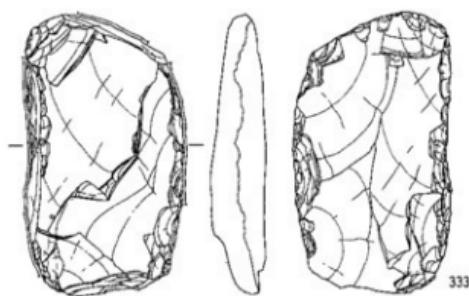
第82図 SD 27出土遺物実測図(1)



331



332



333



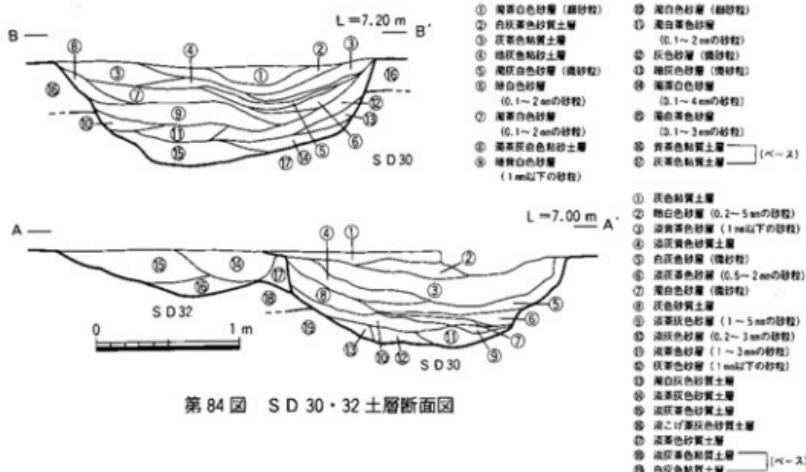
第 83 図 SD 27 出土遺物実測図(2)

SD 30

SD 30はSD 29の南側で、並走する溝である。土層は砂層を主としている。ちょうど第1井堰の前面に流れ込んでおり、SD 29と同様な目的で造られたものと考えられる。

334～343はSD 30出土遺物である。334～337は壺である。337は小型の壺である。体部上半外面に3条のヘラ描沈線が施されている。

時期は弥生時代前期から中期である。



第84図 SD 30・32 土層断面図

第33表 SD 30出土土器観察表

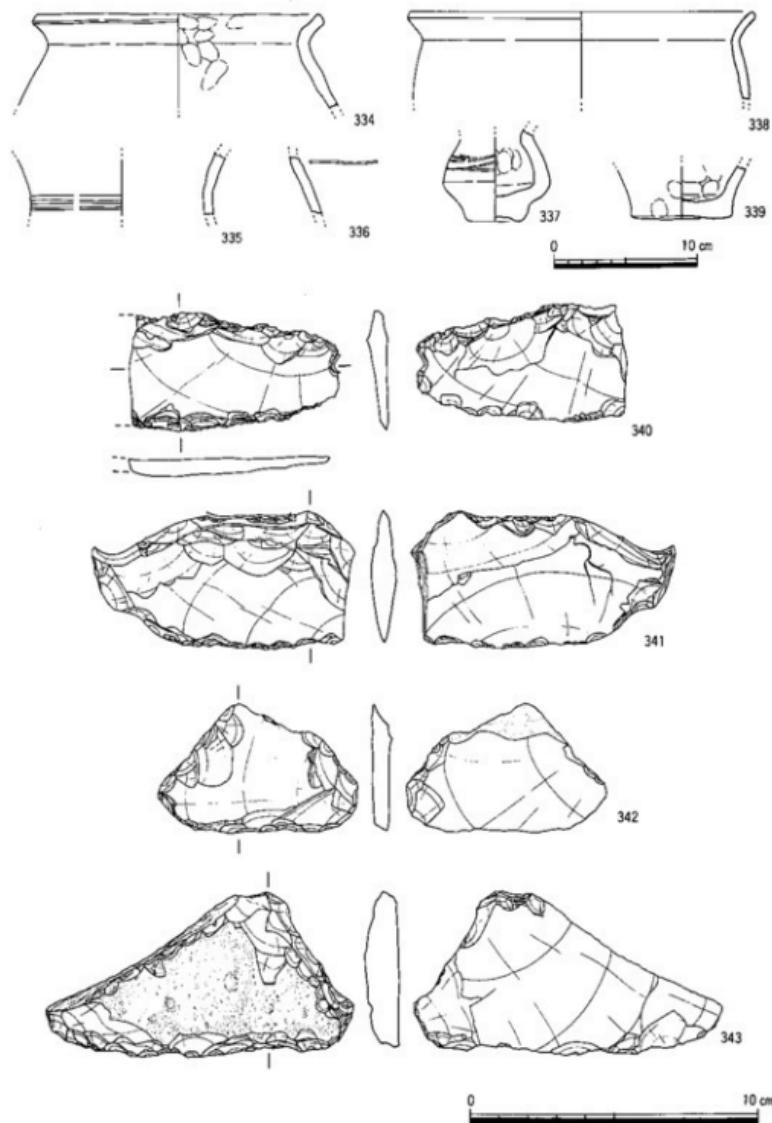
遺物	形質	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その性	模様	地 色	胎 土	造形
334	弥生 壺	19.2cm				フフ	フフ	普通	浅黄色	2.577/3	0.1~2mmの砂粒を含む石	口径1/8
335	弥生 壺					フフ	フフ	(有) 滴水	普通	灰黄色	2.577/2	0.1~4mmの砂粒を含む石
336	弥生 壺					フフ	フフ	(有) 滴水	普通	暗茶色	2.575/2	0.1~1mmの砂粒を含む石
337	59 弥生 壺			3.4cm		フフ	フフ	(有) 体間に 3本のラ ウド	普通	灰黄色	2.577/2	0.1~2mmの砂粒を含む石
79	弥生 壺	23.7cm				フフ	フフ	普通	普通	灰黄色	2.577/2	0.1~2mmの砂粒を含む石
338	弥生 壺					フフ	フフ	普通	浅黄色	2.577/3	0.1~2mmの砂粒を多量に	口径1/8
339	弥生 壺			7.0cm		フフ	フフ	指揮さえ	普通	浅黄色	2.577/4	0.1~3mmの砂粒を多量に
												含む石

第34表 SD 30出土石器観察表

遺物	形質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 性
340	石製	石製	7.3cm	5.1cm	0.7cm	21.5kg	#251	一筋欠損、削除跡の一方に抜き・敲打痕あり
341	23.6cm	-	9.2cm	6.5cm	0.8cm	45.0kg	#252	鋸歯刃(有)、敲打痕(有)
342	23.6cm	-	6.9cm	4.4cm	0.7cm	22.5kg	#253	削除
343	23.6cm	-	10.7cm	5.4cm	1.2cm	80.2kg	#254	削除

SD 31

SD 31はSD 29から派生し、SR 01に流れ込む溝である。規模は天幅約0.85m、深さ約0.21mと深い溝である。底のレベルにかなり差があるので最終埋没頃に分流した可能性を考えられる。



第 85 図 SD 30 出土遺物実測図

SD 32

SD 32はSD 30より派生し、SR 01に流れ込む溝である。規模は天幅約1.6m、深さ約0.36mと浅い溝である。この溝もSD 31と同様に、底のレベルに差があることから、最終埋没頃に分流した可能性が考えられる。

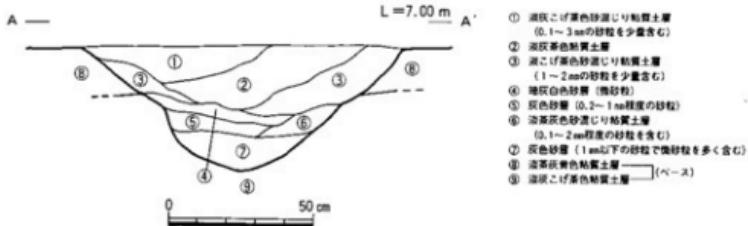
SD 33

SD 33はSR 01西側から流れ込む溝である。北東方向に流路を取る。規模は天幅約1.35m、深さ約0.54mを計る。

344～347はSD 33より出土した遺物である。344は壺の底部で、体部最下部に2条のヘラ描沈線が施されている。また、底部外面にはヘラ描による模様が施されている。

時期は弥生時代前期である。

これらSD 29～33は全て南西方向からSR 01に流れ込み、SD 18・19・23はSR 01から派生する。これらはSR 01で検出された井堰の前面にあることから容易に井堰と関連があることがわかり、SR 01の水量だけでなく流れ込む水は井堰の貯水量を増やす役目も果していたものと考えられる。

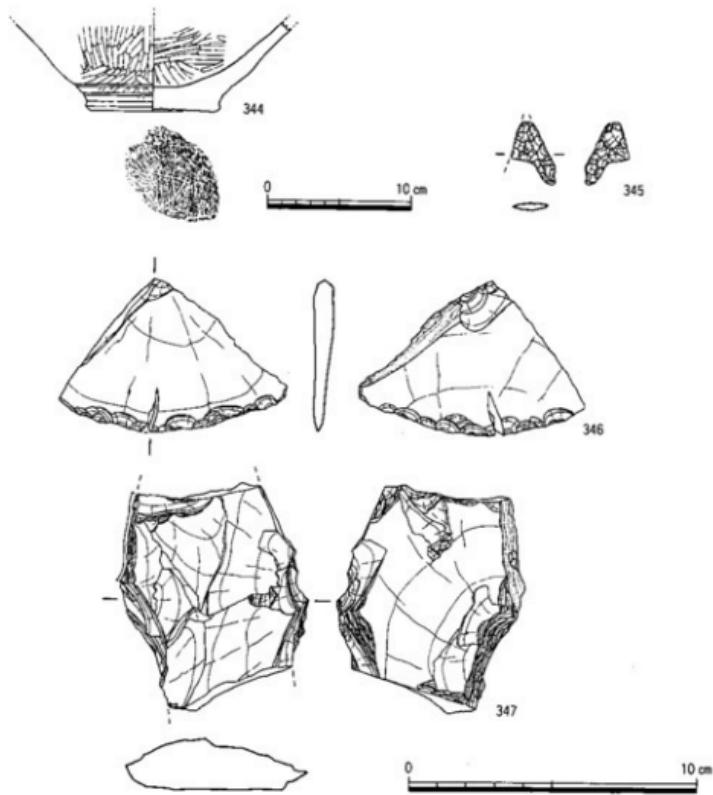


第86図 SD 33土層断面図

SD 41

SD 41は宅地部分南の調査区で検出された溝である。ほぼ北西に流路を取る。川津二代取遺跡から延びる溝で、おそらく第IV調査区のSD 46に続くものと考えられる。規模は天幅約1.0m、深さ約0.21mを計る。

遺物は弥生時代前期の土器片が少量出土している。



第 87 図 S D 33 出土遺物実測図

第 35 表 S D 33 出土土器観察表

番号	形質	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	粘土	遺存度
344	79	弦生 壶 底部		9.4 cm	ペリキテナ	ペリキテナ	(引) 2 本の 縦筋 底部にヘリ 縫文	普通	灰黄色 2.5/6/2	0.1 ~ 2 mm の砂粒を多量に 含む	0.1 ~ 2 mm の砂粒を多量に 含む	底径 4/5

第 36 表 S D 33 出土石器観察表

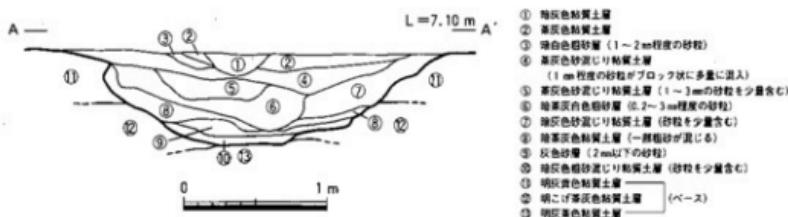
番号	形質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整形・調整の特徴
345	石鏃		2.1 cm	1.6 cm	0.3 cm	0.46 g	玉琳石	風化、凹基式、基部・先端部欠損
346	219-1-1		7.8 cm	5.3 cm	0.7 cm	23.92 g	玉琳石	風化
347	石鏃		17.5 cm	6.4 cm	1.7 cm	107.42 g	玉琳石	風化、基部・刃部欠損、左側面に磨打痕あり

SD 46

SD 46は第IV調査区、宅地部分の東側で検出した溝である。検出した面積が狭いために詳細は不明である。ほぼ北方向に流路を取る。規模は天幅約2.5m、深さ約0.87mを計る。宅地部分南の調査区で検出されたSD 41に繋がるものと考えられる。

348～353はSD 46より出土した遺物である。

時期は弥生時代前期～中期頃のものと思われる。



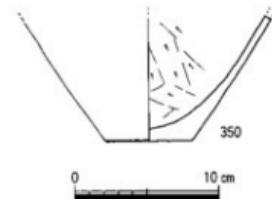
第38図 SD 46 土層断面図

第37表 SD 46 出土土器観察表

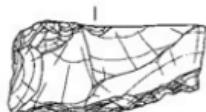
遺物 番号	写真 説明	器種	口径	高さ	底径	外觀	内面	その性	焼成	色 調	胎 土	遺存度
348	弥生 底部			10.6cm	++-板付+	指揮さえ +付		普通	灰黃色 2.5H7/2 ~ 1/2	0.2~2mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	底径 2/8	
349	弥生 底部			9.8cm	板++	指揮さえ +付		普通	にぶい 黄褐色 10H5/4	0.1~3mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	底径 2/8	
350	弥生 底部			6.0cm	摩滅	ハリ付		普通	にぶい 黄褐色 2.5H5/4	0.2~4mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	底径 4/8	

第38表 SD 46 出土石器観察表

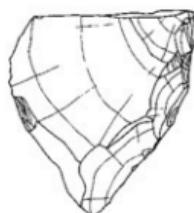
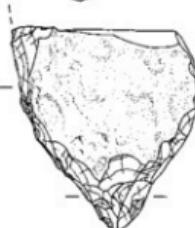
遺物 番号	写真 説明	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調整 の 井 頭	
								整 形	調整
351	アラ-6n-~		6.7cm	3.3cm	1.2cm	32.85g	砂利付	白色風化	
352	79 石鏃?		6.3cm	7.0cm	1.8cm	85.00g	砂利付	白色風化、基部欠損	
353	石鏃		7.6cm	5.9cm	1.6cm	81.93g	砂利付	万部欠損、右側刃に敲打痕あり、刃部片面に摩滅あり	



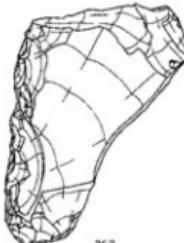
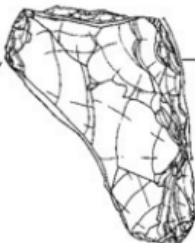
0 10 cm



351



352



353



0 10 cm

第 89 図 S D 46 出土遺物実測図

2. 弥生時代後期

SD 03

SD 03は北部の第I調査区で検出した溝である。北西方向に流路を取るもので、規模は天幅約0.8m、深さ約0.17mを計る。検出した南部はSD 02によって壊されている。

354～362はSD 03より出土した遺物である。354～358は甕である。頸部を「く」の字に屈曲させ、口縁端部はそのまま終わらせる。360は高坏である。

時期は若干弥生時代中期の土器もみられるが、弥生時代後期を中心とする時期である。

SD 04

SD 04は北部の第I調査区で検出した溝である。北西方向に流路を取るもので、規模は天幅約0.4m、深さ約0.09mを計る。ほぼSD 03と並走する。

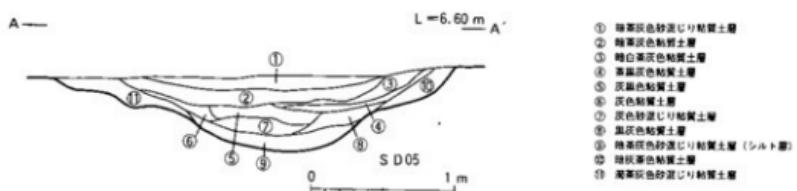
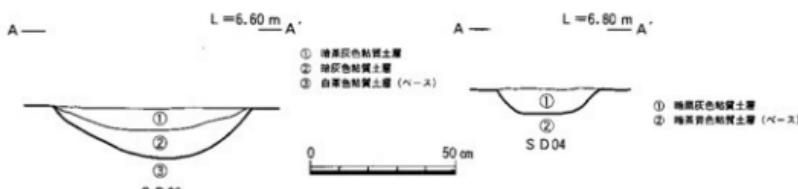
遺物は弥生土器が少量出土している。

時期は弥生時代後期である。

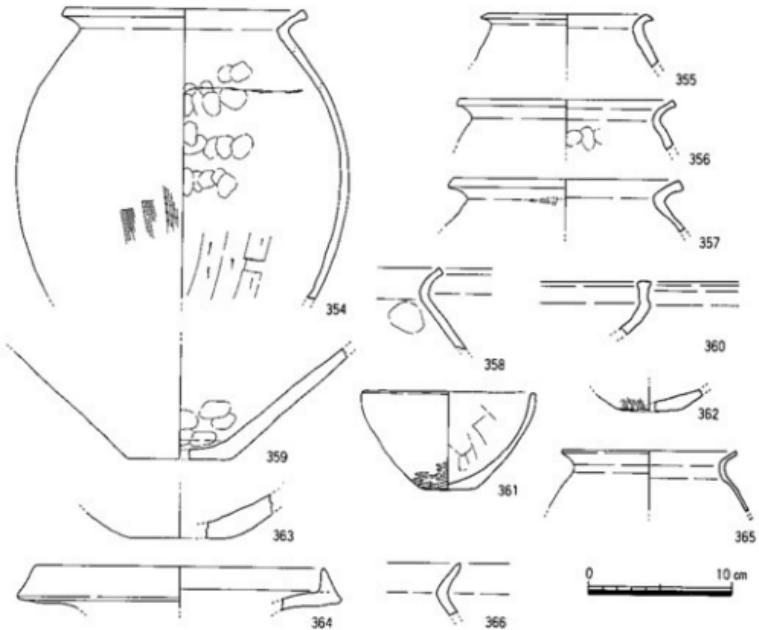
SD 05

SD 05は北部の第I調査区で検出した溝である。北西方向に流路を取るもので、規模は天幅約2.8m、深さ約0.52mを計る。北端でSX 01より派生した溝と合流する。

遺物は弥生土器が少量出土している。



第90図 SD 03・04・05 土層断面図



第91図 SD 03・04・05出土遺物実測図

第39表 SD 03・04・05出土土器観察表

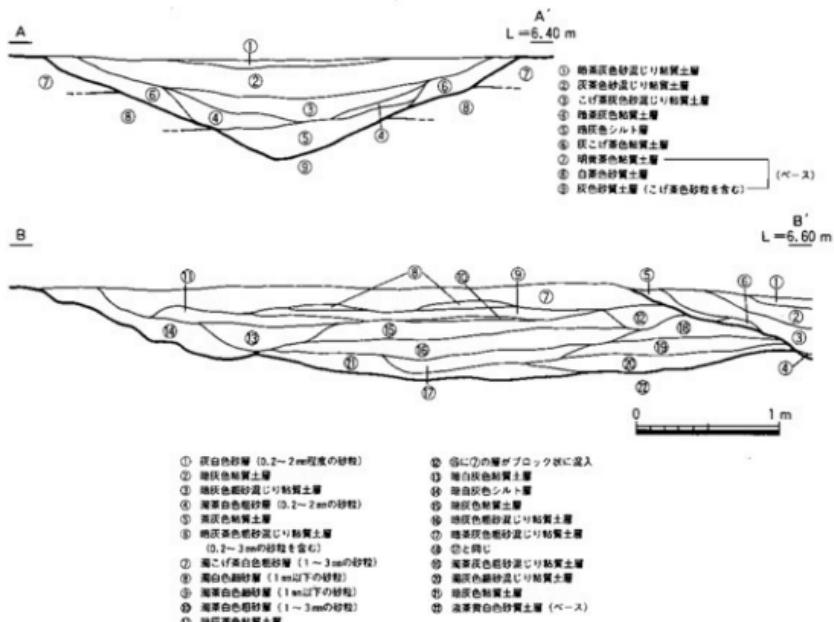
測定	形状	基盤	器種	口径	器高	底径	外面	内部	その他	焼成	色調	胎土	直角度
354	弥生	甌	甌	16.4cm			ハリ目	ハリ目 指揮さえ		普通	黄褐色 10YR5/6	0.1~3mmの砂粒を多量に含む 石炭、灰石合む	口径4/8
355	弥生	甌	甌	11.0cm			摩滅	摩滅		普通	明黄褐色 10YR7/6	0.1~2mmの砂粒を含む石炭、灰石合む	口径1/8
356	弥生	甌	甌	14.7cm			摩滅	横け、摩滅 指揮さえ		普通	明黄褐色 10YR5/6	0.1~3mmの砂粒を含む石炭、金星母合む	口径1/8
357	弥生	甌	甌	15.6cm			摩滅			普通	に赤い黄褐色 10YR7/3	0.1~1mmの砂粒を少量含む 石炭合む	口径3/8
358	弥生	甌	甌				摩滅	摩滅、指 揮さえ		普通	に赤い黄褐色 2.5YR3	0.1~2mmの砂粒を多量に含む 灰片	
359	弥生	底部			7.1cm		ハリ	ハリ、指揮 さえ		普通	灰青褐色 2.5YR6/2	0.1~2mmの砂粒を含む 石炭、灰石合む	底径2/8
360	弥生	高环					摩滅	剥離		普通	灰青褐色 2.5YR6/2	0.1~2mmの砂粒を多量に含む 灰片	
361	79	弥生	鉢	12.1cm	6.8cm	3.8cm	磨滅、ハリ+板ハリ			普通	灰青褐色 2.5YR6/6	0.1~3mmの砂粒を多量に含む 石炭、灰石合む	口径3/8
362	弥生	鉢	鉢			4.6cm	ハリ目	ハリ		普通	灰青褐色 2.5YR6/2	0.1~2mmの砂粒を含む 灰合む	底径2/8
363	弥生	鉢	鉢			5.4cm	摩滅	摩滅		普通	灰青褐色 2.5YR6/2	0.1~2mmの砂粒を含む 石炭、灰石合む	底径2/8
364	弥生	甌	甌	20.0cm			剥離	剥離	二重口縁	普通	明赤褐色 5YR5/8	0.1~4mmの砂粒を多量に含む 石炭、灰石合む	口径2/8
365	弥生	甌	甌	12.0cm			摩滅	摩滅		普通	褐色 5YR5/6	0.2~3mmの砂粒を多量に含む 灰片	
366	弥生	甌	甌				摩滅	摩滅		普通	に赤い黄褐色 10YR7/2	0.2~4mmの砂粒を含む 灰片	

SD 06

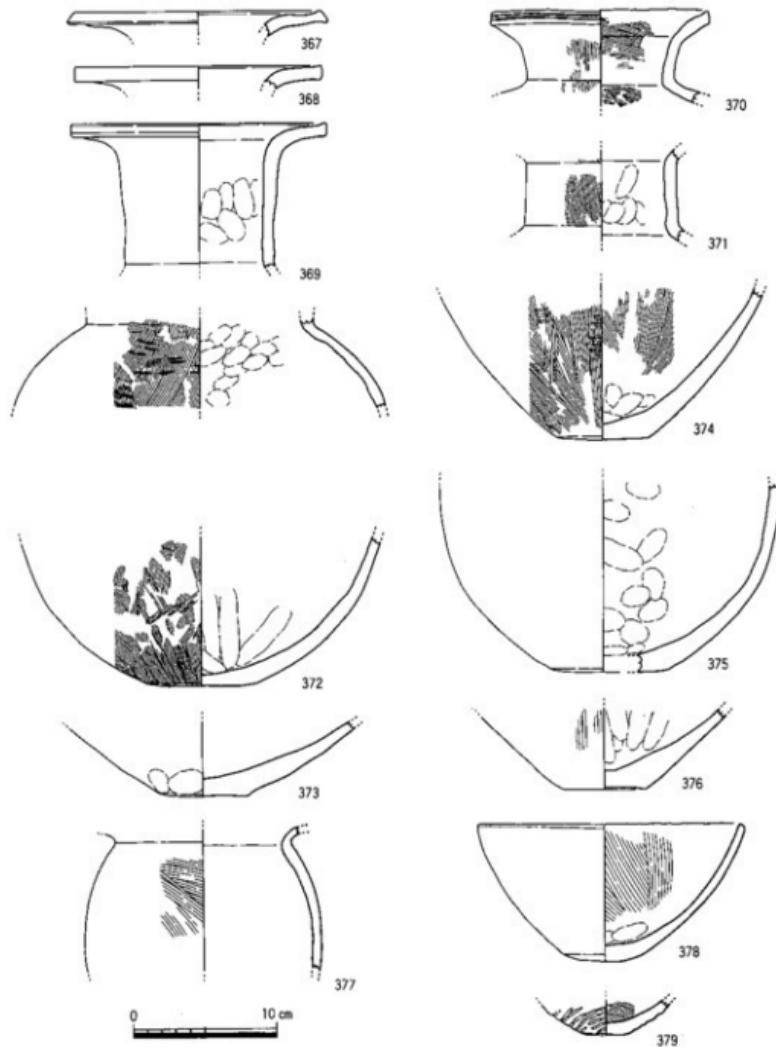
SD 06は北部の第Ⅰ調査区で検出した溝である。第Ⅰ調査区は3箇所に調査区が分かれているが埋土および方向性から同一溝として考える。流路はほぼ南北方向を取り北部でやや東に湾曲し、南部では浅くなり多数の流路に分かれる。北部では断面形がV字型を呈している。埋土は粘質土を基本とする。残りのいい部分での規模は天幅約6.2m、深さ約0.69mを計る。

遺物は北部と南部とに分けて説明する。

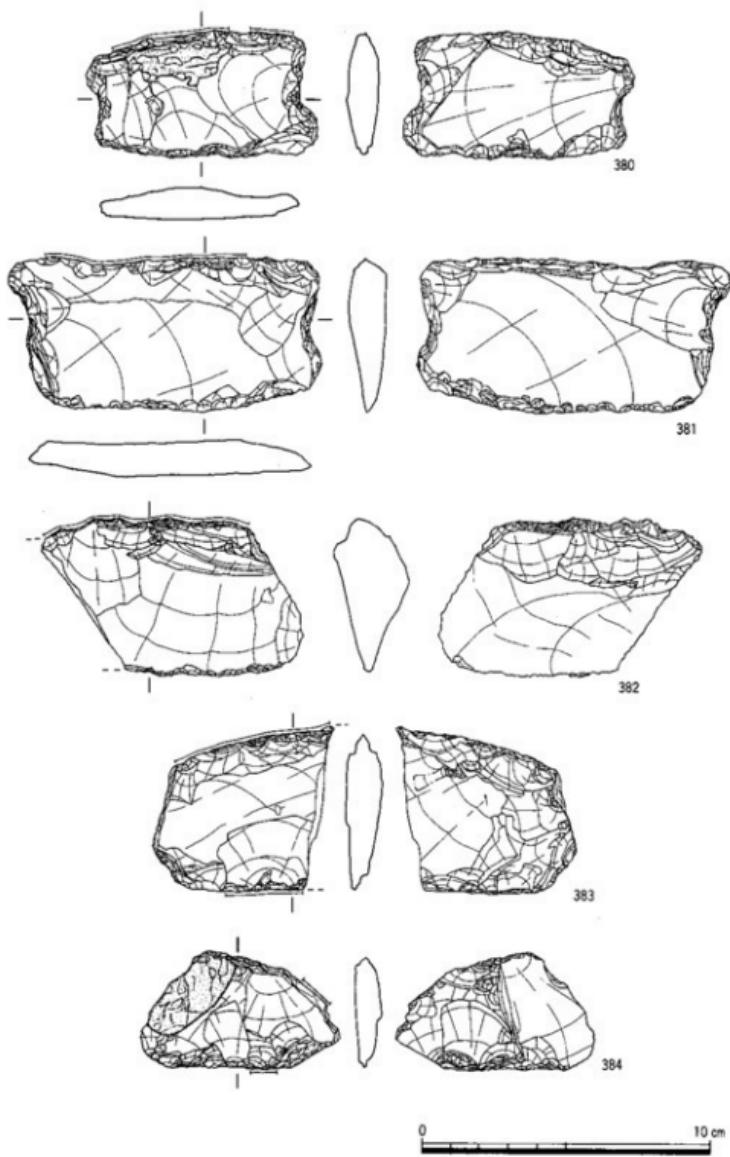
367～390は北部より出土した遺物である。367～376は壺である。壺は頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部は朝顔型に外方向に開く。口縁端部の拡張は認められない。底部は僅かに平底を残している。体部外面には叩きのち刷毛目が、頸部外面に刷毛目が施されている。内面は指頭痕が顯著に認められる。377は壺、378・379は鉢である。380～390は石製品である。石庖丁・スクレイバー・石鍬・石斧・磨石・敲石などが出土している。打製石庖丁は短冊型を呈し、両端に抉りがある。386・387は打製石斧である。389はほぼ円形



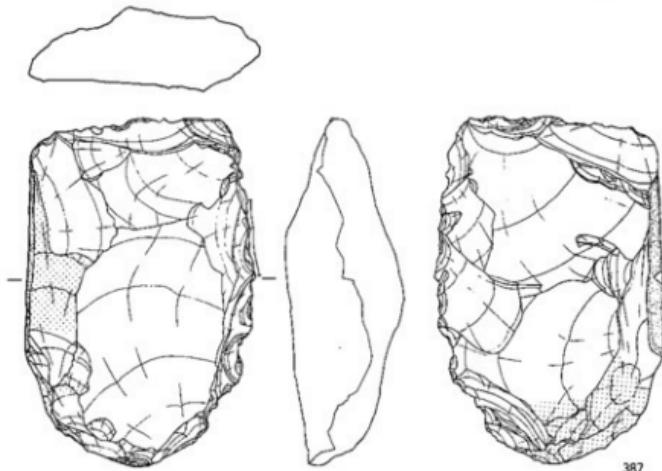
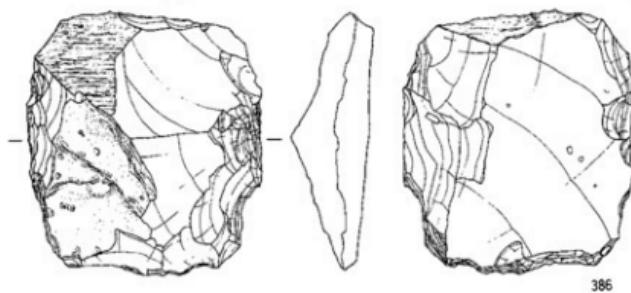
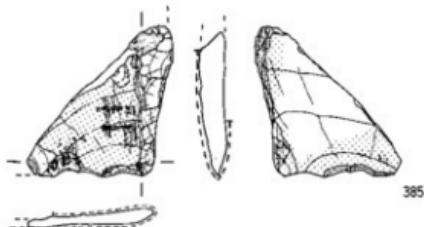
第92図 SD 06 土層断面図



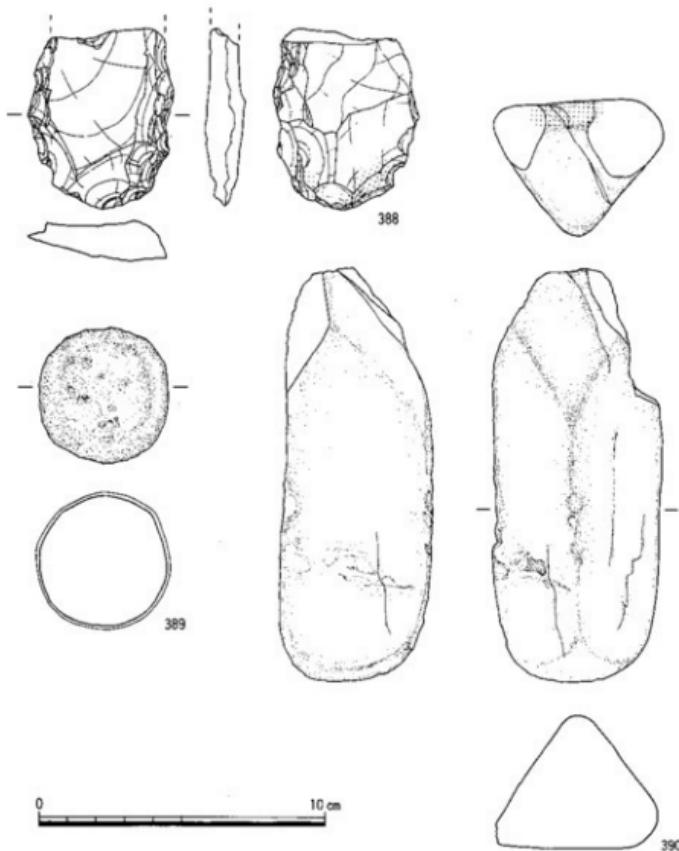
第93図 SD 06 出土遺物実測図(1)



第94図 SD 06出土遺物実測図(2)



第95図 SD 06 出土遺物実測図(3)



第96図 SD 06 出土遺物実測図(4)

の石製品で投弾と考えられる。材質は輝緑ひん岩である。389・390以外は全てサヌカイト製である。

391～397は壺である。頸部が「く」の字に屈曲するもので、体部最大径は上方にある体部を持つ。底部は平底を残す。体部外面には叩きあるいは刷毛目が、内面には頸部付近までヘラ削りが施されている。395～397は高壺である。397は屈曲部外面に突帯を貼り付けており、胎土は赤褐色を呈する。

時期は弥生時代前期の土器も少量出土しているが、主としては弥生時代後期のものと考

第40表 SD 06出土土器観察表(1)

番号	実質 陶器	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色 調	胎 土	遺存度
367	弥生 磁	17.0cm			17.0cm	横付	横付		普通	にぶい 黄褐色 10YR7/4	0.2~1mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	口徑1/8
368	弥生 磁	17.0cm			17.0cm	横付	横付		普通	灰褐色 2.5Y7/2	0.2~1mmの砂粒を含む 石 英・長石含む	口徑1/8
369	弥生 磁	17.8cm			17.8cm	車輪	車輪、附 蓋付え		普通	灰褐色 2.5Y7/2	0.1~3mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	口徑1/8
370	80 弥生 磁	14.9cm			14.9cm	横付	内目		普通	灰褐色 2.5Y7/2	0.2~3mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	口徑4/8
371	弥生 磷					内目	剥離・指付		普通	灰褐色 2.5Y8/3	0.1~1mmの砂粒を含む 石 英・長石含む	径1/8
372	80 弥生 磷	7.5cm			7.5cm	内目・斜板	指付え つづけ・蓋 付え		普通	灰褐色 2.5Y7/2 · 黄褐色 2.5Y5/1	0.2~2mmの砂粒を含む 石 英・長石含む	径8/8
373	80 弥生 磷	6.3cm			6.3cm	車輪・指付	車輪		普通	灰褐色 2.5Y7/3	0.2~3mmの砂粒を少量含む 石英・長石含む	径8/8
374	80 弥生 磷	6.4cm			6.4cm	斜板後へ付	指付		普通	灰褐色 2.5Y7/3	0.2~6mmの砂粒を含む 石 英・長石含む	径8/8
375	弥生 磷	8.2cm			8.2cm	つづけ	斜板え づけ		普通	にぶい 黄褐色 10YR7/2~7/4	0.3~2mmの砂粒を少量含む 石英・長石含む	底径2/8
376	80 弥生 磷	5.6cm			5.6cm	内目	剥離・指 付え		普通	灰褐色 2.5Y7/3 · 黄褐色 2.5Y6/1	0.1~4mmの砂粒を含む 石 英・長石含む	径8/8
377	弥生 磷					横付	内目	車輪	普通	灰褐色 2.5Y8/4	0.1~3mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	径2/8
378	80 弥生 磷	18.6cm	9.6cm	5.5cm	18.6cm	つづけ・底 減	内目・蓋 付え		普通	灰褐色 2.5Y7/3	0.1~3mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	5/8
379	弥生 磷				2.8cm	内目	内目		普通	にぶい 黄褐色 10YR7/4~6/4	0.2~2mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	底径8/8

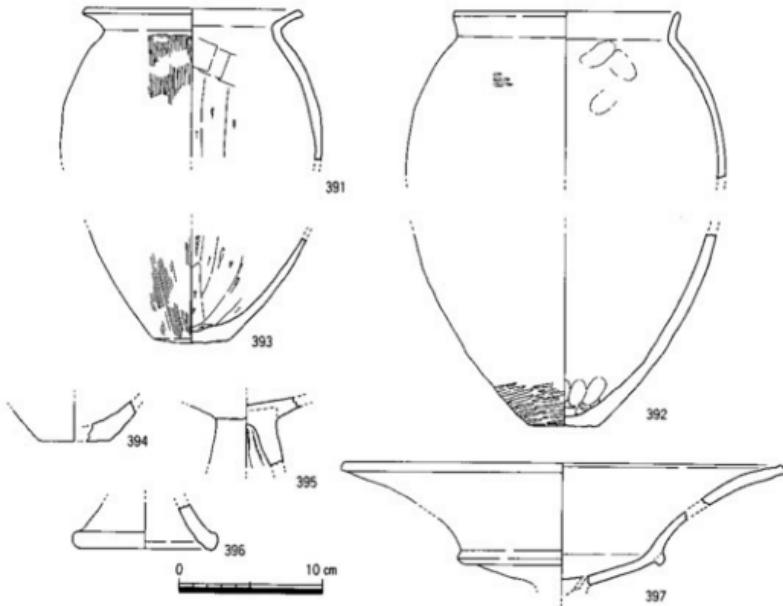
第41表 SD 06出土石器観察表

番号	実質 陶器	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴
380	80 石磨丁	7.7cm	4.3cm	1.1cm	46.8g	9280	両端近く抉りあり、斜削込(背)に敲打痕あり	
381	80 石磨丁	10.8cm	5.2cm	1.3cm	93.8g	9281	両端近く抉りあり、斜削込(背)に敲打痕あり	
382	2%rn/-	7.6cm	5.4cm	2.3cm	100.45g	9282	風化、一部欠損、斜削込(背)に敲打痕あり	
383	2%rn/-	5.5cm	5.4cm	1.2cm	57.16g	9283	風化、一部欠損、斜削込(背)に敲打痕あり	
384	2%rn/-	6.9cm	4.0cm	0.9cm	26.71g	9284	風化、斜削込(背)に敲打痕あり	
385	石磨	4.9cm	4.4cm	0.9cm	22.89g	9285	一部欠損、両面に摩滅・削痕あり	
386	81 打製石斧	8.9cm	8.0cm	2.7cm	194.30g	9286	白色風化	
387	81 打製石斧	12.0cm	8.0cm	4.0cm	411.72g	9287	風化、石削込に敲打痕あり、両面に磨滅あり	
388	石磨	5.9cm	4.9cm	1.3cm	43.50g	9288	風化、底部欠損、刃削片面に摩滅あり	
389	81 砕石(枝 4.5cm)	4.5cm	4.4cm	138.19g	9289	細縫ひん 縫		
390	砾石	13.9cm	5.8cm	4.6cm	458.71g	砂岩	頭部に敲打痕あり	

第42表 SD 06出土土器観察表(2)

番号	実質 陶器	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色 調	胎 土	遺存度
391	81 弥生 磁	14.6cm			14.6cm	横付	横付		普通	にぶい 黄褐色 10YR7/4~6/4	0.1~3mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	口徑4/8
392	弥生 磷	15.4cm			4.8cm	横付	車輪・指 付え		普通	灰褐色 2.5Y6/6 · 黄褐色 2.5Y6/6	0.1~2mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	口徑4/8
393	81 弥生 磷				5.2cm	内目	内前り		普通	灰褐色 10YR6/2~7/2	0.1~4mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	底径4/8
394	弥生 磷				4.8cm	摩滅	摩滅		普通	明るい褐色 2.5Y5/6	0.3~1mmの砂粒を少量含む 石英・長石含む	底径1/8
395	弥生 高环					摩滅	摩滅		普通	灰褐色 2.5Y7/2	0.1~1mmの砂粒を少量含む 石英・長石含む	径5/8
396	弥生 高环				9.3cm	摩滅	摩滅		普通	浅黄褐色 10YR8/3	0.2~1mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	底径2/8
397	弥生 高环	30.0cm				摩滅	摩滅	[外]貼付突 起	普通	浅黄褐色 2.5Y7/3 · 褐色 2.5Y6/6	0.2~3mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	径1/8

えられる。流路西側を SX 0 3 によって壊されており、その前後関係は出土遺物からも矛盾しない。



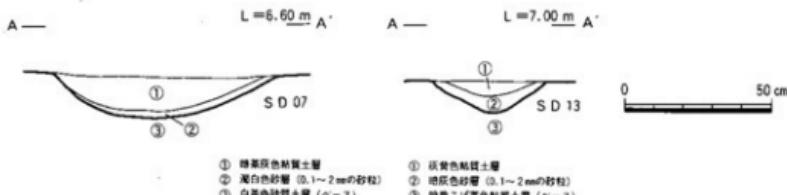
第97図 SD 06出土遺物実測図(5)

SD 07

SD 07は北部の第II調査区で検出した溝である。北西方向に弧を描きながら延びる。規模は天幅約1.0m、深さ約0.16mを計る。第I調査区で検出されているSD 06の東部に派生する溝に繋がる可能性が考えられる。

溝内より弥生土器の小片と石庖丁が出土している。398は打製石庖丁である。短冊型を呈し、両端には抉りが認められる。刃部は湾曲する。

時期は弥生時代後期である。



第98図 SD 07・13土層断面図

SD 10

SD 10は北部の第Ⅱ調査区で検出した溝である。西方向に流路を取るが、検出長が短く詳細は不明である。規模は天幅約0.35m、深さ約0.05mを計る。

399～403はSD 10出土遺物である。

溝内より縄文土器深鉢とボール状の鉢・石庵丁が出土している。403は打製石庵丁で、短辺片側に抉りを持つものである。

時期は國化可能遺物をみると縄文時代であるが弥生時代後期の土器片が少量出土しているのと埋土より、弥生時代後期と考えられる。

SD 12

SD 12は北部の第Ⅱ調査区で検出した溝である。北方向に流路を取る。規模は天幅約0.95m、深さ約0.05mを計る。

405～407はSD 12出土遺物である。これらは全てサヌカイト製の石製品であるが、この他に少量の弥生土器も出土している。

SD 13

SD 13は北部の第Ⅱ調査区で検出した細い溝である。SD 13はSD 11・12と繋がっており、全て同時期と考えられる。北方向に流路を取る。規模は天幅約0.45m、深さ約0.11mを計る。

404はSD 13出土の石鋤である。

遺物はほとんど出土していない。

第43表 SD 07出土石器観察表

番号	分類	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整形・調整の特徴
398	R2 石器	深鉢	9.6cm	6.2cm	1.6cm	113.6g	サヌカイト	風化・両辺に抉りあり。底部刃(背)に敲打痕あり

第44表 SD 10出土土器観察表

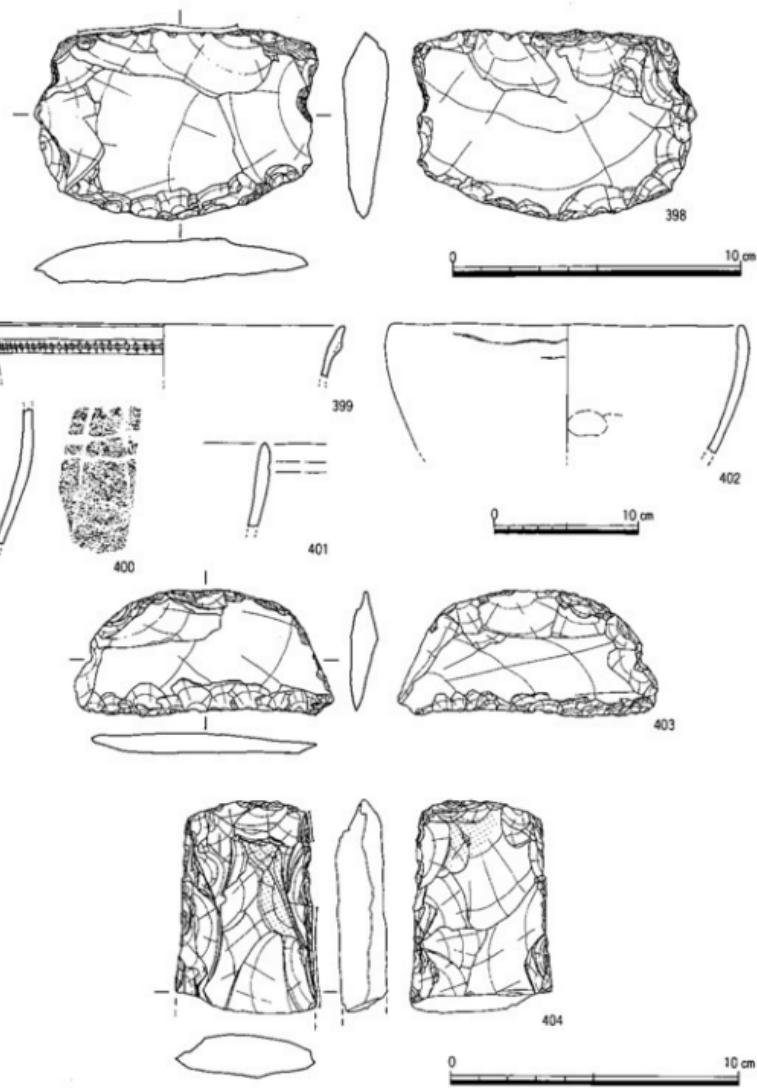
番号	分類	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色 調	胎 土	直存度
399	縦文	深鉢	25.0cm			斜面凸帯支	摩滅		普通	灰黄色 2.5V5/1	0.1～2mmの砂粒を含む石破片	風化
400	縦文	鉢				摩滅	摩滅・指	(外)洗削	やや不良	灰黄色 2.5V7/2	0.1～1mmの砂粒を含む石	口邊1/8 底・芯石合せ
401	縦文	鉢				摩滅	摩滅	(外)洗削	普通	灰黄色 2.5V5/2	0.2～3mmの砂粒を多量に含む	石英・長石合せ
402	縦文	鉢				摩滅	摩滅・指	普通	灰黄色 2.5V7/2	0.1～1mmの砂粒を多量に含む	石英・長石合せ	風化

第45表 SD 10出土石器観察表

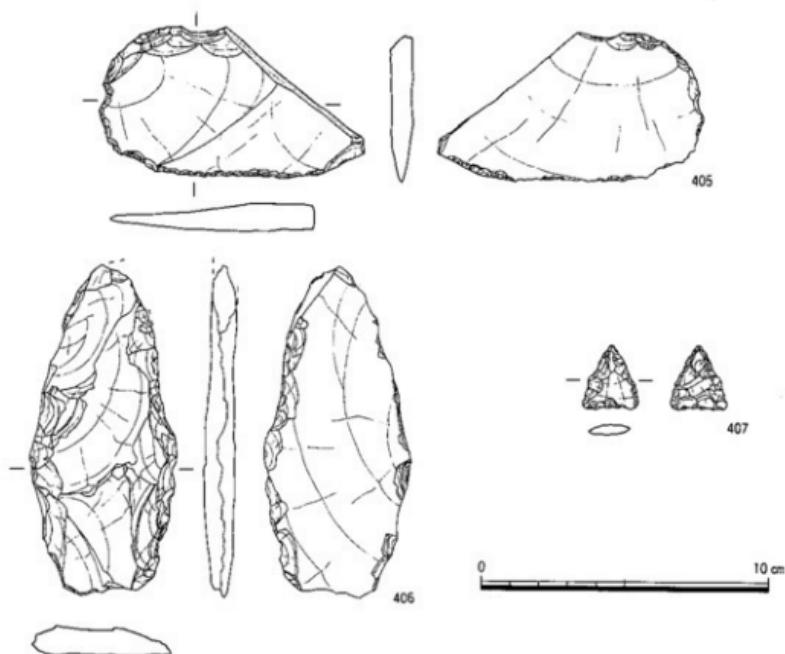
番号	分類	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整形・調整の特徴
403	R2 石器	深鉢	8.9cm	4.2cm	0.9cm	36.34g	サヌカイト	底部刃(背)に敲打痕あり

第46表 SD 13出土石器観察表

番号	分類	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整形・調整の特徴
404	R2 石器	深鉢	7.3cm	4.0cm	1.7cm	71.26g	サヌカイト	底部欠損。底部刃(背)に敲打痕あり。調節に削減あり



第99図 SD 07・10・13出土遺物実測図



第100図 SD 12出土遺物実測図

第47表 SD 12出土石器観察表

遺物 名及 び位	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整形・調整の特徴	
							左	右
405	石鏟	8.9cm	5.0cm	0.8cm	36.00g	珪藻土	風化、鋸歯刃の一方に抉りあり	
406	石箭	11.2cm	5.0cm	1.1cm	61.05g	珪藻土	風化、木座跡欠損	
407	石鏟	2.2cm	1.9cm	0.3cm	1.13g	珪藻土	風化、平底式	

溝内より遺物がほとんど出土していないが、埋土等により時期は弥生時代後期と思われる。

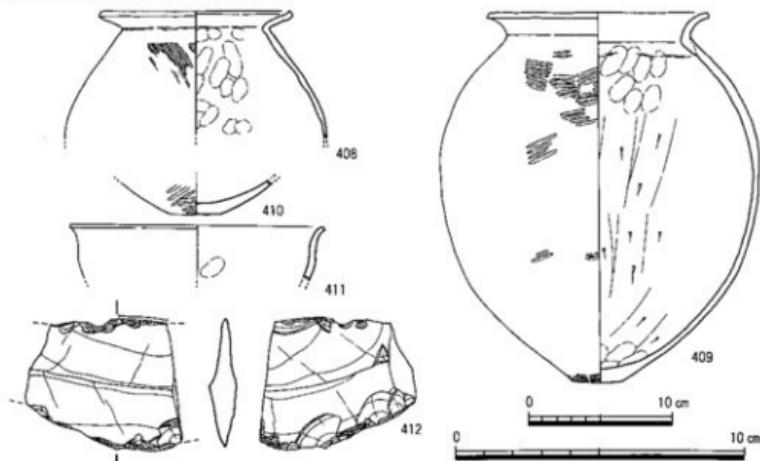
SD 15

SD 15は第IV調査区で検出した溝である。北方向に流路を取るが、消滅する。規模は天幅約3.15m、深さ約0.17mを計る。

408～412はSD 15出土の遺物である。

408～410は甕である。408は頸部を「く」の字に屈曲させ、口縁端部を上方に小さく摘み上げる。体部外面に細かい刷毛目が、内面に指頭痕が施されている。形態は「下川津B類」であるが、胎土に角閃石を含まない。409は底部に平底を残し、体部は内彎する。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は外彎しながら延びる。体部外面には叩きが、内面には頸部付近に指頭痕があるが、下半にはヘラ削りが施されている。この時期には、2タイプの甕がある。

時期は弥生時代後期と思われる。



第101図 SD 15出土遺物実測図

第48表 SD 15出土土器観察表

遺物 名及 び 通 数	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他の 特徴	焼成	色調	胎 土	遺存度
408	弥生 甕	12.9cm			横付・中付	斜削・指付		普通	灰青色 2.5YR7/2	0.1～3mmの砂粒を含む石 英・長石合せ	口径 1/8
409	82 弥生 甕	15.0cm	25.0cm	3.3cm	横付・中付	横付・斜削 及ぶよへ り削り		普通	に点状の砂粒を多量に 含む 灰青色	0.1～2mmの砂粒を多量に 含む 長石・長石合せ	6/8
410	弥生 甕			3.6cm	中付	底彎		普通	浅黄色 2.5YR7/2	0.2～2mmの砂粒を含む石 英・長石合せ	底径 3/8
411	弥生 甕	17.4cm			摩滅	指削え 底彎		普通	明褐色 7.5YR5/6	0.1～2mmの砂粒を含む石 英・長石合せ	破片

第49表 SD 15出土石器観察表

遺物 名及 び 通 数	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴
412	石刀	5.3cm	4.5cm	0.9cm	26.00g	石英	風化。一部大根、長筒刃(背)に敲打痕あり

S D 2 6

S D 2 6 は調査区南西部の第Ⅲ調査区で検出した溝である。北方向に流路を取るが、南北で消滅している。規模は天幅約3.1m、深さ約0.24mを計る。

413～433はSD26出土の遺物である。

壺は口縁部が朝顔型に開くもので、端部は拡張しない。壺は頸部を「く」の字に屈曲させるもので、体部外面に叩きが、内面にヘラ削り・指頭痕が施されている。体部最大径はほぼ中央にあるようである。426・427は打製石庵丁である。427は結晶片岩製で、両端辺に抉りを持つ。

時期は弥生時代後期と思われる。

SD 27

SD27はSD26より東方に派生し、消滅する溝である。規模は天幅約2.1m、深さ約0.1mを計る。

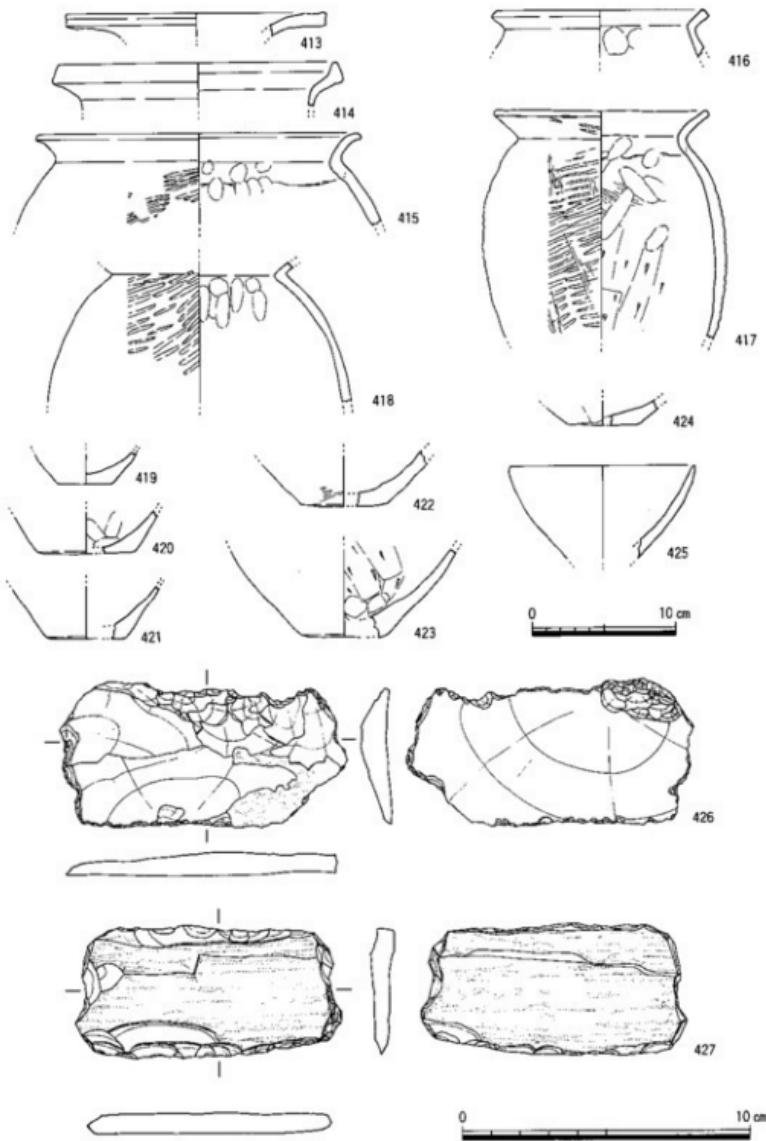
第50表 SD 26出土土器鉢窓表

植物名	学名	種類	口径	器高	底径	外面	内面	その性	焼成	色	質	地	土	直存度
413	青生 瓶	18.0cm				艶	艶		普通	灰黄色 2.57H/2	0.1~3回の焼成を多目に含む石灰、石灰合	田植 1/8		
414	青生 瓶	19.0cm				磨減	磨減		普通	灰白色 2.57H/2	0.1~2回の焼成を多目に含む石灰、石灰合	田植 1/8		
415	青生 瓶	22.0cm				艶・艶	艶・指揮	2.5	普通	灰黄色 2.57H/2	0.1~3回の焼成を多目に含む石灰、石灰合	田植 1/8		
416	青生 瓶	15.1cm				磨減	磨減・指	2.5	普通	灰黄色 2.57H/2	0.1~3回の焼成を多目に含む石灰、石灰合	田植 1/8		
417	83 青生 瓶	14.3cm				艶・薄手	艶・薄手	2.5	普通	灰黄色 10H/B/2	0.1~4回の焼成を多目に含む石灰、石灰合	田植 6/8		
418	青生 瓶					艶・薄手	艶・薄手	2.5	普通	灰黄色 2.57H/2	0.1~4回の焼成を多目に含む石灰、石灰合	田植 6/8		
419	青生 蓋部					磨減	磨減		普通	灰黄色 2.57H/2	0.1~4回の焼成を多目に含む石灰、石灰合	田植 2/8		
420	青生 蓋部					剥離	剥離		普通	灰黄色 2.57H/2	0.1~2回の焼成を少石合	田植 2/8		
421	青生 底部					磨減	磨減		普通	灰黄色 2.57H/2	0.1~1回の焼成を含む石灰、石灰合	田植 1/8		
422	青生 底部					6.0cm 磨減・艶	磨減		普通	浅黄色 2.57H/2	0.1~2回の焼成を多目に含む石灰、石灰合	田植 3/8		
423	青生 底部					6.5cm 艶	艶・薄手	2.5	普通	灰黄色 2.57H/2	0.1~3回の焼成を多目に含む石灰、石灰合	田植 2/8		
424	青生 底部					5.1cm 剥離?	剥離		普通	浅黄色 2.57H/2	0.1~2回の焼成を多目に含む石灰、石灰合	田植 2/8		
425	青生 筒	12.8cm				磨減	艶		普通	灰黄色 2.57H/2	0.1~1回の焼成を少石合	田植 1/8		

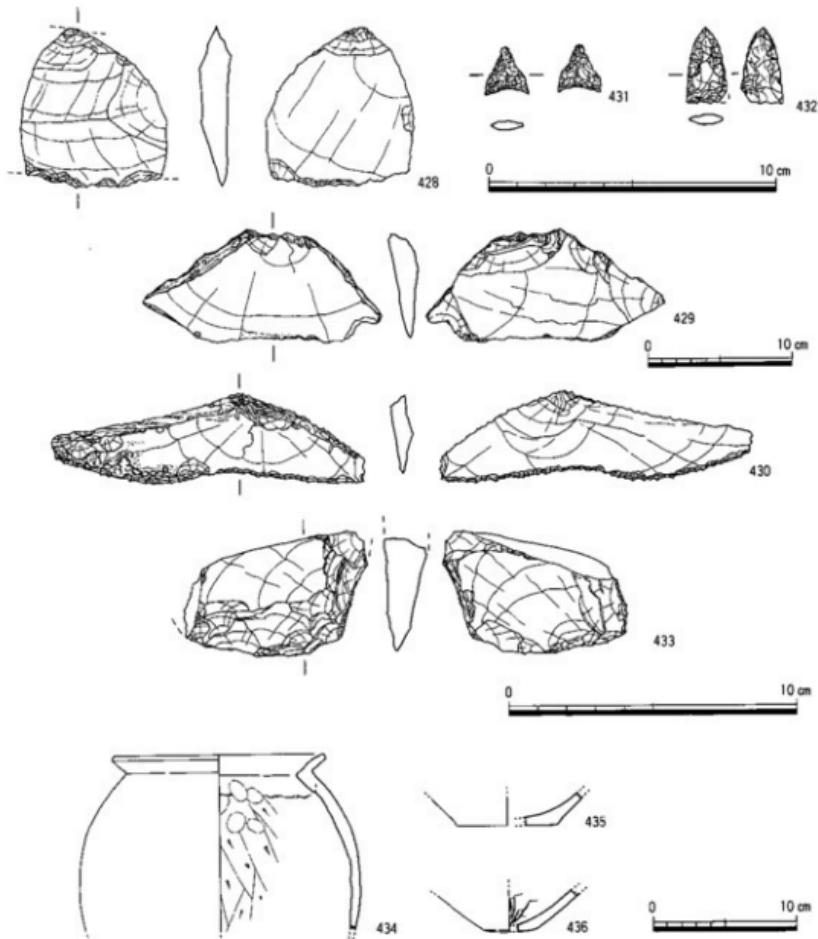
第51表 SD 26出土石器觀察表

番号	変種	標高	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整形・調査の特徴
425	83	石垣島	9.9cm	5.0cm	0.9cm	56.50g	木柱材	風化、削削面に抉りあり
427	83	石垣島	9.1cm	4.5cm	0.7cm	51.20g	木柱材	刃突起、削削面に抉りあり
428		石垣島	5.1cm	5.3cm	1.1cm	41.0g	木柱材	白色化、縦穴眼
429	83	ミクニ島	15.7cm	7.4cm	1.6cm	211.25g	木柱材	刃突起、削削面に抉りあり
430	83	ミクニ島	10.5cm	2.6cm	0.6cm	21.6g	木柱材	風化
431		石垣島	1.7cm	1.5cm	0.2cm	0.4kg	木柱材	可燃式
432		石垣島	2.5cm	1.4cm	0.3cm	1.1kg	木柱材	風化、半板式、基部の一部欠損
433		石垣島	3.9cm	5.7cm	1.4cm	39.95g	木柱材	基部欠損

第52表 SD 27出土土器觀察表



第102図 SD 26出土遺物実測図



第103図 SD 26・27出土遺物実測図

434～436はSD 27出土の遺物である。

434は壺で頸部内側の屈曲がきつい。体部内面にはヘラ削りが施されている。

時期は弥生時代後期と思われる。

S X 0 1

S X 0 1 は調査区北部の第 I 調査区で検出された遺構である。この遺構の一部が S D 0 5 に繋がっており、ほぼ同時期と考えている。平面形態は不定形で、規模は長径約 3.2 m, 短径約 2.85 m, 深さ約 0.23 m を計る。

S X 0 1 より弥生土器片が出土している。

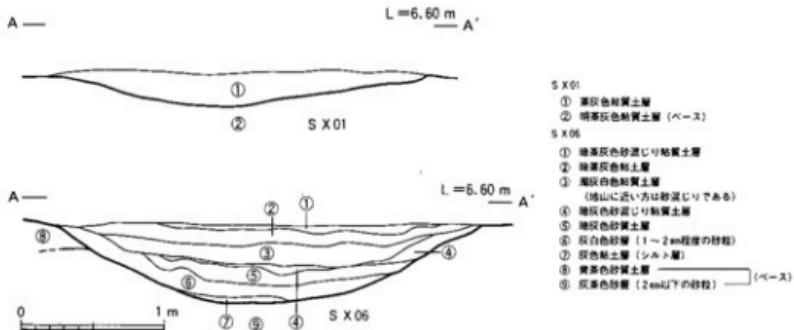
時期は弥生時代後期である。

S X 0 6

S X 0 6 は調査区北部の第 II 調査区で検出された遺構である。平面形態は梢円形を呈し、規模は長径約 5.1 m, 短径約 3.6 m, 深さ約 0.62 m を計る。

438～443は S X 0 6 出土遺物である。438は壺である。口縁端部を拡張し、3条の退化凹線が施されている。442は高坏である。

時期は弥生時代後期でも前半頃と思われる。



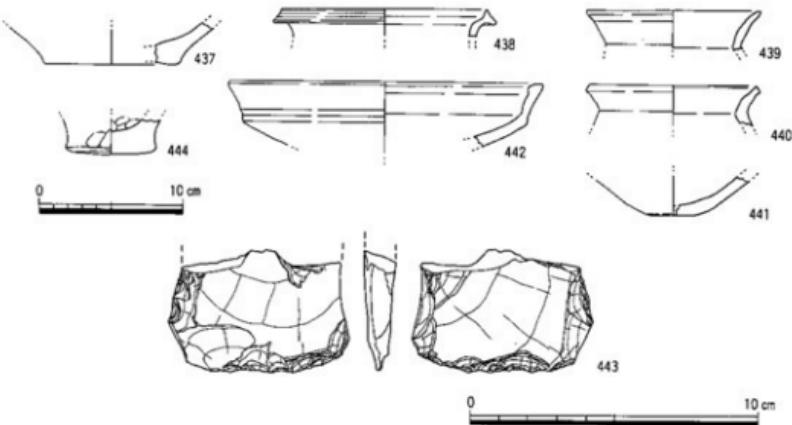
第 104 図 S X 01・06 土層断面図

S X 0 8

S X 0 8 は調査区北部の第 II 調査区で検出された遺構である。平面形態は長い梢円形を呈し、規模は長径約 10.01 m, 短径約 2.6 m, 深さ約 0.26 m を計る。

遺構内より少量の弥生時代後期の遺物が出土している。

第 I ・ II 調査区北部では特に平面形態が不定形の不明遺構が多数検出されている。そのほとんどが弥生時代後期と考えられ、この時期にこの付近が湿地状を呈していたものと考えられる。



第105図 S X 01・06・08出土遺物実測図

第53表 S X 01出土土器観察表

遺物名	高さ	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	胎土	遺存度
437	既破	深鉢	18cm		9.4cm	摩滅			普通	淡青色2.5H5/3	0.2~3mmの砂粒を多量に含む石英・長石合	

第54表 S X 06出土土器観察表

遺物名	高さ	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	胎土	遺存度
438	既破	直口壺	14.0cm			摩滅	摩滅	(例) 口縁部 3条の 筋目	普通	に赤い黄褐色 10H5/4	0.2~1mmの砂粒を少量含む 石英合	破片
439	既生	甕	12.0cm			横円	横円		普通	淡青色2.5H7/3	0.1~1mmの砂粒を少量含む 石英合	破片
440	既生	甕	11.5cm			横円	横円		普通	淡青色2.5H7/3	0.1~1mmの砂粒を多量に含む 石英・長石合	口沿1/8
441	既生	甕			3.8cm	分	摩滅		普通	明赤褐色5H5/6	0.2~2mmの砂粒を含む石 英合	底径3/8
442	既生	直口壺	21.5cm			摩滅	摩滅	(例) 口縁	普通	灰青色2.5H7/2	0.1~0.7mmの砂粒を少量含む 石英合	破片

第55表 S X 06出土石器観察表

遺物名	高さ	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整形・調製の特徴		
443	石盤		4.1cm	6.2cm	1.1cm	37.17g	4H8/1	風化・基部欠損		

第56表 S X 08出土土器観察表

遺物名	高さ	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	胎土	遺存度
444	既破	直口壺			6.2cm	けずり、指揮させた			普通	に赤い黄褐色 10H7/4	0.1~3mmの砂粒を多量に含む石英・長石合	底径4/8

3. 古墳時代前期（布留式期）

S D 1 4

S D 1 4 は調査区南東部の第IV調査区で検出した溝である。北方向に流路を取り、消滅する。規模は天幅約2.3m、深さ約0.18mを計る。

445～459はS D 1 4 出土の遺物である。

445～447は壺である。446は口縁端部を上方に拡張し、外面に刺突文と波状文を施す。447は長頸壺で頸部外面上半に凹線文が、下半に綾杉状の刺突を施す。頸部内面には指頭痕状の指なしが、体部内面には横方向のヘラ削りが施されている。448～451は甕である。甕は頸部が「く」の字に屈曲するもので、口縁端部をそのまま終わらせるものと上方に小さく挿み上げるものがある。後者は下川津B類に形態および調整は類似するが、胎土には角閃石を含まず乳白色を呈している。453～455は高坏である。454は脚の軸部がやや膨らみ端部が外方に屈曲する。坏部はほぼ中央に僅かな屈曲部を持つが、緩やかに外方に延びる。455は450・451の甕と同じ胎土を持つものである。456～458は鉢、459は砂岩製の砥石である。

時期は弥生時代後期の遺物も含まれるが、古墳時代前期である。

第57表 S D 14 出土土器観察表

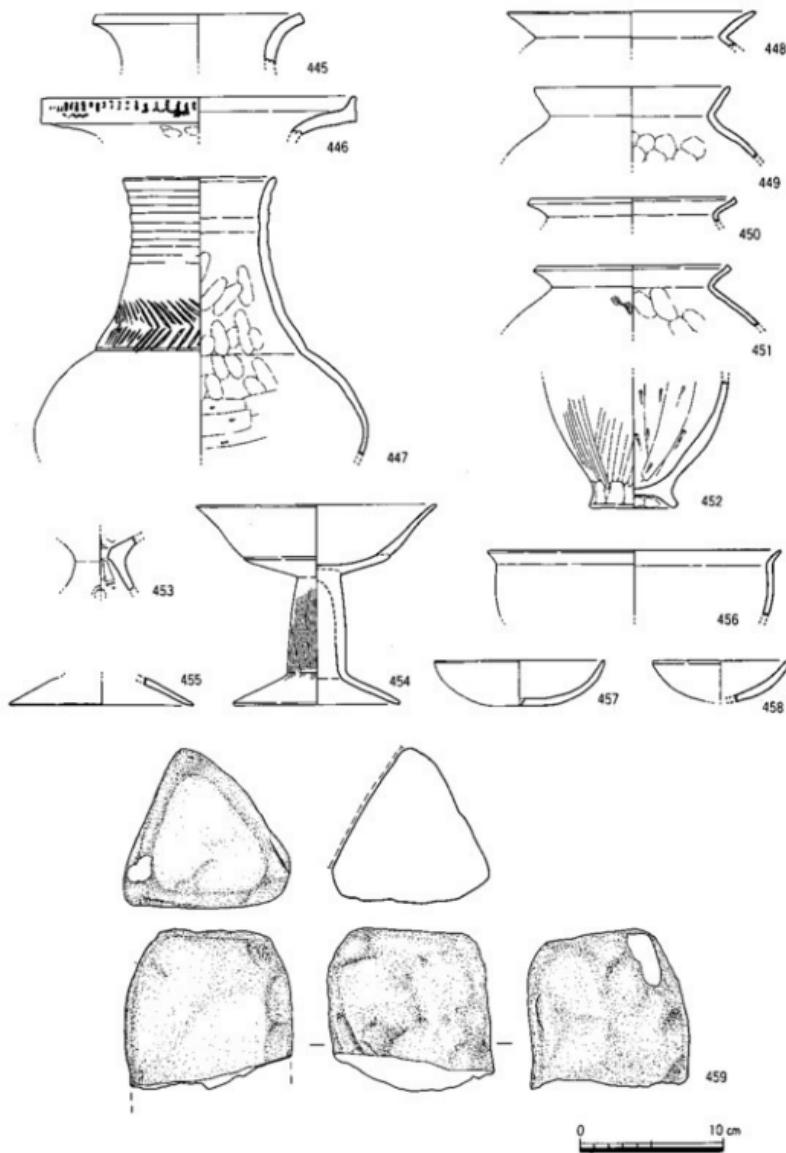
番号	形質	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色 調	胎 土	盛存度
445	弥生 壺	14.0 cm				摩滅	摩滅		普通	明赤褐色 SYRS/6	0.1～5mmの砂粒を多量に含む 灰白色・灰白色	口徑2/6
446	83 弥生 壺	21.6 cm				↑ - 振持き	摩滅	内側刺突文 波状文	普通	明赤褐色 SYRS/6	0.1～5mmの砂粒を多量に含む 灰白色・灰白色	口徑2/6
447	83 弥生 壺	10.2 cm				鋸歯	↑ -	内側刺突文 波状文 上半に横板	普通	明赤褐色 SYRS/6	0.1～5mmの砂粒を多量に含む 灰白色・灰白色	口徑3/6
448	弥生 甕	17.0 cm				摩滅	摩滅		普通	淡黃色 2.SYR/3	0.2～2mmの砂粒を少量含む 灰白色・灰白色	口徑1/6
449	弥生 甕	13.4 cm				摩滅	摩滅・周辺丸み		普通	淡黃色 2.SYR/4	0.1～1mmの砂粒を少量含む 灰白色・灰白色	口徑1/6
450	弥生 甕	14.0 cm				摩滅	摩滅		普通	淡黃褐色 T0SYR/2	0.1～0.8mmの砂粒を少量含む 灰白色	口徑1/6
451	弥生 甕	13.0 cm				摩滅・凹目	摩滅・凹 目		普通	灰黃色 2.SYR/2	0.2～2mmの砂粒を少量含む 灰白色・灰白色	口徑1/6
452	84 砂先 高台		6.1 cm			ヘリカル・削 付たる・切 り			普通	灰黃色 2.SYR/2	0.2～2mmの砂粒を多量に含む 灰白色・灰白色	底径8/8
453	83 砂先 高坏					摩滅	摩滅	穿孔4所・ 内側斜削 り	普通	橙色 SYRS/6	0.1～1mmの砂粒を多量に含む 灰白色・灰白色	底径7/8
454	83 土留器 高	16.4 cm	13.8 cm	11.4 cm		↑ - 凹目	摩滅		普通	明赤褐色 7.SYRS/6	0.1～3mmの砂粒を多量に含む 灰白色・灰白色	5/8
455	土留器 高 底						摩滅		普通	灰黃色 2.SYR/2	0.1～1mmの砂粒を少量含む 灰白色・灰白色	底径3/8
456	83 砂先 鉢	20.0 cm				摩滅	摩滅		普通	淡黃色 2.SYR/3	0.1～2mmの砂粒を多量に含む 灰白色・灰白色	1/8
457	84 弥生 鉢	11.6 cm	3.1 cm			摩滅	摩滅		普通	橙色 T0SYR/6	0.1～2mmの砂粒を多量に含む 灰白色・灰白色	1/8
458	83 弥生 鉢	9.4 cm	2.9 cm			↑ - 削り	摩滅		普通	橙色 SYRS/6	0.1～1mmの砂粒を多量に含む 灰白色・灰白色	口徑1/6

第58表 S D 14 出土石器観察表

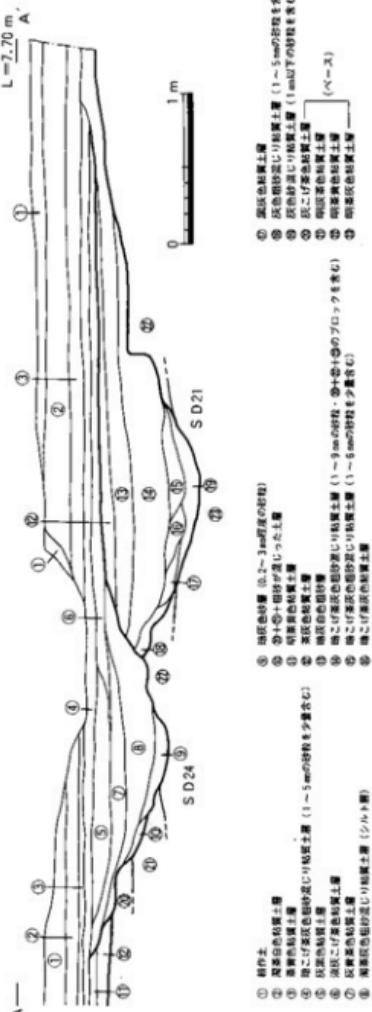
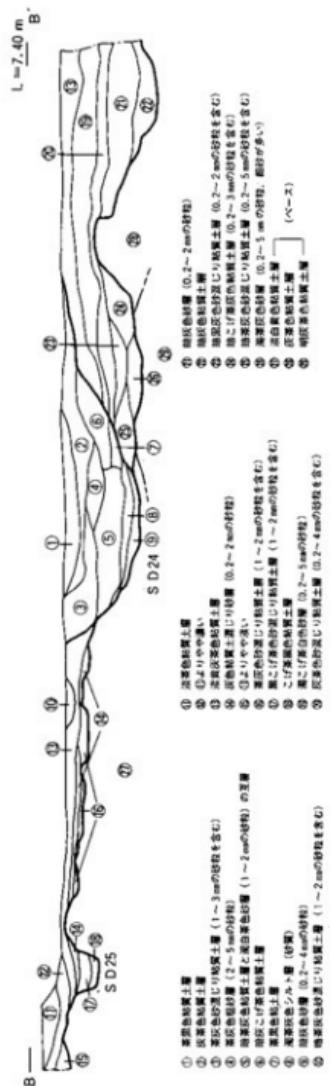
番号	形質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	概 形・調 整 の 特 徴
459	砾石		10.8 cm	11.6 cm	10.9 cm	176g	砂岩	一層矢張

S D 2 4

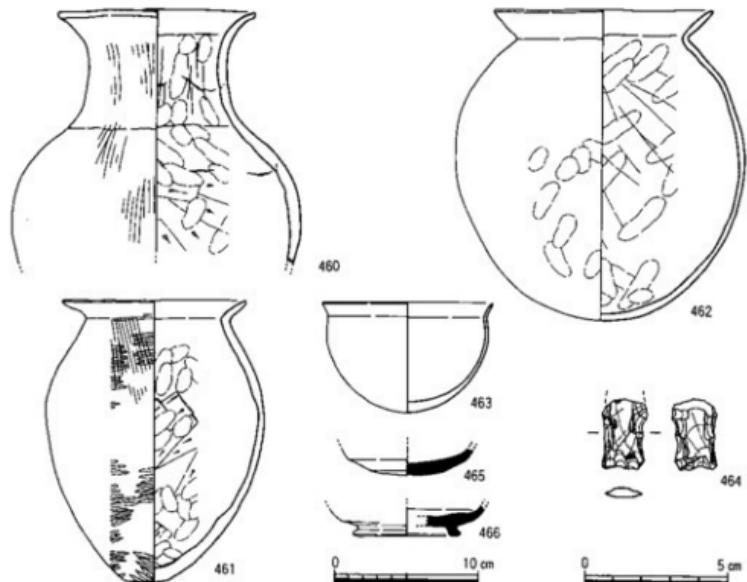
S D 2 4 は調査区南部の第IV調査区で検出した溝である。土層より上・中・下層に細分



第106図 SD 14 出土遺物実測図



第107圖 SD 21·24十層而圖



第108図 SD 24 上層出土遺物実測図

第59表 SD 24 上層出土土器観察表

番号	方目	石種	口径	基高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	胎土	遺存度
460	84	弥生 壺	13.5cm			剥離～凹目	剥離～凹目		普通	にぼい黄褐色 10187/3	0.3～3mmの砂粒を多量に 含む 石英、長石含む	7/8
461	84	弥生 壺	12.6cm	19.5cm	3.0cm	剥離～凹目	剥離～凹目	砂利、板状 砂利指揮	普通	にぼい黄褐色 10187/4	0.3～3mmの砂粒を含む 石 英、長石含む	7/8
462	84	弥生 壺	15.0cm	21.3cm		??	??	板状	普通	灰青褐色 10187/2	0.1～1mmの砂粒を含む 石 英、長石含む	7/8
463	84	弥生 壺	11.7cm			??	??		普通	にぼい黄褐色 10187/3	0.1～1mmの砂粒を少なめ 含む 石英含む	5/8
465	84	須恵器 环 石斧			5.2cm	圓輪形・A5	圓輪形		普通	灰褐色 518/1	1mm以下の砂粒を含む	底径8/8
466	84	須恵器 环 石斧			7.3cm	圓輪形	圓輪形		やや 直角	灰色系～S 直角	1mm以下の砂粒を含む 石 英含む	底径2/8

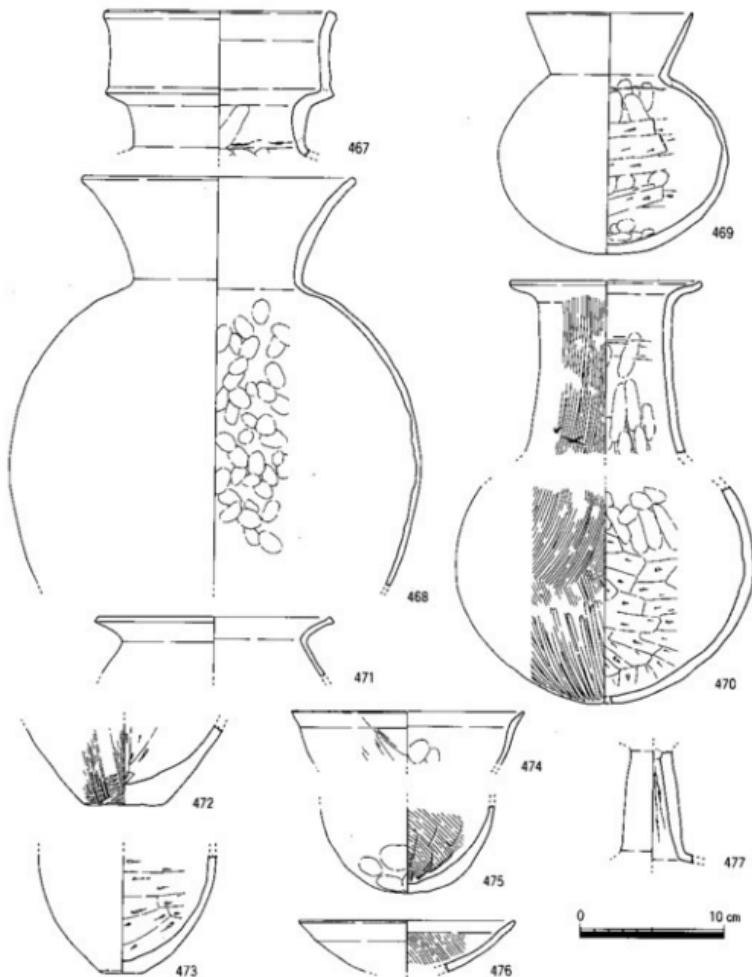
第60表 SD 24 上層出土石器観察表

番号	方目	石種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	形・調査の特徴
464		石鏡	2.4cm	1.6cm	0.3cm	1.45g	砂岩	風化、平基式、先端部欠損

され、上層はほぼ北方向に流路を取るが、中・下層では途中から東に若干屈曲する。埋土は上層が茶黒色粘質土層を主とし、中層が茶灰色粗砂層を主とし、下層が暗灰色砂層を主とする土層である。規模は天幅約2.1m、深さ約0.42mを計る。

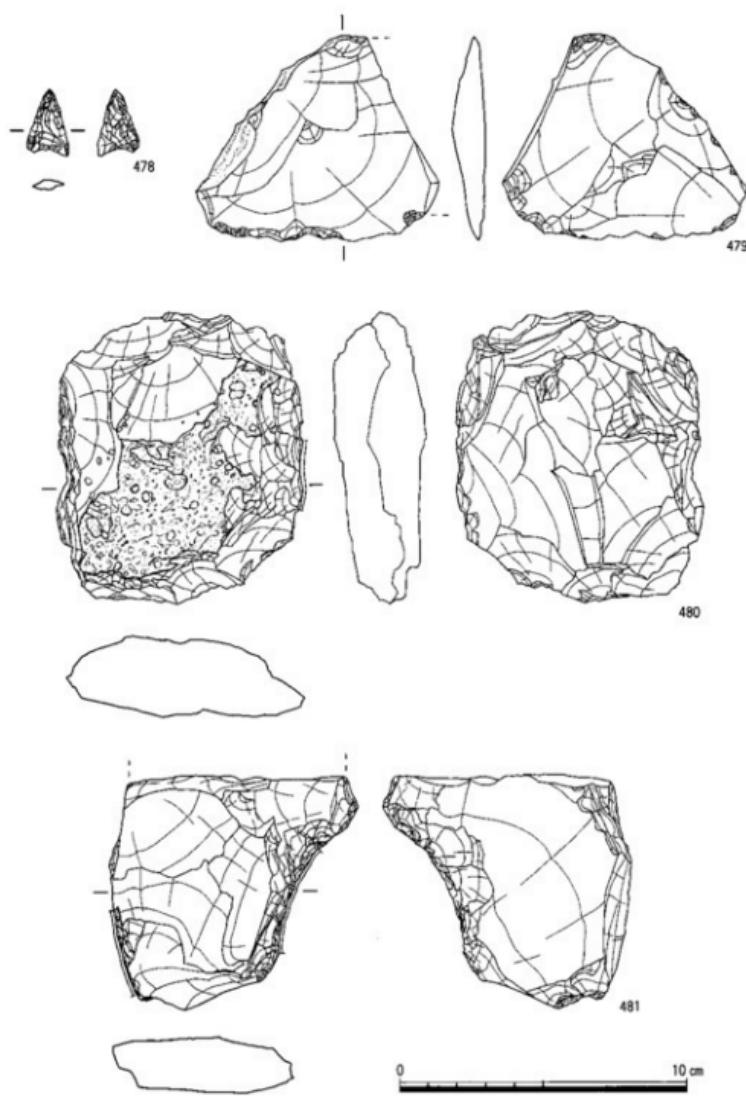
460～494はSD 24出土の遺物である。

460～466は上層出土の遺物である。弥生時代後期末から古墳時代初の壺・甕と共に須恵器の壊が出土している。

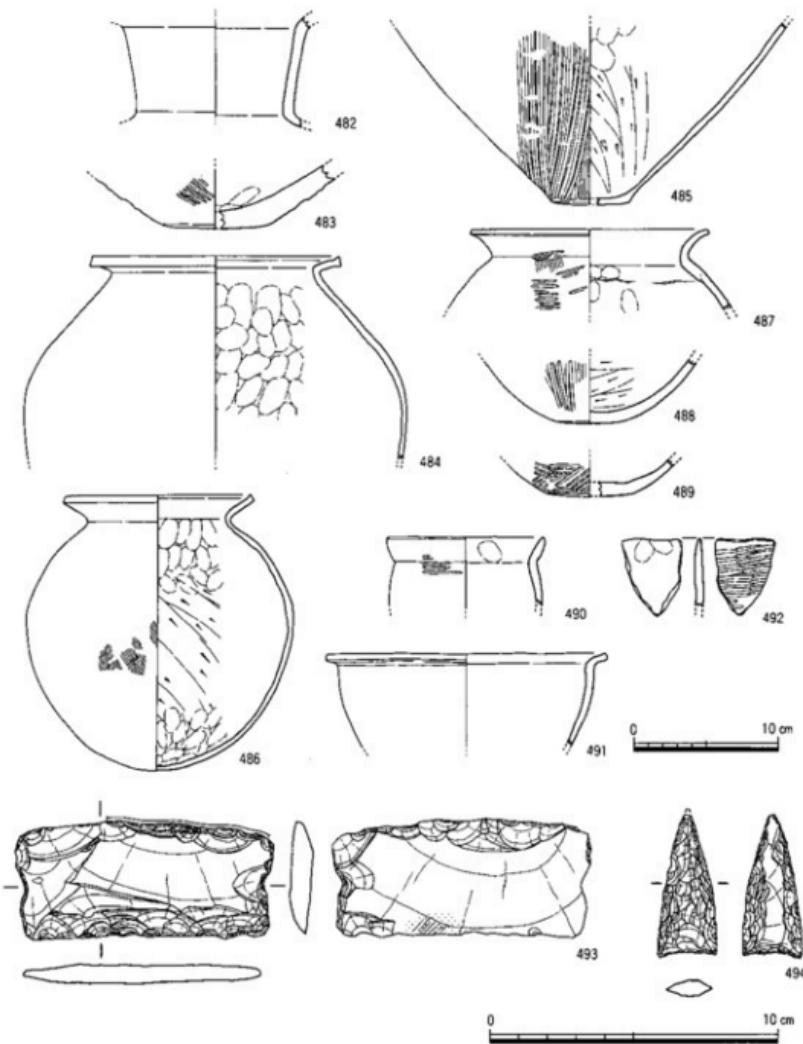


第109図 SD 24 中層出土遺物実測図(1)

467～481は中層出土の遺物である。467～470は壺である。467は二重口縁壺である。468は頸部が朝顔型に開くもので、体部は丸い。体部内面には指頭痕が密に施されている。469は直口壺である。470は長頸壺で頸部および体部外面には刷毛目が、内面には指頭痕状の指などで、体部下半にはヘラ削りが施されている。471は壺である。477は高坏脚部である。467・468・477は乳白色を呈する同一胎土を持つ。



第 110 図 S D 24 中層出土遺物実測図(2)



第111図 SD 24 下層出土遺物実測図

時期は古墳時代前期（布留式期）と思われる。

482～494は下層出土の遺物である。482・483は壺である。484～489は壺である。484・485は底部に平底を残し、体部最大径を上半に持つ。頸部は「く」の字に屈曲させ、口

縁端部を上方に小さく摘み上げるものである。体部外面に刷毛目が、内面上半に指頭痕、下半にヘラ削りが施されている。胎土に角閃石を含み、チョコレート色を呈している。所謂下川津B類である。486は底部が丸底で体部は球形を呈する壺である。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部を上方に小さく摘み上げる。上層からの混ざり込みと考える。

時期は弥生時代後期である。

SD 24は各層間で若干の時期差がある。しかし、上層は7世紀頃とし、中・下層は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。また、中・下層出土の壺（467・468）・壺（486）・高杯（477）は下川津VI式期の基準資料と思われる。

第61表 SD 24中層出土土器観察表

番号	年号	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	胎 土	造存度
467	85	土師器 壺	15.0cm			横付	一重口縁		普通	灰黄色 2.517/2	0.2~1mmの砂粒を多量に含む石英・長石含む	口径 4/8
468	85	土師器 壺	18.4cm			付	指揮		普通	灰黄色 2.517/2	含む石英・長石含む	口径 6/8
469	85	弥生 壺	11.3cm	16.0cm	5.0cm	摩滅	ハサギリ・指揮えみ		普通	にごり・褐色	0.1~4mmの砂粒を多量に含む石英・長石含む	7/8
470	85	弥生 壺	12.9cm		2.8cm	ハサギリ・付	指揮えみ		普通	褐色褐色 5185/6	0.2~1mmの砂粒を多量に含む石英・長石含む	口徑 1/8
471	弥生 壺	16.0cm				摩滅			普通	浅黄色 10188/4	0.1~1mmの砂粒を含む石英・長石含む	口徑 1/8
472	弥生 底部			5.5cm		ハサギリ・指揮			普通	にごり・褐褐色	0.2~1mmの砂粒を多量に含む石英・長石含む	底径 2/8
473	弥生 底部			3.1cm		摩滅	ハサギリ		普通	浅黄色 2.517/3	0.1~2mmの砂粒を多量に含む石英・長石含む	破片
474	弥生 茶	16.0cm				板付・摩滅	付・摩滅		普通	褐色褐色 5185/6	0.1~1mmの砂粒を多量に含む石英・長石含む	破片
475	弥生 茶					指揮えみ・付	付		普通	にごり・褐褐色	0.1~1mmの砂粒を多量に含む石英・長石含む	破片
476	弥生 茶	15.0cm				摩滅	摩滅		普通	にごり・褐褐色	0.1~1mmの砂粒を多量に含む石英・長石含む	口徑 1/8
477	85	土師器 高杯				摩滅			普通	灰黄色 2.517/2	0.3~1mmの砂粒を含む石英・長石含む	脚部 3/8

第62表 SD 24中層出土土器観察表

番号	年号	器種	現存径	最大幅	最大厚	重量	材質	輪形・調整の特徴
478	石器		2.2cm	1.4cm	0.3cm	0.65g	玉	磨削式
479	石器		8.4cm	6.9cm	1.1cm	74.42g	玉	一重尖頭
480	85	打削石斧	10.0cm	8.5cm	3.2cm	306.00g	石	右側面に打削痕あり
481	不明	打削石斧	8.1cm	8.1cm	1.9cm	115.38g	石	底部欠損、刃部刃に打削痕あり

第63表 SD 24下層出土土器観察表

番号	年号	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	胎 土	造存度
482	弥生 壺					摩滅			普通	にごり・黄褐色	0.1~1mmの砂粒を多量に含む石英・長石含む	底 2/8
483	弥生 壺			7.4cm		付?	付?		普通	にごり・黄褐色	0.1~1mmの砂粒を多量に含む石英・長石含む	底 2/8
484	85	弥生 壺	17.0cm			摩滅・付?	付・摩滅	指揮えみ	普通	にごり・黄褐色	0.1~1mmの砂粒を含む石英・長石含む	口徑 5/8
485	85	弥生 壺		5.4cm	ハサギリ・摩滅				普通	褐色褐色 7.518/3	0.1~2mmの砂粒を含む石英・長石含む	底径 3/8
486	85	土師器 壺	12.3cm	18.8cm		摩滅・付	摩滅・指揮えみ・付	指揮えみ	普通	浅黄色 2.517/3	0.1~2mmの砂粒を多量に含む石英・長石含む	8/8
487	弥生 壺	16.2cm				付付・目	指揮えみ		普通	にごり・褐色	0.2~1mmの砂粒を含む石英・長石含む	口徑 3/8
488	弥生 壺			4.8cm	ハサギリ	付	付		普通	にごり・黄褐色	0.1~1mmの砂粒を含む石英・長石含む	底径 3/8
489	弥生 壺			5.9cm	付	摩滅			普通	にごり・黄褐色	0.1~2mmの砂粒を含む石英・長石含む	底径 2/8
490	弥生 茶	10.7cm				付付・付	付		普通	にごり・黄褐色	0.1~1mmの砂粒を含む石英・長石含む	口徑 1/8
491	弥生 茶	19.1cm				剥離・摩滅	剥離		普通	灰黄色 10185/2	0.2~2mmの砂粒を多量に含む石英・長石含む	口徑 1/8
492	弥生 茶	張場				付付	付付えみ		普通	灰黄色 2.517/2	0.1~1mmの砂粒を含む石英・長石含む	破片

第64表 SD 24下層出土土器観察表

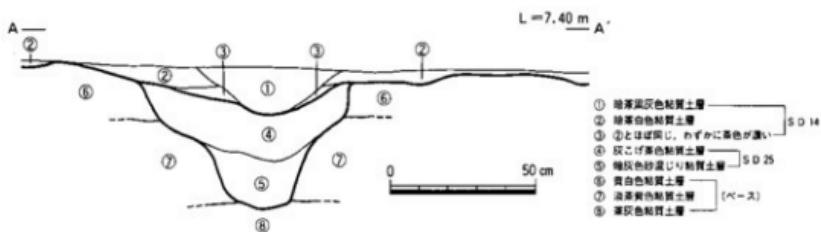
番号	年号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	輪形・調整の特徴
493	85	石器	9.0cm	6.0cm	0.2cm	37.50g	石	部分的に抉りあり、長辺側(背面)に剥離痕あり、刃部前面に摩耗・削痕あり
494	85	石器	14.9cm	10.1cm	0.3cm	4.30g	石	平面

SD 25

SD 25は調査区南東部の第IV調査区で検出した溝である。北方向に流路を取る。上部をSD 14に切られ、北で2条に分流する。規模は天幅約0.9m、深さ約0.3mを計る。天幅の割に深い溝である。

495～500はSD 25出土の遺物である。

498は高坏である。坏部の屈曲部から上方が長いものである。500は大型の打製石庖丁と思われる。刃部に細かい調整を施すのみで、その他はそのままである。

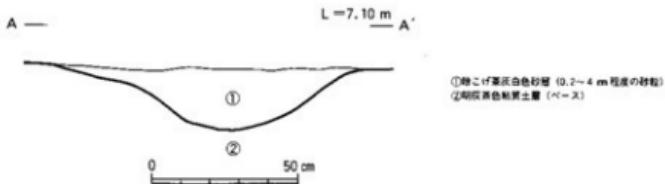


第112図 SD 25 土層断面図

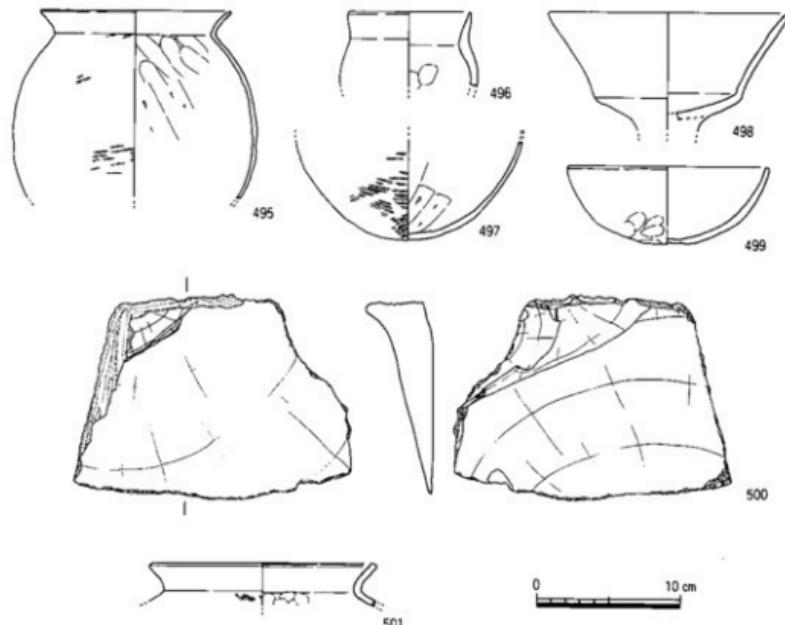
SD 44

SD 44は第IV調査区（宅地部分東）で検出した溝である。北方向に流路を取る。検出長が短いため詳細は不明であるが、規模は天幅約1.3m、深さ約0.2mを計る。第V調査区で検出された溝の延長と思われる。

溝内より少量の土器片が出土している。501は甕で、「く」の字に屈曲する頸部から口縁部になり、口縁端部内面に沈線を施す。



第113図 SD 44 土層断面図



第114図 S D 25・44出土遺物実測図

第65表 S D 25出土土器観察表

遺物 名及 び 所	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	機成	色調	胎 土	遺存度
495 弥生 甕	13.1cm				縦溝・指 跡・アマ			普通	淡黄色 2.5R/4	0.3~1mmの砂粒を少 量含む	口径1/8
496 弥生 甕	8.3cm				縦溝・指 跡			普通	明褐色 7.5R/6	0.1~2mmの砂粒を多 量に含む・石英・石 粉	口径1/8
497 87 弥生 甕			5.3cm		縦溝・ア マ			普通	に赤・黄褐色 10R/3	0.3~1mmの砂粒を少 量含む・石英・石 粉	底径2/8
498 弥生 高环	16.6cm				鉄錆			普通	褐色 5R/6	0.1~2mmの砂粒を含む 石英・石粉	口径2/8
499 87 弥生 甕	13.6cm	5.2cm			竹・指押 き痕・ア マ			普通	褐色 5R/6	0.2~3mmの砂粒を多 量に含む・石英・石 粉	2/8

第66表 S D 25出土石器観察表

遺物 名及 び 所	器種	現存長	最大幅	最大厚	重 量	材質	整形・調 整の特 徴
500 87 石刀		19.1cm	14.0cm	4.1cm	753.2g (重複)		

第67表 S D 44出土土器観察表

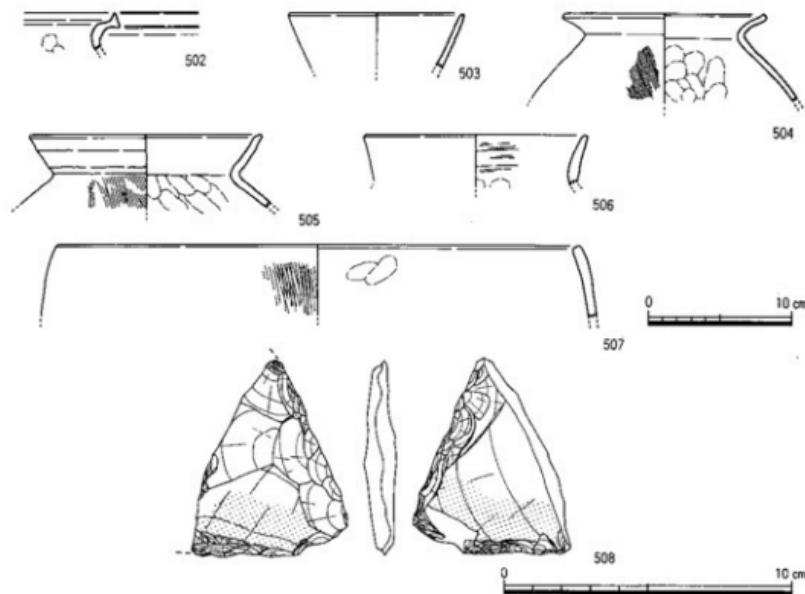
遺物 名及 び 所	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	機成	色調	胎 土	遺存度
501 弥生 甕	15.1cm				横溝・アマ	縦溝・指 跡	(内)口縁部 1条の 鉄錆	普通	淡黄色 2.5R/3	0.2~3mmの砂粒を含む 石英	口径1/8

S X 0 3

S X 0 3 は調査区北部の第 I 調査区で検出された遺構である。平面形態は楕円形を呈し、断面はレンズ状を呈している。規模は長径約 9.1 m、短径約 5.35 m、深さ約 0.63 m を計る。西側一部を S D 0 2 に切られている。

502～508 は S X 0 3 出土の遺物である。

503 は直口壺である。504～506 は甌である。504 は口縁端部を小さく上方に摘み上げる



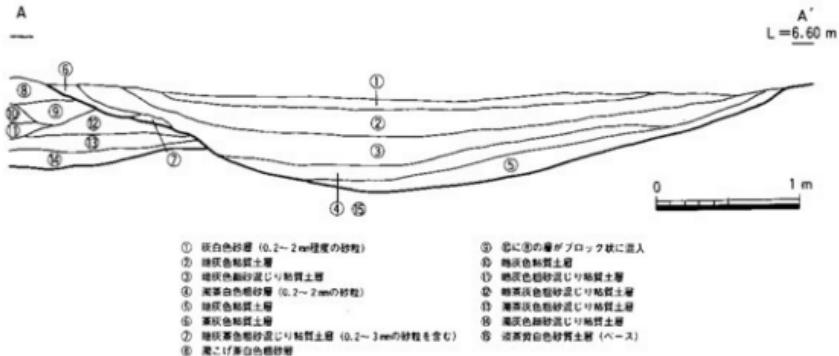
第 115 図 S X 03 出土遺物実測図

第 68 表 S X 03 出土土器観察表

遺物 番号	瓦質 陶質	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色 調	胎 土	遺存度
502	陶生	甌				斜壁	斜壁・指 跡等見え		普通	桜色 SYR6/6	0.3～3mm の砂粒を含む石 英・黄白青白	薄片
503	土師器	甌	10.0 cm			フサ	フサ		普通	1.5～2.5mm の砂粒を少含む 2.5SYR6/6	0.2～1mm の砂粒を含む 石英・黄白青白	口徑 1/8
504	88	土師器 甌	14.0 cm			横フサ・口目	横フサ・指 跡等見え		普通	灰青色 2.5YR6/2	0.3～1mm の砂粒を少含む 石英	口徑 4/8
505	88	土師器 甌	16.0 cm			横フサ・口目	横フサ・指 跡等見え		普通	灰青褐色 10YR6/2	0.3～1mm の砂粒を多量に 含む 石英・灰白色	口徑 2/8
506	土師器 甌		15.0 cm			フサ	横フサ・指 跡等見え		普通	灰白色 2.5YR6/2	0.1～1mm の砂粒を多量に 含む 石英含む	口徑 2/8
507	土師器 甌		36.1 cm			ハサ目	斜壁		普通	灰青褐色 10YR5/2	0.1～1cm の砂粒を含む	薄片

第 69 表 S X 03 出土石器観察表

遺物 番号	瓦質	器種	現存高	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴
508	石灰		6.7 cm	5.3 cm	1.1 cm	39.75g	#2441	風化、一部欠損、両面に磨滅あり



第116図 S X 03 土層断面図

もので下川津VI式期に比定される。505は「く」の字に屈曲する頭部から、口縁がやや内彌氣味に及び、口縁端部をやや内方に肥厚させるものである。典型的な「布留式甕」である。

502のような若干時期の古い土器も出土しているが、時期は古墳時代前期（布留式期）と考えている。

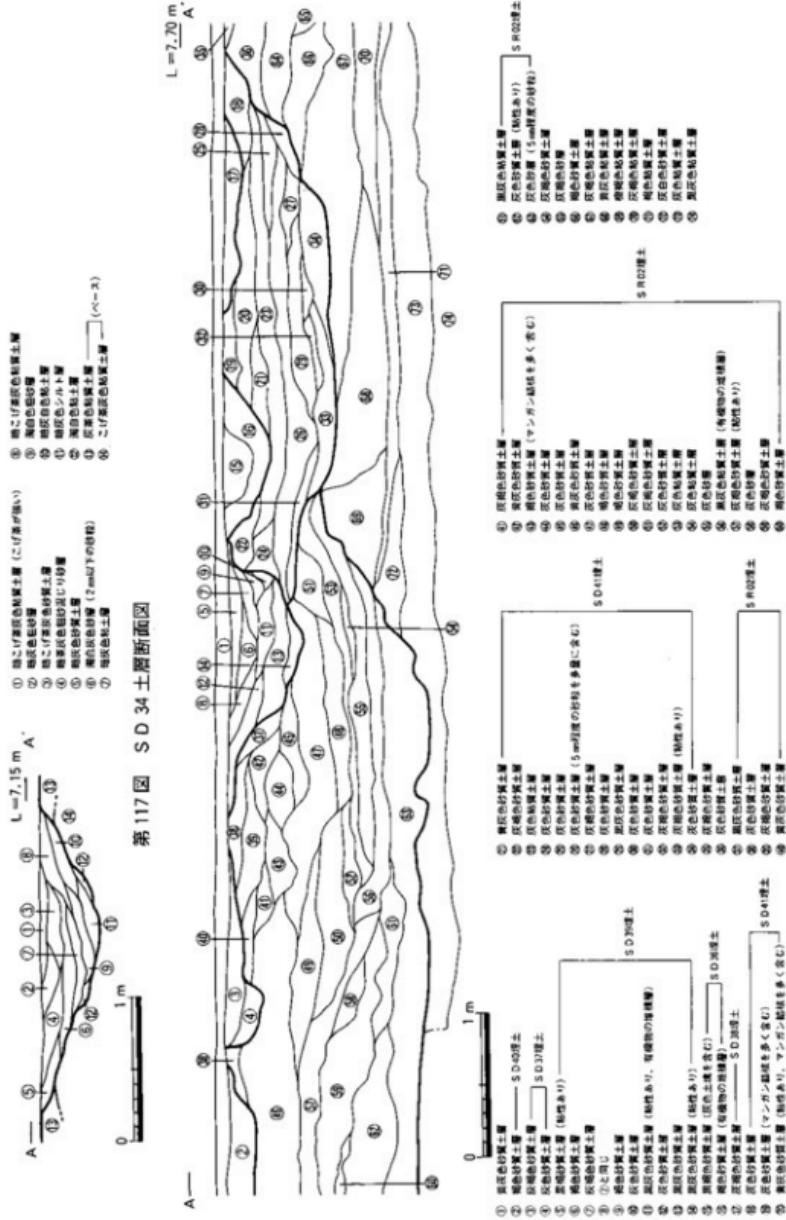
4. 時期不明遺構

S D 3 4

S D 3 4 は第Ⅲ調査区最南端で検出した溝である。規模は天幅約2.3 m、深さ約0.38 mを計る。

時期は出土遺物が無いため不明であるが、川津二代取遺跡で検出された弥生時代後期の溝やS R 0 1 の上層とに前後関係が認められなかったことから弥生時代後期から古墳時代前期の可能性が高い。

また、時期が明確でない溝が第V調査区で5条（S D 3 6 ~ 4 0）検出されている。これらの溝も川津二代取遺跡からの延長に繋がるもので、そのまま北流し第V調査区で検出された溝に繋がるものと思われる。

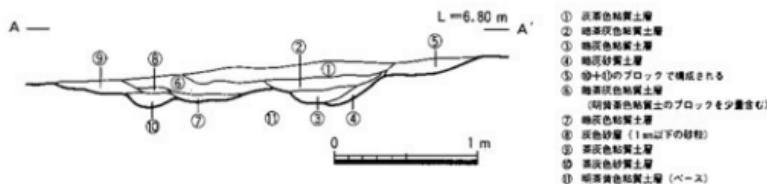


- 130 -

5. 古代（7世紀）

SD 02

SD 02は調査区北部の第I調査区で検出された溝である。北西方向に流路を取り、西調査区外に延びる。規模は天幅約3.1m、深さ約0.3mを計る。遺物は7世紀代の須恵器を含む。

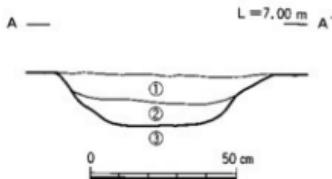


第119図 SD 02 土層断面図

SD 08

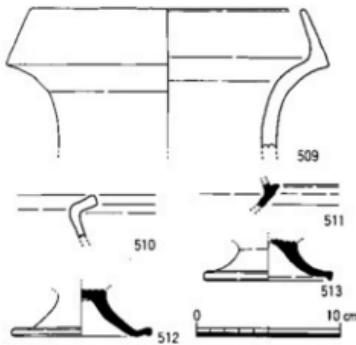
SD 08は調査区北部の第II調査区で検出した溝である。北西方向に流路を取る。規模は天幅約0.8m、深さ約0.15mを計る。

509～517はSD 08出土の遺物である。509・510の弥生土器も混入している。511は須恵器環身で立ち上がりが小さいものと思われる。512・513は須恵器高壙である。脚部が短く、脚端部を下方に小さく折り曲げている。514～517は打製石庵丁・スクレイバーなどのサヌカイト製の石製品である。

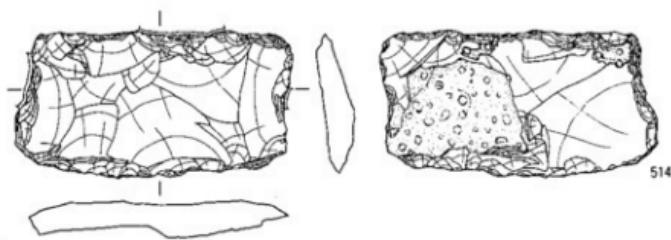


第120図 SD 08 土層断面図

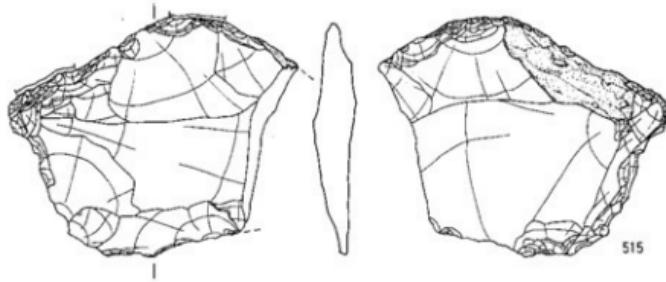
- ① 淡褐色粘質土層
- ② 深褐色粘質土層
- ③ 黒灰色粘質土層（ベース）



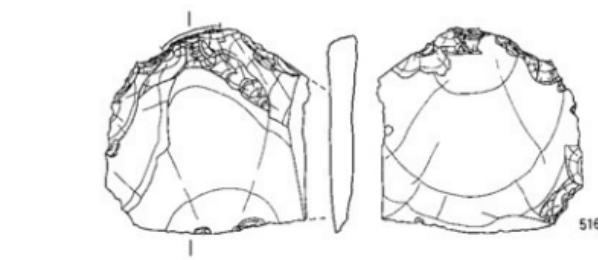
第121図 SD 08 出土遺物実測図(1)



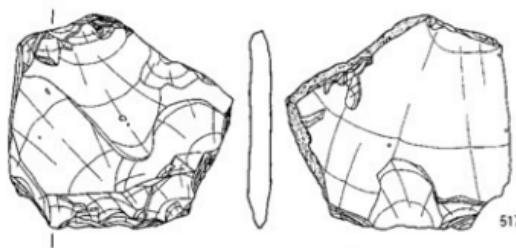
514



515



516



517

0 10 cm

第 122 図 S D 08 出土遺物実測図(2)

第70表 SD 08出土土器観察表

番号	形質	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	胎土	遺存度
509	88	弥生 壺	19.0cm			摩滅	摩滅	二蓋口縁 不直	やや 灰黄色	2.5I7/2	0.3~5mmの砂粒を多量に 含む 石英・長石含む	口徑7/8
510	88	弥生 壺				摩滅-竹?	摩滅		普通	浅黄色 2.5I7/3	0.2~0.5mmの砂粒を少量 含む 長石含む	破片
511	須恵器 壺					圓輪付・内 削り	圓輪付		やや 直	灰白色 N6/	精良	破片
512	須恵器 高 环			9.9cm		摩滅-竹?	摩滅-竹		普通	浅黄色 2.5I7/3	鐵器 石英・長石含む	脚部2/8
513	須恵器 高 环			8.7cm		竹	竹		やや 不直	灰白色 2.5I8/2	鐵器 石英・長石含む	脚部5/8

第71表 SD 08出土石器観察表

番号	形質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴
514	88	石廻丁	9.4cm	4.9cm	1.0cm	65.17g	±28(+) ±28(-)	風化、両端辺に抉りあり、長側面(背)に敲打痕あり
515	88	石廻丁	9.3cm	7.8cm	1.4cm	125.69g	±28(+) ±28(-)	一部欠損、長側辺(背)に敲打痕あり
516	88	石廻丁	7.0cm	7.0cm	1.0cm	65.24g	±28(+) ±28(-)	一部欠損、長側辺(背)に敲打痕あり
517	88	石廻丁	7.7cm	7.4cm	0.8cm	74.07g	±28(+) ±28(-)	白色風化

時期は弥生時代後期のSD 13を切っていることや出土遺物より7世紀頃と考えられる。

6. 中世

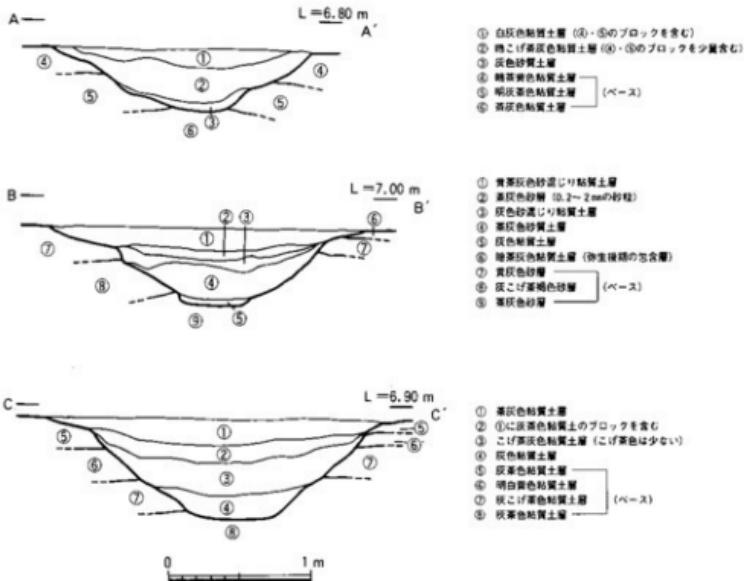
SD 01

SD 01は調査区西部第Ⅰ・Ⅲ調査区で検出された溝である。現在の地割りと同方向の流路を持つもので、この溝の時期から現在の地割りの機能していた時期を決定する一資料となる。規模は天幅約2.4m、深さ約0.56mを計る。断面はU字型を呈し、ほとんど一定した埋土を持つ。

SD 01から土師器小皿・壺・椀を主とした中世の遺物が出土している。土師器小皿・壺は少量で、椀形態がかなり出土している。椀形態には土師器椀・黒色土器椀・瓦器椀がみられる。瓦器椀は和泉型で、体部内面見込み部に平行ヘラ磨きが施されている。尾上編年Ⅲ-1期に比定される。須恵器は皿・壺・甕体部が出土している。

時期は和泉型瓦器椀から13世紀前半頃と思われる。

また、須恵器皿・壺よりこの溝の上限を求めるにすれば、10世紀前半頃と思われ、この時期には既にこの溝は機能していたものと思われる。また、7世紀以降の遺構は、ほとんど検出されておらず、SD 01の上限を10世紀前半に求めることは可能と思われる。



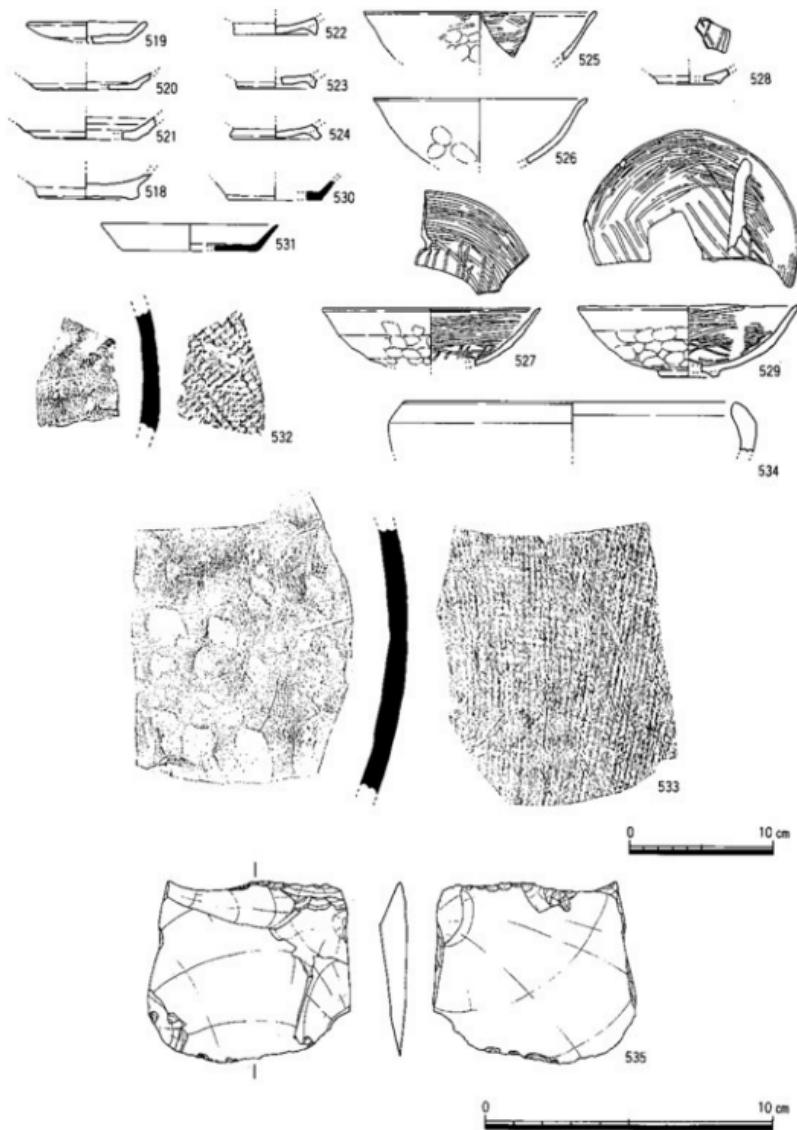
第123図 SD 01 土層断面図

第72表 SD 01出土土器観察表

遺物	名前	器種	口径	器高	底径	外形	内面	その他	焼成	色調	地土	遺存状
518	白磁 瓢			6.3 cm	ハリ前立	回転付 直腹	回転付		普通	灰白色 2.5R/1 灰白色 2.5R/1	無害	底径7/8
519	土師器 小	8.5 cm	1.4 cm	5.9 cm	分	回転付	回転へラ切	普通	灰白色 10YR8/3	0.1-0.7 mmの移粒を含む	4/6	底径7/8
520	土師器 壺			7.2 cm	直底	直底	回転へラ切	普通	に赤い褐色 2.5R5/4	0.1-0.7 mmの移粒を少認	底径2/8	底径7/8
521	土師器 壺			7.3 cm	回転付	回転へラ切	回転付	普通	に赤い褐色 2.5R6/4	0.1-0.3 mmの移粒を含む	底径1/8	全表面含む
522	土師器 瓢			5.8 cm	分	分	分	普通	2.5R7/3	0.1-1 mmの移粒を少含む	底径1/8	底径7/8
523	土師器 瓢			6.2 cm	分	分	分	普通	灰白色 10YR8/2	0.1-0.8 mmの移粒を少認	底径2/8	底径7/8
524	土師器 瓢			5.8 cm	分	分	普通	普通	浅黄色 2.5R7/4	0.1-0.6 mmの移粒を少認	底径2/8	底径7/8
525	瓦器 瓢	16.0 cm	ハリ付	ハリ付	直底付	直底付	直底付	普通	黑色 N/	無害	口徑1/8	底径7/8
526	瓦器 瓢	14.8 cm	付	付	付	付	付	普通	灰白色 N/-7	無害	口徑1/8	底径7/8
527	瓦器 瓢	15.0 cm	指揮さえ	ハリ付	直底型	直底型	直底型	普通	灰白色 N/	0.5 mm以下の移粒を少認	口徑2/8	底径7/8
528	瓦器 瓢			5.4 cm	分	直底型	直底型	普通	灰白色 N/	無害	底径1/8	底径7/8
529	瓦器 瓢	15.2 cm	4.9 cm	4.1 cm	付付 さえ	付付 付付	付付 付付	普通	灰白色 10YR7/1	無害	4/6	底径7/8
530	頸壺器 壺			6.5 cm	回転付	回転付	回転へラ切	普通	灰色 5R6/1	0.2-0.8 mmの移粒を少認	底径2/8	底径7/8
531	頸壺器 壺	12.2 cm	1.8 cm	9.2 cm	回転付	回転付	回転へラ切	普通	灰色 N/	1 mm以下の移粒を少認含む	1/8	底径7/8
532	頸壺器 壺			格子目付	當て共貫 の上付	格子目付	格子目付	普通	灰白色 5R8/1	1 mm以下の移粒を少認含む	無害	底径7/8
533	頸壺器 壺			格子目付	付	格子目付	付	普通	灰色 N/	無害	底径1/8	底径7/8
534	土器質 瓢	22.4 cm			付	付	付	普通	灰褐色 2.5R3/1	0.1-1 mmの移粒を含む	底径1/8	底径7/8

第73表 SD 01出土石器観察表

遺物	名前	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調整 の 特 徴
535	石斧		7.0 cm	(5.1) cm	0.9 cm	50.43g	石英	



第 124 図 S D 01 出土遺物実測図

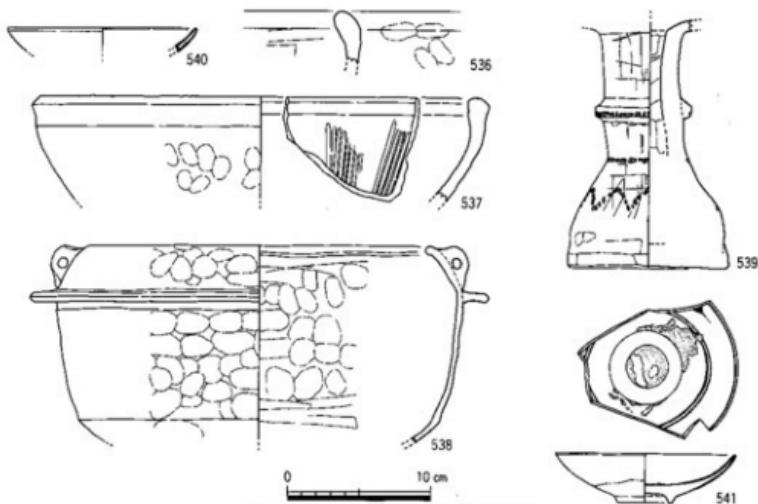
7. 近世

当遺跡から近世の遺構はほとんど検出されていない。僅かに第III・IV調査区で土坑・溝を検出しているだけである。

S K 05

S K 05は調査区中央部第III調査区で検出した遺構である。平面形態はほぼ方形を呈し、規模は一辺約0.85m、深さ約0.12mを計る。

遺物は土師質土器・瓦質土器・近世陶磁器が出土している。536・537は土師質の摺り鉢である。内面に条溝を持つ。538は瓦質の羽釜である。539は仏前の花瓶であろうか？。



第125図 S K 05出土遺物実測図

第74表 S K 05出土土器観察表

番号	分類	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色 調	胎 土	遺存度
536	瓦質	盆				ガラ・指押さ 文	ガラ・板付 文		普通	淡青紫色 7.51mm厚	0.2~2mmの粒状を含む石 灰・石英・長石等 灰分	破片
537	土師質	盆	30.4cm			ガラ・指押さ 文	(内)重い条 溝	(内)重い条 溝	普通	褐色 5.92/6	0.1~4mmの砂粒を含む石 灰・金雲母合む	口徑1/8
538	89	瓦質 羽釜	23.4cm			横打・面押 き文	ガラ・板付 文	ガラ・指押 き文	普通	褐色 2.57/2	0.1~1mmの砂粒を少許含む 石英含む	口徑4/8
539	89	土師質 花 瓶		11.0cm		横打・削み 目	横打・削 目	無	普通	灰白色 2.57/2	0.2~2mmの粒状を含む石 灰・長石・金雲母合む	7/8
540	伊万里	皿	13.0cm			施釉	施釉		良好	灰色 7.51/1 底白 10.7/1	無	破片
541	89	伊万里 皿	12.4cm	3.4cm	3.8cm	施釉+・施 釉	施釉+・施 釉	施釉+・施 釉	良好	淡青紫色 2.57/3	無	6/8

540・541は伊万里焼である。内面見込み部は蛇の目状に釉が掻き取られ、融離剤としての砂粒が少量付着する。

時期は17世紀頃と思われる。

S D 35

S D 35 は調査区中央部第Ⅲ調査区と第Ⅳ調査区の間で検出された溝である。最近まで使用されていた溝の下部で検出され、検出面で規模は天幅約0.9m、深さ約0.1mを計る。

遺物は土師質土器・近世陶磁器が多数出土している。

542～546は土師質の土釜である。鉢が退化し、立ち上りもかなり内傾するものである。548は土師質の土鍋で、器高も浅いものである。549～551は土師質の摺り鉢である。内面に条溝が認められる。土師質のものは土釜・土鍋・摺り鉢で、小皿・壺・椀類は出土していない。552～563は陶磁器である。内面見込み部に砂目積みが認められるものや蛇の目状に釉を搔き取るものがある。553～557は唐津刷毛目椀である。559～561は伊万里碗である。外面に草花文が描かれている。562・563は伊万里徳利である。564は備前焼である。

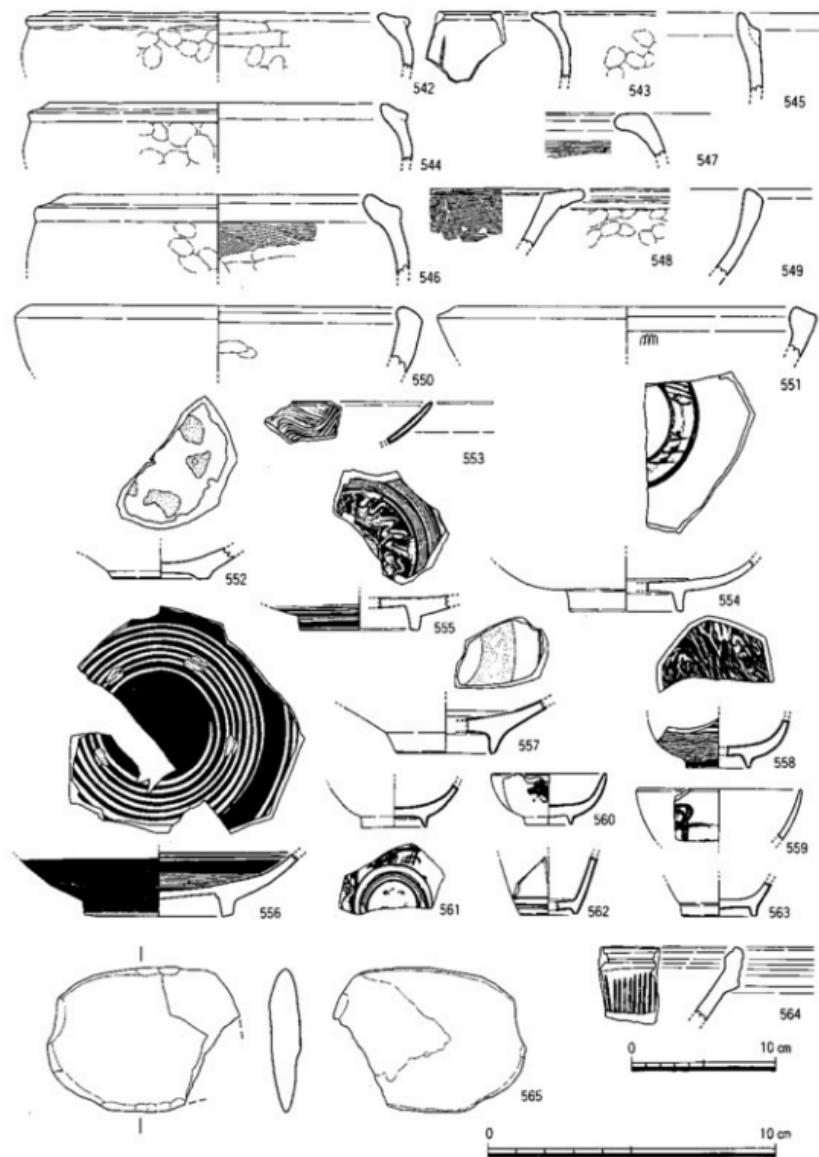
時期は出土遺物より中世後半から近世までの遺物が出土している。

第75表 S D 35出土土器観察表

番号	基盤	器種	口径	高さ	底径	外面	内面	その他	焼成	色	調	胎	土	遺存度
542	90 土師質 玉	土釜	22.9cm			横付・指揮 付	横付		普通	淡黄色2.578/3	精良 石英含む	口徑1/8		
543	90 土師質 玉	土釜				横付			普通	灰黄色2.577/2	精良	破片		
544	90 土師質 玉	土釜	23.0cm			横付・指揮 付			普通	淡黄色2.578/3	精良	破片		
545	90 土師質 玉	土釜				横付		付	普通	淡黄色2.577/4	0.2～1mmの砂粒を含む	石英含む	灰	0.2～1mmの砂粒を含む
546	90 土師質 玉	土釜	20.6cm			横付・指揮 付	横付	付	普通	淡黄色2.578/3	精良 金型堆合む	口徑1/8		
547	90 土師質 玉					付	付	付	普通	褐色7.5786/6	0.2～2mmの砂粒を含む	石英含む	破片	
548	90 土師質 玉					横付・指揮 付	付	付	普通	淡黄色2.5788/3	精良 石英含む	破片		
549	90 土師質 摺 り鉢					付	付		普通	改良褐色 [0.078/4	精良	破片		
550	90 土師質 摺 り鉢		25.4cm			付	付		普通	褐色10.078/1	0.2～1mmの砂粒を多く含む	石英含む	灰	0.2～1mmの砂粒を多く含む
551	90 土師質 摺 り鉢		23.2cm			付	付	(内)粗い面	普通	淡黄色10.078/4	0.3～4mmの砂粒を多様に含む	石英含む	口徑1/8	
552	90 土師質 摺 り鉢				6.8cm	削り・削り 出し	施釉(質入)	砂目積み	良好	にふいた褐色 の砂目	褐色10.078/1	繊密	底径4/8	
553	90 唐津刷毛 目碗					施釉	施釉(質入)		良好	灰白色5.577/2	繊密	破片		
554	90 唐津刷毛 目碗		7.7cm			施釉(質入)	施釉(質入)		良好	灰白色5.577/2	繊密	武徳2/8		
555	91 唐津刷毛 目碗				8.2cm	施釉	施釉	施釉(質入)	良好	灰白色5.577/2	繊密	武徳2/8		
556	91 唐津刷毛 目碗		10.2cm			施釉付	施釉付	施釉(質入)	良好	灰白色5.577/1	繊密	武徳6/8		
557	91 唐津刷毛 目碗				6.8cm	施釉(質入)	施釉(質入)	施釉(質入)	良好	灰白色5.577/1	繊密	武徳2/8		
558	91 唐津かけ 付刷毛				4.4cm	施釉	施釉		良好	灰白色5.577/1	繊密	底径4/8		
559	91 伊万里 瓢		11.0cm			施釉・染め	施釉		良好	灰白色5.577/2	繊密	口徑1/8		
560	91 伊万里 瓢		7.7cm	3.5cm	3.2cm	施釉・染め	施釉		良好	灰白色5.577/1	繊密	1/8		
561	91 伊万里 瓢				4.2cm	施釉・染め	施釉		良好	灰白色5.577/1	繊密	武徳4/8		
562	91 伊万里 瓢				3.8cm	施釉・染め	付	(内)無釉	良好	灰白色5.577/1	繊密	武徳3/8		
563	91 伊万里 瓢				5.2cm	施釉・付	付	(内)無釉	良好	灰白色5.577/1	繊密	底径4/8		
564	91 伊万里 瓢					施釉・ハリ	ハリ	(内)密に塗	普通	褐色灰白色7.367/1	0.1～2mmの砂粒を含む	石英含む	破片	

第76表 S D 35出土石器観察表

番号	形	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整 形・調 整 の 特 徴
565	91 五角錐		16.4cm	15.0cm	1.0cm	40.1kg	米山岩	直削りの方に施りあり

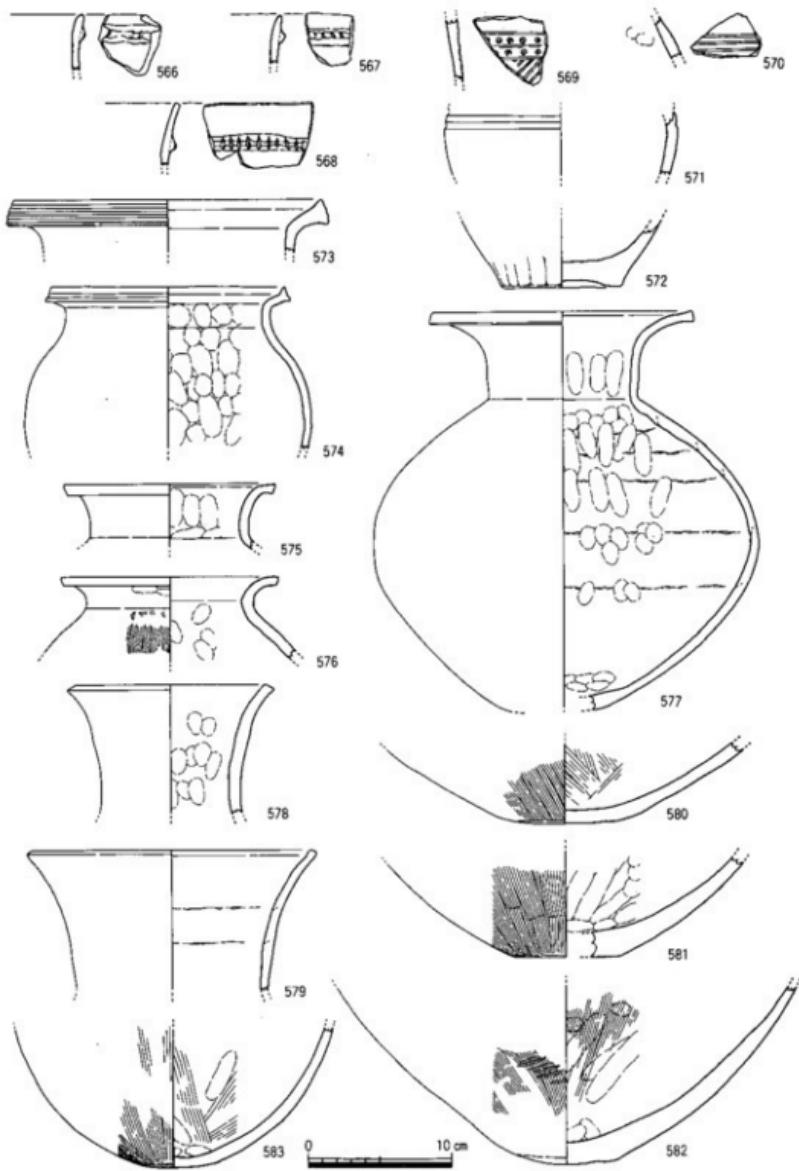


第126図 S D 35 出土遺物実測図

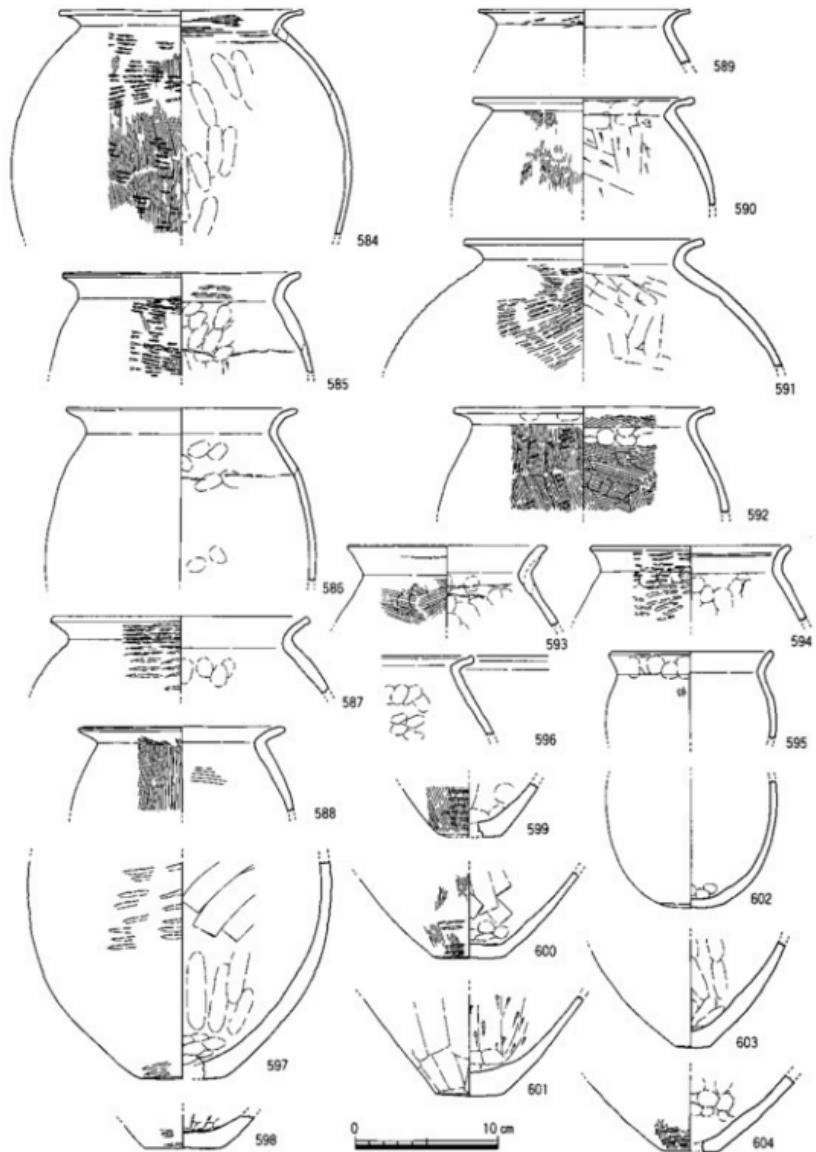
8. 包含層出土遺物

566～729は包含層出土遺物である。

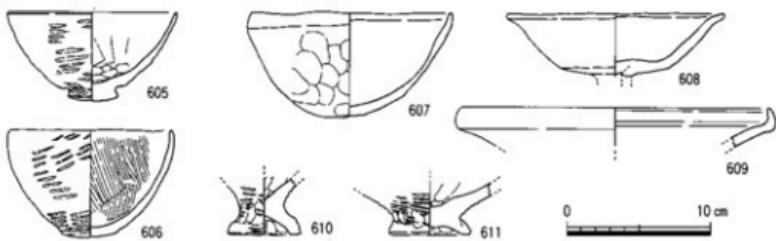
566～568は深鉢である。口縁部外面に刻目突帯を持つものである。若干突帯の位置に違いが認められる。569は弥生時代前期の壺である。外面に2条の沈線を施し、その間に竹管文を施す。その沈線下には斜め方向の沈線を施す。570～572は弥生時代前期の壺である。体部上半に少条の沈線が認められる。573～582は弥生時代中期末から後期の壺である。573は口縁端部を拡張させ、外面に3条の凹線を施すものである。577は頸部が直立に立ち上り、口縁部がほぼ水平に広がるものである。口縁端部はそのまま終わらせている。底部は僅かに平底を残す。体部外面の調整は摩滅のために不明である。内面は指頭痕が認められる。578・579は頸部がやや外反気味の直口壺である。584～604は弥生時代後期の壺である。頸部を「く」の字に屈曲させるもので、内面の屈曲部はシャープなものと丸いものがある。口縁部はほぼ真っ直ぐに延びるものとやや外反するものがあり、口縁端部はほとんどがそのまま終わらせるものである。底部は僅かに平底を残す。体部最大径はほぼ中央にある。596は所謂「下川津B類」の形態を持つものである。口縁部を短く屈曲させ、口縁端部を小さく上方に摘み上げる。胎土に角閃石を含む。605～607は弥生時代後期の鉢である。底部を突出させて平底状に作るものと丸底が認められる。体部外面には叩きが、内面には刷毛目が施されている。608・609は高壺である。609は口縁部をやや内方に屈曲させるものである。610・611は製塩土器である。脚部は短く「ハ」の字に開き、体部は外方に延びる。体部外面には叩きが、脚部外面には指頭痕が施されている。弥生時代後期である。612～705は石製品である。612～637は打製石庵丁である。ほとんどが横長の短冊型のもので両端に抉りを持つ。長さは8cm前後とやや小型である。全てサヌカイト製である。636・637は結晶片岩製の打製石庵丁である。形態はサヌカイト製のものと同じである。638～653はスクレイパーである。形態はさまざま横長の短冊状に作り、背面・刃部に調整を加えたものと不定形の剥片に細かい刃部調整を加えただけのものがある。652・653はそれぞれが一個のスクレイパーであるが、接合可能で元は一個体のものである。654・655は横長石匙である。656～673は打製の石鍬である。形態は短冊状を呈するものやや基部が細くなるものがある。基部両端には刃つぶしを行っている。残りのいいもので約12cm前後のものが一般的である。667が安産岩製で、その他は全てサヌカイト製である。674～677は打製石斧である。675は前面に調整を加え、ほぼ方形を呈する打製石斧である。石鍬



第127図 包含層出土遺物実測図(1)



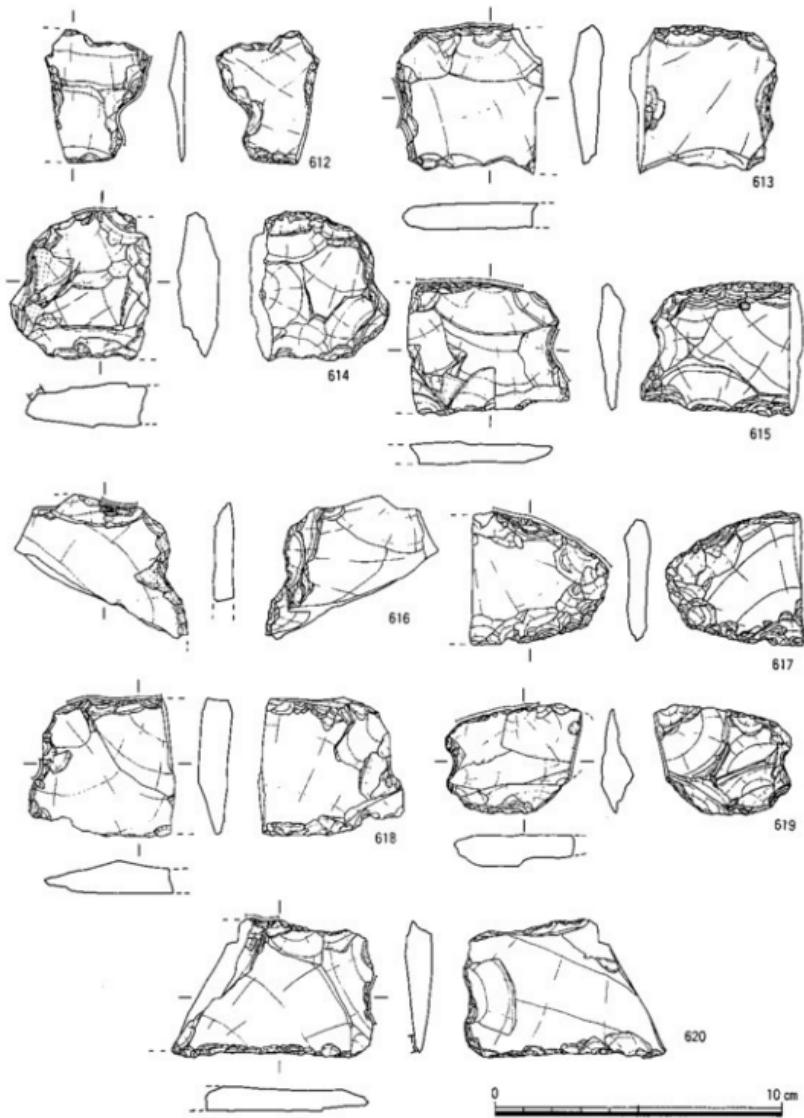
第128図 包含層出土遺物実測図(2)



第129図 包含層出土遺物実測図(3)

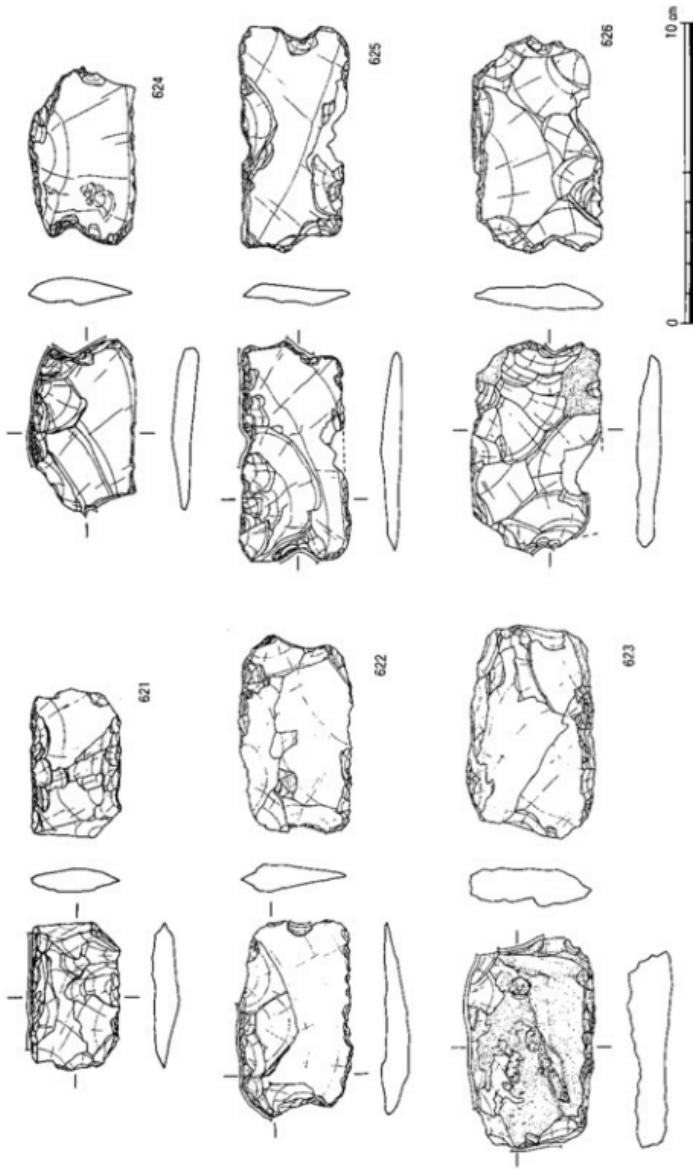
に比べて身が厚く作られている。サヌカイト製である。677は安産岩製の打製石斧である。大きめの剥片の刃部に調整を加えただけのものである。678は石英粗面岩製の磨製石斧である。679は石錐である。680～696は石鎚である。ほとんどが小型の三角形状のもので基部が凹基式、平基式、凸基式の3種類が認められる。また、その他に柳葉形のものや紡錘形のものがある。697は小型の石槍である。701は安山岩製の敲石である。702は滑石製の砥石である。703は石英粗面岩製の砥石である。704・705は砂岩製の台石である。

706は土師器の坏である。707は土師器の椀である。細く高い高台が付き、体部は内彎しながら外方に延びる。708は畿内産の黒色土器A類椀である。底部には小さい三角形状の高台が付き、内面見込み部には密にヘラ磨きが施されている。710は土師質土釜である。頸部で「く」の字に屈曲し、屈曲部下に短い鈍が付く。711～713は須恵器皿である。底部はヘラ切りされ、体部は直線的に外方に延びる。714は回転台土師器の皿である。形態は須恵器皿と同じである。715は須恵質の硯である。側辺を丸く仕上げ、外面に手持ちヘラ削りを施す。716～719は須恵器の蓋である。716は6世紀後半頃。717は内面に小さい反りが付き、天井部にはつまみが付くようである。718・719は口縁端部を短く下方に屈曲させるもので、8世紀頃のものと思われる。720～725は須恵器の坏身である。底部と体部の境に断面方形の高台が付く。726は須恵器椀である。底部は糸切りされた円盤状を呈している。727は須恵器薬壺である。728は須恵器高坏である。短い脚部を外方に広げ、端部を下方に小さく屈曲させるものである。729は備前焼の壺である。下半に不定方向のヘラ削りを施す。

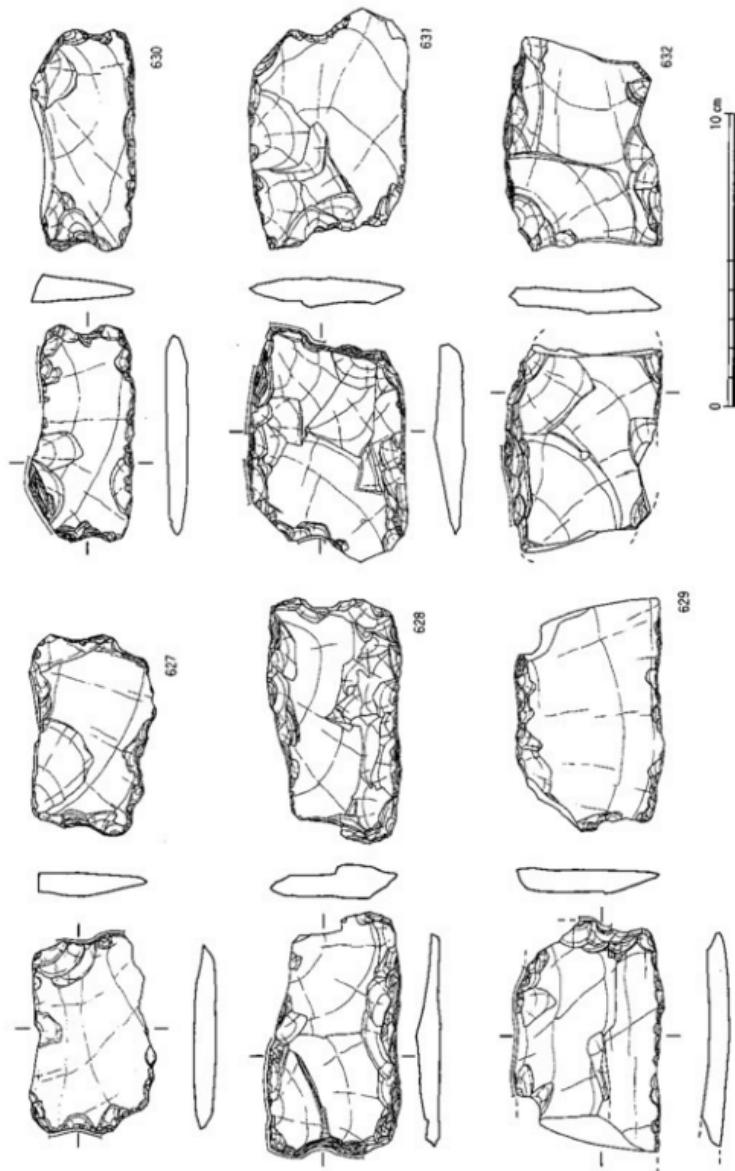


第130図 包含層出土遺物実測図(4)

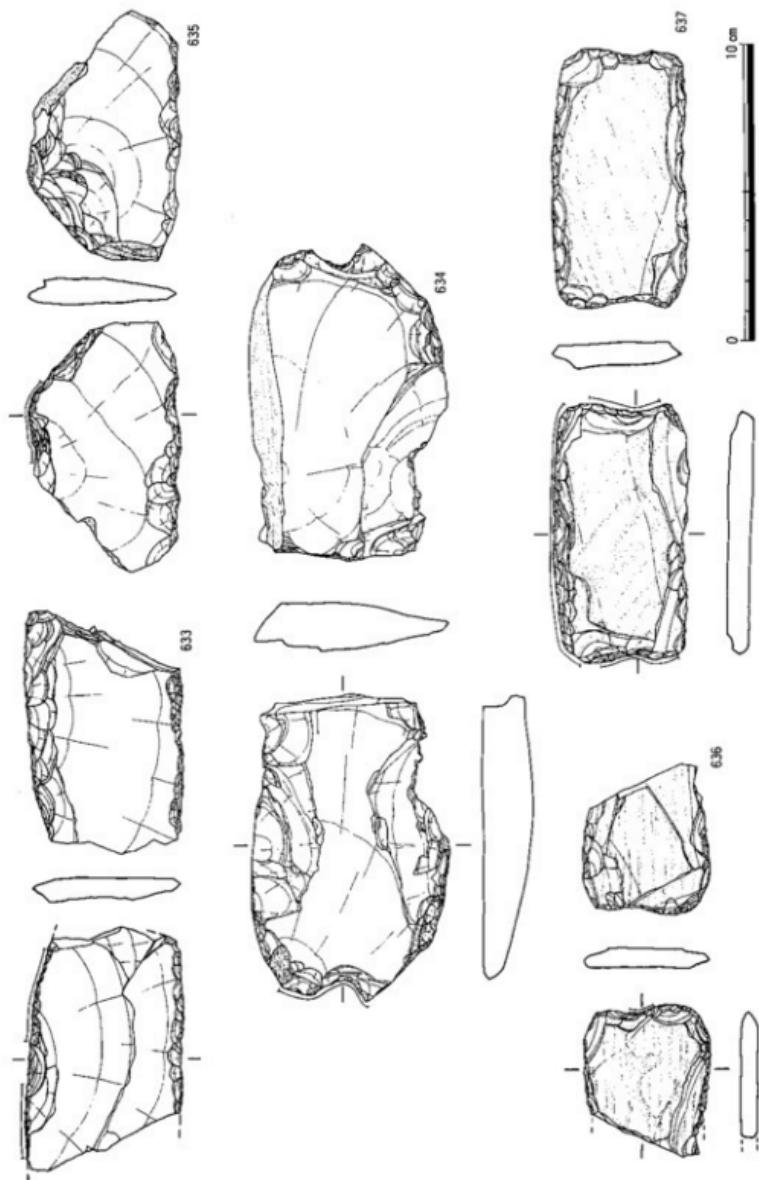
第131图 包含层出土遗物实测图(5)



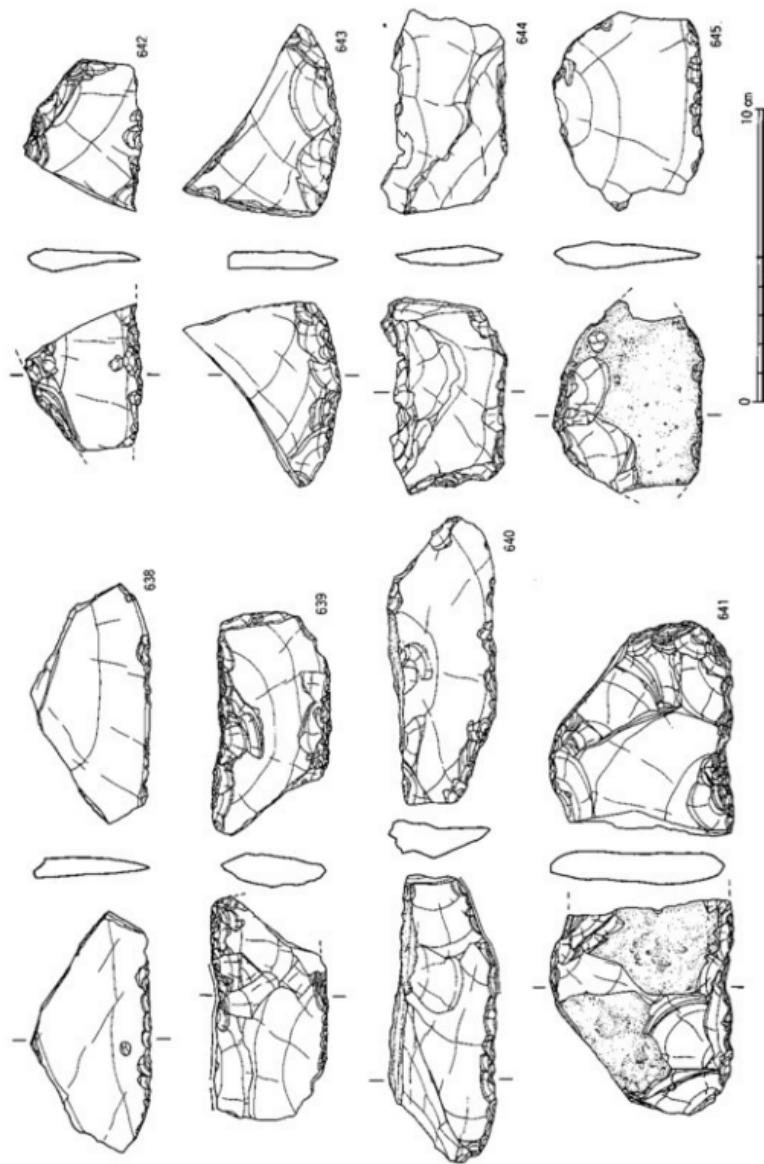
第132圖 包含層出土遺物實測圖(6)

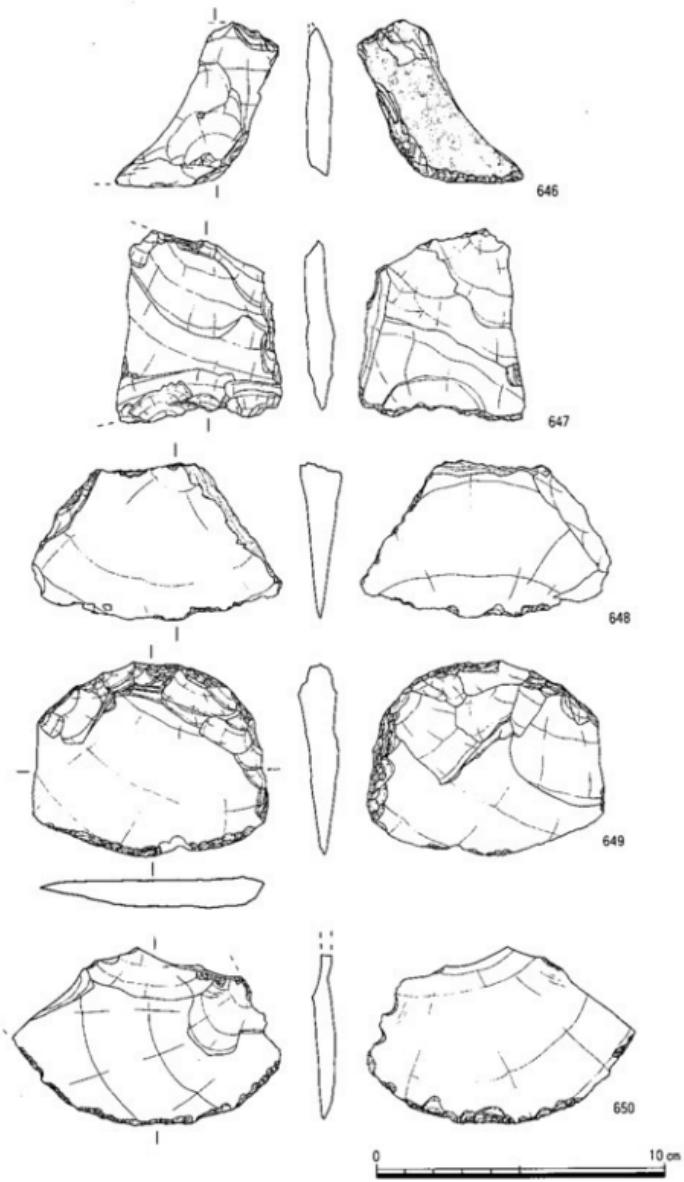


第133圖 包含層出土遺物實測圖(7)

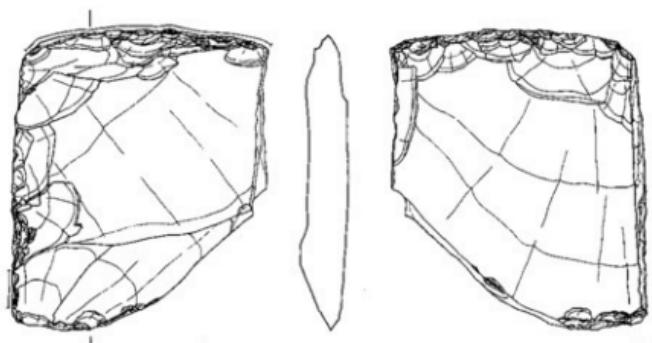


第134圖 包含層出土遺物素描圖(6)

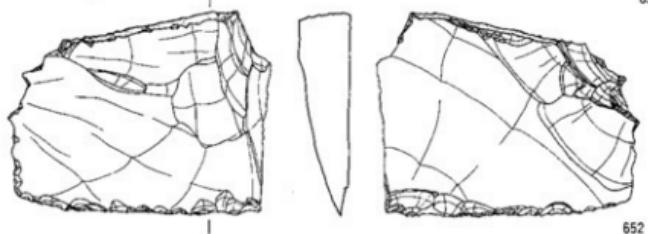




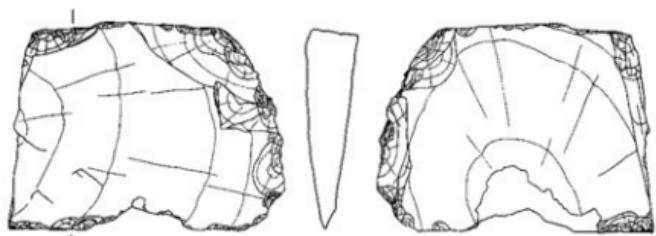
第135図 包含層出土遺物実測図(9)



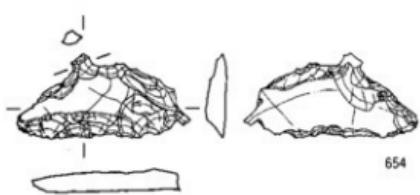
651



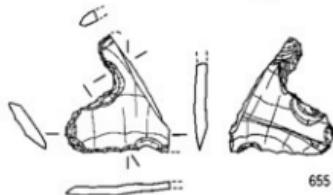
652



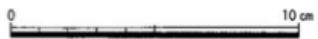
653



654

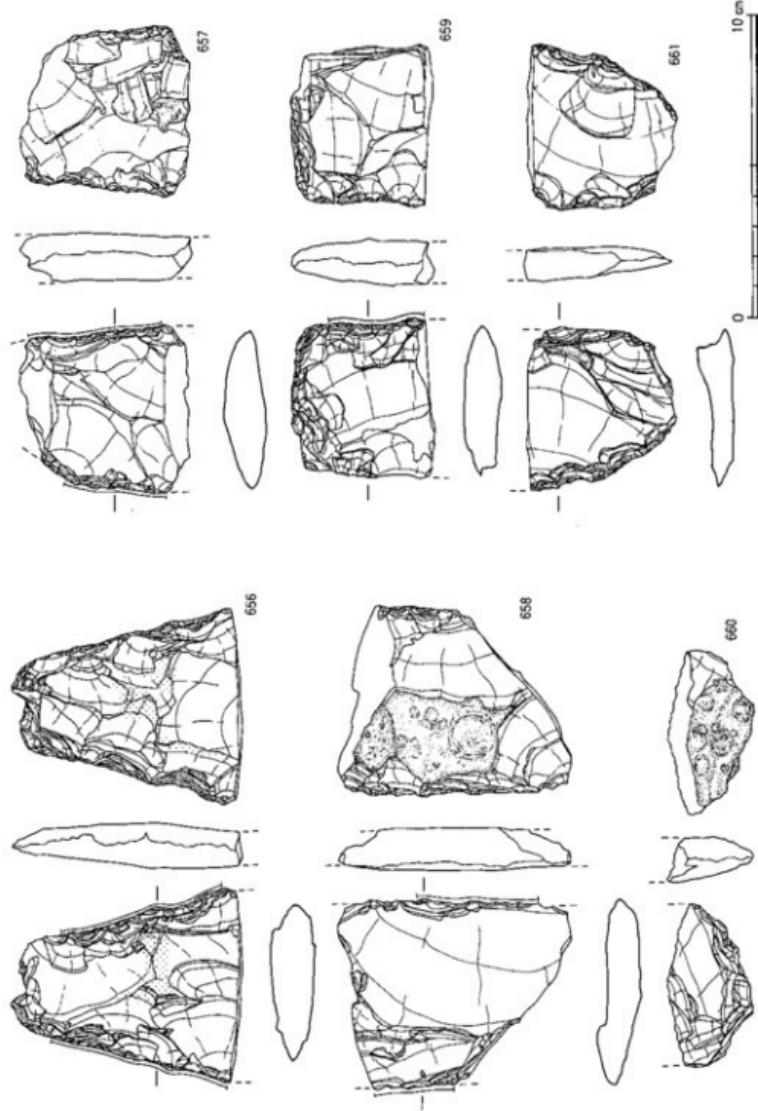


655

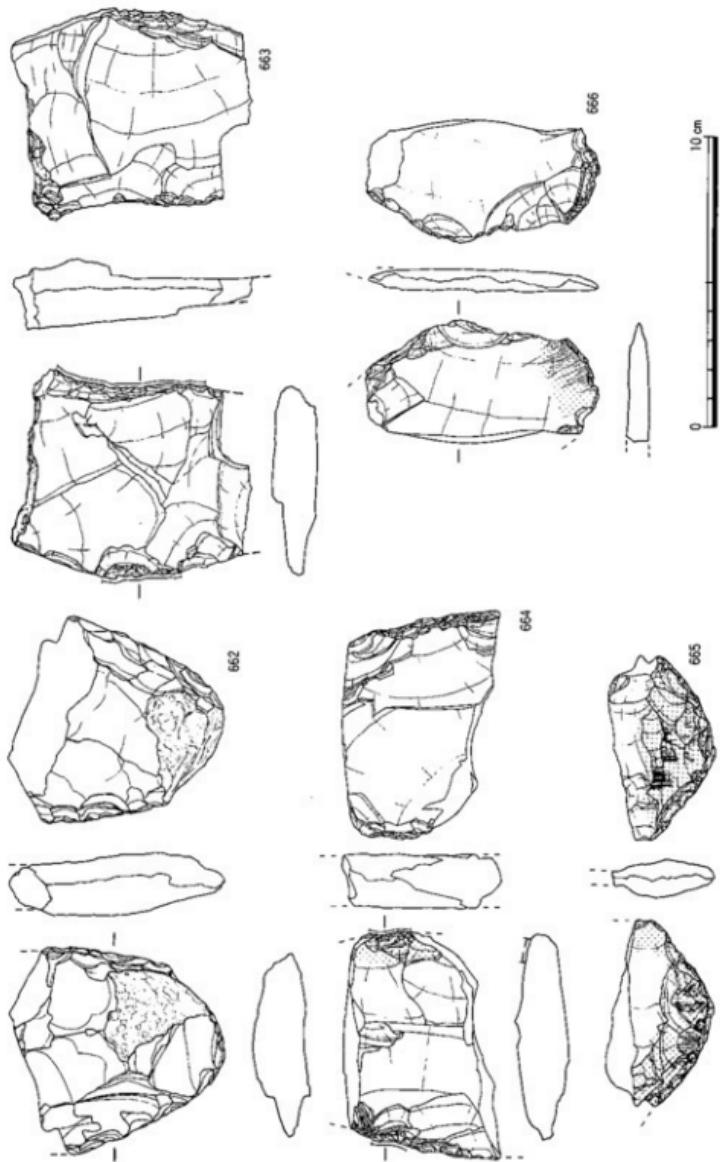


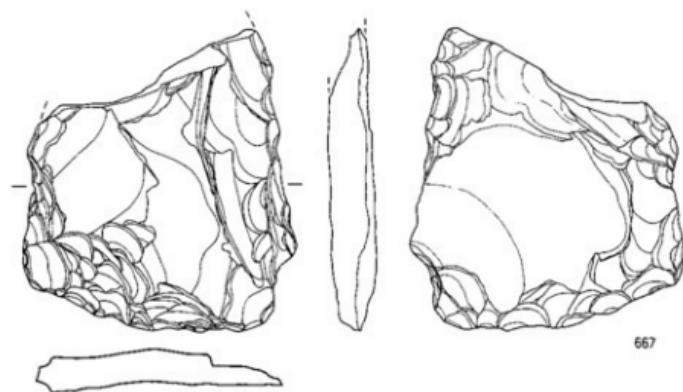
第136図 包含層出土遺物実測図(10)

第137图 包含层出土遗物实测图(11)

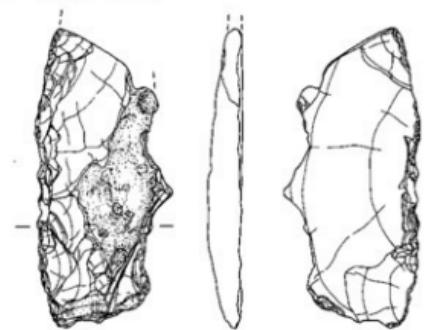


第138图 包含层出土遗物实测图(12)

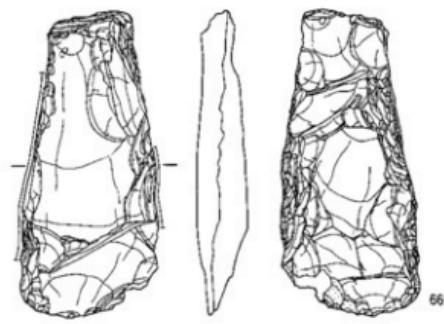




667



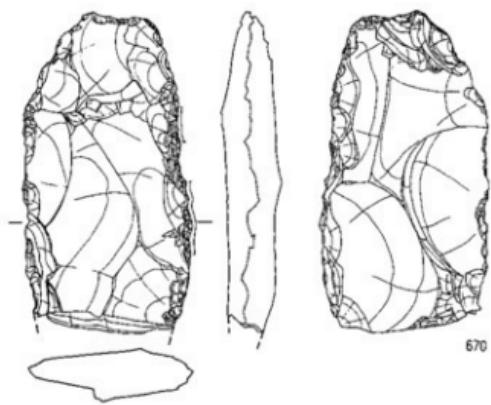
668



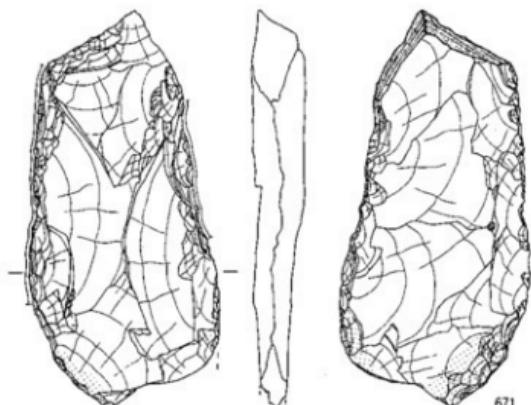
669



第139図 包含層出土遺物実測図(13)



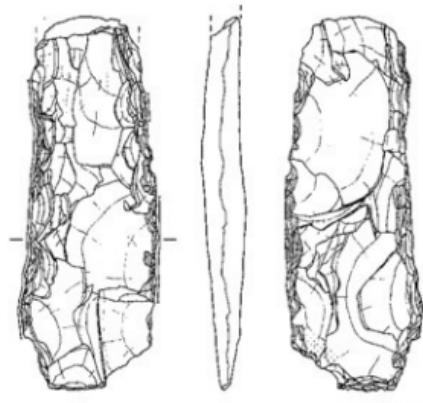
670



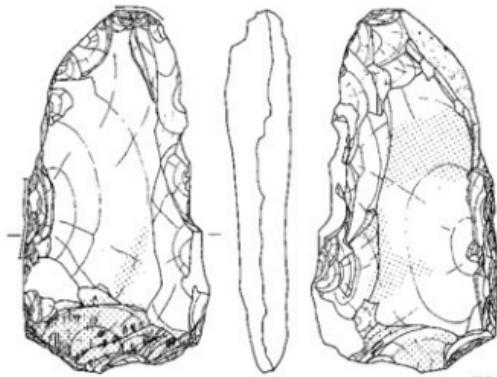
671

0 10 cm

第140図 包含層出土遺物実測図(14)



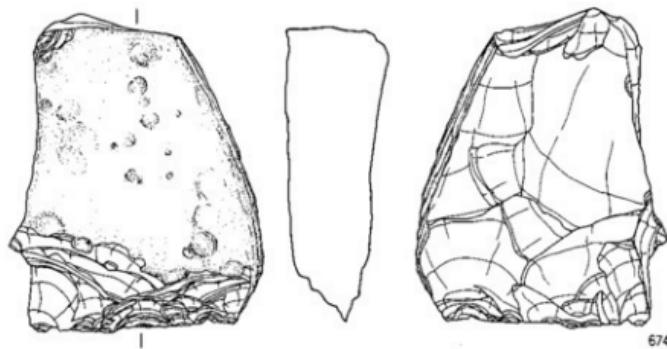
672



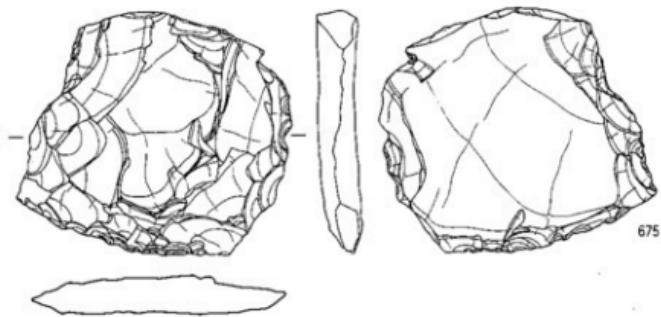
673



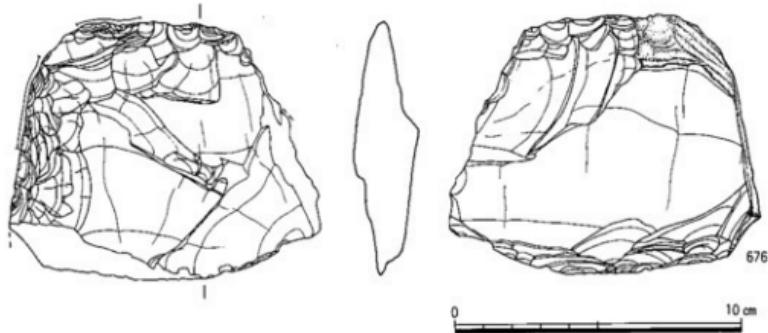
第 141 図 包含層出土遺物実測図(15)



674



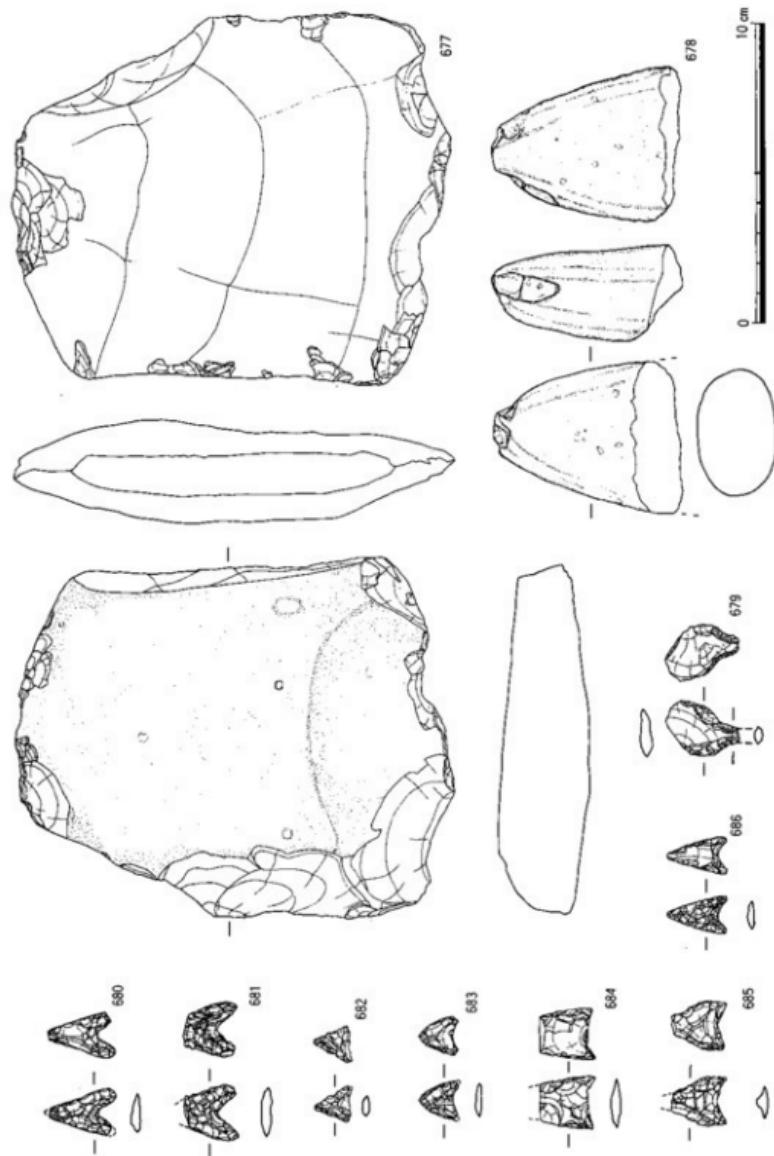
675

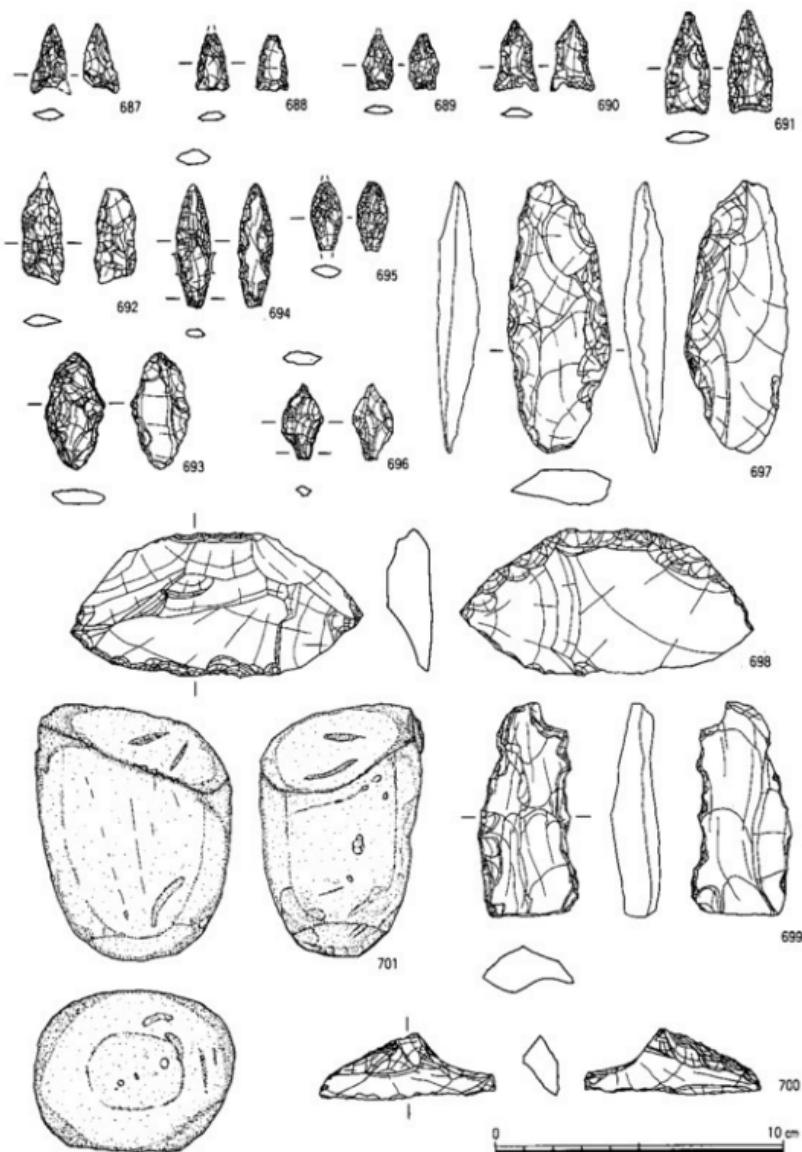


10 cm

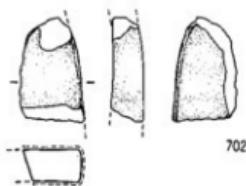
第142図 包含層出土遺物実測図(16)

第143圖 包含層出土遺物實測圖(17)

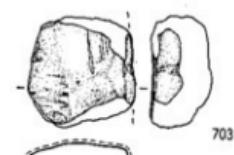




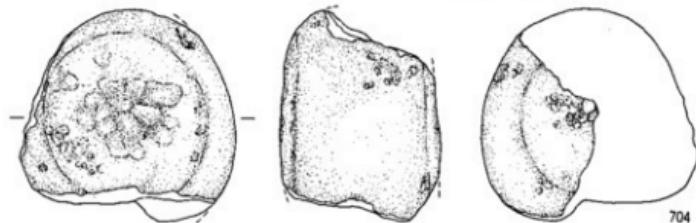
第144図 包含層出土遺物実測図(18)



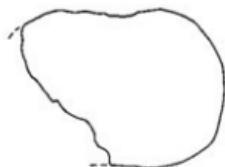
702



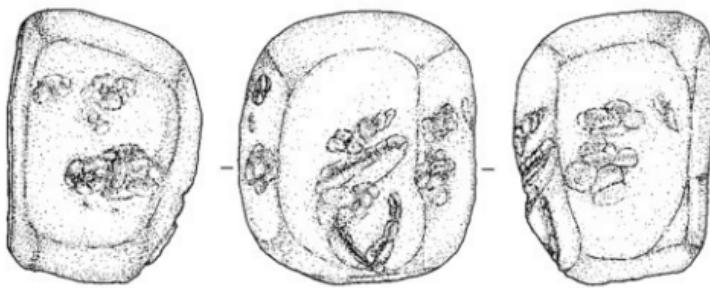
703



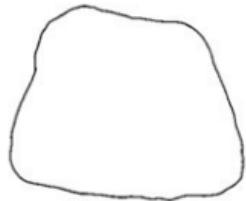
704



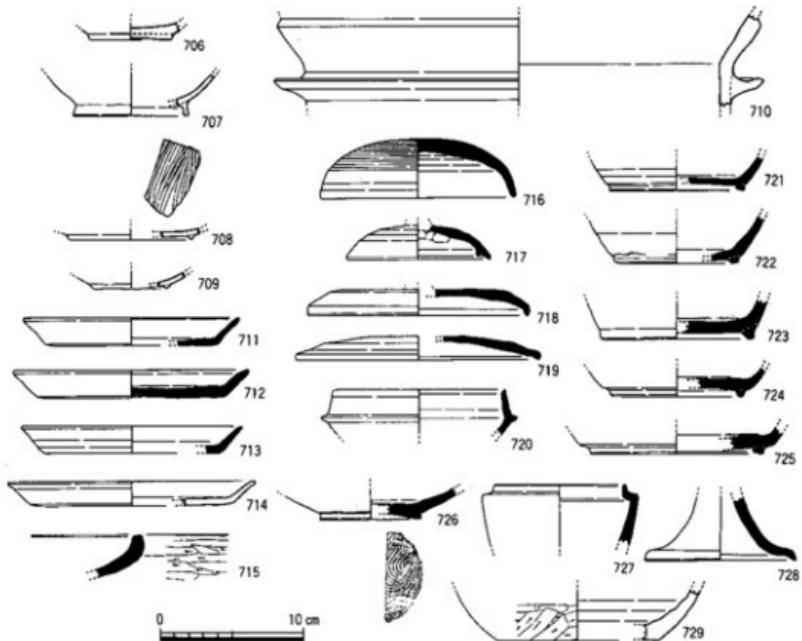
0 10 cm



705



第145図 包含層出土遺物実測図(19)



第146図 包含層出土遺物実測図(20)

第77表 包含層出土土器観察表(1)

遺物 番号	形質 分類	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	胎土	遺存度
565	縄文	深鉢				斜口尖底支 手	直底		普通	灰黄色 2.517/2	0.2~2mmの隙縫を含む石 英・長石合せ	破片
567	縄文	深鉢				斜口尖底支 手	直底		普通	灰黄色 2.517/2	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英合せ	破片
568	縄文	深鉢				斜口尖底支 手	直底		普通	浅黄色 2.517/3	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	破片
569	弥生	甕				斜口	直底	(例) 体部上 半にへり縁 比較: 竹内文	普通	灰白色 7.5185/4	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	破片
570	弥生	甕	竹			竹	指揮 比較: へり縁	普通	灰白色 2.517/2	0.1~2mmの隙縫を多目に 含む石英合せ	破片	
571	弥生	甕				原底	原底	(例) へり縁 比較	普通	灰黄色 2.517/2	0.1~2mmの隙縫を含む石 英合せ	径2/8
572	弥生	甕		8.0 cm		原底	原底		普通	灰白色 2.518/2	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	径2/8
573	弥生	甕		21.2 cm		原底	原底	(例) へり縁 比較: 3条の 隙縫	普通	灰白色 10.017/4	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	口径2/8
574	弥生	甕		16.1 cm		原底	原底	(例) へり縁 比較: 1条の 隙縫	普通	浅黄色 10.018/4	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	口径4/8
575	弥生	甕	横竹	14.8 cm		横竹	指揮	指揮	普通	明赤褐色 5185/6	0.1~2mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	口径1/8
576	92	弥生	甕	15.0 cm		竹目	指揮	指揮さえ	普通	褐色 7.5197/6	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	口径2/8
577	92	弥生	甕	17.8 cm		原底	原底	竹	普通	褐色 7.5194/6	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	7/8
578	弥生	甕		13.0 cm			指揮さえ	指揮	普通	灰白色 10.0185/4	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	口径2/8
579	弥生	甕		20.0 cm		原底	原底		普通	浅黄色 2.517/3	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	口径3/8
580	92	弥生	甕		7.0 cm	竹目	竹目	竹目	普通	灰白色 10.0187/3	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	底径3/8
581	92	弥生	甕			竹目	竹目	指揮さえ 指揮	普通	灰白色 10.0192/4	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	底径3/8
582	92	弥生	甕			竹目	竹目	竹目	普通	褐色 5177/3	0.1~1mmの隙縫を多目に 含む石英・長石合せ	底径8/9

第78表 包含層出土土器観察表(2)

番号	性質	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他の	焼成	色・調	胎	蓋存度
583	共生	盤		5.5cm	ハ目	内凹	内凹		普通	に赤い黄褐色	0.1~5mmの砂粒を多量に含む石英	底径8/8
584	共生	盤	16.5cm		ハ目	内凹	内凹		普通	に赤い黄褐色	含む石英、長石含む	口徑2/8
585	共生	盤	16.2cm		ハ目	内凹	内凹		普通	に赤い黄褐色	0.1~2mmの砂粒を多量に含む石英、長石含む	口徑1/8
586	共生	盤	16.0cm		ハ目	内凹	内凹		普通	に赤い黄褐色	0.1~3mmの砂粒を多量に含む石英、長石含む	口徑3/8
587	共生	盤	17.4cm		ハ目	内凹	内凹		普通	赤褐色2.5R7/3	0.1~1mmの砂粒を多量に含む石英、長石含む	口徑2/8
588	共生	盤	13.7cm		ハ目	内凹	内凹		普通	に赤い黄褐色	0.1~0.5mmの砂粒を少量含む石英、長石含む	口徑2/8
589	共生	盤	14.4cm		ハ目	内凹	内凹		普通	に赤い黄褐色	0.1~2mmの砂粒を多量に含む石英、長石含む	口徑1/8
590	共生	盤	15.1cm		ハ目	内凹	内凹		普通	に赤い黄褐色	0.2~0.5mmの砂粒を少量含む石英、長石含む	口徑2/8
591	共生	盤	16.2cm		横打	内凹	内凹		普通	に赤い黄褐色	0.1~1mmの砂粒を少量含む石英、長石含む	口徑1/8
592	共生	盤	18.0cm		ハ目	内凹	内凹		普通	に赤い黄褐色	0.2~3mmの砂粒を含む石英含む	口徑1/8
593	共生	盤	13.7cm		ハ目	内凹	内凹		普通	黒褐色7.5R8/4	0.2~2mmの砂粒を多量に含む石英含む	口徑3/8
594	共生	盤	13.9cm		ハ目	内凹	内凹		普通	赤褐色3.5R5/6	0.1~1mmの砂粒を少量含む石英含む	口徑2/8
595	共生	盤	11.4cm		ハ目	内凹	内凹		普通	赤褐色5.5R6/7	0.3~2mmの砂粒を多量に含む石英含む	口徑4/8
596	共生	盤			ハ目	内凹	内凹		普通	赤褐色5.5R6/7	0.1~1mmの砂粒を含む石英含む	口徑4/8
597	共生	盤	5.8cm		ハ目	内凹	内凹		普通	赤褐色2.5R7/3	0.1~4mmの砂粒を多量に含む石英含む	底径4/8
598	共生	盤	5.3cm		ハ目	内凹	内凹		普通	に赤い黄褐色	0.1~3mmの砂粒を含む石英含む	底径7/8
599	共生	盤	4.4cm		ハ目	内凹	内凹		普通	赤褐色2.5R6/4	0.2~3mmの砂粒を多量に含む石英含む	底径6/8
600	共生	盤	4.8cm		ハ目	内凹	内凹		普通	赤褐色2.5R5/7	0.1~4mmの砂粒を多量に含む石英含む	底径5/8
601	共生	盤	4.5cm		横打	内凹	内凹		普通	赤褐色2.5R5/7	0.1~3mmの砂粒を多量に含む石英含む	底径6/8
602	共生	盤	4.4cm		ハ目	内凹	内凹		普通	赤褐色3.5R6/6	0.3~2mmの砂粒を多量に含む石英含む	底径7/8
603	共生	盤	2.3cm		横打	内凹	内凹		普通	赤褐色7.5R7/4	0.3~2mmの砂粒を多量に含む石英含む	底径6/8
604	共生	盤	4.0cm		横打	内凹	内凹		普通	赤褐色5.5R7/6	0.1~1mmの砂粒を含む石英含む	底径2/8
605	共生	盤	11.6cm	5.9cm	3.4cm	横打	内凹		普通	に赤い黄褐色	0.1~5mmの砂粒を多量に含む石英含む	3/8
606	共生	盤	11.1cm	7.2cm	4.2cm	横打	内凹		普通	赤褐色2.5R7/3	0.2~1mmの砂粒を含む石英含む	5/8
607	共生	盤	13.7cm	6.9cm		内凹	内凹		普通	赤褐色5.5R7/6	0.1~3mmの砂粒を多量に含む石英含む	4/8
608	共生	高杯	14.8cm			内凹	内凹		普通	赤褐色5.5R6/8	0.2~1mmの砂粒を多量に含む石英含む	6/8
609	共生	高杯	21.0cm			内凹	内凹		普通	赤褐色2.5R7/2	0.1~4mmの砂粒を少量含む石英含む	口徑1/8
610	共生	製塙			5.0cm	横打	内凹		普通	赤褐色5.5R8/3	0.2~4mmの砂粒を多量に含む石英含む	底径8/8
611	共生	製塙			5.6cm	横打	内凹		普通	赤褐色5.5R7/4	0.1~6mmの砂粒を多量に含む石英含む	底径7/8

第79表 包含層出土石器観察表(1)

番号	性質	器種	現存径	最大幅	最大厚	重量	材質	蓋形・調査の特徴
515	石製	石盤	3.6cm	4.6cm	0.6cm	5.3kg	石質	扇形・二部式。剥離刃の一方に抜打痕あり
516	石製	石盤	3.5cm	4.1cm	0.5cm	39.3kg	石質	扇形・二部式。剥離刃の一方に抜打痕あり
514	石製	石盤	4.9cm	5.1cm	1.4cm	44.2kg	石質	扇形・二部式。剥離刃の一方に抜打痕あり
515	石製	石盤	5.4cm	4.6cm	0.8cm	30.9kg	石質	扇形・二部式。剥離刃の一方に抜打痕あり。剥離刃の一方に抜打痕あり。
516	石製	石盤	5.4cm	3.8cm	0.7cm	22.00kg	石質	扇形・二部式。剥離刃の一方に抜打痕あり。剥離刃の一方に抜打痕あり。
517	石製	石盤	4.7cm	4.5cm	0.9cm	22.1kg	石質	白色化。二部式。剥離刃の一方に抜打痕あり。
518	石製	石盤	5.0cm	4.9cm	0.9cm	56.3kg	石質	剥離刃剥離刃の一方に抜打痕あり。剥離刃の一方に抜打痕あり。
520	石製	石盤	4.6cm	3.1cm	0.9cm	31.5kg	石質	剥離刃剥離刃の一方に抜打痕あり。剥離刃の一方に抜打痕あり。
525	石製	石盤	6.7cm	4.6cm	0.9cm	36.3kg	石質	扇形・四角形。剥離刃の一方に抜打痕あり。
521	石製	石盤	5.1cm	4.0cm	0.8cm	16.7kg	石質	扇形・剥離刃の一方に抜打痕あり。
525	石製	石盤	6.7cm	3.9cm	0.9cm	23.4kg	石質	扇形・剥離刃の一方に抜打痕あり。剥離刃の一方に抜打痕あり。
523	石製	石盤	7.2cm	6.4cm	1.3cm	61.12kg	石質	白色化。剥離刃の一方に抜打痕あり。
524	石製	石盤	5.6cm	3.6cm	0.9cm	20.3kg	石質	扇形・剥離刃の一方に抜打痕あり。剥離刃の一方に抜打痕あり。
525	石製	石盤	7.4cm	3.8cm	0.5cm	25.5kg	石質	二部式剥離刃の一方に抜打痕あり。剥離刃の一方に抜打痕あり。
526	石製	石盤	7.6cm	5.2cm	0.8cm	29.3kg	石質	扇形・剥離刃の一方に抜打痕あり。
528	石製	石盤	6.9cm	5.2cm	0.8cm	31.5kg	石質	扇形・四角形。剥離刃の一方に抜打痕あり。
529	石製	石盤	8.4cm	4.6cm	1.2cm	48.3kg	石質	扇形・四角形。剥離刃の一方に抜打痕あり。
529	石製	石盤	7.7cm	5.1cm	0.8cm	42.7kg	石質	扇形・二部式。剥離刃の一方に抜打痕あり。
530	石製	石盤	3.6cm	2.5cm	0.9cm	32.8kg	石質	剥離刃に抜打痕あり。剥離刃の一方に抜打痕あり。
531	石製	石盤	7.4cm	5.5cm	1.0cm	50.9kg	石質	剥離刃に抜打痕あり。剥離刃の一方に抜打痕あり。
532	石製	石盤	7.7cm	5.3cm	0.8cm	52.1kg	石質	扇形・一部式剥離刃の一方に抜打痕あり。
533	石製	石盤	7.9cm	5.4cm	0.8cm	49.5kg	石質	一端大頭式。剥離刃の一方に抜打痕あり。
534	石製	石盤	10.5cm	6.8cm	1.5cm	116.2kg	石質	白色化。剥離刃の一方に抜打痕あり。両端に空洞あり。

第80表 包含層出土石器観察表(2)

番号	写真面	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	整形・調整の跡
635		石砲丁	8.4cm	5.2cm	0.9cm	43.28g	#38付	長側辺(背)に敲打痕あり
636	97	石砲丁	5.2cm	4.3cm	0.7cm	21.45g	結晶片岩	一部欠損、短側辺の一方に敲打痕あり
637	97	石砲丁	8.8cm	4.7cm	0.8cm	58.64g	結晶片岩	両端辺に抉りあり、長側辺(背)と両端辺に敲打痕あり
638	98	石刃(?)	8.0cm	4.1cm	0.7cm	23.67g	#38付	
639	98	石刃(?)	7.6cm	3.9cm	1.1cm	37.84g	#38付	一部欠損、長側辺(背)に敲打痕あり
640	98	石刃(?)	9.9cm	3.7cm	1.1cm	60.07g	#38付	長側辺(刃部)に敲打痕あり
641	98	石刃(?)	7.4cm	6.2cm	1.1cm	72.80g	#38付	風化、一部欠損
642	98	石刃(?)	4.8cm	4.1cm	0.9cm	13.95g	#38付	一部欠損
643	98	石刃(?)	6.4cm	5.1cm	0.6cm	22.09g	#38付	
644	98	石刃(?)	6.8cm	3.8cm	0.6cm	24.08g	#38付	風化
645	98	石刃(?)	6.7cm	5.2cm	0.9cm	29.34g	#38付	風化、一部欠損
646	98	石刃(?)	3.3cm	5.0cm	0.9cm	18.06g	#38付	一部欠損
647	98	石刃(?)	5.7cm	6.4cm	1.0cm	43.45g	#38付	白色風化、一部欠損
648		石刃(?)	8.5cm	5.3cm	1.4cm	49.59g	#38付	風化
649	99	石刃(?)	6.2cm	8.2cm	1.2cm	72.88g	#38付	
650	99	石刃(?)	8.9cm	6.2cm	0.7cm	37.90g	#38付	一部欠損
651	99	石刃(?)	8.8cm	10.1cm	1.6cm	229.05g	#38付	風化、長側辺(背)と短側辺の一方に敲打痕あり
652	99	石刃(?)	8.8cm	7.0cm	1.8cm	155.79g	#38付	風化、653と接合可能
653	99	石刃(?)	9.4cm	7.0cm	1.8cm	142.00g	#38付	風化、652と接合可能
654	101	石砲	6.0cm	2.8cm	0.7cm	12.44g	#38付	風化
655	101	石砲	3.6cm	4.0cm	0.4cm	4.78g	#38付	風化、一部欠損
656	100	石歯	8.0cm	6.6cm	1.6cm	84.58g	#38付	刃部欠損、両側辺に敲打痕あり。両面に磨滅あり
657	100	石歯	5.9cm	5.6cm	1.6cm	62.69g	#38付	風化、基部・刃部欠損、両側辺に敲打痕あり
658		石歯	8.1cm	6.5cm	1.5cm	80.97g	#38付	風化、基部・刃部欠損、短側辺に敲打痕あり
659	100	石歯	5.0cm	5.3cm	1.4cm	48.24g	#38付	風化、刃部欠損、右側辺に敲打痕あり
660		石歯	5.6cm	2.8cm	1.5cm	21.14g	#38付	白色風化、基部欠損
661	100	石歯	5.2cm	5.4cm	1.1cm	35.08g	#38付	基部欠損
662	100	石歯	7.1cm	7.1cm	2.1cm	102.81g	#38付	白色風化、基部欠損
663		石歯	6.6cm	7.8cm	1.5cm	133.10g	#38付	風化、刃部欠損、両側辺に敲打痕あり
664	100	石歯	5.2cm	7.5cm	1.9cm	111.08g	#38付	白色風化、基部・刃部欠損、両側辺に敲打痕あり、片面に磨滅あり
665	100	石歯	6.4cm	3.6cm	1.3cm	24.99g	#38付	風化、基部欠損、刃部両面に磨滅・擦痕あり
666	101	石歯	8.1cm	4.2cm	0.8cm	37.67g	#38付	風化、基部欠損、刃部両面に磨滅・擦痕あり
667	101	石歯	10.2cm	9.5cm	1.5cm	157.18g	安山岩	白色風化、基部欠損
668	101	石歯	10.2cm	4.5cm	1.2cm	51.53g	#38付	風化、基部欠損、刃部片面に磨滅・擦痕あり
669	101	石歯	10.3cm	4.7cm	1.7cm	99.05g	#38付	両側辺に敲打痕あり、刃部片面に磨滅あり
670	102	石歯	10.9cm	5.8cm	1.9cm	144.66g	#38付	白色風化、刃部欠損、右側辺に敲打痕あり、刃部片面に磨滅あり
671	102	石歯	13.0cm	6.5cm	1.8cm	163.06g	#38付	白色風化、刃部欠損、両側辺に敲打痕あり、刃部片面に磨滅あり、刃部片面に擦痕あり
672	102	石歯	12.6cm	4.6cm	1.4cm	97.37g	#38付	風化、基部欠損、両側辺に敲打痕あり、刃部片面に磨滅あり
673	102	石歯	12.3cm	6.5cm	2.3cm	211.85g	#38付	白色風化、左側辺に敲打痕あり。刃部両面に磨滅あり、刃部片面に擦痕あり
674		打製石斧	10.8cm	8.8cm	3.5cm	437.18g	#38付	白色風化
675	102	打製石斧	8.4cm	8.9cm	1.3cm	137.66g	#38付	白色風化
676	102	打製石斧	8.8cm	10.7cm	2.2cm	253.64g	#38付	白色風化、一部欠損。長側辺(背)と左側辺に敲打痕あり
677		打製石斧	15.1cm	12.3cm	3.4cm	841.51g	安山岩	風化
678	103	磨製石斧	6.5cm	5.1cm	2.7cm	135.50g	石英粗面岩	刃部欠損
679		石斧	2.5cm	1.8cm	0.4cm	1.53g	#38付	風化、先端部欠損
680	103	石斧	2.3cm	1.6cm	0.3cm	0.68g	#38付	風化、凹凸式、基部の一端・先端部欠損
681		石斧	1.7cm	1.9cm	0.3cm	1.10g	#38付	風化、凹凸式、先端部欠損
682	103	石斧	1.3cm	1.3cm	0.2cm	0.26g	#38付	風化、平底式
683	103	石斧	1.3cm	1.3cm	0.2cm	0.31g	#38付	風化、凹凸式、基部の一部欠損
684	103	石斧	1.8cm	1.8cm	0.3cm	1.33g	#38付	凹凸式、先端部欠損
685	103	石斧	2.0cm	1.7cm	0.4cm	0.90g	#38付	凹凸式、先端部欠損
686	103	石斧	2.1cm	1.3cm	0.2cm	0.50g	#38付	白色風化、凹底式
687		石斧	2.3cm	1.3cm	0.3cm	0.60g	#38付	風化、凹底式、基部の一部欠損
688	103	石斧	1.9cm	1.1cm	0.3cm	0.62g	#38付	風化、平底式、先端部欠損
689	103	石斧	1.8cm	1.1cm	0.3cm	0.53g	#38付	風化、平底式、先端部欠損

第81表 包含層出土石器観察表(3)

番号	年月	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	基形・調整の特徴	
								風化	手縫式
690	103	石鏡	2.4 cm	1.5 cm	0.3 cm	0.82g	9254	風化	手縫式
691	103	石鏡	3.4 cm	1.5 cm	0.3 cm	1.78g	9254	風化	手縫式
692	103	石鏡	3.2 cm	1.4 cm	0.4 cm	2.06g	9254	風化	手縫式、先端部欠損
693	103	石鏡	4.1 cm	2.0 cm	0.5 cm	4.61g	9254	風化	
694	103	石鏡	4.2 cm	1.2 cm	0.5 cm	2.56g	9254	風化	縫製式、両長辺に裁打痕あり
695	103	石鏡	2.3 cm	1.1 cm	0.4 cm	0.88g	9254	風化	縫製式、基部・先端部欠損
696	103	石鏡	2.7 cm	1.4 cm	0.4 cm	1.63g	9254	白色風化	凸縫式
697	104	石鏡	9.4 cm	3.5 cm	1.4 cm	38.96g	9254	白色風化	
698	104	アラマニ	9.9 cm	5.0 cm	1.5 cm	77.52g	9254		
699	不明		7.4 cm	3.3 cm	1.6 cm	36.46g	9254	風化	
700		柳葉剣片	6.1 cm	2.2 cm	1.2 cm	11.14g	9254		
701		扇形石	6.7 cm	6.5 cm	5.6 cm	497.96g	便山岩		
702		扇形石	3.4 cm	2.2 cm	1.1 cm	14.52g	扇石	一部欠損、両面に摩滅あり	
703		扇形石	3.7 cm	3.7 cm	2.1 cm	35.19g	扇石	一部欠損、片面に摩滅あり	
704	104	白石	6.9 cm	7.4 cm	5.4 cm	352.00g	砂岩	一部欠損	
705		白石	9.4 cm	8.3 cm	6.6 cm	783.23g	砂岩	一部欠損	

第82表 包含層出土土器観察表(3)

番号	年月	器種	口径	器高	底径	外面	内面	その他	焼成	色調	胎土	遺存度
										普通	灰白色/2	酸密
706		土師器 环			5.8 cm	フ	素地		普通	灰白色 0108/2		底径 5/8
707		土師器 瓢			8.0 cm	素地	素地		普通	にぼい 灰褐色	微密	底径 1/8
708		泥色土器 瓢			8.4 cm	素地	ハリキ	縫合部	普通	黒褐色 0107/5	0.2~1mmの砂粒を少量含む	底径 2/8
709		瓦器 瓢			5.0 cm	素地	素地		普通	黒褐色 0121/1	微密	底径 2/8
710		土師質 土 釜			フ	フ	フ		普通	黒褐色 0105/5	0.1~2mmの砂粒を多量に含む	破片
711		須恵器 釜	14.9 cm	2.0 cm	11.9 cm	回転フ	回転フ	回転ヘタ切 丸	普通	灰褐色 0105/5	0.1mm以下の砂粒を少量含む	底径 1/8
712		須恵器 釜	16.0 cm	1.9 cm	12.9 cm	回転フ	回転フ	回転ヘタ切 丸	普通	灰褐色 0106/6	0.5mm以下の砂粒を少量含む	底径 3/8
713		須恵器 釜	15.2 cm	1.9 cm	12.0 cm	回転フ	回転フ		やや	灰褐色	0.1mm以下の砂粒を少量含む	底径 1/8
714		土師器 釜	17.0 cm	1.7 cm	14.0 cm	素地	素地	回転ヘタ切 丸	普通	灰褐色 2.518/2	0.3~1mmの砂粒を少量含む	口径 1/8
715		須恵器 瓢			フ	前り	フ		やや	灰褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	破片
716	104	須恵器 环	13.4 cm	4.0 cm	9.7 cm	回転フ	回転フ	回転ヘタ切 丸	良好	灰白色 0107/7	0.8mm以下の砂粒を少量含む	7/8
717		須恵器 瓢	10.0 cm		8.4 cm	前り	回 転フ	回 転ヘタ 切 丸上 げ	良好	青灰色 0106/1	0.1mm以下の砂粒を少量含む	4/8
718		須恵器 环	15.2 cm		12.0 cm	回転フ	フ		良好	灰白色 0106/6	0.1mm以下の砂粒を少量含む	2/8
719		須恵器 瓢	16.8 cm	1.6 cm	14.0 cm	回転フ	回転フ		良好	灰褐色	0.1mm以下の砂粒を少量含む	2/8
720		須恵器 环	11.8 cm		9.8 cm	回転フ	自	回転フ	良好	灰褐色	0.3mm以下の砂粒を少量含む	口徑 1/8
721		須恵器 高 台付			11.4 cm	回転フ	回転フ		良好	灰色	1mm以下の砂粒を含む	底径 3/8
722		須恵器 高 台付			8.6 cm	回転フ	回転フ		普通	灰褐色 7.517/1	1mm以下の砂粒を含む	底径 2/8
723		須恵器 高 台付			10.6 cm	回転フ	回転フ	自	良好	灰褐色 0107/1~ 0108/1	1mm以下の砂粒を少量含む	底径 1/8
724		須恵器 高 台付			9.2 cm	回転フ	ナ	回転フ	普通	灰褐色 7.517/1	0.3mm以下の砂粒を少量含む	底径 3/8
725		須恵器 高 台付			11.9 cm	回転フ	回転フ	ナ	やや	灰褐色 0107/1~ 0108/1	0.5mm以下の砂粒を少量含む	底径 1/8
726	104	須恵器 瓢			7.0 cm	回転フ	回転フ	回転系切り	良好	灰白色 0107/1~ 0108/1	精良	底径 3/8
727		須恵器 釜	9.0 cm		7.0 cm	回転フ	自	回転フ	良好	灰色 0106/6	0.3mm以下の砂粒を少量含む	口径 2/8
728		須恵器 釜 环			10.4 cm	回転フ	回転フ		良好	灰白色 0107/1~ 0108/1	0.5mm以下の砂粒を含む	底径 7/8
729		陶器 釜			11.1 cm	前り	回転フ		良好	灰褐色 7.518/2~ 0108/1	0.1~1mmの砂粒を含む	底径 1/8

第4章 自然科学調査の成果

第1節 川津下樋遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、川津下樋遺跡 S Z 01（水田址）における稻作跡の検証および探査を試みたものである。

2. 試 料

調査地点は、IV-①区東壁の第1地点と西壁の第2、3地点の3地点である。試料は、第1地点で仮⑪・仮⑫層、第2地点（第67図）で⑧・⑨・⑪～⑭層、第3地点で仮⑧・仮⑩層の計10試料が採取された（第7図）。このうち、⑭層は弥生時代中期以前（縄文時代晚期？）の水田耕土とされ、⑫層および⑬層は水田畦畔と考えられていた。なお、試料は遺跡の調査担当者によって採取され、当研究所に送付されたものである。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の乾燥（105℃・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスピーブ添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42kHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

(7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が300以下になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原、1987）。

4. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を第83表および第147図～150図に示す。なお、稻作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ・ヨシ属・タケ亜科・ウシクサ族（ススキやチヌガヤなどが含まれる）・キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5種類群に限定した。卷末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考 察

水田址（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稻作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、稻作の可能性について検討を行った。

当該遺跡では、⑧・⑨・⑪～⑭・仮⑧・仮⑩～仮⑫層について分析を行った。その結果、⑬層を除く各層からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、水田耕土とされていた⑭層では、プラント・オパール密度が6,000個/gと高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって同層で稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。水田畦畔とされていた⑫層でもイネのプラント・オパールが検出されたが、密度は2,600個/gと比較的低い値である。また、同じく水田畦畔とされていた⑬層では、イネのプラント・オ

パールは検出されなかった。一般に小畦畔であれば、畦塗りや作り変えにおいて水田土壌そのものが畦に使われることから、畦畔からイネのプラント・オパールが検出されるが、大畦畔あるいは水路に伴う畦畔であれば検出されないか、検出されても非常に少量であるというのが通例である。このことから、これらは⑩層水田に伴う畦畔（小畦畔、大畦畔）に該当する可能性が考えられる。

その他の層については、密度が900～1,900個/gと低い値であることから、稲作の可能性は考えにくいものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

6. まとめ

発掘調査において弥生時代中期以前（縄文時代晚期？）の水田耕作土と考えられていた⑩層では、イネのプラント・オパールが高い密度で検出された。同層で稲作が行われていたことが分析的にも検証された。⑪層以外にも分析を行ったほとんどの層からイネのプラント・オパールが検出されたが、いずれも密度が低い値であることから、稲作跡の可能性は考え難い。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志. 1987. 川口市赤山陣家跡遺跡におけるプラント・オパール分析. 赤山－古環境編一. 川口市遺跡調査会報告, 第10集, 281-298.
- 藤原宏志. 1976. プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9: 15-29.
- 藤原宏志. 1979. プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ (*O. sativa L.*) 生産総量の推定－. 考古学と自然科学, 12: 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二. 1984. プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学, 17: 73-85.

第83表 プラント・オバール分析結果

香川県、川津下樋遺跡

第3地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粗総量) t/10 a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
仮⑧層	45	8	1.14	900	0.82	2,900	261,600	1,900	0
仮⑩層	53	18	1.19	900	1.85	900	305,300	2,700	0

第2-1地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粗総量) t/10 a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
⑬層	63	10	0.95	0	0.00	800	200,300	800	0

第2-2地点①

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粗総量) t/10 a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
⑧層	62	8	1.11	1,800	1.57	900	37,700	900	0
⑪層	76	4	1.22	900	0.41	900	55,900	0	0

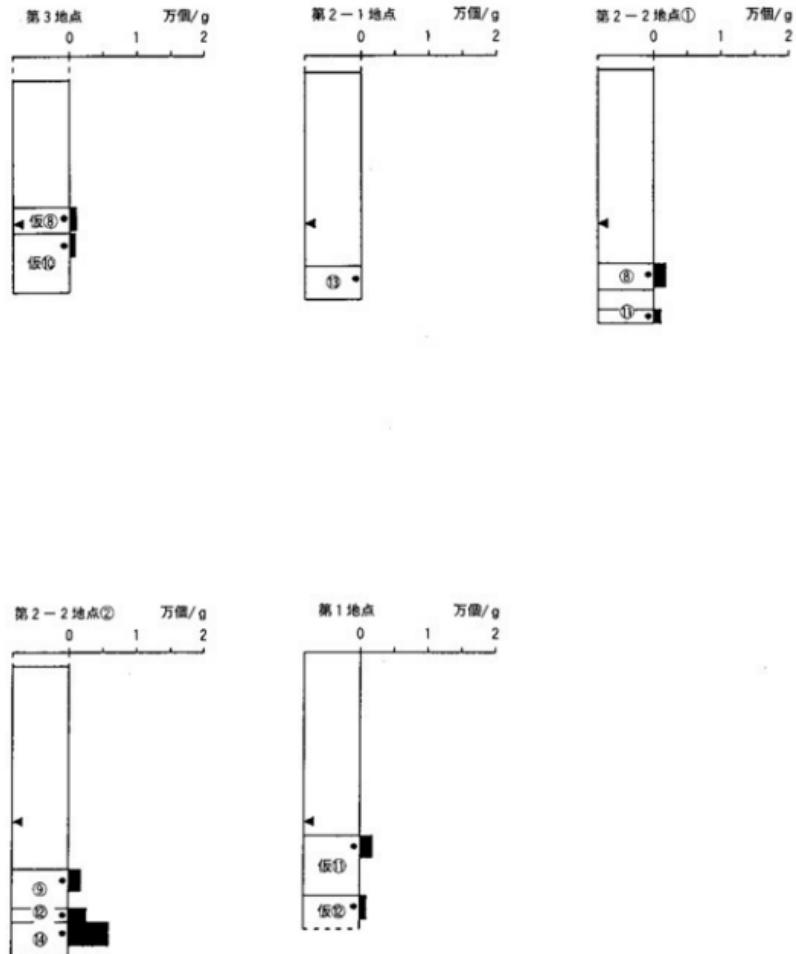
第2-2地点②

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粗総量) t/10 a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
⑨層	64	12	1.23	1,900	2.84	900	38,700	1,900	0
⑫層	76	4	1.11	2,600	1.15	800	102,000	1,700	0
⑬層	80	—	0.90	6,000	—	2,000	139,600	2,000	0

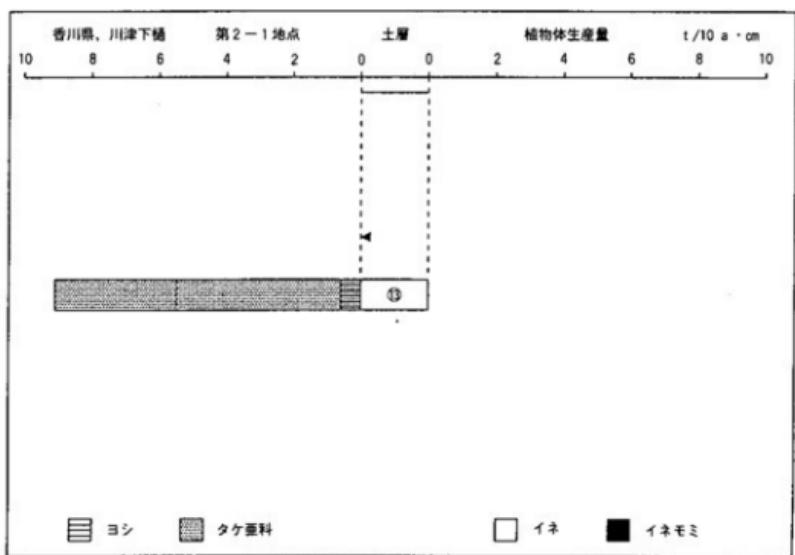
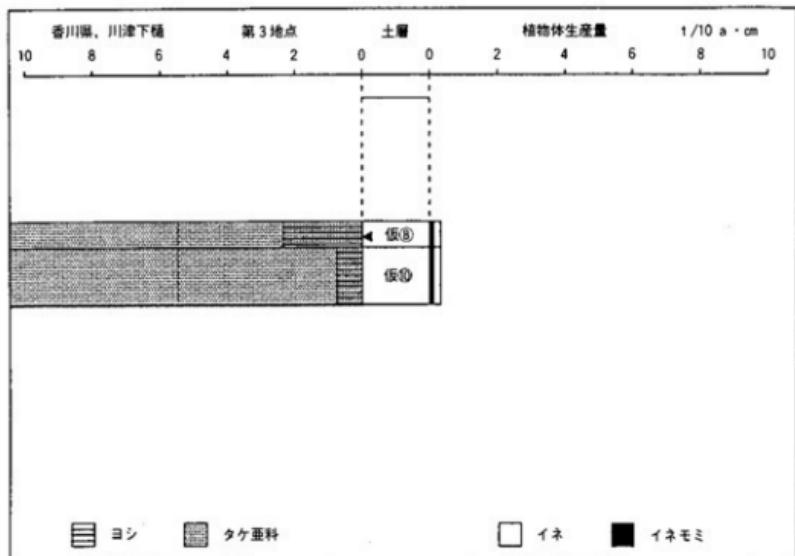
第1地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粗総量) t/10 a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
仮⑪層	54	18	1.10	1,900	3.71	1,900	129,500	1,900	0
仮⑫層	72	—	0.75	900	—	1,900	182,500	1,900	0

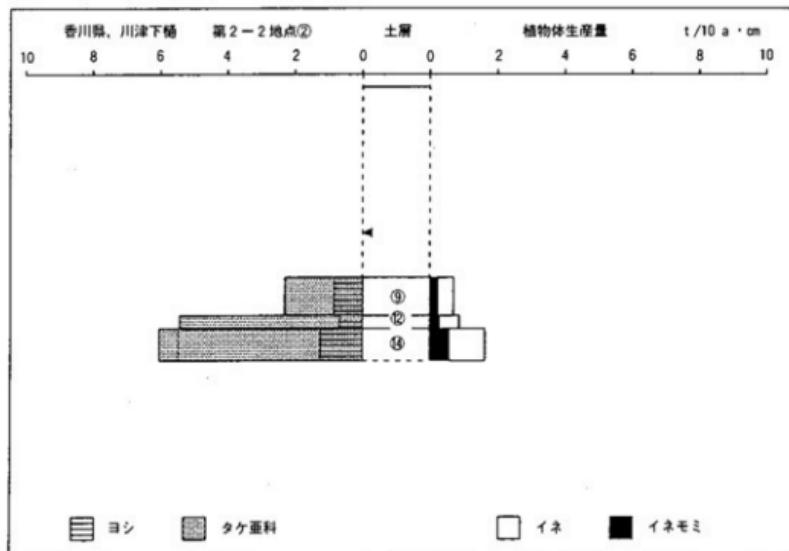
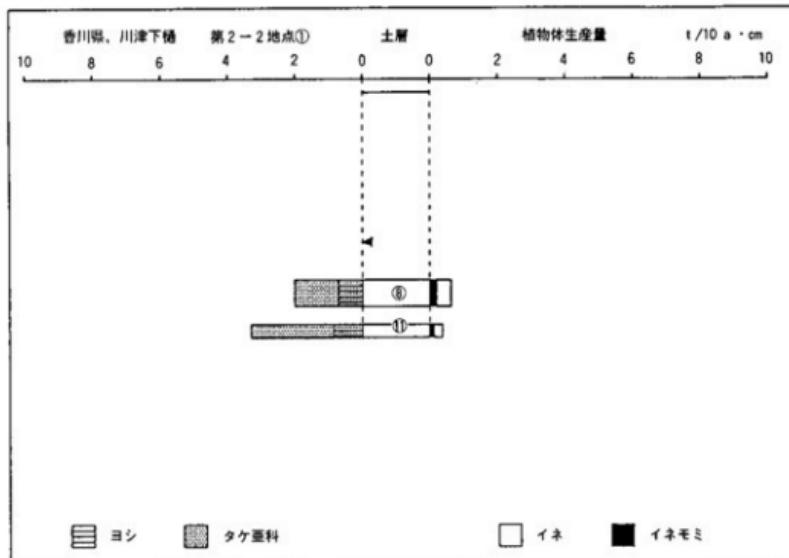
(仮⑧・仮⑩～仮⑫層は調査時の土層番号であり、当報告書では概当する土層図は存在しない)



第147図 イネのプラント・オバールの検出状況
(注) ◀印は50cmのスケール。●印は分析試料の採取箇所

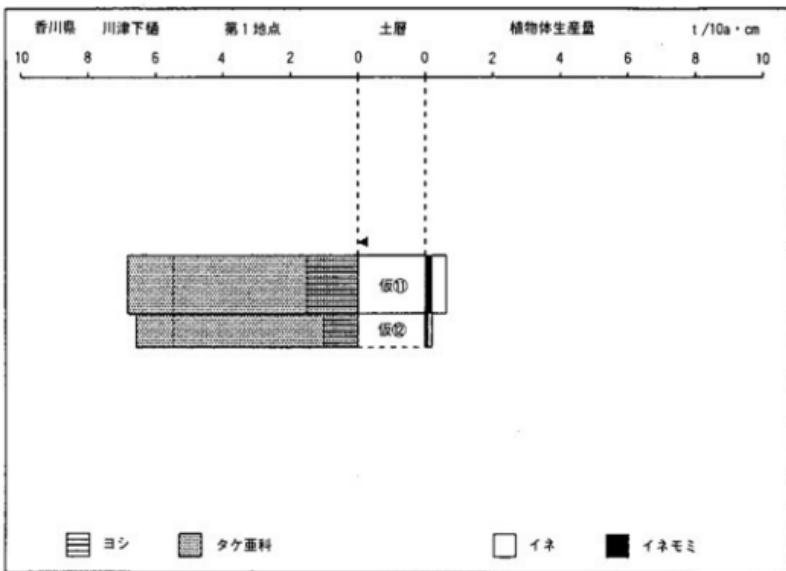


第148図 おもな植物の推定生産量と変遷(1)
 (注) ◀印は50cmのスケール



第149図 おもな植物の推定生産量と変遷(2)

(注) ◀印は50cmのスケール

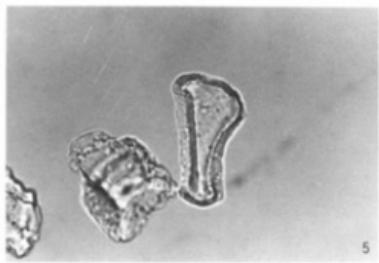
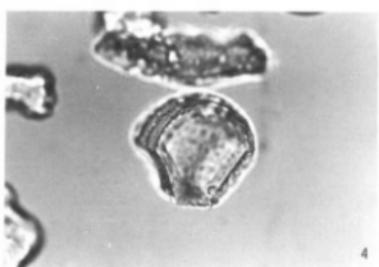
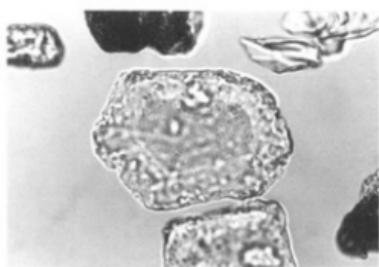


第150図 おもな植物の推定生産量と変遷(3)

(注) ◀印は50cmのスケール

川津下植遺跡から検出されたプラント・オパールの顕微鏡写真

No.	分類群	地点	試料名	倍率
1	イネ	第2	⑯層	400
2	イネ	第2	仮⑯層	400
3	ヨシ属	第3	⑪層	400
4	タケ亜科 (ネザサ節など)	第3	⑪層	400
5	不明 (ウシクサ族類似)	第2	⑯層	400
6	樹木起源	第2	仮⑯層	400



第151図 プラント・オバールの顕微鏡写真

第2節 川津下樋遺跡における植物性遺物の同定

〈目 次〉

はじめに.....	p.174
1. 試料	
(1)木質遺物	p.174
(2)植物遺体	p.174
2. 方法	
(1)木質遺物	p.174
(2)植物遺体	p.175
3. 結果	
(1)木質遺物	p.175 ~ p.178
(2)植物遺体	p.178 ~ p.179
4. 考察.....	
引用文献.....	p.180

〈図表一覧〉

第84表 樹種同定結果(1).....	p.176
第85表 樹種同定結果(2).....	p.177
第86表 植物遺体の同定結果	p.179
第152図 樹種顕微鏡写真(1).....	p.181
第153図 タ (2).....	p.182
第154図 タ (3).....	p.183
第155図 タ (4).....	p.184
第156図 植物遺体	p.185

川津下樋遺跡における植物性遺物の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

川津下樋遺跡が位置する丸亀一坂出平野周辺地域では、下川津遺跡や郡家一里屋遺跡で過去の植物利用に関する検討が行われている（島池・林、1990；能城・鈴木、1990a；古市、1990；パリノ・サーヴェイ株式会社、1993）。また、古植生や稻作に関する検討が下川津遺跡および永井遺跡で行われている（藤原、1990；古環境研究所、1990a, 1990b；パリノ・サーヴェイ株式会社、1990；能城・鈴木、1990）。これらの調査から、本地域における縄文時代以降の植生変遷や人間の生業に関する情報が蓄積されつつある。とくに、過去の木材利用に関しては大量の木製品を対象として樹種同定が実施されている。その結果をみると、流通を示唆するような樹種はほとんど認められず、周辺に生育していた樹木を利用していたことが推定される。

本報告では、川津下樋遺跡から出土した弥生時代前期の水田に伴う井堰の構築材および井堰内から検出された植物遺体（種子・葉）の種類を明らかにし、周辺植生及び植物利用に関する情報を得る。

1. 試 料

（1）木質遺物

試料は、弥生時代前期の水田址に伴う堰（井堰）の構築部材58点（No.1～58）である。

（2）植物遺体

試料は、井堰内の土壤中から一括採取されたものである。室内における観察の結果、種実遺体は41点および葉1点を抽出した。

2. 方 法

（1）木質遺物

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレバラートを作製した。プレバラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類の同定を行った。

(2) 植物遺体

植物遺体については、双眼実態顕微鏡を用いて観察し、その形態的特徴から種類を同定した。同定後は、種実は種類ごとにサンプル瓶に入れ40%エタノール中に保存し、葉はエタノール浸したワイパーに包みプラスチックケースに入れて保存した。

3. 結 果

(1) 木質遺物

同定結果を第84・85表に示す。No 5, 25の2点は保存状態が良好でなく、観察できた範囲で木材の種類を記した。その他の試料は針葉樹1種類（ヒノキ属近似種）と広葉樹11種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・エノキ属・ニレ属・ヤマグワ・タブノキ属・クスノキ科・ムクロジ・エゴノキ属・イボタノキ属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。なお、学名・和名は基本的に「原色日本植物図鑑本文編〈I・II〉」（北村・村田、1971, 1979）にしたがった。

・ヒノキ属近似種 (*cf. Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科

試料の保存が良好ではなく、板面の切片が作成できなかった。早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、放射柔細胞の壁は滑らかである。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～15細胞高。以上の特徴からヒノキ属と推定されるが、特定には至らなかった。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.) ブナ科

環孔材で孔圈部は1～3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。年輪界は明瞭。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織がある。年輪界は不明瞭。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔圈部は1～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～

第84表 樹種同定結果(1)

番号	遺構名・遺物名	時代	樹種名	報文番号
1	III-② SR-01' 第2井堰 杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	86
2	III-② SR-01' 第2井堰 杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	95
3	III-② SR-01' 第2井堰 杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	83
4	III-② SR-01' 第2井堰 杭	弥生時代前期	クスノキ科	96
5	III-② SR-01' 第2井堰 杭	弥生時代前期	広葉樹	89
6	III-② L-32 SR-01 墓灰色シルト 杭	弥生時代前期	ヒノキ属近似種	110
7	第2井堰部材 №121	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	105
8	第2井堰部材 №113	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	98
9	第2井堰部材 №103	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	104
10	第2井堰部材	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	85
11	第2井堰部材	弥生時代前期	エゴノキ属	92
12	第2井堰部材 №44	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	84
13	第2井堰部材 №95	弥生時代前期	クスノキ科	112
14	第2井堰部材 №62-1	弥生時代前期	イボタノキ属	93
15	第2井堰部材 №55-1	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	99
16	第2井堰部材	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	100
17	第2井堰 №54	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	-
18	III-② SR-01' 第2井堰 杭⑥	弥生時代前期	イボタノキ属	109
19	III-② SR-01' 第1井堰 杭	弥生時代前期	ムクロジ	61
20	第2井堰 杭 №34	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	87
21	第2井堰 №86-2	弥生時代前期	エノキ属	-
22	第2井堰 №79	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	-
23	III-② SR-01' 第1井堰 №15 杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	65
24	III-② SR-01' 第1井堰 №5-2 杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	74
25	III-② SR-01' 第1井堰 №6 杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	63
26	III-② SR-01' 第1井堰 №10 杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	62
27	III-② SR-01' 第1井堰	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	72
28	III-② SR-01' 第1井堰 №9 矢板杭	弥生時代前期	広葉樹	77
29	III-② SR-01' 第1井堰 №4 杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	71
30	III-② SR-01' 第2井堰 杭	弥生時代前期	コナラ属アカガシ亜属	94
31	III-② SR-01' 第1井堰	弥生時代前期	タブノキ属	70
32	III-② SR-01' 第2井堰 №138 杭	弥生時代前期	コナラ属アカガシ亜属	91
33	III-② SR-01' 第2井堰 №10	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	-
34	III-② SR-01' 第2井堰 №18	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	-
35	III-② SR-01' 第2井堰 №18	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	-
36	III-② SR-01' 第2井堰 №42	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	-
37	III-② SR-01' 杭 №3	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	111
38	III-② SR-01'	弥生時代前期	ニレ属	-
39	III-② SR-01'	弥生時代前期	ヤマグワ	-
40	III-② SR-01' 第2井堰部材 №30	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	102
41	第1井堰 №16-1 杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	75
42	III-② SR-01' 第1井堰 №2 杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	76
43	III-② SR-01' 第1井堰	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	64
44	III-② SR-01' 第1井堰 №16-2 杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	67
45	III-② SR-01' 第1井堰	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	69
46	III-② SR-01' 第1井堰 №12 杭	弥生時代前期	コナラ属アカガシ亜属	73
47	III-② SR-01' 第1井堰 №3 杭	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	60

第85表 樹種同定結果(2)

番号	遺構名・遺物名	時代	樹種名	報文番号
48	Ⅲ-② SR-01' 第2井堰	弥生時代前期	コナラ属アカガシ亜属	88
49	Ⅲ-② SR-01' 第2井堰 No.146 杖	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	103
50	Ⅲ-② SR-01' 第2井堰 No.137	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	101
51	Ⅲ-② SR-01' 第1井堰 No.92	弥生時代前期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	66
52	Ⅲ-② SR-01' 第1井堰 No.24	弥生時代前期	コナラ属アカガシ亜属	68
53	Ⅲ-② SR-01' 第2井堰 板材	弥生時代前期	ムクロジ	97
54	Ⅲ-② SR-01' 第2井堰 柱材	弥生時代前期	ヤマグワ	106
55	Ⅲ-② SR-01' 第2井堰 杖	弥生時代前期	クリ	107
56	堅穴住居柱材転用 No.2 杖	弥生時代前期	ヤマグワ	108
57	Ⅲ-② SR-01' 第2井堰	弥生時代前期	コナラ属アカガシ亜属	90
58	Ⅲ-② SR-01' 第1井堰 No.7	弥生時代前期	ヤマグワ	78

15細胞高。年輪界は明瞭。

・エノキ属 (*Celtis* sp.) ニレ科

環孔材で孔圈外は1~3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の文様をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1~15細胞幅、1~50細胞高で鞘細胞をもつ。年輪界は明瞭。

・ニレ属 (*Ulmus* sp.) ニレ科

環孔材で孔圈部は1~3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の文様をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~6細胞幅、1~40細胞高。年輪界は明瞭。

・ヤマグワ (*Morus australis* poiret) クワ科クワ属

環孔材で孔圈部は1~5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は蜜に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ~Ⅲ型、1~6細胞幅、1~50細胞高で、しばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

・タブノキ属 (*Persea* sp.) クスノキ科

散孔材で管壁は厚く、横断面では橢円形、単独および2~3個が放射方向に複合する。道管は単および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ~Ⅱ型、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。年輪界は明瞭。

・クスノキ科 (Lauraceae sp.)

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独まれに2~3個が放射方向に複合する。道管は單穿孔または階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔細胞には油細胞が認められる。年輪界はやや明瞭。

クスノキ科には、クスノキ属 (*Cinnamomum*)、タブノキ属 (*Persea*) 等8属23種が自生する。これらの材構造は、クスノキを除いて互いによく似ており、分類することが困難であることが多い。今回の試料は、クスノキおよびタブノキ属以外のクスノキ科であるが、種類の特定には至らなかった。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

環孔材で孔圈部は1列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~3細胞幅、1~40細胞高。柔組織は周囲状~連合翼状、帶状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

・エゴノキ属 (*Styrox* sp.) エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、2~4個が複合または単独で、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性II型、1~3細胞幅、1~20細胞高。年輪界は明瞭。

・イボタノキ属 (*Ligustrum* sp.) モクセイ科

環孔性を帯びた散孔材。年輪のはじめにやや大型の道管が1列に配列し、急激に管径を減じた道管が均一に分布する。道管は單穿孔を有し、道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性II型、1~2細胞幅、1~20細胞高。年輪界はやや不明瞭。

(2) 植物遺体

同定結果を第86表に示す。以下には形態的特徴について示す。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) ブナ科

果実と葉の一部が検出された。果実は卵円形で、穀斗つきの大きさは約15~18mm、未熟果は5~7mm程度。総苞片は合着して環状となる。果実はアクリ抜きをすれば食用となる。

葉は倒披針形であるが、基部から2/3程度は失われていると考えられる。検出された部分には鋭い鋸歯が認められる。3次脈が2次脈の間をほぼ平行に、等間隔で結ばれていることを考慮すると、イチイガシ (*Q. giva* Blume) の可能性が高いが、断定には至らなかった。

・クスノキ科 (Lauraceae sp.)

種子が検出された。黒～茶褐色で、径5～6.5mmの球形。種皮は堅く薄く、表面は平滑なものとやや粒状の模様をもつものがある。

・サクラ属 (*Prunus* sp.) バラ科

核（内果皮）が検出された。褐色で大きさ6.7 mmの偏平な卵形。表面は比較的平滑。

・ヒヨウタン類 (*Lagenaria* sp.) ウリ科

外果皮の一部が検出された。褐色、肉厚で弾力がある。

第86表 植物遺体の同定結果

種類名	部位(点数)
コナラ属アカガシ亜属	果実(11)、葉(1)
コナラ属	果実(5)
クスノキ科	種子(11)
サクラ属	種子(1)
ヒヨウタン類?	外果皮(1)
不明種子	種子(6)
同定不能	樹皮?(2)、他(4)
合計	42点

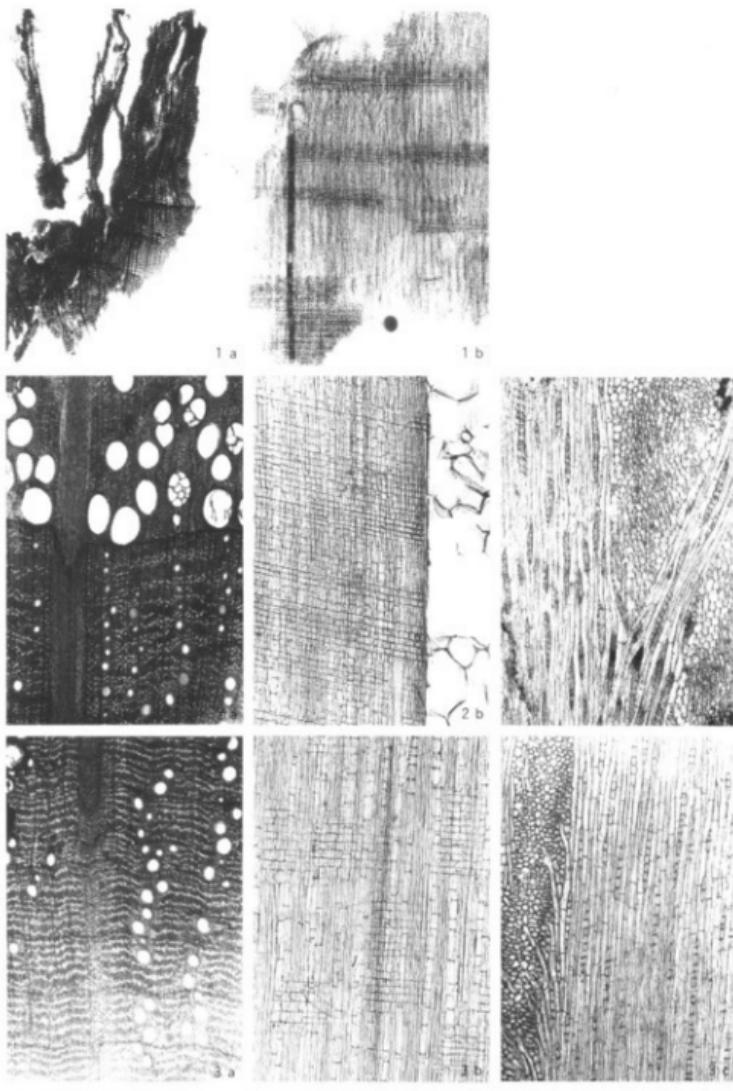
4. 考 察

堰の構築部材には12種類の木材が認められ、クヌギ節の木材が最も多かった。井堰の構築材という用途、構成する種類数が多いこと、転用材が含まれていること等を考慮すると、使用する木材に特定の種類があったのではなく、主として周辺に生育していた樹木や流木等が使用されたと推定される。また時には、壊れるなどして不要となった建築材や木製品も転用されていたのであろう。これまで香川県内で行われた樹種同定結果をみると、一部搬入の可能性がある木製品も認められるが、多くは遺跡周辺で木材を入手していたことが推定される。したがって、井堰に転用された木製品も遺跡周辺の植生を反映していると考えられる。

最も多く認められたクヌギ節やニレ属・エノキ属・ヤマグワ・クリ等の落葉広葉樹は、集落周辺や水田の周囲などで、普通に二次林を構成していたと考えられる。また、井堰の構築材にアカガシ亜属・タブノキ属などが確認された。また、井堰内から検出された植物遺体には、アカガシ亜属の果実および葉、クスノキ科の種子などが確認された。アカガシ亜属の果実の中には大きさが5 mm程度の未熟果が含まれており、植物遺体が上流域からの流れ込みであることを示唆する。これらのことから、井堰からそれほど遠くない上流部にアカガシ亜属やクスノキ科からなる暖温帯性の植生が存在していたと考えられる。このような植生は、下川津遺跡で行われた弥生時代前期頃の花粉分析結果（パリノ・サーヴェイ株式会社、1990）とも調和的である。しかし、構築材の樹種に落葉広葉樹が多いことは、遺跡周辺は落葉広葉樹を中心とした二次林的な植生であったと考えられる。

〈引用文献〉

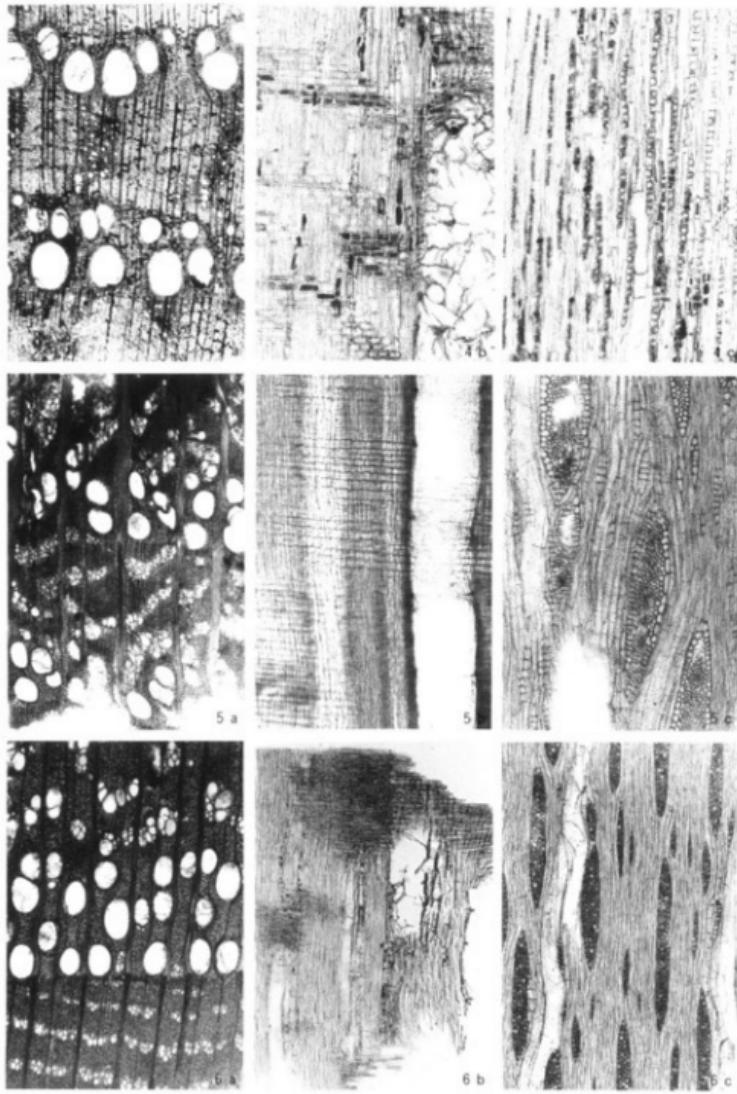
- 藤原宏志（1990）昭和60年度調査の分析結果、「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡－第2分野－」, p.436-442, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団。
- 古市光信（1990）普通寺市永井遺跡（縄文時代）産出の植物遺体（種子）について、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第九冊 永井遺跡」, p.814-822, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団。
- 北村四郎・村田 源（1971, 1979）原色日本植物図鑑 木本編（I・II）, 453p, 545p, 保育社
- 古環境研究所（1990a）昭和61年度調査の分析委託結果、「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡－第2分野－」, p.443-463, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団。
- 古環境研究所（1990b）昭和63年度調査の分析委託結果、「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡－第2分野－」, p.464-478, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団。
- 能城修一・鈴木三男（1990a）昭和63年度調査の分析委託結果、「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡－第2分野－」, p.533-557, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団。
- 能城修一・鈴木三男（1990b）普通寺市永井遺跡の木材化石群集、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第九冊 永井遺跡」, p.823-864 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団。
- 島地 謙・林 昭三（1990）昭和61年度調査の分析委託結果、「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡－第2分野－」, p.520-532, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団。
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1990）下川津遺跡における花粉・珪藻分析委託報告、「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡－第2分野－」, p.479-519, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団。
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）郡家一里屋遺跡出土木材等分析委託業務報告、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第十二冊 郡家一里屋遺跡」, p.227-233, 香川県埋蔵文化財研究所。



1. ヒノキ属近似種 (No.6)
 2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (No.2)
 3. コナラ属アカガシ亜属 (No.52)
 a : 木口 b : 程目 c : 板目

200 μm : a
 200 μm : b, c

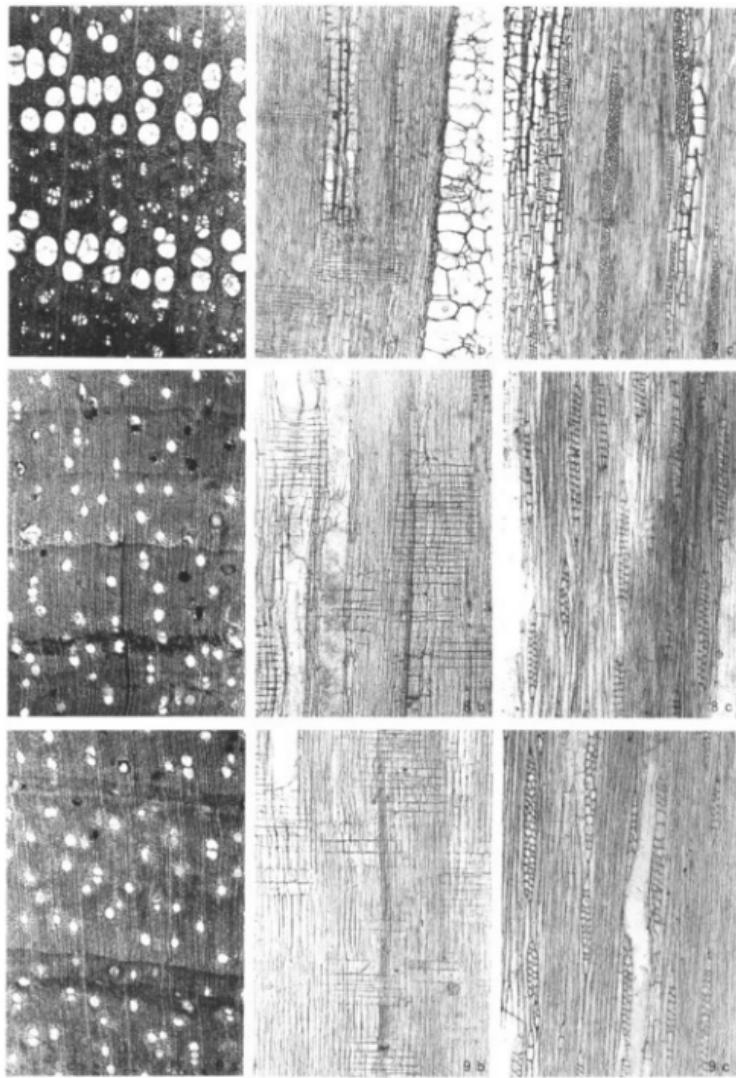
第152図 樹種顕微鏡写真(1)



4. クリ (No.55)
 5. エノキ属 (No.21)
 6. ニレ属 (No.38)
 a : 木口 b : 柱目 c : 板目

200 μm : a
 200 μm : b, c

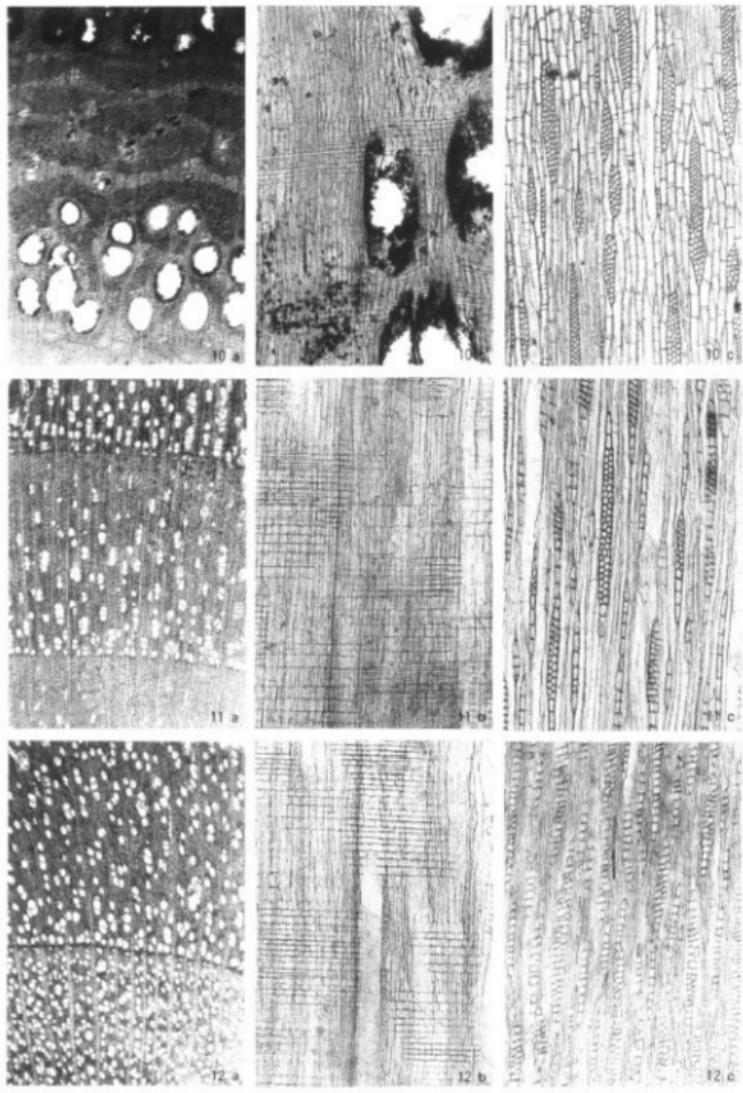
第153図 樹種顕微鏡写真(2)



7. ヤマグワ (No.39)
8. タブノキ属 (No.31)
9. クスノキ属 (No.13)
a : 木口 b : 杖目 c : 板目

200 μm : a
200 μm : b, c

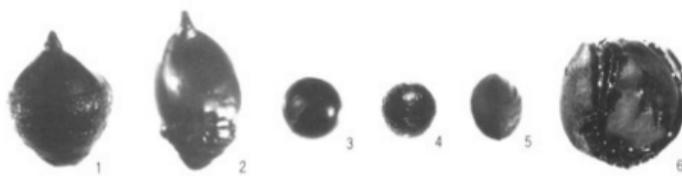
第154図 樹種顕微鏡写真(3)



10. ムクロジ (No.19)
11. エゴノキ属 (No.11)
12. イボタノキ属 (No.14)
a : 木口 b : 柱目 c : 板目

— 200 μm : a
— 200 μm : b, c

第 155 図 樹種顕微鏡写真(4)



5 mm
(1-7)

2.5 mm
(8)

1・2. コナラ属アカガシ亜属（果実）
5. サクラ属（核）
7・8. コナラ属アカガシ亜属（葉）

3・4. クスノキ科（種子）
6. 不明種子？（部位不明）

第 156 図 植物遺体

第5章 総括

まとめ

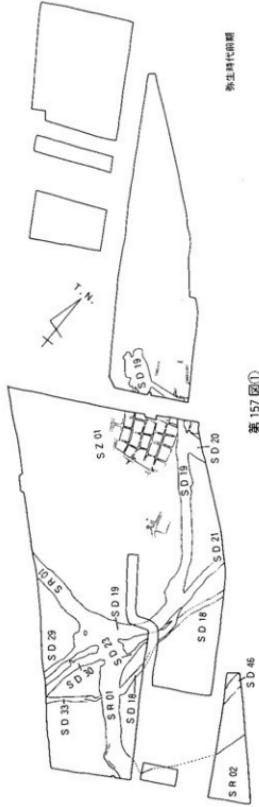
川津下樋遺跡の位置する坂出平野は、四国横断自動車道建設および瀬戸大橋建設に伴い合計7遺跡の調査が行われている。その結果、坂出平野の弥生時代から中・近世にかけての全容がほぼ明らかとなった。

各時代ごとに坂出平野における川津下樋遺跡の位置付けを行いたい。

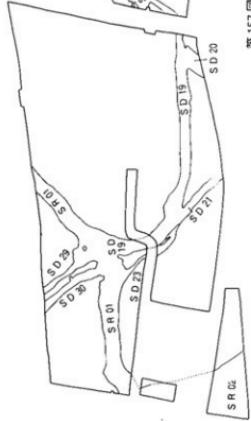
弥生時代前期の遺構は溝・自然河川（井堰）・（水田址？）が検出されている。井堰は2基検出されている。残りの良い第2井堰はその構造が合掌型を呈するもので、井堰が造られた弥生時代前期の中段階より坂出平野には高度な灌漑技術が流入され、水稻耕作が行われていたことがわかる。水田址は時期が縄文時代晚期から弥生時代中期の間と確定していないが、ここでは弥生時代前期の可能性を強調しておきたい。水田址の検出面積は約400m²と小面積ではあるが、一区画がはっきりわかり水口も確認されている。一区画の面積は約10m²前後で高松市浴・長池Ⅱ遺跡で検出された水田址の一区画あたりの面積（4.5m²）のほぼ2倍である。おなじ高松平野でも浴・長池遺跡S R 0 1 西岸微高地で検出された水田址の一区画当たりの面積が約10m²前後であることから、面積差は地域性・土地条件などの諸条件に起因するものと思われる。

坂出平野において弥生時代前期の遺構は下川津遺跡、川津元結木遺跡、川津西又遺跡、川津二代取遺跡などで検出されている。そのほとんどは溝・土坑・自然河川などで、竪穴住居は下川津遺跡で僅かに1棟検出されているだけである。しかし、土器は多量に出土しており、各遺跡に近接してか、あるいは削平されているのか不明であるが、確実にこの坂出平野に弥生時代前期の居住域はあったものと考えられる。

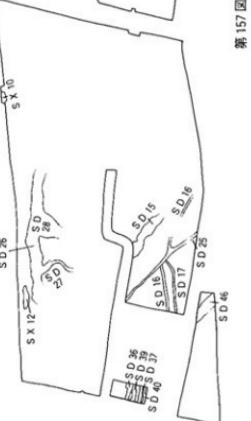
川津下樋遺跡で検出された遺構は前述した居住域としての遺構とは違い、生産域としての遺構である。また、近接する川津中塚遺跡、川津二代取遺跡でも居住域としての遺構が検出されていないことから当遺跡周辺は弥生時代前期においては高度な灌漑技術を駆使し、水稻耕作が行われていた地域であることがわかる。



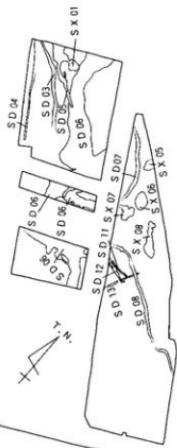
第157图①



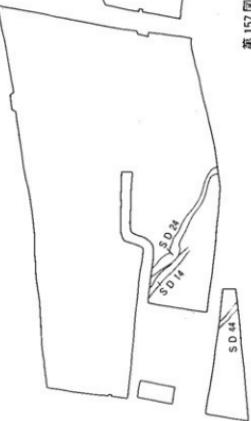
第157图②



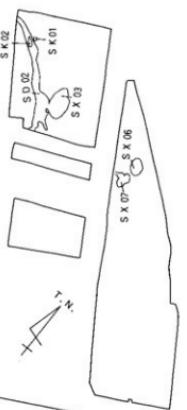
第157图③



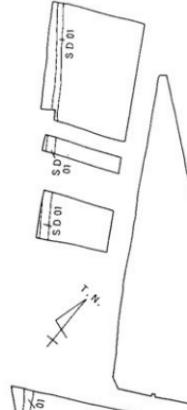
第157图④



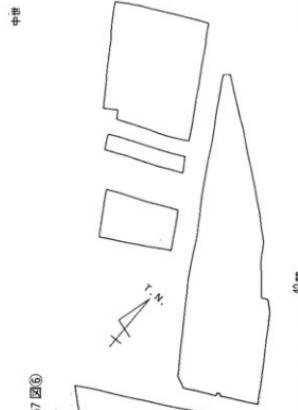
第157图⑤



第157图⑥



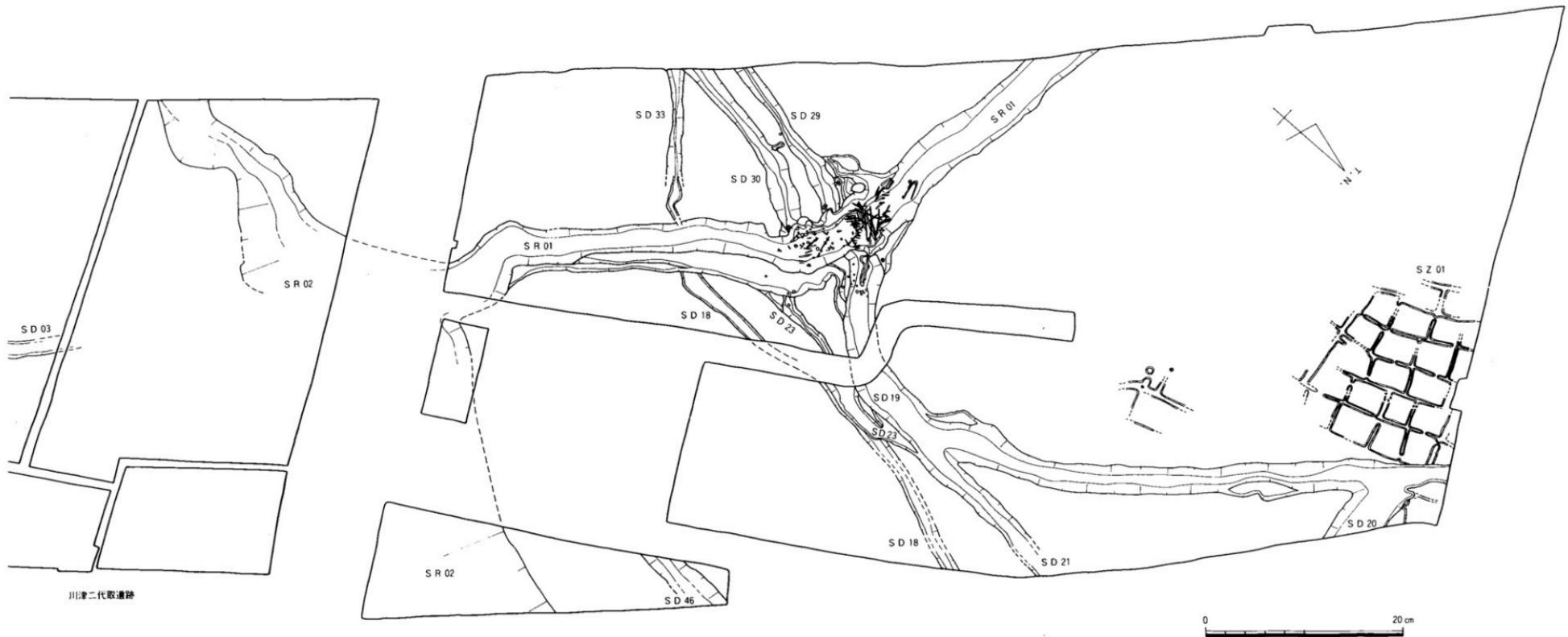
第157图⑦



第157图⑧

0 40 m

第157图 川津下通道防堵变更图



第158図 川津下橋遺跡弥生時代前期～中期遺構配置図

弥生時代中期には溝が検出されているだけである。

この時期の遺構は、川津西又遺跡や飯野山山頂遺跡等で検出されているだけで、明確な居住域は検出されていない。

弥生時代後期には溝・土坑が検出されている。これらの遺構には規則性がなく、その性格は不明である。

この時期の坂出平野の遺構は下川津遺跡・川津中塚遺跡・川津二代取遺跡・川津一ノ又遺跡・東山田遺跡・川津川西遺跡などで検出されている。そのほとんどで居住域としての堅穴住居などの遺構が検出されており、特に下川津遺跡と飯野山北麓の川津一ノ又遺跡に集落が密集するようである。一方この時期の明確な生産域としての遺構は検出されていない。

古墳時代前期には溝が数条検出されているだけである。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては下川津遺跡や川津一ノ又遺跡で、集落が爆発的に増える時期である。この集落を背景に川津茶臼山古墳・聖通寺山山頂の聖通寺山古墳・田尾茶臼山古墳・吉岡神社古墳などの前期古墳が形成される。

古代（7世紀）の遺構は溝・不明遺構が検出されているだけである。

この時期には下川津遺跡では牛馬耕を証明するようなカラスキが出土しており、水稻耕作が大きな進展を見せる時期である。

中世の遺構は溝が検出されているだけである。この溝は現在の土地区画に合致しており、流路方向は真北より23°西偏している。この土地区画は丸亀市、善通寺市を含む丸亀平野全域にみられ、この溝の時期を解明することで、丸亀平野の土地開発の時期を知ることができる。

近世の遺構は溝・土坑が検出されているだけである。

川津下樋遺跡で検出された遺構を7期に細分したが、それぞれの遺構は弥生時代前期から近世まで坂出平野のなかでみると生産域を形成するものであることがわかった。特に弥生時代前期では生産域を代表する水田址や井堰が検出され、この時期の灌漑技術の高さが窺われる。それ以降際立った遺構が検出されないのは土地の不安定さに代表される結果と思われる。

参考文献 山元敏裕「水田遺構について」『浴・長池II遺跡』高松市教育委員会 1994

『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会 1990

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告 第十四冊 川津中塚遺跡』

香川県教育委員会 1994

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告 第十六冊 川津二代取遺跡』

香川県教育委員会 1995

第87表 遺構観察表(1)

SD (溝)

SD	グリッド	規模 (m)		出土遺物	時期	辨別番号	国際番号
		天幅	深さ				
01	I-23・24・25・26 J-28・29	2.4	0.56	土師器、須恵器、土師質土器、瓦器、白磁。サヌカイト製品	中世、10世紀前半～13世紀前半	123	32
02	I-23・24	3.1	0.3	弥生土器、土師器、須恵器、サヌカイト製品	7世紀。(弥生土器含む)	119	33
03	I-23・24	0.8	0.17	弥生土器、土師器、須恵器、サヌカイト製品	弥生時代後期、古墳時代前期	90	
04	I-23・24	0.4	0.09	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代後期	90	
05	I-23・24	2.8	0.52	弥生土器、土師器、サヌカイト製品	弥生時代後期、古墳時代前期	90	
06	I-23・24・25・26 J-23・24・25・26	6.2	0.69	弥生土器、土師器、須恵器、サヌカイト ・砂岩・輝緑ひん岩製品	弥生時代後期	92	33
07	J-24・25、K-25	1.0	0.16	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代後期	98	
08	K-25・26、L-27	0.8	0.15	弥生土器、土師器、須恵器、サヌカイト 製品	弥生時代後期、古墳時代、古代	120	
09	K-25・26	0.45	0.03	サヌカイト製品	不明		
10	K-26	0.35	0.05	縄文土器、弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代後期		
11	K-26	0.35	0.11	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代後期		
12	K-26	0.95	0.05	弥生土器、土師器、サヌカイト製品	弥生時代後期		
13	K-26	0.45	0.11	土師器、サヌカイト製品	弥生時代後期	98	
14	M-31・32	2.3	0.18	弥生土器、土師器、須恵器、サヌカイト・ 砂岩製品	古墳時代、6世紀		
15	M-31	3.15	0.17	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代後期		
16	M-30・31・32	0.7	0.21	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代後期	78	34・40
17	M-31・32	0.5	0.17	弥生土器	弥生時代後期		34
18	L-32、M-30・31	1.5	0.48	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代前期	72・80	35・41 42
19	K-27・28 L-28・29・31 M-29・30・31	3.1	0.37	縄文土器、弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代前期～中期	73・74	35・36 37・38 39
20	L-28・29、M-29	4.55	0.45		弥生時代前期～中期	74	39
21	M-30・31	2.2	0.46	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代前期～中期	78・107	34・40 42
22	M-31	0.55	0.11	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代		
23	L-31・32	1.7	0.37	サヌカイト製品	弥生時代前期～中期	80	

第88表 遺構観察表(2)

SD	グリッド	規模 (m)		出土遺物	時期	坪区番号	田版番号
		天幅	深さ				
24	M-30・31	2.1	0.42	弥生土器、土師器、製塙工具、須恵器、サヌカイト製品	弥生時代後期～古墳時代前期、7世紀	78・107	34・40 41
25	M-31・32	0.9	0.3	弥生土器、土師器、サヌカイト製品	弥生時代後期～古墳時代前期	112	43
26	K-31・32	3.1	0.24	弥生土器、サヌカイト・結晶片岩製品	弥生時代後期		
27	K-32	2.1	0.1	弥生土器、土師器、サヌカイト製品	弥生時代後期		
28	K-31	6.1	0.2	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代後期～古墳時代、6世紀後半～7世紀前半		
29	K-32、L-31・32	2.5	0.44	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代前期～中期	81	43・44
30	K-32、L-32	2.5	0.61	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代前期～中期	84	45
31	L-32	0.85	0.21	弥生土器、サヌカイト製品	不明	81	44
32	L-32	1.6	0.36		弥生時代前期	84	45
33	K-32、L-32	1.35	0.54	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代前期	86	
34	M-33	2.3	0.38	サヌカイト製品	弥生時代後期～古墳時代前期	117	46
35	L-29・30	0.9	0.1	土師器、須恵器、土師質土器、瓦、陶器、サヌカイト・安山岩製品	近世		
36	M-33	1.25	0.27	サヌカイト製品	弥生時代後期	118	46
37	M-33	1.2	0.1	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代後期	118	
38	M-33	1.4	0.24	サヌカイト製品	不明	118	
39	M-33	1.05	0.43	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代後期	118	
40	M-33	0.8	0.16	弥生土器	弥生時代後期	118	
41	M-33	1.0	0.21	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代前期	118	47
42	M-33	(2.8)	0.37	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代前期		47
43	M-32、N-31	1.0	0.51	弥生土器、サヌカイト製品	不明		
44	N-32	1.3	0.2	弥生土器、サヌカイト製品	古墳時代	113	
45	N-32	1.2	0.19	弥生土器、サヌカイト製品	不明		
46	K-31・32	2.5	0.87	弥生土器、サヌカイト製品	弥生時代前期～中期	88	48
47	N-32	0.6	0.26	サヌカイト製品	不明		
48	N-32	0.4	0.18	サヌカイト製品	不明		

第89表 遺構観察表(3)

SK (土坑)

SK	グリッド	形状	規模 (m)		出土遺物	時期	揮団番号	図版番号
			天幅	深さ				
01	I-23	橢円形	長1.6 短1.0	0.11	土師器	古代		
02	I-23	橢円形?	長(3.8) 短(0.8)	0.12	*カケ製品	不明		
03	I-23	椭丸方形	長1.3 短1.15	0.07	土師器, 須恵器	7世紀		
04	L-29	椭丸長方形	長1.3 短1.05	0.2	土師器, *カケ製品, 肉器, 瓦質土器	不明		
05	L-29	椭丸方形	0.85	0.12	土師器, 土師質土器, 瓦質土器, 陶磁器, *カケ製品	近世, 17世紀		

SX (不明遺構)

SX	グリッド	形状	規模 (m)		出土遺物	時期	揮団番号	図版番号
			天幅	深さ				
01	I-23	不定形	長3.2 短2.85	0.23	弥生土器	弥生時代後期	104	
02	I-24	不定形	長2.8 短1.4	0.37		不明		
03	I-24, J-24	橢円形	長9.1 短5.35	0.63	弥生土器, 土師器, サヌカイト, 花崗岩製品	古墳時代前期	116	48・49
04	J-24, K-24	不定形	長(2.2) 短1.5	0.17	土師器	不明		
05	K-24	不定形	長(2.1) 短2.6	0.35	弥生土器, サヌカイト製品	弥生時代後期, 7世紀		
06	K-25	橢円形	長5.1 短3.6	0.62	弥生土器, 土師器, 須恵器, サヌカイト製品	弥生時代後期, 7世紀	104	
07	J-25, K-25	不定形	長4.3 短3.3	0.3	弥生土器	弥生時代後期		
08	K-25	不定形	長10.01 短2.6	0.26	弥生土器, サヌカイト製品	弥生時代前期~後期		
09	K-26	不定形	長2.7 短1.4	0.06		不明		
10	J-30	不定形	長3.4 短(1.4)	0.2	弥生土器	弥生時代後期		
11	M-31・32	不定形	長3.9 短1.15	0.27	サヌカイト製品	不明		
12	K-32	不定形	長6.6 短1.45	0.19	弥生土器	弥生時代後期		

図 版





(1) III区・IV区南部遺構検出状況（北より）



(2) IV区南部遺構検出状況（北より）

図版2



(1) IV区北部遺構検出状況（南より）



(2) I区北部遺構検出状況（南より）



(1) III区・IV区南部遺構検出状況（真上より）



(2) SR 01 土層断面①

図版 4



(1) S R 01 土層断面②



(2) S R 01 土層断面④



(1) S R 01 土層断面4 拡大



(2) S R 01 土層断面5

図版 6



(1) 第1・2井堀検出状況（西より）



(2) 第1・2井堀検出状況（東より）



(1) 第1井堀検出状況（西より）

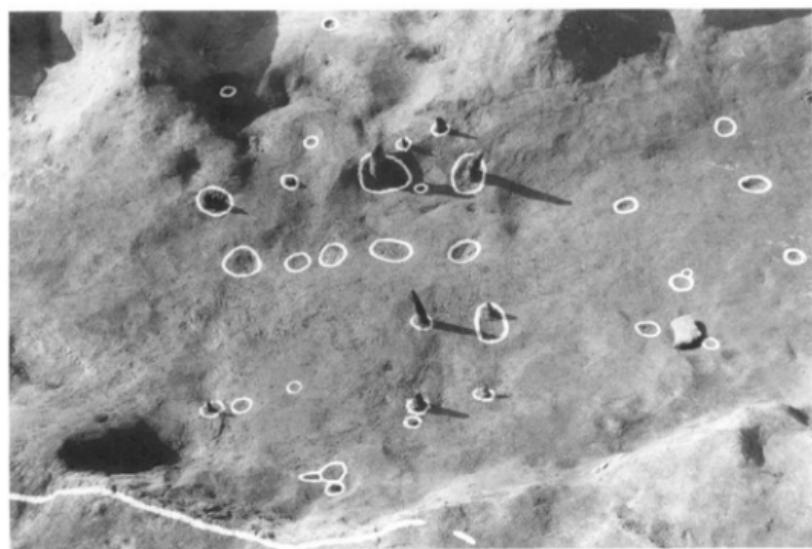


(2) 第1井堀検出状況（S R 01 内より）

图版 8



(1) 第 1 井 墓 检 出 状 况



(2) 第 1 井 墓 杭 检 出 状 况



(1) 第1井堀検出状況 (S R 01 内より)

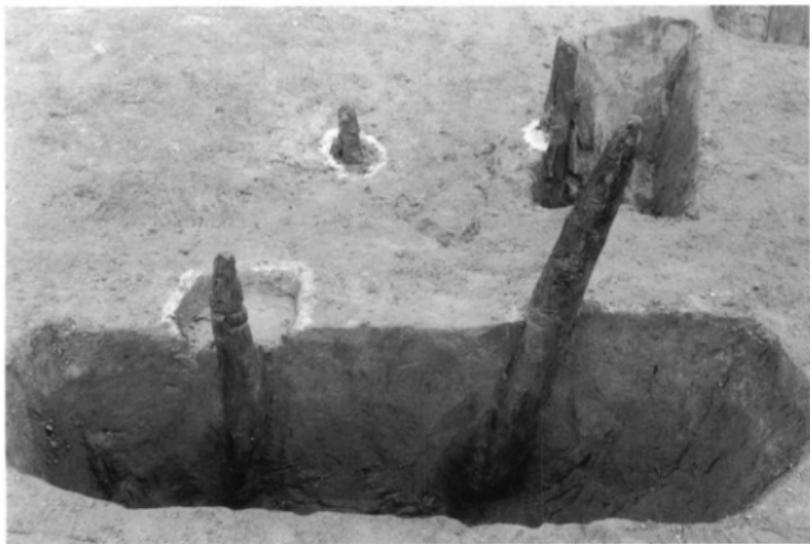


(2) 第1井堀杭検出状況 (S R 01 内より)

図版 10



(1) IV区南部検出状況（真上より）



(2) 第1井堀杭No.2・3



(1) 第1井環杭No.6・7



(2) 第1井環杭No.12



(3) 第1井環杭No.8



(4) 第1井環杭No.9



(5) 第1井環杭No.14①・②



(6) 第1井環杭No.4①～③

図版 12



(1) 第2井堀検出前



(2) 第2井堀検出状況（南より）



(1) 第2井発掘状況（南より）



(2) 第2井発掘状況（南西より）

図版 14



(1) 第2井堀検出状況（西より）



(2) 第2井堀検出状況拡大（西より）



(1) 第2井堀検出状況（北西より）



(2) 第2井堀検出状況（北より）

図版 16



(1) 第2井堀検出状況拡大（南東より）



(2) 第2井堀検出状況（南東より）



(1) 第2井堀検出状況拡大（西より）



(2) 第2井堀実測風景

図版 18



(1) 第2井堀検出状況（西より）



(2) 第2井堀検出状況（東より）



(1) 第2井壙検出状況（西より）



(2) 第2井壙検出状況拡大（西より）

図版 20



(1) 第2井堀検出状況拡大（西より）



(2) 第2井堀検出状況（南より）



(1) 第2井廻検出状況（東より）



(2) 第2井廻検出状況（東より）